

3. 上狛北遺跡第2次発掘調査報告

1. はじめに

この発掘調査は、主要地方道上狛城陽線の建設工事に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。上狛北遺跡では、平成21年度に調査対象地内全域に6か所の調査区を設けて実施した。6か所の調査区のうち、南部の3か所で遺存状況の良好な地点を確認した(第1次調査)。この調査成果を受けて、平成22年度に調査地を拡張して、全面的な調査を実施することとした(第2次調査)。

現地調査にあたっては、京都府教育委員会、木津川市教育委員会、京都府立山城郷土資料館のご指導、ご協力を得た。また、現地調査並びに整理作業には、当調査研究センター上田正昭理事長をはじめ、中尾芳治副理事長、井上満郎・上原真人・中谷雅治・高橋誠一各理事、奈良文化財研究所渡辺晃宏氏・神野恵氏・中村一郎氏、木簡学会の諸先生方からは、遺構・遺物についてさまざまなご指導・ご教示を得た。記して感謝します。本報告は筒井・松尾のほか、谷崎仁美(現大阪市博物館協会大阪文化財研究所)が執筆した。また、調査期間中ならびに本報告に記載した国土座標は、日本測地系(第Ⅵ座標系)を使用している。なお、調査にかかる経費は、全額京都府山城南土木事務所が負担した。

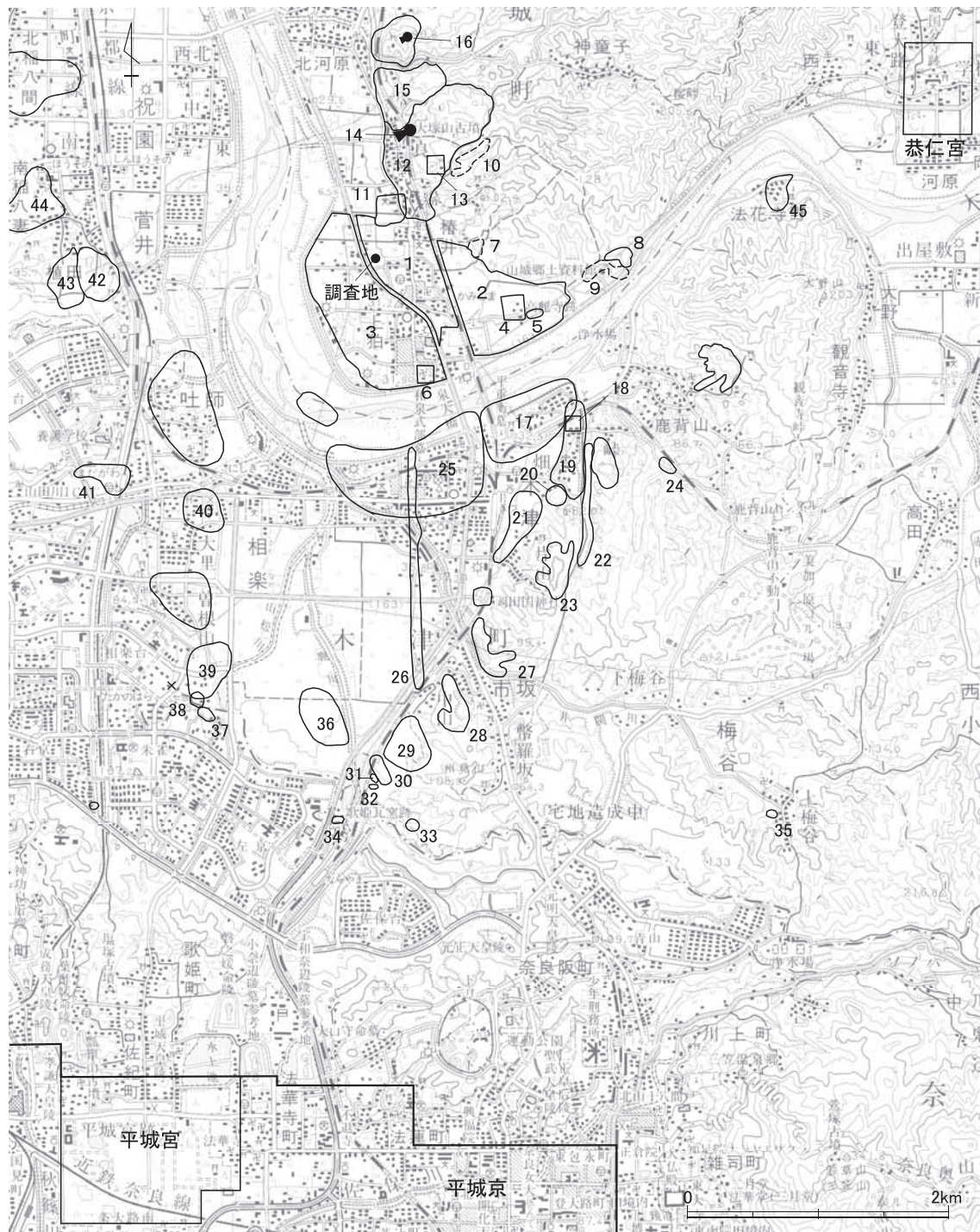
〔調査体制等〕

現地調査責任者	調査第2課長	肥後弘幸
調査担当者	調査第2課主幹調査第3係長事務取扱	石井清司
	同 専門調査員	竹井治雄
	同 調査員	筒井崇史
	同 調査第1係調査員	松尾史子
調査場所	木津川市山城町上狛宝本・西浦代ほか	
現地調査期間	平成22年8月24日～平成23年3月9日	
調査面積	1,630㎡	

2. 位置と環境

1) 地理的環境

上狛北遺跡の所在する木津川市は、平成19年に木津町・山城町・加茂町の3町が合併して成立したもので、上狛北遺跡は旧山城町に属する。木津川市は京都府の最南端に位置し、地理的にも京都盆地の南端に位置する。京都盆地は干拓によって消滅した巨椋池を境に北山城地域と南山城地域に区分でき、南山城地域は、木津川とそれに注ぎ込む中小河川の沖積作用によって形成され



第1図 調査地位置図および周辺主要遺跡分布図(国土地理院1/50,000 奈良)

- | | | | | |
|------------|-------------|-------------|-------------|------------|
| 1. 上粕北遺跡 | 2. 上粕東遺跡 | 3. 上粕西遺跡 | 4. 高麗寺跡 | 5. 高麗寺瓦窯跡 |
| 6. 泉橋寺 | 7. 天竺堂古墳群 | 8. 千両岩遺跡 | 9. 千両岩古墳群 | 10. 宮城谷古墳群 |
| 11. 柳田遺跡 | 12. 椿井遺跡 | 13. 松尾廃寺 | 14. 椿井大塚山古墳 | 15. 堂ノ上遺跡 |
| 16. 平尾城山古墳 | 17. 上津遺跡 | 18. 燈籠寺廃寺 | 19. 燈籠寺遺跡 | 20. 内田山遺跡 |
| 21. 片山遺跡 | 22. 釜ヶ谷遺跡 | 23. 木津城山遺跡 | 24. 鹿背山瓦窯跡 | 25. 木津遺跡 |
| 26. 作り道遺跡 | 27. 馬場南遺跡 | 28. 西山遺跡 | 29. 瓦谷遺跡 | 30. 上人ヶ平遺跡 |
| 31. 市坂瓦窯跡 | 32. 五領池東瓦窯跡 | 33. 瀬後谷瓦窯跡 | 34. 歌姫瓦窯跡 | 35. 梅谷瓦窯跡 |
| 36. 弓田遺跡 | 37. 歌姫西瓦窯跡 | 38. 音如ヶ谷瓦窯跡 | 39. 大畠遺跡 | 40. 相楽遺跡 |
| 41. 樋ノ口遺跡 | 42. 畑ノ前東遺跡 | 43. 畑ノ前遺跡 | 44. 森垣外遺跡 | 45. 法花寺野遺跡 |

た河谷地形で、南北14km、東西2～3kmの狭長な地形を呈する。木津川は奈良・三重両県に水源を発し、旧山城町付近までは東から西に流れ、ここでその流れを大きく北に変える。旧山城町は、旧町域の西側と南側を木津川によって画される。旧山城町の地形は大きく、旧町域東部の山地と、旧町域西部の河岸段丘や平野部に区分される。また、旧町域内の鳴子川など4河川が天井川と化している。

上狛北遺跡は、木津川の右岸、旧町域西部の河岸段丘と平野部の境界付近で、平野部側に位置する。遺跡付近の標高は28.7m前後で、木津川との比高差はおよそ5mである。遺跡の周辺は、木津川によって形成された沖積平野が広がっており、現在は宅地化が進むものの、水田地帯が広がる。

2) 歴史的環境

木津川市山城町には南山城地域を代表する遺跡が多数所在する。以下、上狛北遺跡の周辺における旧山城町域における代表的な遺跡について概観する(第1図)。

山城町域では旧石器時代・縄文時代に属する遺跡はそれほど多くないが、上狛北遺跡の東方約2kmに位置する千両岩遺跡(8)ではサヌカイト製の有茎尖頭器や押型文土器(高山式)が出土している。また、椿井大塚山古墳(14)の盛り土から縄文時代後・晩期の土器が出土している。

弥生時代になると、中期の湧出宮遺跡、後期の上狛西遺跡(3)・椿井遺跡(12)・堂ノ上遺跡(15)などがある。いずれも竪穴式住居跡が確認されているが、集落の規模はあまり大きくないようである。対岸に位置する木津川市旧木津町の大畠遺跡(39、中期後半)や木津城山遺跡(23、後期初頭)などでも集落が確認されている。

古墳時代になると、三角縁神獣鏡が30面以上出土した椿井大塚山古墳(14、前方後円墳、全長175m)が築造される。また、椿井大塚山古墳に引き続き平尾城山古墳(16、前方後円墳、全長110m)が築造されるものの、その後は全長100mを越えるような大型前方後円墳は築造されなくなる。中期における大型前方後円墳の築造は城陽市域に多くみられようになる。その後、中期末には上狛北遺跡の北東の丘陵上に天竺堂1号墳(7)が築造される。全長わずか27mの小規模な前方後円墳であるが、墳丘上には円筒埴輪や形象埴輪が並べられていた。南山城地域では、埋葬施設として横穴式石室を採用したもっとも古い古墳の1つとされる。石室内からは約3,000点の玉類や馬具などが出土した。天竺堂1号墳以降、山城町域では直径6～20m程度の小規模な古墳が多数築造され、群集墳を形成する。代表的な群集墳として車谷古墳群(総数40基以上)・宮城谷古墳群(10、総数12基)・千両岩古墳群(9、総数7基)などがある。これに対して、古墳時代の集落はあまり知られておらず、上狛東遺跡(2)で古墳時代前期の土器がまとまって出土しているものの、竪穴式住居跡などは確認されていない。

飛鳥時代になると、山城地域でも最も古い古代寺院の1つである高麗寺跡(4)が造営される。高麗寺跡の創建は、奈良県飛鳥寺と同範の軒丸瓦が出土したことから7世紀初頭と考えられる。ただし、この段階で伽藍は未整備で、本格的な伽藍が整備されるのは7世紀後半と考えられる。これにともなう軒丸瓦は、奈良県川原寺の軒丸瓦と同範である。また、高麗寺伽藍整備期の軒丸

瓦などを焼いた高麗寺瓦窯跡(5)なども確認されている。なお、高麗寺は、近年の調査成果によると、中世前期まで存続した可能性が高い。このほか旧山城町域では白鳳期に遡る寺院跡として、蟹満寺や松尾廃寺(13)などがある。このように早い時期から寺院の整備が進むが、当該期の集落域は確認されていない。

奈良時代になると、上狛北遺跡周辺では、具体的な遺構は未確認であるが、第1次山城国府や恭仁京右京の推定地とされている。前者は文献資料からの推定であり、相楽郡内でも他の推定地がある。後者は足利健亮氏をはじめ、いくつかの恭仁京域に関する復元プランが提示されているが、これまでに考古学的な遺構は確認されていない。このため、恭仁京の京域についてはその存在を疑問視する意見もあった。

引き続き平安時代・中世も遺物の出土はみられるものの、具体的な遺構が検出された遺跡は少ない。

3. 調査の経過

1) 第1次調査の成果

平成21年度に実施した本事業に伴う調査としては、上狛北遺跡と柳田遺跡の2遺跡がある。両遺跡は、これまで発掘調査が行われたことはなく、調査対象地周辺でも具体的な調査成果が少ない地点に当たる。このため、遺物の散布は認められるものの、木津川の旧河道などの存在も予想された。そこで、遺構・遺物の状況を把握するための調査を実施した。

調査は平成21年10月27日に開始し、平成22年2月25日に終了した。調査面積は1,000㎡である。調査に当たっては、対象地内に合計10か所のトレンチを設定した(第2図)。このうち第1～6トレンチが上狛北遺跡、第7～10トレンチが柳田遺跡に該当する。

第1トレンチでは中世の溝や柱穴などの遺構の存在を確認し、遺物が多数出土した。第2・3トレンチでも中世の耕作溝を多数確認するとともに、その下層に南北方向に延びる奈良時代の溝を確認した。これらの遺構の確認により、第1～3トレンチについては、関係機関と協議の上、平成22年度に対象地全体まで調査区を拡張して全面的な調査を実施することとなった。

第4～6トレンチならびに第7～10トレンチの柳田遺跡については、耕作土・床土を除去すると、砂質土層・砂層が厚く堆積しており、安定した遺構面を確認することはできなかった。この砂質土層・砂層からは少量ながらも弥生時代から中世にかけての遺物が出土した。砂層より下層の状況を確認するため、重機による断ち割りを行ったが、粘土層が厚く堆積していることを確認したにとどまる。以上のような状況を確認して、第4トレンチ以北の調査対象地については調査を終了した。

両遺跡の調査で出土した遺物の総量は整理箱にして15箱である。このうち第1～3トレンチに伴う遺物は13箱ある。これらの遺物については、一部昨年度に報告しているが、本報告で改めて掲載したものがある。

2) 第2次調査の経過

平成22年度の調査は、道路建設予定地内を対象に1,500㎡の調査区の設定を行った。ただ、周辺には水田や用水路、里道などが広がることから、調査区と対象地外との間に余裕を持って調査区を設定した部分がある。

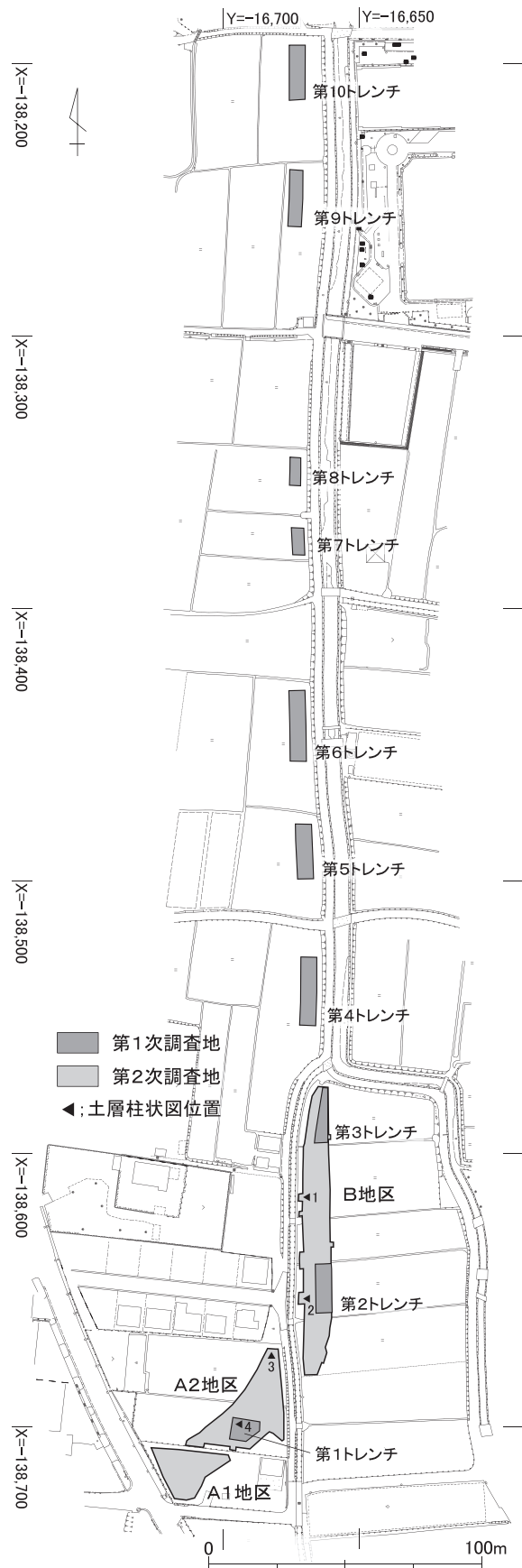
平成21年度の調査成果を受けて、平成22年8月24日からフェンスの設置作業、調査トレンチの設定などに着手し、9月1日からは重機による掘削を開始した。調査区は、現在の里道を挟んで大きく西側のA地区と東側のB地区に分けたが、A地区については土地利用の関係上、南側の駐車場用地をA1地区、北側の水田部分をA2地区とした(第2図)。

調査を進めると、各調査区とも、中世、奈良時代、古墳時代中・後期の各時期の遺構が確認された。

A1・A2地区の古墳時代の遺構の状況ならびにB地区の奈良時代の遺構の状況がおおむね明らかになったことから、平成23年1月23日に現地説明会を実施し、約480人の参加があった。

調査期間中には平成22年12月2日、平成23年1月25日、同2月23日の3回に分けて、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。現地説明会終了後、A地区については、平面図の補足や遺物の取り上げ等を行った後、埋め戻し作業を行い、2月22日に現地調査を終了した。B地区については、2月に古墳時代の遺構面の調査を実施し、すべての作業を3月4日に終えた。その後、3月9日まで埋め戻し作業を行い、調査を終了した。

なお、第1次調査における第1トレンチはA2地区に、第2・3トレンチはB地区に含まれる。



第2図 第1・2次調査区配置図

3) 報告書作成作業について

平成23年度は、平成22年度に実施した上狛北遺跡第2次調査の出土遺物の整理作業ならびに報告書作成作業を実施した。出土遺物の整理作業では、遺物の洗浄・接合・注記を順次行い、報告に必要な遺物の選別を行った。これらについては実測を行い、必要な場合は拓本も行った。最終的に本報告に掲載した遺物は、写真図版のみに掲載したものも含めて739点である。実測した遺物のうち、復元可能なものについては石膏による復元を実施した。復元できた遺物や小破片でも重要な遺物については、遺物写真の撮影を行い図版として掲載した。

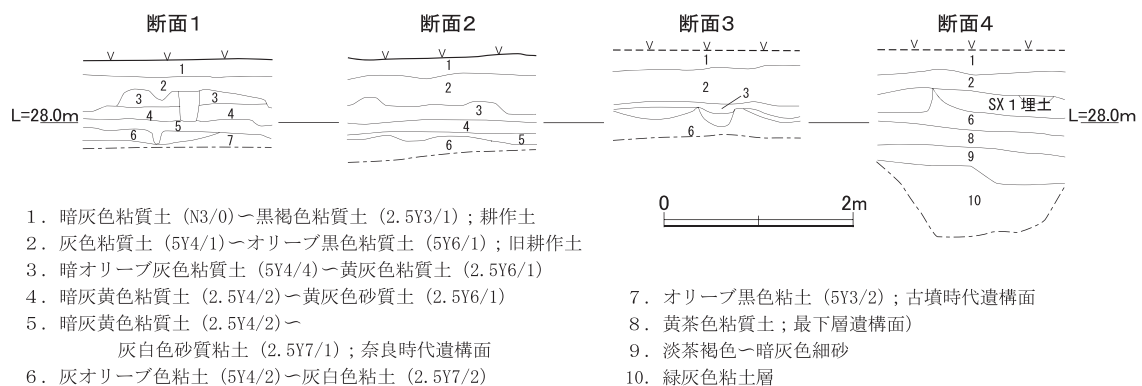
また、土坑S X96から持ち帰った土砂の洗浄を順次進め、木簡や削屑の検出に努めた。その結果、木簡3点、削屑41点のほか、墨書土器31点を確認した。これらの木簡の内容については、平成23年7月19日に奈良文化財研究所の協力を得て赤外線カメラによる釈読を行った。出土した木簡の内容や遺構の時期、遺跡全体の性格などを考慮して、7月27日に出土木簡のみを対象とした報道発表を行った。

報道発表後、出土した木簡や削屑の保存処理とともに、木簡材の樹種同定作業を委託した^(注1)。また、土坑S X96からは大量の炭化材が出土したので、これらの試料を使って放射性炭素年代測定も委託した^(注2)。これらの結果については、それぞれの項で報告する。

4. 調査の概要

1) 調査の方法

昨年度の調査成果にもとづき、いずれの調査区とも、上層遺構面直上まで耕作土・床土・旧耕作土等を重機で除去し、その後、人力による精査を行い、遺構の検出に努めた。検出した遺構は、その位置を平板で記録しながら、掘削を行った。検出した遺構には原則として通し番号をつけ、遺構の性格を示す略号を付与した。略号は調査の進展に伴って変更することもあったが、遺構番号は変更しないようにした。使用した略号は、竪穴式住居跡；SH、掘立柱建物跡；SB、溝；SD、土坑；SKもしくはSX、井戸；SE、柱穴；SP、不明遺構・その他；SXである。なお、本報告で使用した遺構番号は調査時のものである。ただし、調査時に番号のなかった遺構については、本報告作成時に新たに付与した。



第3図 土層柱状図

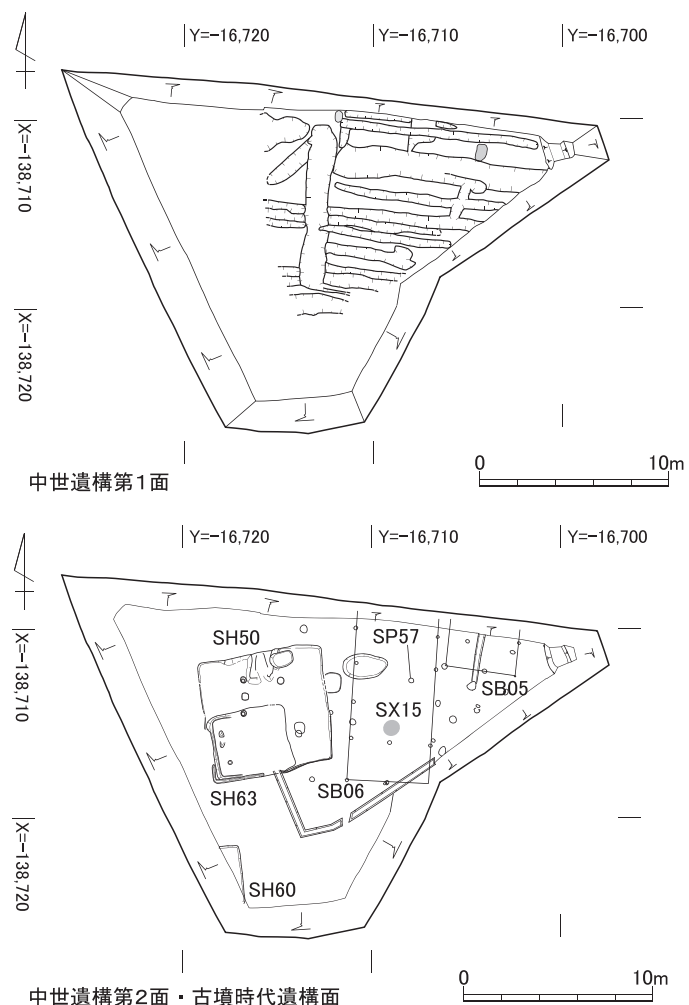
遺構の掘削を終えると、必要に応じて1/10ないし1/20の平面図や断面図の作成と写真撮影を行った。遺構面全体の調査を終えると、調査区ごとに全景写真を撮影するように努めた。なお、A1・A2地区では、中世の遺構は2～3時期の遺構の重複が認められた。また、今回の調査では国土座標系にもとづく地区割りの設定等を行わなかった。

各遺構面の間も厚さ5～30cm程度の遺物包含層が認められたので、必要に応じて重機でこれ除去し、上記の作業を繰り返した。調査期間中、調査の進捗状況に合わせて、計3回のラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。

今回の調査で出土した遺物は、整理箱にして84箱である。このほかに土坑SX96からは木簡や削屑を含む土砂60箱余りを持ち帰り洗浄した。

2) 基本層序

調査区の基本的層序を第3図に示した。調査区の基本層序は、現在の耕作土、旧耕作土等の堆積層、上層遺構面、下層遺構面、最下層遺構面となる。なお、A1地区では、現在の耕作土の上面に1m余りの盛り土をして、駐車場として利用されていた。各調査区の中世の遺構面の検出標高は、B地区北端で27.9m、南端で28.1m、A2地区北端で28.1m、南端で28.3m、A1地区南端で28.2mとなり、南から北へ向かって緩やかに傾斜している。なお、A2地区では中世の遺構を3時期確認したが、B地区では1面のみ確認した。次に奈良時代の遺構面は、B地区で標高27.8～27.9mであるのに対して、A地区では奈良時代の遺構面そのものを確認することはできなかった。これは中世の遺構群の土地利用の結果、奈良時代の遺構面が大きく削平されたものと考えられる。古墳時代の遺構面の検出標高は、B地区北半部で27.7m、南端で27.9mであり、南半部では奈良時代の遺構と古墳時代の遺構は、ほぼ同一面で検出した。A2地区では27.8～27.9m、A1地区西端で28.0mとなる。いずれの調査区においても、中世の遺構面からおよそ0.2m下で古墳時代



第4図 A1地区遺構配置図

の遺構面を検出した。古墳時代の遺構面よりも下層の状況は、A2地区井戸SE215とB地区土坑SX96の断ち割りで確認した。古墳時代の遺構面よりもおよそ2mは緑灰色粘土層で、固く締まる。それよりも下は茶灰色砂層ないし、粗砂と細砂の互層堆積層となり、古墳時代の遺構面よりも約3.4m下で、湧水層に達する。SE215はこの湧水層まで達していた。

3) 各調査区の概要

(1) A1地区

調査対象地の南端に位置し、調査前は駐車場として利用されていた。調査地の西側を国道24号線が通るため、安全に配慮して調査区の設定を行った。調査区の平面形はやや歪な三角形を呈する。調査面積は当初170㎡であったが、その後、古墳時代の竪穴式住居跡の全容を確認するため、調査区の南西側の拡張を行った。最終的な調査面積は300㎡である。

遺構面は、中世と古墳時代の2時期を確認した。現地表面下約1.4m、標高28.1m付近で中世の遺構を検出した。中世の遺構は2時期あり、第1面では重複した耕作溝を15条以上検出した。第2面では掘立柱建物跡2棟のほか、柱穴20基などを検出した。出土遺物としては瓦器・土師器などがあり、中世から近世にかけての遺構と思われる。

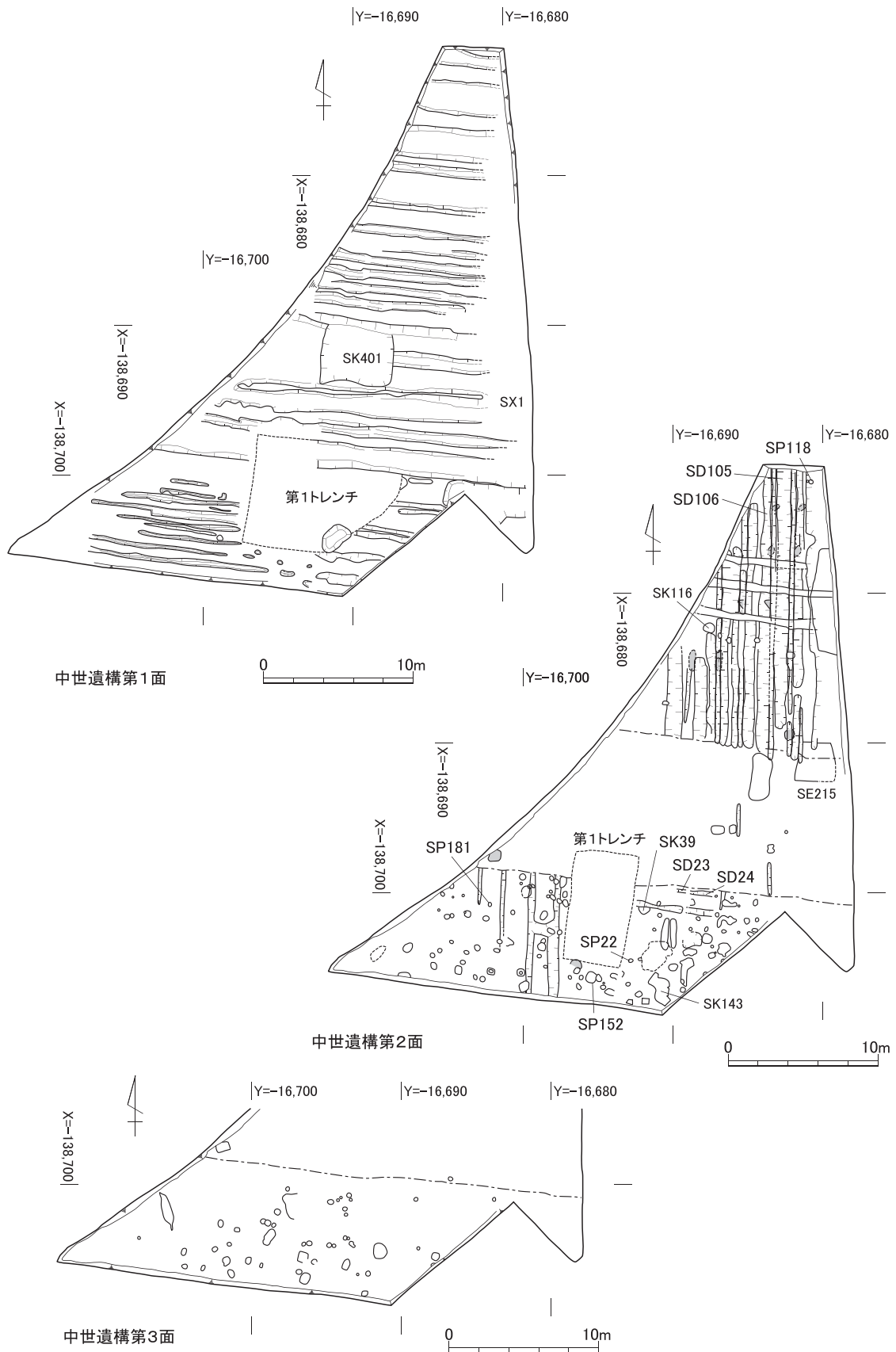
古墳時代の遺構としては竪穴式住居跡3基、土器溜まり1か所などがある。中世の遺構の第1面で検出した耕作溝の掘削時に、土器溜まりの一部や住居跡の竈などを検出しつつあり、中世の遺構の第2面と古墳時代の遺構面はほぼ同一面で検出した。出土遺物としては須恵器・土師器・製塩土器などがあり、古墳時代中期後半ごろと思われる。なお、奈良時代の遺構面は確認されなかった。

(2) A2地区

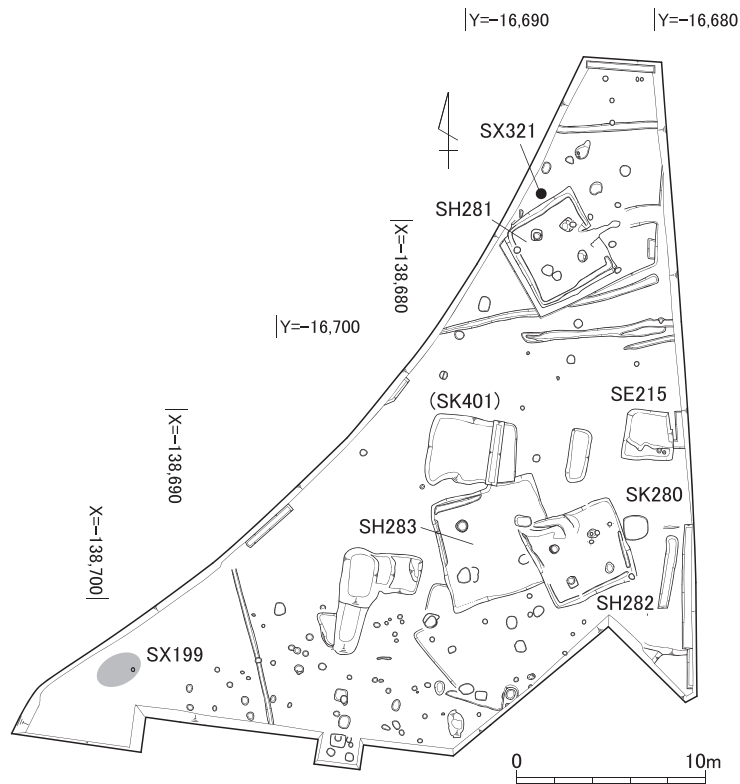
A1地区の北側に位置し、調査前は水田であった。調査区の平面形は不整形な台形を呈する。調査面積は540㎡である。遺構面は、上層と最下層の2面を確認した。現地表面下約0.6m、標高28.2m付近で中世の遺構を検出した。

中世の遺構は3時期の遺構が重複していた。第1面ではおもに東西方向の耕作溝30条以上と調査区のはほぼ中央を東西方向に横断する幅10m、深さ0.3mほどの大溝状の遺構SX1を検出した。SX1は第2面、第3面の遺構面を掘り込んでいる。出土遺物としては瓦器、中国製陶磁器、中世陶器、銭貨(寛永通寶)などがあり、中世後半～近世と思われる。第2面では、SX1よりも北部で南北方向の耕作溝を20条以上検出し、南部では耕作溝のほか、土坑や柱穴多数を検出した。ただし掘立柱建物跡として復元することはできなかった。出土遺物に土師器・瓦器・中国製陶磁器などがあることから、中世前半～中頃の遺構と考えられる。第3面はSX1よりも南側のみに認められ、柱穴40基以上を検出した。これらも掘立柱建物跡として復元することはできなかった。出土遺物に土師器・瓦器などがあり、中世初頭～前半の遺構と考えられる。また、わずかであるが平安時代の黒色土器碗や緑釉陶器の破片などが出土した。

中世の遺構の調査終了後に重機によって堆積層の掘り下げ(約20～30cm)を行い、古墳時代の遺構面を検出した。古墳時代の遺構として竪穴式住居跡4基をはじめ、溝や土坑、柱穴などを多



第5図 A2地区遺構配置図



第6図 A2地区遺構配置図(古墳時代遺構面)

確認した。奈良時代の遺構面は、中世の遺構の形成過程で大きく削平されたものと判断した。

(3) B地区

A2地区の北東側、里道をはさんで位置し、調査前は水田であった。調査区の平面形は、細長い矩形を呈する。調査区の西側には現用の用水路が、東側には水田が存在するため、調査区は若干の余地を残して設定した。しかし、奈良時代の遺構面で検出した掘立柱建物跡の状況や南北溝の対となる溝の有無を確認するため、部分的に拡張した。最終的な調査面積は790㎡である。

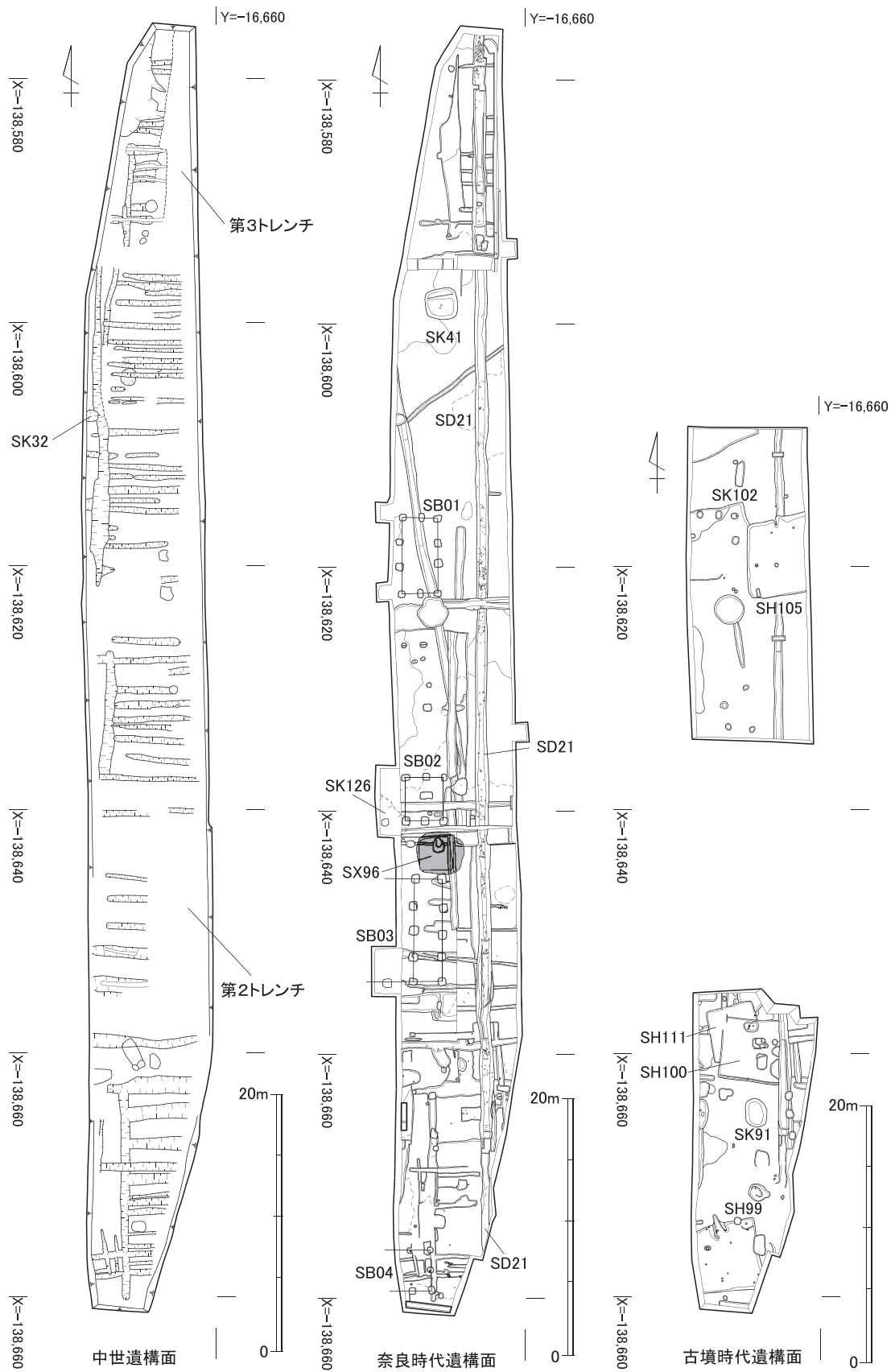
遺構は、中世・奈良時代・古墳時代の3時期を確認した。現地表面下約0.7m、標高28m付近で上層遺構面を検出した。中世の遺構はA1・A2地区と異なり、1時期のみである。中世の遺構として東西方向の耕作溝を60条以上検出した。また、区画溝や排水水路と思われるやや規模の大きな南北溝も数条検出した。出土遺物には土師器・瓦器・中国製陶磁器などがあり、中世の遺構と考えられる。A2地区の中世の遺構の第1面に相当すると考える。

中世の遺構面の調査終了後に、重機によって堆積層を掘り下げ(約10～20cm)、奈良時代の遺構面を検出した。奈良時代の遺構としては掘立柱建物跡4棟、溝5条、土坑2基などを検出した。このうち土坑SX96は、古墳時代の遺構面の状況を確認するための断ち割り作業中に確認したもので、掘立柱建物跡などよりも若干先行する遺構である。土坑SX96では、大量の土器や炭が出土した。また、埋土の状況から木簡や木製品が遺存しやすい土質であることから、埋土に木簡等が含まれている可能性や調査期間等を踏まえて、SX96の埋土を可能な限り取り上げ、室内で洗浄作業を行うこととした。現地調査中に木簡2点と削屑1点を確認し、その後、室内の洗浄作業

数検出した。土壌化の影響や堆積土の状況から遺構の輪郭を確定するのに相当の時間を要した。ただ、遺構の遺存状況は良好である。

出土遺物としては須恵器・土師器・製塩土器などがあり、古墳時代中期後半～後期にかけてと思われる。このほか、遺構にともなわないが、庄内式や布留式の甕が出土しており、当該期の遺構が調査地周辺に存在する可能性がある。

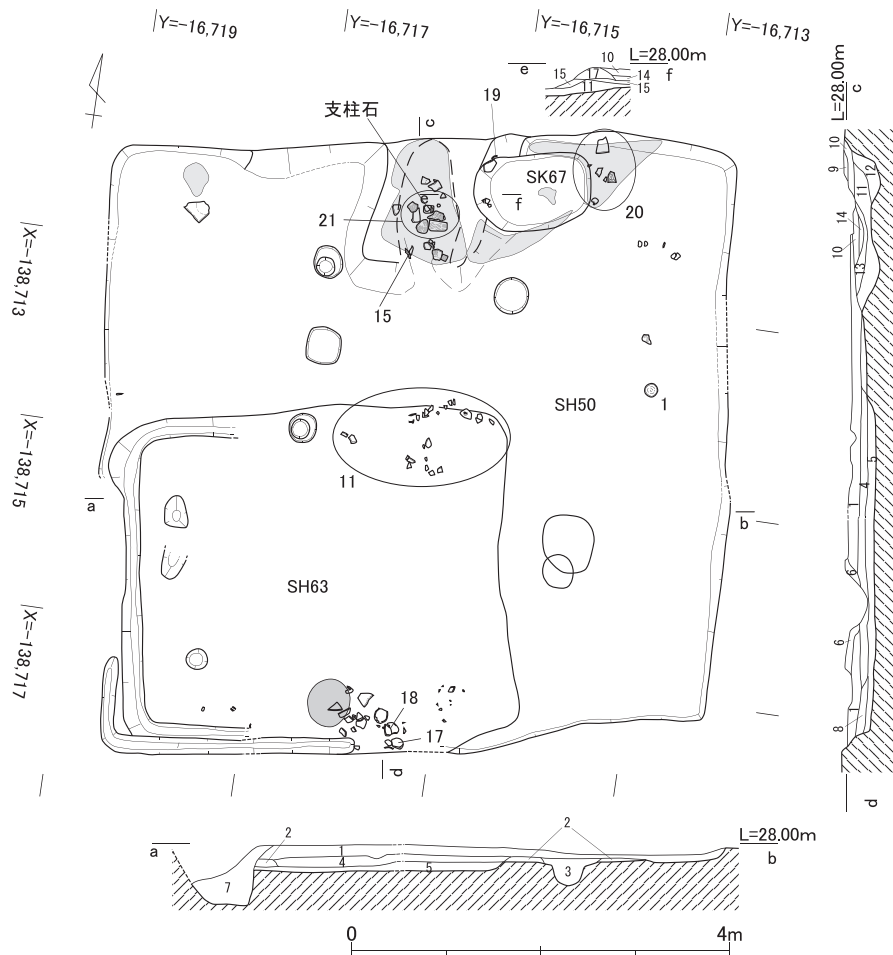
なお、遺構面として確認することはできなかったが、奈良時代の井戸1基と土器溜まり1か所のほか、柱穴数基を



第7図 B地区遺構配置図

で、後述するように大きな成果を上げることができた。奈良時代の遺構からの出土遺物としては木簡、瓦埴類、須恵器、土師器、製塩土器、金属製品、木製品などがあり、奈良時代中ごろと思われる。5条検出した溝のうち、溝S D21を除く4条については詳細な時期は不明であるが、S D21や掘立柱建物跡に先行すると考えられる。

土坑S X96の調査に並行して、三たび重機によって堆積層を掘り下げ(約5～10cm)、古墳時代の遺構面を検出した。なお、最下層遺構面は遺構の認められた2地点の合計470㎡を対象とした。調査区は北寄りと南半部の2か所で、両地点の間にS X96が位置する。古墳時代の遺構としては竪穴式住居跡4基、土坑と柱穴を10基前後ずつ検出した。出土遺物として須恵器・土師器などがあり、古墳時代後期と思われる。



- | | |
|----------------------------------|--|
| 1. 灰オリーブシルト (5Y5/2) | 9. 灰白色極細砂 (10YR7/1) |
| 2. 灰白色粘土 (7. 5Y7/2) | 10. 赤色土 (10R4/8) 焼土 + 明褐色土 (7. 5YR7/2) |
| 3. オリーブ灰色粘土 (2. 5GY6/1) | 11. 明オリーブ灰色粘質土 (2. 5GY7/1) |
| 4. 灰オリーブ粘質土 (5Y6/3) | 炭混・遺物片混・焼土混 |
| 黄色粘土ブロック混じる | 12. オリーブ灰色シルト質粘土 (2. 5GY6/1) |
| 5. 淡黄色粘土 (2. 5Y8/3) | 13. 浅黄色粘質土 (5Y7/4) |
| 部分的に灰色粘土混じる (N4/0) | 14. 赤色土 (10R5/8) |
| 6. 褐色砂質土 (7. 5YR6/1) | 15. 16 のブロック混じり灰色粘土 (7. 5Y6/1) |
| 7. 青灰色砂混にぶい褐色土 (5B6/1+7. 5YR5/3) | 17. 淡黄色粘質土 (5Y8/4) |
| 8. 灰白色シルト (7. 5Y7/2) | カマド構築材 (炭・焼土・遺物片混) |

第8図 竪穴式住居跡S H50・63実測図

5. 検出遺構

調査の概要でも述べたように、遺構面としては「上層」、「下層」、「最下層」の3面を確認したが、以下では、各遺構面を上から順に、中世、奈良時代、古墳時代として、古い方から時代順に調査区ごとに検出した遺構を報告する。

1) 古墳時代

各調査区合わせて、竪穴式住居跡11基や土器溜まり3か所をはじめ、土坑、溝、柱穴などを多数検出した。

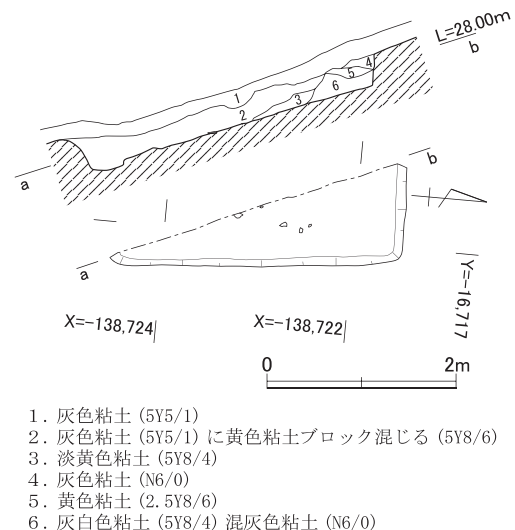
(1) A 1 地区

竪穴式住居跡 S H50 (第8図) 調査区のやや西寄りで検出した。当初設定した調査区では、西辺がトレンチ外となることから、調査区を拡張し、住居跡の全容を明らかにした。

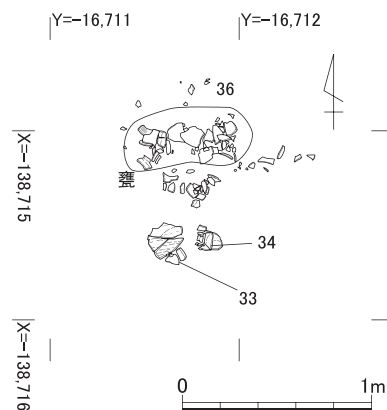
平面形はほぼ方形を呈し、南北長6.4m、東西長6.5m、深さ0.15mを測る。住居跡の北辺に竈を有する。削平のため煙道や煙出しなどは確認できなかった。竈は残存長1.8m、幅1.6mを測る。竈の中央に支柱石がある。竈の東側に接して貯蔵穴と推定される土坑 S K67を検出した。小判形に近い楕円形を呈し、長軸長1.2m、短軸長0.8m、深さ0.4~0.5mを測る。周壁溝は南西隅で検出したものの、それ以外には検出できなかった。また、明確に支柱穴といえるものも検出できなかった。

遺物の出土状況としては、竈内に土師器甑や甕などが落ち込んだ状況で出土した。また、大量の製塩土器片が竈上面から出土した。顕著なまとまりは認められなかったが、集落における製塩土器のあり方を考える上で良好な出土状況である。住居埋土からは須恵器杯蓋、土師器杯・小型丸底土器・高杯・甕などが出土しているが、住居床面よりは若干浮いた個体が多い。また、土坑 S K67からも須恵器杯蓋・杯身、土師器杯、甕、製塩土器などが出土している(第37図1~第38図32)。出土した遺物から古墳時代中期後半~末ごろと推定される。

竪穴式住居跡 S H63 (第8図) 竪穴式住居跡 S H50と重複して検出した住居跡で、S H50よりも古い。平面形はほぼ方形を呈し、南北長3.6m、東西長4.1m、深さ0.1mを測る。S H50にくらべ小型の住居である。住居跡の南辺に焼土がみられたが、竈かどうかは不明である。南辺の焼土の状況か



第9図 竪穴式住居跡 S H60実測図



第10図 土器溜まり S X15実測図

らも、竈導入以前の住居跡である可能性がある。

周壁溝は住居の西半部で検出したものの、東半部では確認できなかった。また、支柱穴も認められなかった。明らかにS H63出土の遺物と言えるものはないが、S H50出土遺物に当住居跡の遺物が含まれている可能性がある。S H50との重複関係から古墳時代中期後半よりも古く位置づけられる。

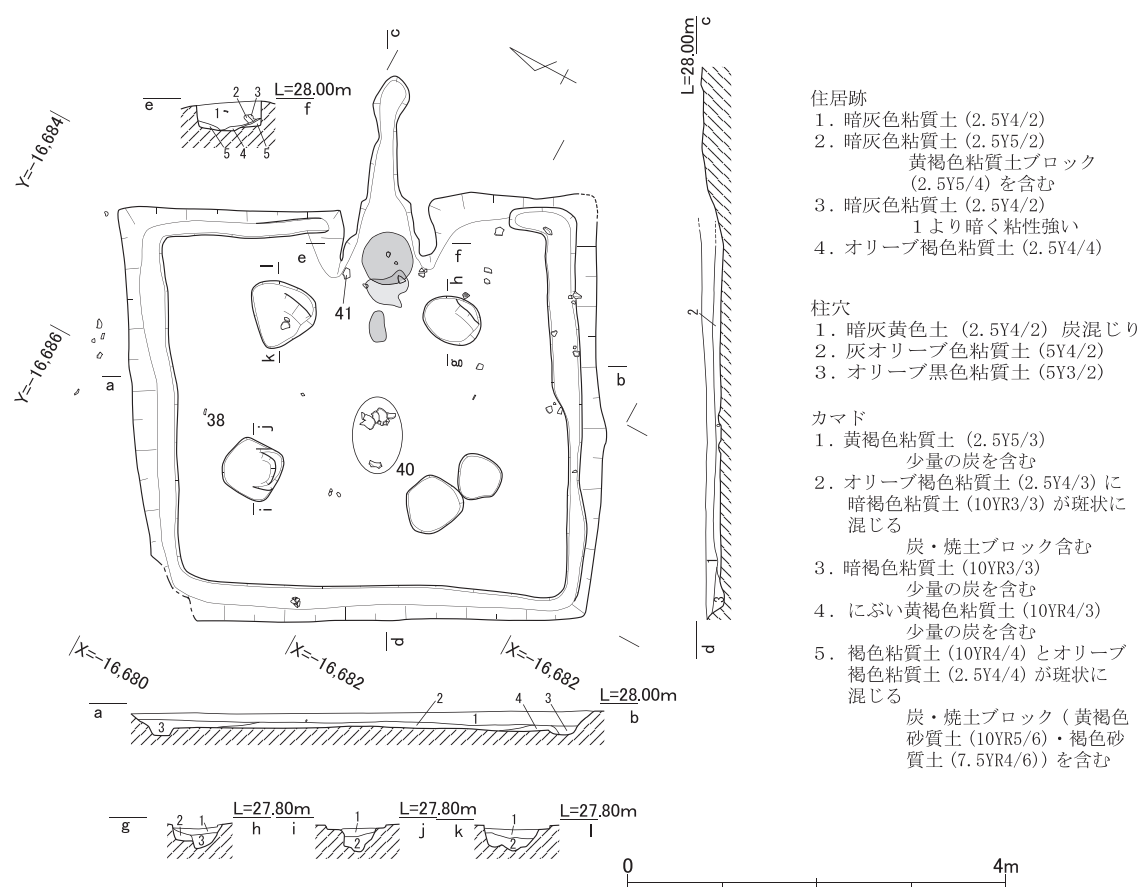
竪穴式住居跡 S H60 (第9図) 竪穴式住居跡 S H50の全容を明らかにするための調査区を拡張した結果、調査区西辺で検出した住居跡である。住居跡は、これ以上調査区の拡張ができなかったため、検出は部分的なものにとどまる。

平面形は検出状況から方形を呈すると考えられ、住居跡の北東隅を検出したものとする。南北辺3.1m以上、東西辺1.1m以上、深さ0.3mを測る。周壁溝や柱穴は認められなかった。

住居跡の埋土から土師器の小片が少量出土したが、詳細は不明である。このため住居の時期は明らかではないが、周辺の遺構とほぼ同じ古墳時代中期ではないかと推定される。

土器溜まり S X15 (第10図) 調査区のほぼ中央で検出した。直径2mほどの範囲から多数の土器が出土したが、これに伴う遺構の輪郭は確認できなかった。

出土した土器はすべて土師器で、甕・甑・椀などが出土した(第39図33～36)。出土した遺物から古墳時代中期後半ごろと推定される。



第11図 竪穴式住居跡 S H281実測図

(2) A2地区

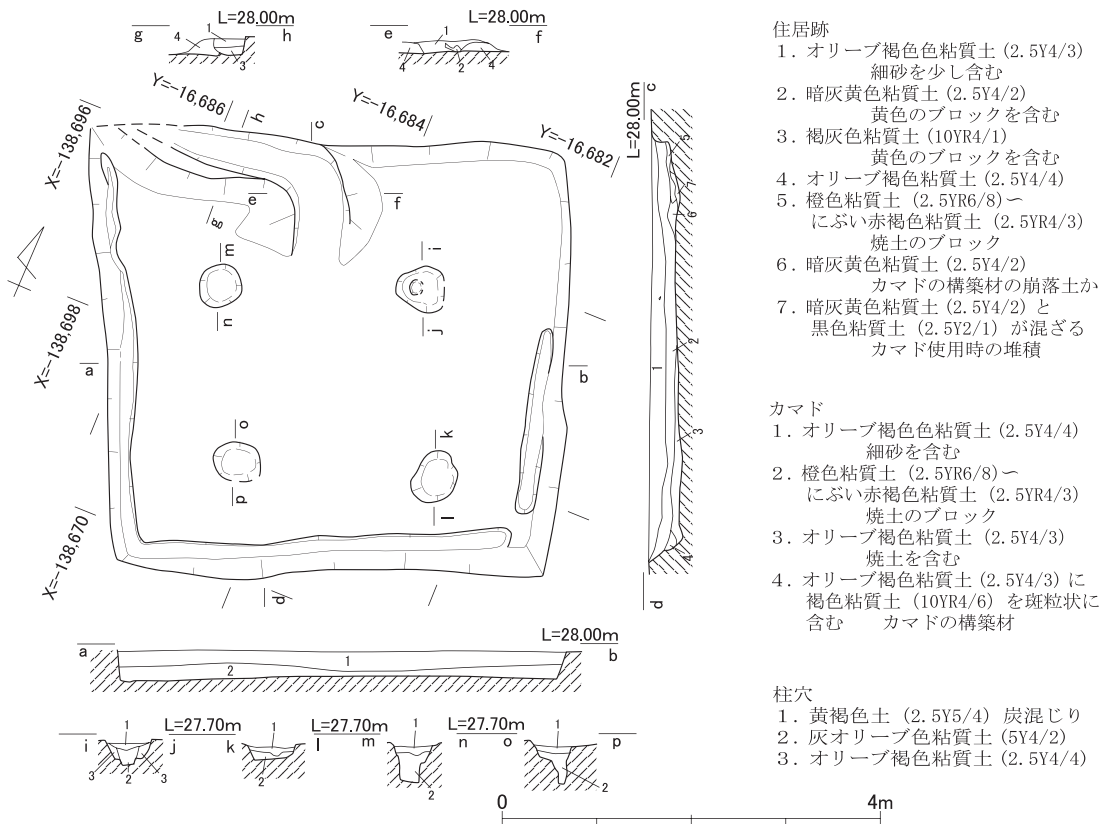
竪穴式住居跡 S H281 (第11図) 調査区の北半で検出した。平面形はほぼ方形を呈し、北に対して61°ほど東へ振っている。北東辺長5.0m、南東辺長4.5m、深さ0.15mを測る。北辺の中央に竈を有する。煙道と煙出しを合わせた竈の全長2.3m、幅1.2mを測る。竈の上面は上層遺構第2面を検出した時点ですでに確認していた。

周壁溝はほぼ全周しており、竈の付近だけ途切れている。幅10～25cm、深さ5～10cmを測る。主柱穴は4か所確認したが、南西の柱穴がやや浅く、その他は24～28cmの深さがあった。

出土遺物は少ない。遺物の出土状況としては、住居のほぼ中央で土師器甕が出土したほか、床面上に散在した状態で須恵器杯身、土師器甑などが出土した(第40図37～41)。出土した遺物から古墳時代後期中頃～後半と推定される。

竪穴式住居跡 S H282 (第12図) 調査区に南半部、やや東寄りで検出した。後述する竪穴式住居跡 S H283と重複し、本住居跡の方が新しい。S H283とともに、遺構の輪郭がみにくく、竈の焼土を確認することで、住居跡の存在を認識することができた。また、S H283との切り合い関係や遺構の最終的な規模や形状を確認するのにやや時間を要した。平面形はやや歪な方形を呈する。南北長4.6m、東西北辺長5.1m、東西南辺長4.6m、深さ0.3mを測る。東西長は北辺の方がやや長い。北辺の中央に竈を有する。

竈は、本体が北辺の中央にみられるが、煙道が住居の周壁に沿って西へ延びており、いわゆる



第12図 竪穴式住居跡 S H282実測図

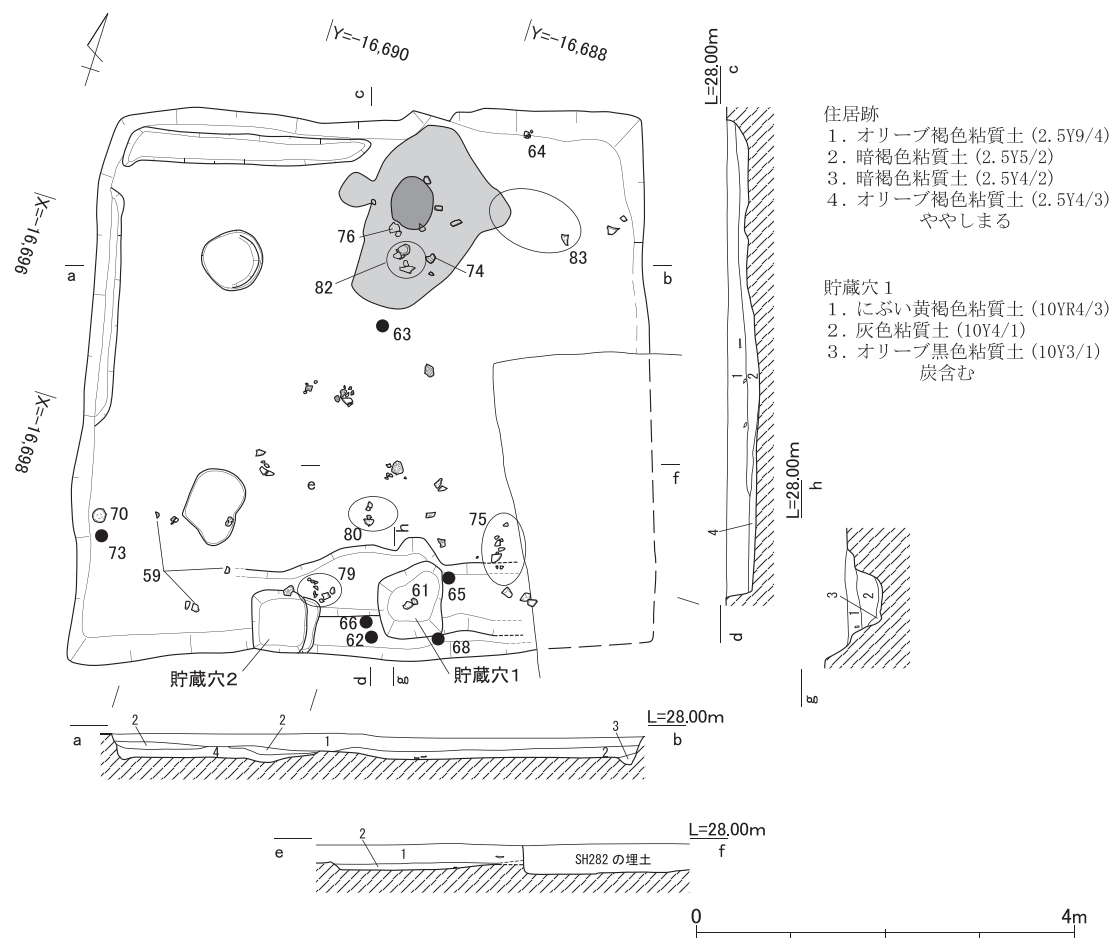
「L字形竈」の形態を呈する。竈本体は全長1.2m、幅1.4mを測る。煙道は住居跡の北辺に沿って延びるが、煙出しの部分が後世の柱穴によって攪乱されているため、全容は明らかでないが、残存長1.8m、幅0.75m、煙道の内法幅0.4mを測る。竈や煙道はオリブ褐色粘質土で構築されていた。

周壁溝は北辺と北東角を除く3辺で検出した。幅0.25～0.3m、深さ0.05m程度を測る。主柱穴は4か所確認し、直径0.4～0.5m、深さ0.12～0.27mを測る。

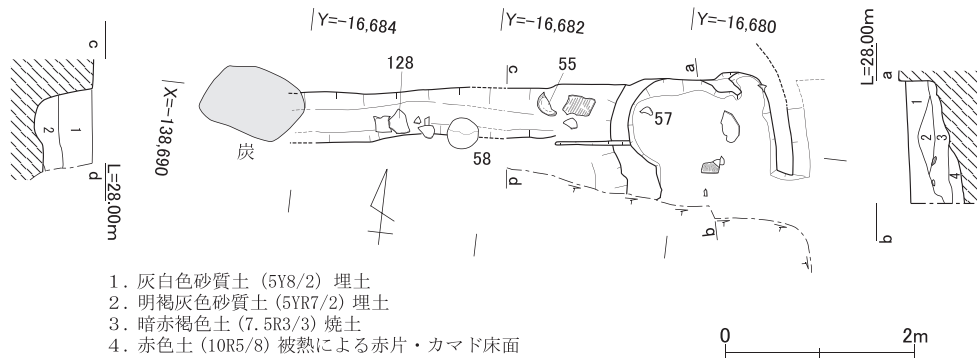
遺物の出土状況としては、竈内部やその周辺で出土したものや主柱穴で囲まれた住居の中央部分で出土したものが多い。このほか埋土上層で出土したものがある。出土した遺物としては、須恵器杯蓋・杯身、土師器甕・甑・高杯などの土器(第40図42～54)のほか、滑石製の白玉や鉄鏃などがある(第46図124・125・127)。出土した土器から古墳時代後期前半～中頃と推定される。白玉は竈の検出中に出土したもので、まとまりは認められなかった。

竪穴式住居跡 S H283 (第13図) 調査区の南半部、ほぼ中央で検出した。前述の竪穴式住居跡 S H282と重複し、本住居跡の方が古い。平面形はほぼ方形を呈し、南北長5.6m、東西長6.0m、深さ0.25mを測る。

竈は遺存していなかったが、焼土や炭・灰の広がりや北辺の中央部に接して確認した。焼土塊



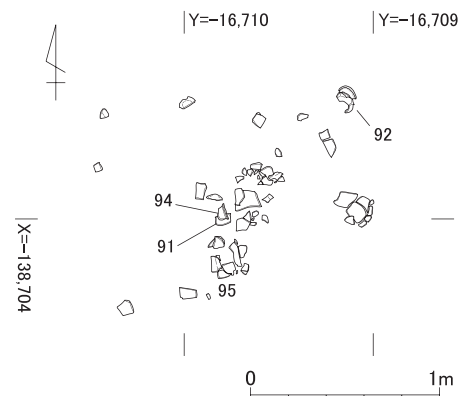
第13図 竪穴式住居跡 S H283実測図



第14図 竪穴式住居跡 S H330実測図

などが厚く堆積していたので、竈を意図的に破壊した可能性もある。竈の構造は不明であるが、焼土の広がりには長軸長2.0m、短軸長1.5mほどの範囲に認められた。

周壁溝は北・西・南の3辺で確認したが、いずれも部分的な検出にとどまる。南辺の周壁溝は幅70cm前後、深さ5～10cmで、北辺や西辺で検出した周壁溝にくらべ、やや規模が大きい。北辺や西辺の周壁溝は幅20～30cm、深さ5～10cmを測る。



第15図 土器溜まり S X199実測図

主柱穴と考えられる柱穴を住居の西半部で2基確認したが、深さが5～13cmと浅く、この柱穴が本住居跡に伴う主柱穴かどうか判断できなかった。

南辺の周壁や周壁溝に接して貯蔵穴と考えられる遺構を2基検出した(貯蔵穴1・2)。貯蔵穴1は、やや歪な方形を呈し、一辺0.6～0.79m、深さ0.4mを測る。貯蔵穴2は、ほぼ方形の平面形を呈し、一辺0.55～0.63m、深さ0.45mを測る。

遺物は、竈の残欠と考えられる焼土の周辺と、住居南半部のほぼ床面直上のほか、貯蔵穴から多く出土した。出土した遺物としては須恵器杯蓋・杯身、土師器甕・甑・高杯、製塩土器などがある(第41図59～90)。このうち貯蔵穴1からは製塩土器(85・86・90)が、貯蔵穴2からは須恵器杯蓋・杯身、土師器杯・甕、製塩土器などが出土した(60・66・71・81・88)。出土した遺物から古墳時代中期後半ごろと推定される。

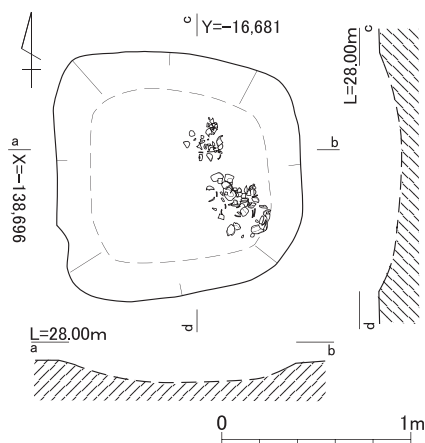
竪穴式住居跡 S H330(第14図) 調査区の東辺沿い、ほぼ中央で検出した。奈良時代の井戸 S E215と重複し、大半を破壊される。検出した周壁がほぼ直線であることから、平面形は方形であったと推定され、住居の北辺の一部を検出した。住居跡の残存する規模は、北辺検出長5.4m、残存幅1.5mである。

北辺に竈を有するが、煙道や煙出しは確認できなかった。ただ、周壁に沿って赤変している箇所がみられたので、竪穴式住居跡 S H282のような「L字形竈」であった可能性もある。周壁溝は北辺に沿って検出し、幅20～25cm、深さ5cm程度を測る。

遺物は、竈内や住居の埋土から、須恵器杯身や土師器甕などが出土した(第40図55～58)。出土

した遺物から古墳時代後期前半～中頃と推定される。また、本住居に直接伴うものではないと思われるが、埋土から朝顔形円筒埴輪の肩部の破片なども出土した(第46図128)。

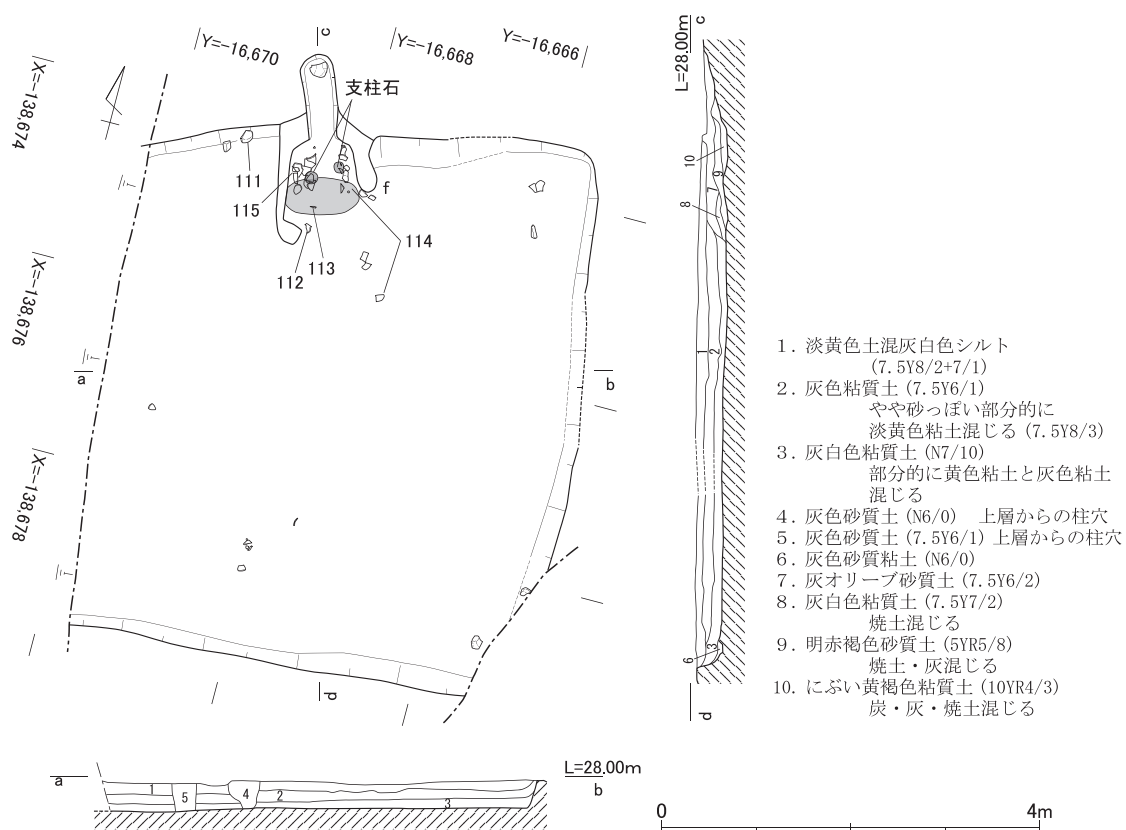
土器溜まり S X 199(第15図) 調査区西端で検出した。長軸長3.5m、短軸長2.5mの範囲から多数の土器が出土した。しかし、A 1 地区の土器溜まり S X 15と同様、これに伴う遺構の輪郭等は確認できなかった。出土した土器として、須恵器高杯・壺、土師器杯・甕などがあり、このうち5点を図示した(第43図91～95)。出土した遺物から古墳時代中期後半ないし末ごろと推定される。



第16図 土坑 S K 280実測図

土器溜まり S X 321 調査区北半部西辺寄りで検出した。明確な遺構の輪郭は認められなかったが、古式土師器など3点がほぼ同一地点で重なった状況で出土した。出土した土器として、土師器甕2点と弥生土器と思われる甕1点がある(第43図96・97)。土師器2点は布留式甕と庄内式甕各1点であり、弥生土器とともに、出土状況から同時性の指摘ができる資料である。

土坑 S K 280(第16図) 調査区の東辺中央部やや南寄り、竪穴式住居跡 S H 282の東側にほぼ接して検出した。平面形は隅丸方形を呈し、一辺1.3m前後、深さ0.2m程



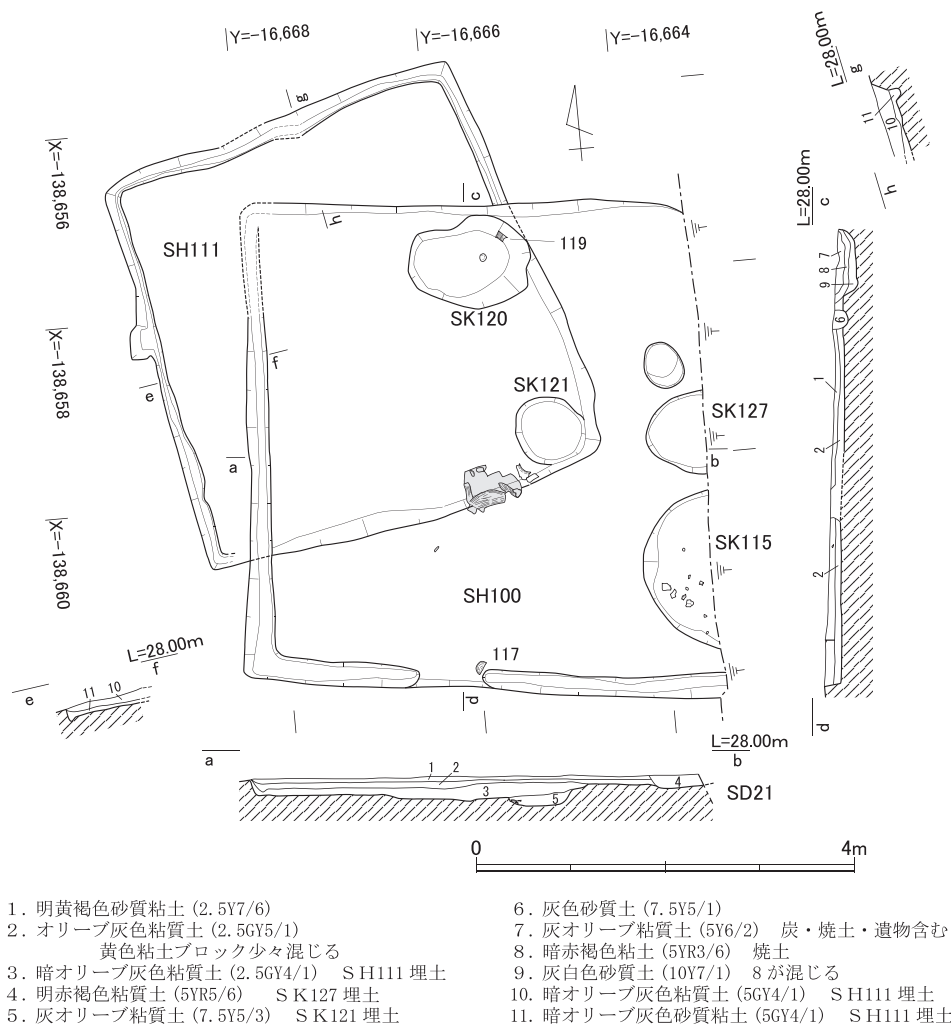
第17図 竪穴式住居跡 S H 99実測図

度を測る。出土遺物としては土坑の埋土最上層から製塩土器300gほどが出土した(第44図98～107)。しかし、土坑内には焼土等が認められないことから焼塩に伴うような焼成用の土坑ではないと判断される。なお、製塩土器以外の遺物が出土しなかったため、時期は明確でないが、周辺の遺構と同時期の古墳時代中～後期に位置づけられると思われる。

(3) B地区

竪穴式住居跡 S H99(第17図) 調査区の最南端で検出した。住居跡の西辺と南東角が調査区外となるため、住居跡の全容を確認することはできなかったが、平面形はやや歪な方形を呈する。南北長5.7m、東西検出長5.0m、深さ0.3mを測る。住居跡の北辺と南辺は平行にならず西に向かって幅がやや狭くなる。北辺の中央に竈が造り付けられており、煙道がまっすぐ住居外へ延びる。煙道と煙出しを合わせた竈の全長1.9m、幅1.1mを測る。竈内には支柱石と思われる石が2点認められた。周壁溝や支柱穴は認められなかった。

遺物は竈内でややまとまって出土したほかは、住居内に散在したような状態で出土した。出土した遺物としては須恵器杯身・高杯、土師器杯・高杯・甕などがある(第45図108～116)。出土した遺物から古墳時代後期中頃～後半と推定される。

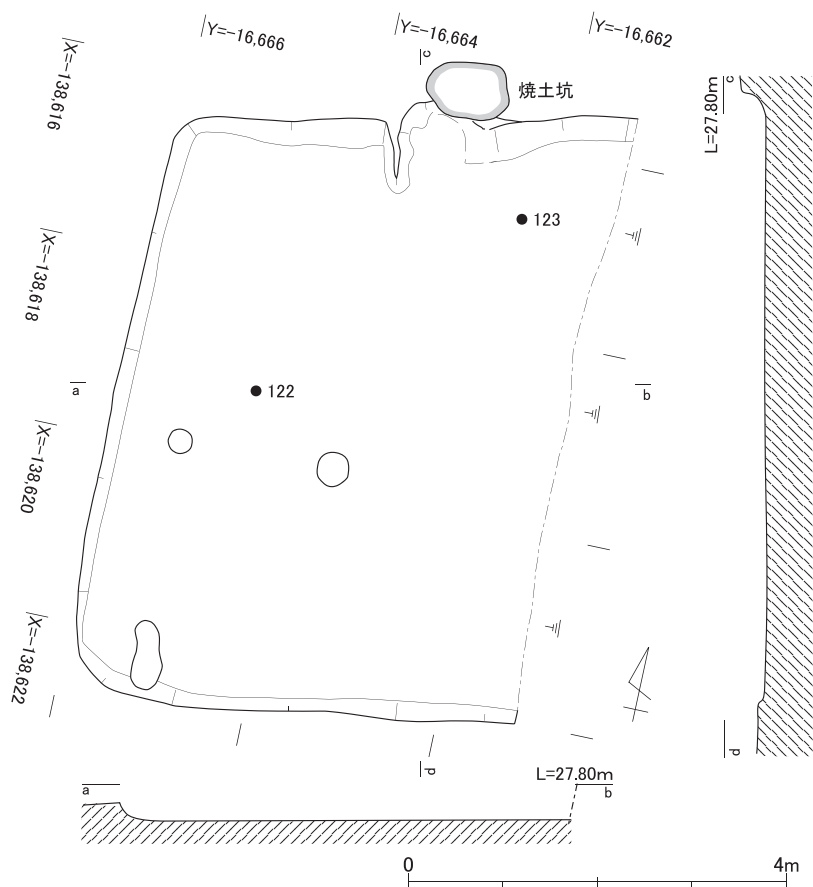


第18図 竪穴式住居跡 S H100・111実測図

竪穴式住居跡 S H100 (第18図) 調査区に南半部で検出した。後述する竪穴式住居跡 S H111と重複し、本住居跡の方が新しい。住居跡の東辺は奈良時代の南北溝 S D21によって切られている。平面形は方形を呈し、南北長5.1m、東西残存長4.9m、深さ0.15mを測る。北辺の中央には竈の残欠と思われる焼土が広がる。この焼土を完掘する過程で長軸長1.3m、短軸長0.9m程度の楕円形を呈する土坑 S K120を検出した。この土坑は竈に関連する可能性はあるものの、竈との関係は明らかにできなかった。住居跡の東半部で土坑 S K115・127を検出した。

周壁溝は西辺と南辺で検出したが、北辺には認められなかった。周壁溝は幅0.15～0.30m、深さ0.05m程度を測る。主柱穴は検出されなかった。遺物は全体に少なく、須恵器杯蓋や土器器甕が出土した(第45図117～119)。また、直径2mm程の孔を穿った緑色を呈する玉状の石製品が出土している(第45図126)。出土した須恵器から古墳時代後期前半ないし中頃と推定される。

竪穴式住居跡 S H111 (第18図) 調査区南半部で検出した。竪穴式住居跡 S H100と重複していたが、本住居が S H100よりも深く掘削されていたことから住居の規模等については明らかにすることができた。平面形はほぼ正方形で、南北長、東西長とも4.4mで、深さは0.25m前後を測る。竈や主柱穴は認められなかった。幅0.1m、深さ0.05m程度の周壁溝は全周すると思われるが、S H100との重複部分では不明瞭であった。本住居の南辺に沿って、炭の塊がまとまって出土した。詳細は不明である。遺物はごく少量が出土した程度である(第45図120・121)。S H100に先行す



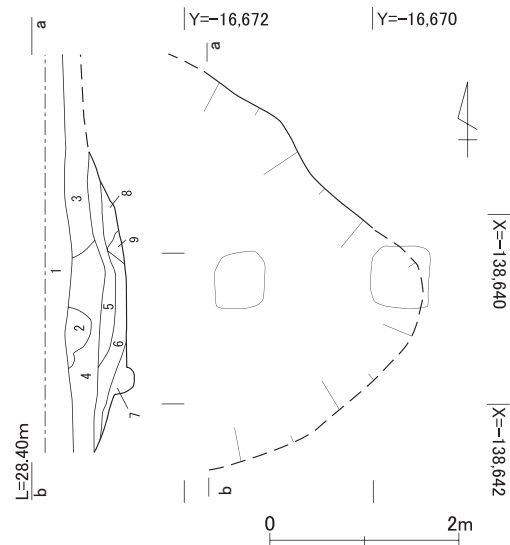
第19図 竪穴式住居跡 S H105実測図

る住居であることから古墳時代後期前半ごろと推定される。

竪穴式住居跡 S H105 (第19図) 調査区北半部で検出した。住居跡の東辺は調査区外となる。平面形は歪な方形を呈し、南北長6.4m、東西検出長4.8m、深さ0.1～0.15mを測る。北辺の中央には竈の袖と思われる部分が残存する。住居の北辺に接して、周囲が赤く焼けた楕円形の土坑がある。しかし、焼土の広がりなどから、竈とは考えられず、古墳時代よりも新しい時期の焼土坑と考えられる。周壁溝や主柱穴は検出できなかった。遺物はほとんど出土せず、土師器の破片などが少量あるのみである(第46図122・123)。出土した土器から時期の特定は難しいが、周辺で検出した竪穴式住居跡とはほぼ同時期の古墳時代中期後半から後期にかけてと推定される。

土坑 S K126 (第20図) 調査区の南半部西辺に接して検出した。遺構の一部がトレンチ壁に接して検出され、大量の土器が出土したことから、調査終了に伴う埋め戻しに際して、調査区の一部を拡張して遺物の取り上げを行った。ただ、遺構の全容は、調査区の西側に現用の水路があるため調査に限界があり、明らかにできなかった点がある。土坑の規模は長さ3.2m以上、深さ0.4m程度の不整形な楕円形を呈すると推定され、大量の土器が廃棄されたような状態で出土した。

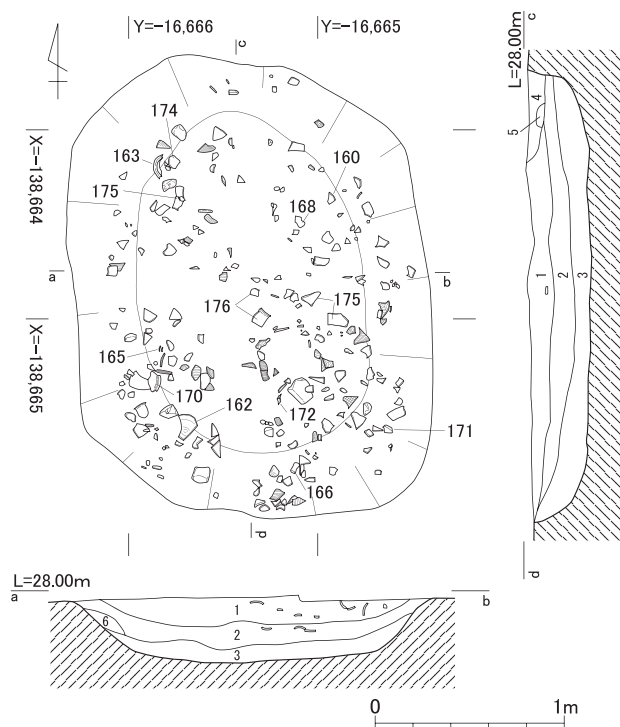
遺物は、縄蓆文を有するタタキ調整痕がみられる陶質土器甕1点を除き、すべてが土師器で、整理箱にして8箱程度が出土した。土師器の器種は小型丸底土器・



1. 灰色粘質土 (7.5Y5/1) 部分的に橙褐色斑粒状の変色有り
2. 灰白色砂混じり粘土 (10YR7/1) 中世東西溝
3. 灰白色粘土 (10YR7/1) 中世東西溝
4. 灰黄色粘質土 (2.5Y7/2)
5. 灰オリーブ色炭混じり粘質土 (7.5Y6/2)
6. 明オリーブ灰炭混じり色粘土 (2.5GY7/1)
7. オリーブ灰色炭混じり粘土 (2.5GY6/1)
8. 明緑灰色炭混じり粘土 (7.5GY7/1)
9. オリーブ灰色焼土・炭混じり粘土 (10Y5/2)

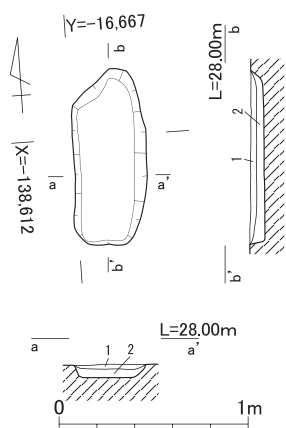
5～9 ; S K126 埋土、土器を大量に含む

第20図 土坑 S K126実測図



1. オリーブ褐色粘質土 (2.5Y4/3) 炭混じり
2. 暗オリーブ褐色粘質土 (2.5Y3/3) 炭混じり
3. 暗オリーブ褐色粘質土 (2.5Y3/3) 炭をほとんど含まない
4. オリーブ褐色砂質土 (2.5Y4/4)
5. 灰オリーブ色細砂 (5Y5/3)
6. 暗灰黄色粘質土 (2.5YR5/8)
明赤褐色 (5YR5/6) などの焼土ブロックを含む

第21図 土坑 S K91実測図



1. 灰褐色砂質土 (7.5YR4/2)
2. 暗オリーブ灰色粘質土 (2.5GY4/1)

第22図 土坑SK102実測図

壺・甕・高杯などがある。本報告ではその一部のみを報告するが、土器様相としては、ほぼ同じ内容のものである(第47図129～第48図159)。出土した土器から古墳時代中期初頭ないし前半と思われる。

土坑SK91(第21図) 調査区南半部で検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸長2.4m、短軸長1.9m、深さ0.35m前後を測る。土坑埋土は大きく3層に分かれ、おもに上2層から多数の土器と少量の炭が出土した。

出土した土器として、須恵器杯蓋・杯身・高杯・壺、土師器杯・甕などがあり、このうち18点を図示した(第49図160～177)。出土した土器から古墳時代後期後半と推定される。

土坑SK102(第22図) 調査区北半部で検出した。平面形はやや歪な長方形を呈し、全長0.94m、幅0.39m、深さ0.1mを測る。土坑からは土師器甕1点が出土した(第49図178)。

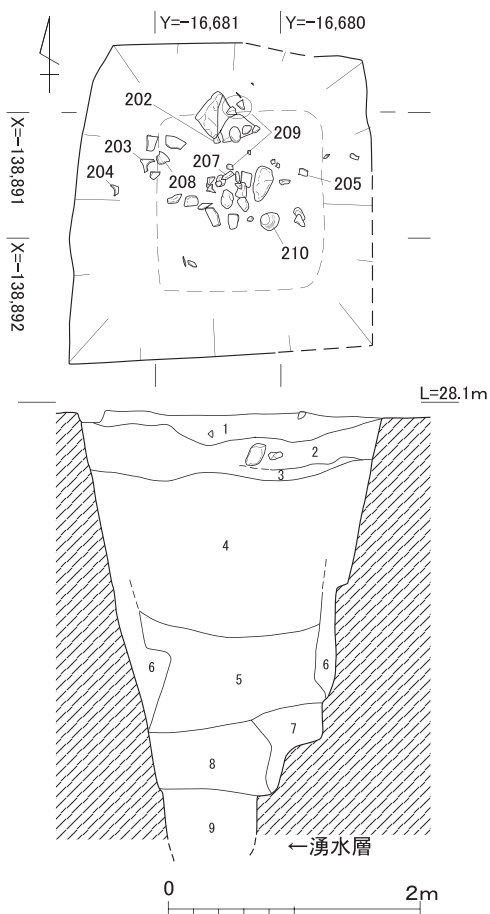
2) 奈良時代

A1地区では当該期の遺構は検出していない。また、遺物もほとんど出土していない。A2地区では井戸1基のほか、少数の柱穴や土坑を検出したのみで、全体として遺構の数は少ない。これは、中世に遺構が削平されてしまったためと思われる。B地区では掘立柱建物跡4棟、溝5条、土坑2基などを検出した。

(1) A2地区

井戸SE215(第23図) 調査区の東辺、ほぼ中央で検出した。平面形はほぼ方形を呈し、一辺2.1～2.5mを測る。当初は人力で掘削を行っていたが、2mを超える深さであることが判明したため、重機による断ち割り調査に切り替えた。その結果、検出面からの深さ約3.4mで湧水層と思われる砂層に達した。この付近が井戸の底と思われるが、曲げ物などは認められなかった。また、井戸枠も確認されなかった。

遺物は最上層の約0.5mほどの範囲からまとまって出土したものの、それよりも下層では、ほとん



1. にぶい黄色粘質土 (2.5Y6/4) 粒子細かい
2. にぶい黄色粘質土 (2.5Y6/4)
3. 灰オリーブ粘土 (7.5Y5/2)
4. 暗青灰色シルト灰色砂混じり
5. 暗青灰色シルト
6. 緑灰色粘質土
7. 緑灰色粘質土
8. 淡青灰色粘土 (やや暗青灰色の部分あり)
9. 茶灰色砂混じり淡青灰色粘土

第23図 井戸SE215実測図

ど出土しなかった。土層の堆積状況から判断して、ある程度埋められた後に土器が投棄されたのではないかと推定される。

出土した遺物としては、土師器杯A、須恵器杯A・杯B・杯B蓋・鉢D・壺L・壺Q、平瓦などがある(第58図200～210)。出土した土器から奈良時代中頃と判断され、B地区で検出した土坑S X 96や溝S D 21などとほぼ同時期である。

土器溜まり S X 203 上層遺構第2面の南北方向の耕作溝の掘削中に確認したもので、1.4m程の範囲から若干の土器がまとまって出土した。耕作溝による攪乱のため、遺構の掘形等は確認されなかった。あるいは遺物包含層中の土器がややまとまって出土した可能性もある。出土遺物としては須恵器ばかりで、杯Bや鉢Dなどがある(第58図211・212)

その他の遺構 A2地区では、奈良時代の遺物を出土する柱穴や土坑を少数検出した。検出した柱穴は掘立柱建物跡としてのまとまりを確認することはできなかった。柱穴S P 222からは土師器皿A・甕Aが、柱穴S P 169からは土師器杯Aが、柱穴S P 221からは須恵器杯Bが、柱穴S P 313からは須恵器杯B蓋がそれぞれ出土した(第58図213～217)。

(2) B地区

土坑 S X 96(第24・25図) 調査区のほぼ中央で検出した。後述する掘立柱建物跡S B 03と重複し、これよりも古い遺構である。平面形はほぼ方形を呈するが、西壁の立ち上がりを明瞭に検出できたのにくらべ、北壁・南壁の立ち上がりはともにやや不明瞭であった。また、東壁はさらに不明瞭であった。検出状況等から、当初は井戸の可能性を考えたが、井戸枠等が認められず、掘形底面でも湧水も、湧水層と思われる砂層も認められなかったことから、土坑と判断した。

平面形は、やや不明瞭な点もあるが、ほぼ方形を呈し、南北長3.5m、東西長3.9mで、深さは最大で1.9mを測る。埋土は下層から、木簡や削屑を含む木屑層(13・15層)、大量の遺物が焼けた木材や炭とともに出土した炭層(7・10層)、土坑を最終的に埋め立てた層(1～4層)の大きく3層に分けることができる。

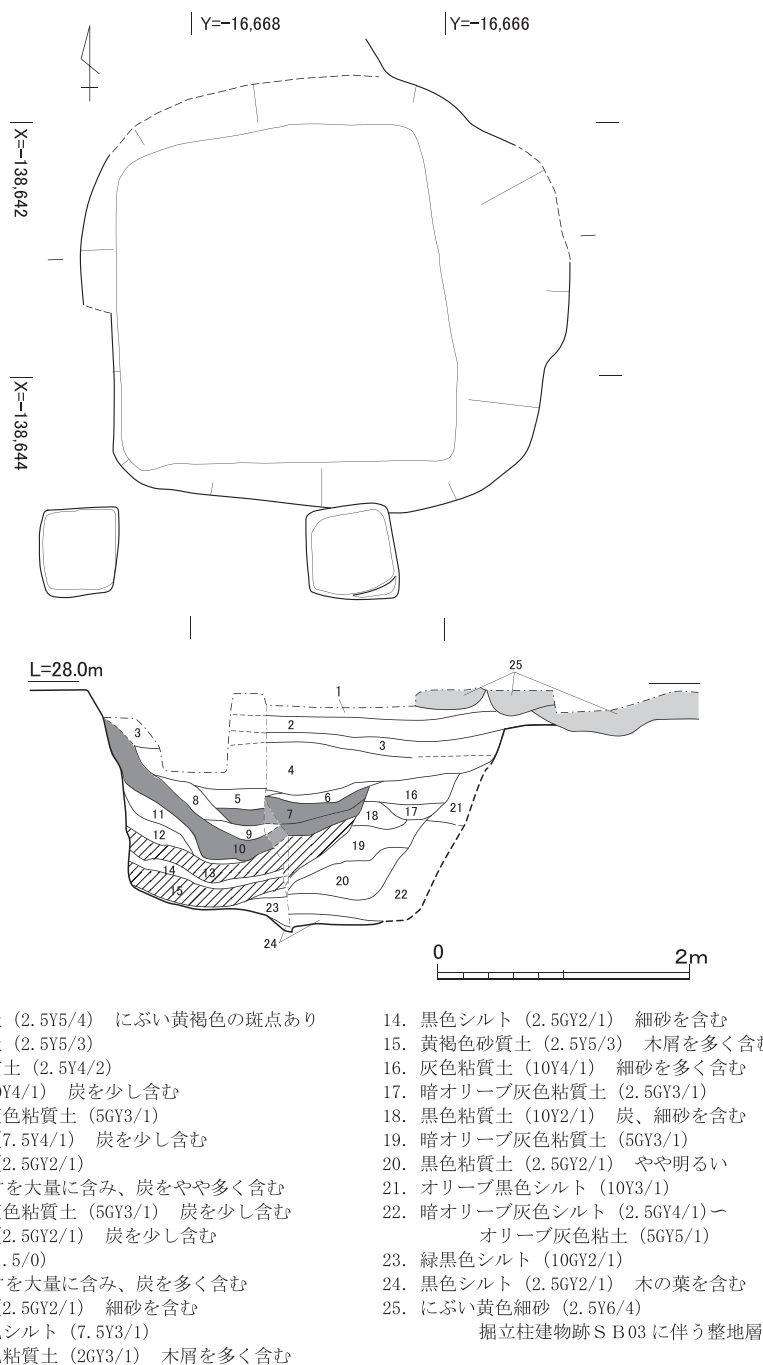
遺物の出土状況は次の通りである。まず、木屑層からは大量の木屑や加工木に混じって今回の調査で最大の成果となった木簡や削屑が出土した。合わせて少量の土器や瓦片などが出土した。次に炭層からは大量の炭や焼けた木材、自然木などとともに、墨書土器、須恵器・土師器などの土器類、製塩土器、瓦埴類のほか、銅椀片、鉾滓などが出土した。その出土量は膨大で、炭層そのものの厚さが限定されることから、これらの遺物と炭などが一時に大量に投棄されたと考えられる。第25図に示した遺物出土状況は、上層・下層としているが、炭層内における遺物の出土状況を示している。整地層からも若干の土器と瓦埴類が出土した。

土坑S X 96から出土した遺物は整理箱にして30箱を越える。その内容は木簡や削屑(第50図179～181、図版第33 703～736)、瓦埴類(第51図182・184、第52図186～188、第53図190・191、第54図193、第55図195～第57図198)、須恵器・土師器などの土器類(第59図218～第67図412)、墨書土器(第68図413～第70図443)、製塩土器(第71図444～457)、木製品・銅製品・鉄製品(第80図604～609)など多岐に及ぶ。出土した木簡や墨書土器などの文字資料に年代の書かれたものはなかつ

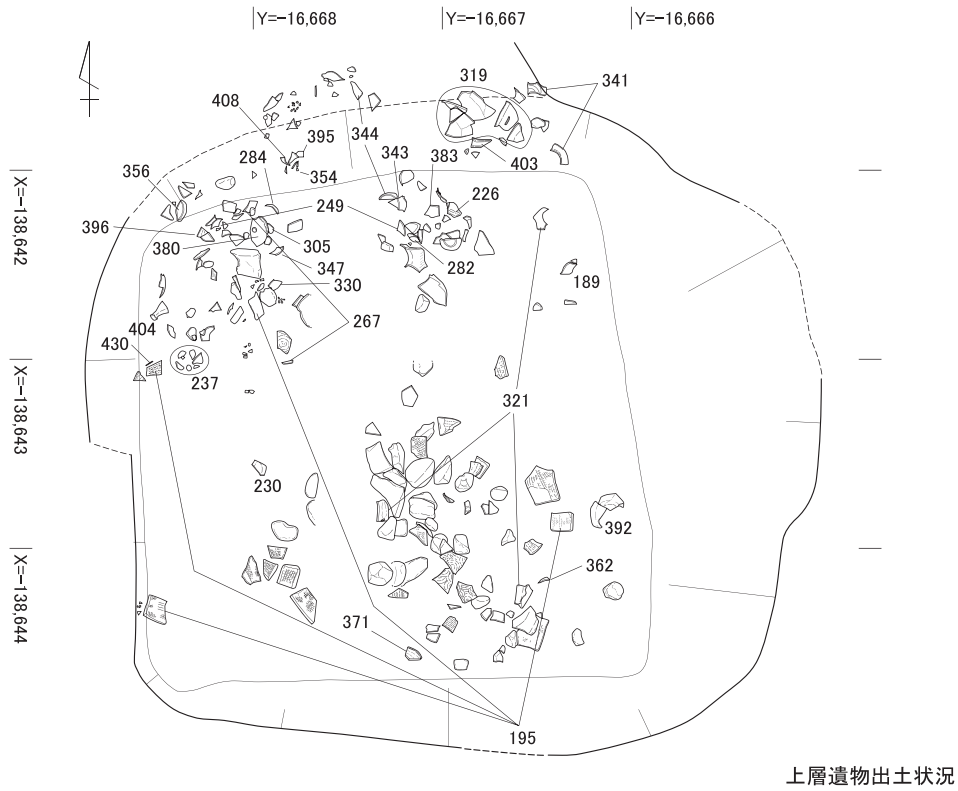
たが、出土土器は、その特徴から奈良時代中頃に位置づけられる。

この遺構の性格については、出土遺物の内容や土層の堆積状況などから、調査地周辺で生じた不要物を廃棄するために掘られた土坑と考えられる。また、調査終了後に重機による断ち割りをを行い、この遺構が井戸でないことを最終的に確認した(図版第15-3)。

また、大量の炭化材が出土したことから、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。結果のみを記すと、 1σ 暦年代範囲(確率68.2%)で681-716 cal AD(39.7%)および744-768 cal AD(28.5%)、 2σ 暦年代範囲(確率95.4%)で671-773 cal AD(95.4%)と、7世紀後半



第24図 土坑 S X 96実測図



0 1m

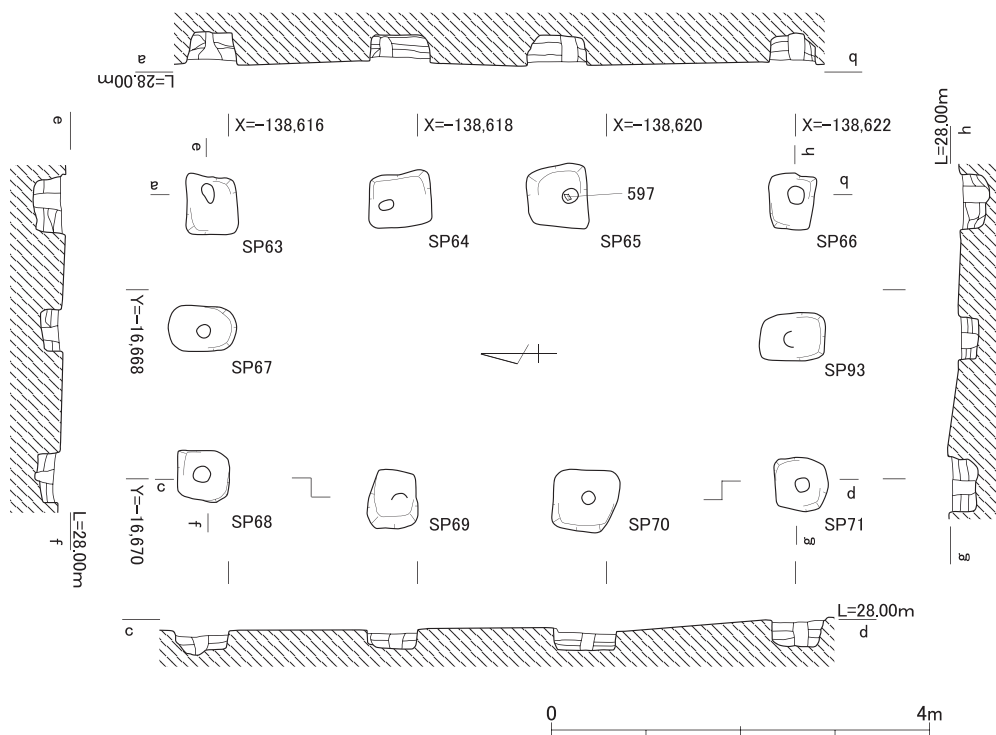
第25図 土坑 S X 96遺物出土状況

～8世紀後半の範囲を示した。この結果は、土器から推定される遺構の年代とほぼ重なるが、土器から得られた年代ほど絞り込むことはできていない。

掘立柱建物跡 S B01 (第26図) 調査区の中央、やや北寄りで検出した。柱間が不揃いであるが、東西2間(2.8m)、南北3間(6.2m)の南北棟建物跡である。建物主軸は北に対して0.5～1°東に振る。柱穴は方形を呈し、一辺の長さがほぼ同じものが多いが、一部長方形を呈するものが多い。柱穴の一辺は45～70cm、深さ20～30cmを測る。両妻側中央の柱穴 S P 67・93はやや南北に長い長方形を呈する。また、四隅の柱穴はほかの柱穴にくらべ、わずかに深い。いずれの柱穴でも柱痕を確認しており、直径12～18cmを測る。

出土遺物としては、柱穴 S P 65から土師器甕(第78図597)があるほか、須恵器や土師器の小破片などがある。出土した土器から時期を特定することは難しいが、奈良時代の建物跡である。

掘立柱建物跡 S B02 (第27図) 調査区の中央で検出した。掘立柱建物跡 S B01から南へ約15mの所に位置する。東西2間(3.2m)、南北1間(3.6m)の建物跡である。建物主軸は北に対して0.5°程度西に振る。柱穴はやや不整形な方形を呈するもの(柱穴 S P 117)もあるが、ほぼ方形を呈する。柱穴の一辺は55～65cm、深さ16～20cmを測る。柱穴 S P 78は断面の観察を繰り返したが、底面を確認することはできなかった。いずれの柱穴でも柱痕を確認しており、直径20～25cmを測る。S B02の西側に位置する柱穴 S P 81は、S B02の南側柱列と柱筋や柱間寸法が揃うが、北側柱列の西への延長部分で柱穴を検出することができなかったため、別の遺構と判断した。また、S B02の柱列で囲まれた中央に、長辺1.0m、短辺0.6m、深さ0.15mを測る平面長方形の柱穴がある(柱穴 S P 75)。柱穴内には柱痕が2つ確認できた。この S P 75が S B02と一体のものである



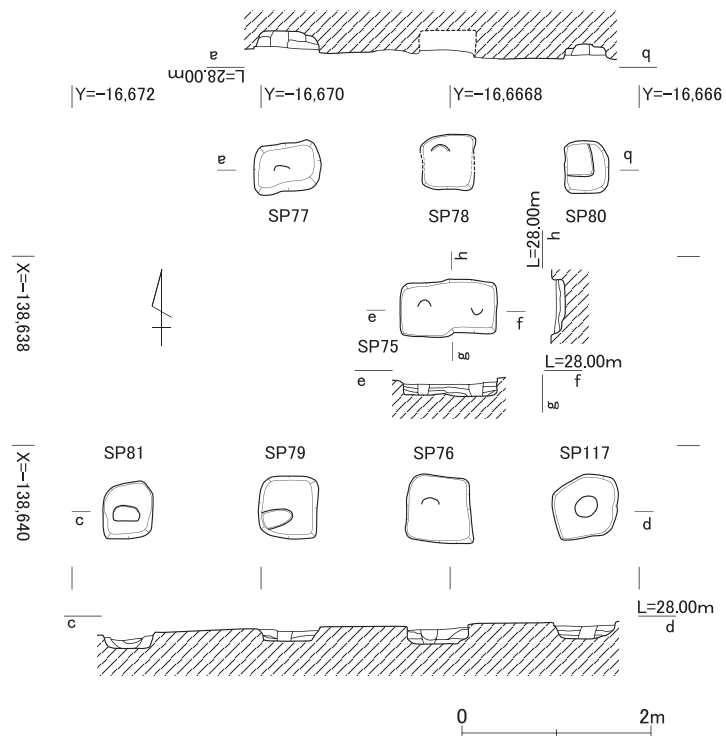
第26図 掘立柱建物跡 S B01実測図

のか、別の時期のものであるのか、明確にすることはできなかった。

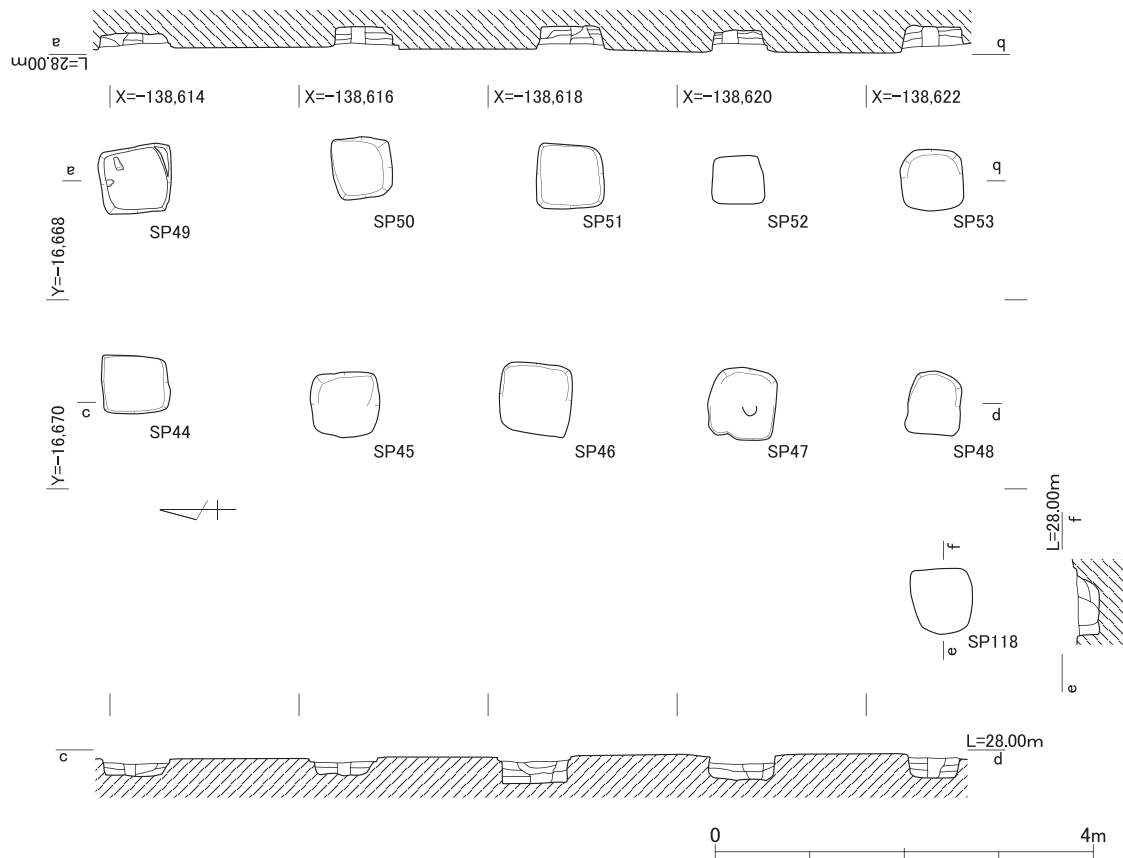
遺物としては、各柱穴から須恵器や土師器の小破片などが出土したが、土器から時期を特定することは難しい。

掘立柱建物跡 S B03 (第28図)

調査区の中央、やや南寄りで
検出した。掘立柱建物跡 S B02
から南へ約 5 m の所に位置す
る。東西 1 間 (2.0m) 以上、南北
4 間 (8.5m) の建物跡で、東側に
庇を持つと考えられる。身舎の
大半は調査区外に位置する。庇
の出は 2.4m (1 間分) である。建
物主軸は北に対して 1 ~ 1.5° 東
に振る。柱穴は方形を呈し、一
辺の長さが 65 ~ 75cm を測るもの
が多い。深さは 18 ~ 28cm を測る。
身舎の柱穴と庇の柱穴の大きさ



第27図 掘立柱建物跡 S B02実測図



第28図 掘立柱建物跡 S B03実測図

はほぼ同じである。柱痕はすべての柱穴で確認しており、直径20cm前後を測る。

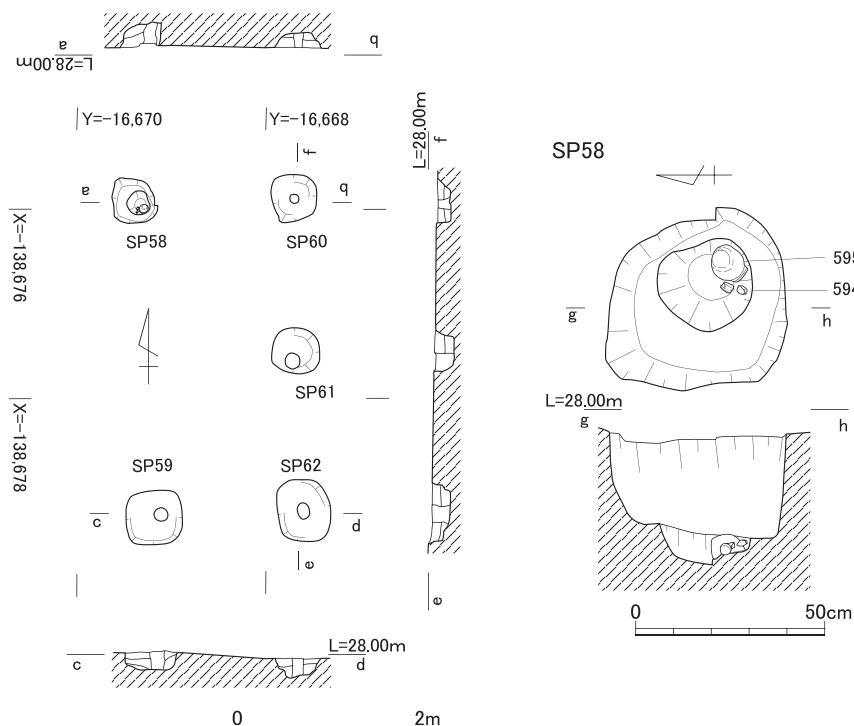
遺物としては、柱穴S P 49から須恵器杯Bや土師器杯Cが出土した(第78図591・592)ほか、各柱穴から須恵器や土師器の小破片などが出土した。出土した土器から奈良時代中頃と思われる。

掘立柱建物跡S B 04(第29図) 調査区の南端で検出した。掘立柱建物跡S B 03から南へ約21mのところの位置する。東西1間(1.6m)以上、南北2間(3.3m)で、東西棟の建物跡と推定される。建物主軸は北に対して15°西に振る。柱穴は隅丸方形を呈し、柱穴の一辺は48~60cm、深さ18cm前後を測る。いずれの柱穴でも柱痕を確認しており、直径11~13cmを測る。

S B 04を構成する柱穴の1つであるS P 58からは、須恵器杯B蓋のつまみや土師器壺Bなど(第78図594・595)が出土した。出土状況から壺Bに供え物を入れて地鎮のため柱穴内に埋納した可能性もある。また、柱穴S P 60から土師器甕(第78図593)が出土したほか、その他の柱穴からも須恵器や土師器の小破片が出土している。出土した土器から奈良時代と思われるが、詳細な時期は不明である。

今回の調査で検出した掘立柱建物跡S B 01~04の4棟の建物跡の、いずれからも時期を決定できるような遺物はほとんど出土しなかった。しかし、後述する溝S D 21と掘立柱建物跡4棟は、方位をおおむね揃えていることから、同時期の遺構である可能性が高いと考えている。この点は土坑S X 96と掘立柱建物跡S B 03との層位的な関係とも矛盾しない。

溝S D 21(第30~33図) 溝S D 21は調査区を縦断する溝で、総延長は100mに達し、幅は0.7~1.1mを測る。深さは地点によってまちまちであるが、0.1~1.0mを測る。S D 21の方位は、北に対して1°西に振る。なお、調査区内で、S D 21に直交するような溝や柵などの遺構は確認しい



第29図 掘立柱建物跡S B 04実測図および柱穴S P 58遺物出土状況図

ない。第1次調査では第2・3トレンチでS D21の一部を検出している。

遺構の検出状況や遺物の出土状況から、S D21全体を大きく3区分して記述する。まず、北部は、調査区の北端から第1次調査の第3トレンチの南端までの範囲で、第3トレンチ全体を含む。この付近の溝の規模は、幅0.9～1.1m、深さ0.1～0.2mを測り、全般的に浅い。水の流れていた痕跡は明確には認められなかったが、北から南に向かって流れていたと思われる。北部では調査範囲が狭かったものの、第1次・第2次とも多数の遺物が出土した。出土遺物としては土師器や須恵器、製塩土器がある(第72図458～第73図512)。しかし、この西側の調査範囲では、出土土器と関連づけられる建物などの遺構は検出されなかった。

中央部は、第1次調査の第3トレンチの南端から同じく第2トレンチの北端までの範囲とする。したがって、第1次調査の際に調査区を設定しなかった範囲である。この範囲の溝の規模は、幅0.7～1.1m、深さ0.15～0.5mを測り、全般的に浅い。溝底は中央が高くて北と南に向かって下がっていくようである。水の流れていた痕跡は明確には認められなかった。遺物の出土状況は、中央部の北10mほどの範囲からは遺物がほとんど出土しなかった。S D21のほかの地点では遺物が多数出土することから、この付近では遺物が投棄されるような状況になかったと考えられる。出土遺物としては土師器・須恵器のほか、丸瓦・平瓦の破片や製塩土器が少量ある(第74図514～第75図549)。

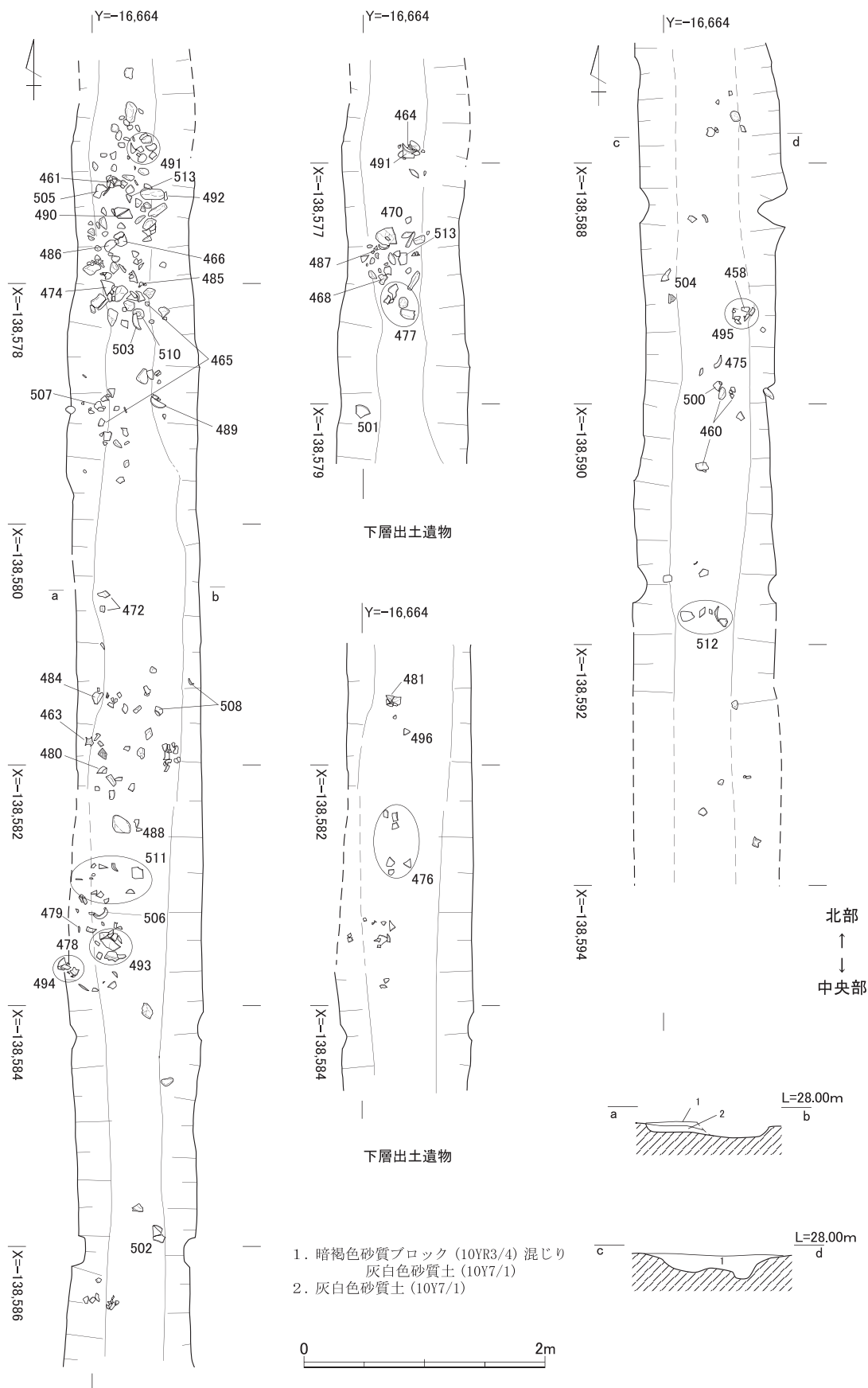
南部は、第1次調査の第2トレンチの北端から調査区の南端までの範囲で、第2トレンチ全体を含む。この範囲の溝の規模は、幅0.6～1.2m、深さ0.1～1.0mを測り、特に第2トレンチで遺構の深さが1.0mを測るところがある。しかし、国土座標のX=-138,666付近で溝の底面が比高0.4mほどの段差をもって急に浅くなり、最南端では深さがわずか0.1m程度となる。溝の底がこのように大きく変化する理由については明らかでない。ただし、この深い範囲の西側には今回調査した建物の中では比較的大型の建物である掘立柱建物跡S B03があり、何らかの関係があるかもしれない。遺物の出土状況は、第2トレンチでまとまった土器が出土したほか、第2トレンチ南端よりも南側では遺物の出土量は徐々に減少し、浅い部分ではほとんど出土しなかった。出土遺物としては土師器・須恵器のほか、丸瓦・平瓦の破片が少量ある(第76図550～第77図590)。ただし、第1次調査の際に、溝S D21の最上層から完形の平瓦1点(第55図194)が出土している。

以上のようにS D21からは多数の須恵器や土師器が出土したほか、平瓦や丸瓦などが少量出土した。軒瓦の出土は認められなかった。出土した土器の特徴からおおむね奈良時代中頃に位置づけられる。また、全体として溝の底の標高は一定しないことから、水を流すような機能は認めにくく、区画等の表示を目的としたものだった可能性もある。

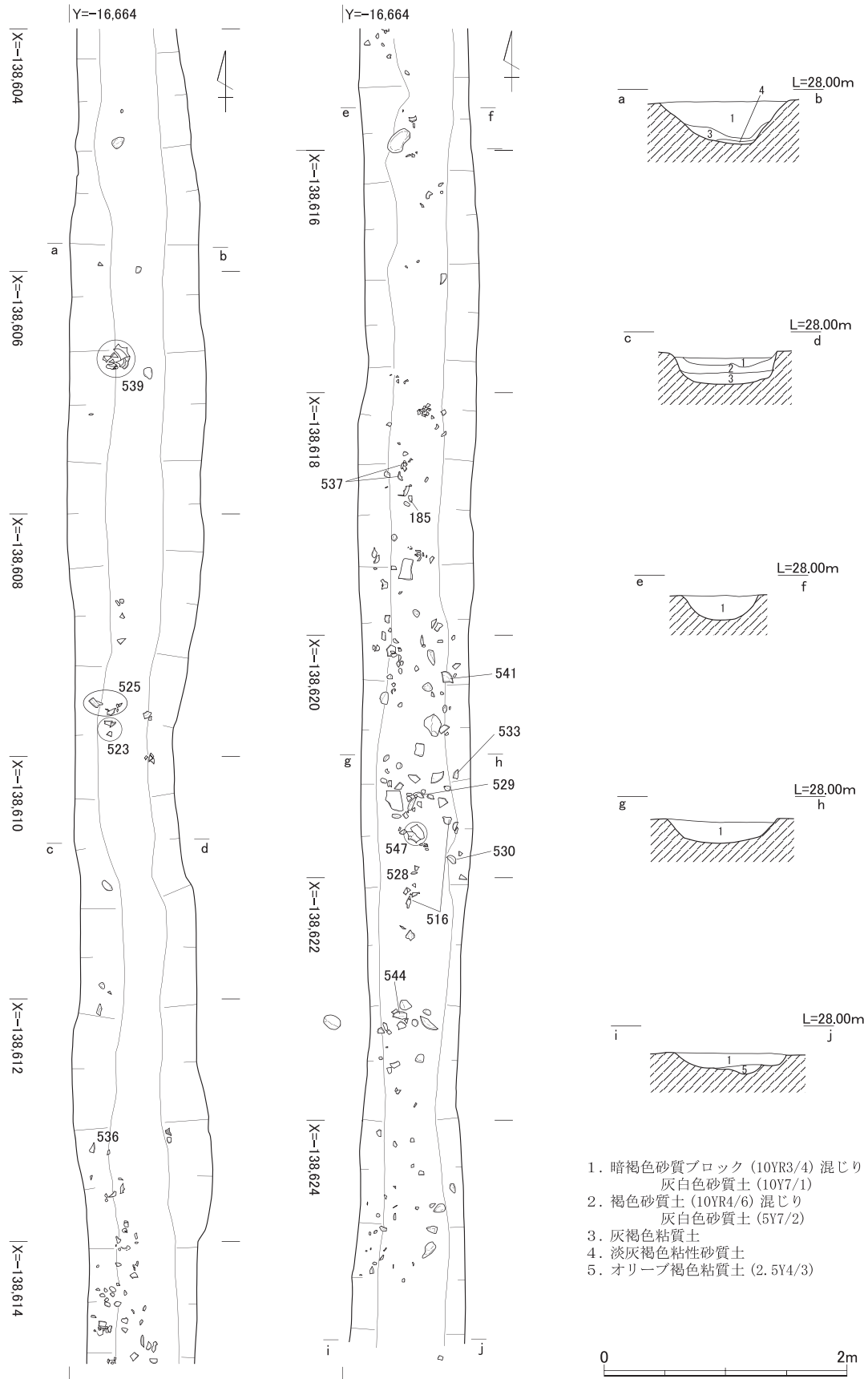
土坑S K41 調査区の北半部で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、一辺2.6m前後、深さ0.3m程度を測る。埋土は黄灰褐色砂質土ないし灰褐色砂質土で、須恵器杯Aなどが出土した(第78図596)。溝S D21や掘立柱建物群とおおむね同時期と考えられる。

3) 中世

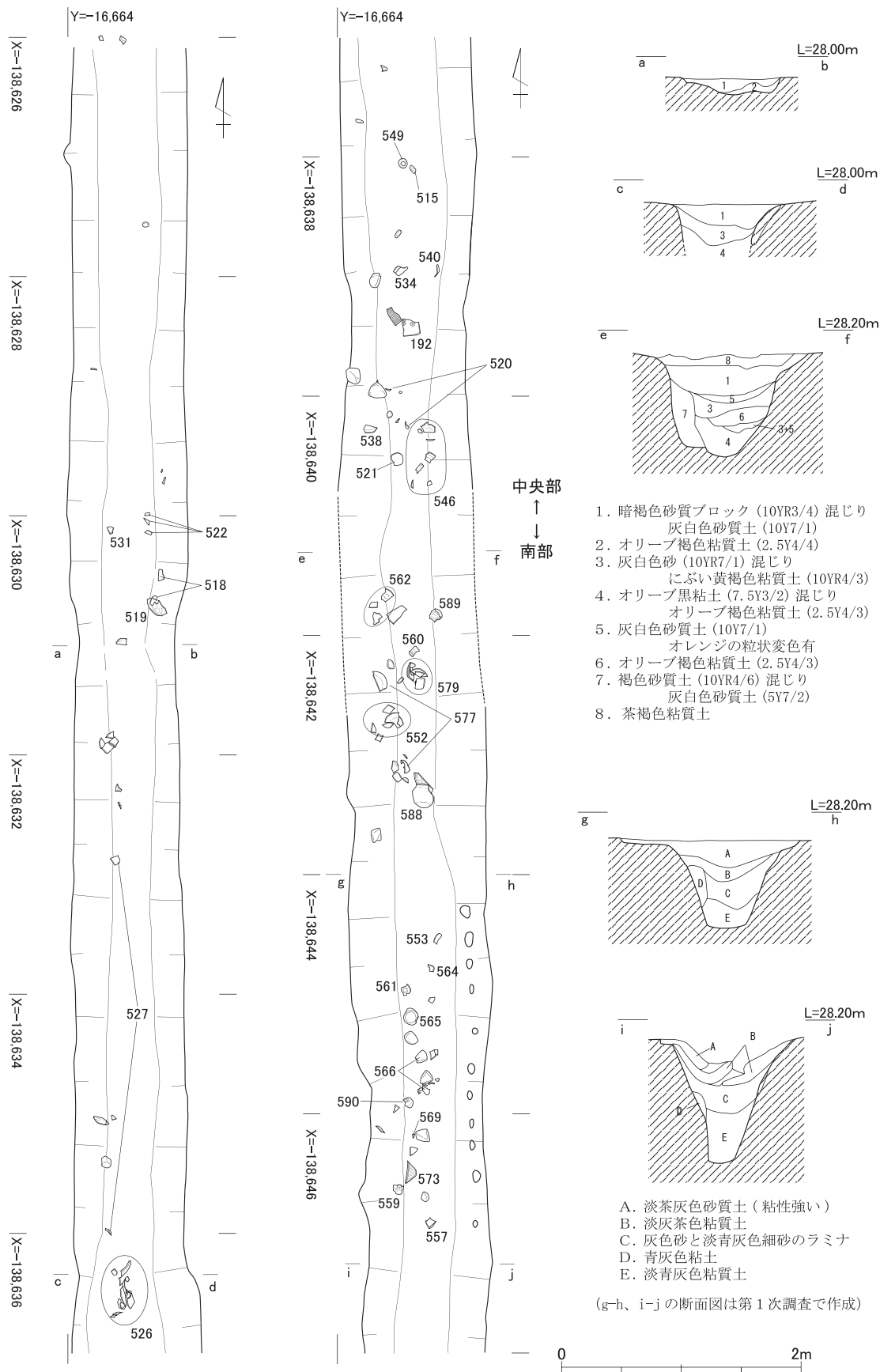
中世の遺構は、A1地区で2面、A2地区で3面、B地区で1面検出した。遺構の大半は素掘



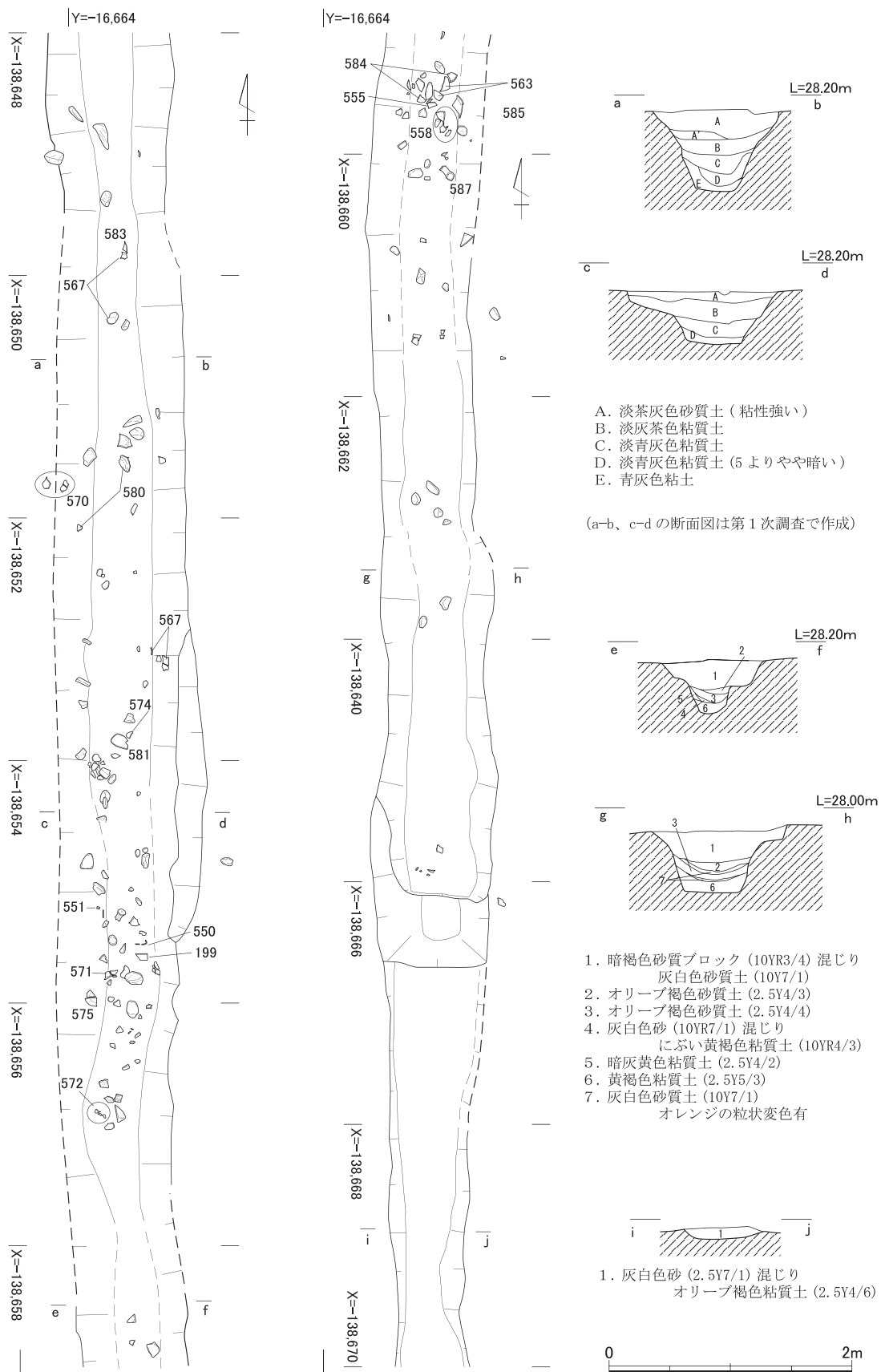
第30図 溝 S D 21実測図(1)



第31図 溝 S D21実測図(2)



第32図 溝 S D 21実測図(3)



第33図 溝 S D 21実測図(4)

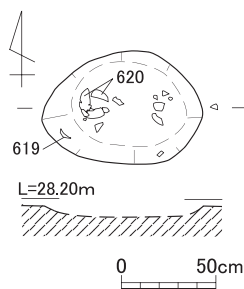
り溝で、100条以上に達する。また、A1地区とA2地区の南半部で掘立柱建物跡2棟をはじめ、柱穴や土坑を多数確認した。中世から近世にかけての遺物が出土しており、当該期の集落と耕作地の一部と推定され、遺構面に応じた変遷が考えられる。

(1) A1地区

素掘り溝群(第4図上段) 中世の遺構の第1面で検出した素掘り溝群で、重複が著しいが、15条以上の溝群を検出した。幅0.5m、深さ0.1~0.3m前後を測るものが多い。東西方向を指向しており、A2地区の中世の遺構の第1面と同方位である。出土遺物としては土師器や瓦器などがあり、中世から近世にかけての遺構と考えられる。

掘立柱建物跡 S B05(第4図下段) 中世の遺構の第2面東寄りで検出した。東西2間(3.8m)、南北1間以上(1.8m以上)の建物跡である。建物主軸は北に対して8°東に振る。柱穴は直径0.2m前後の円形ないし隅丸方形を呈する。深さは0.1m未満である。出土遺物がほとんどなく、詳しい時期は不明である。

掘立柱建物跡 S B06(第4図下段) 中世の遺構の第2面中央で検出した。東西2間(4.3m)、南北4間以上(8.0m以上)の建物跡である。建物主軸は北に対して4°ないし5°東に振る。柱穴は直径0.2mほどの円形を呈する。深さは0.15~0.2mを測る。出土遺物がほとんどなく、詳しい時期は不明である。



第34図 土坑 S K106実測図

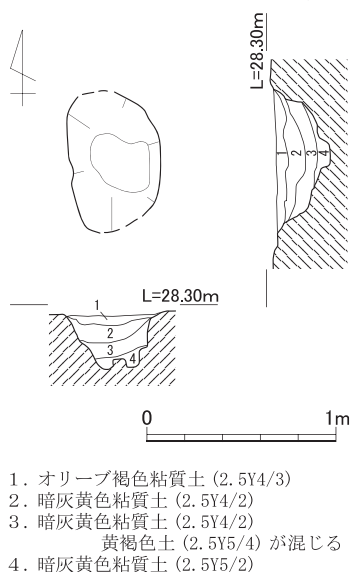
(2) A2地区

素掘り溝群 1(第5図上段) 中世の遺構の第1面で検出した素掘り溝群で、おもに東西方向に延びる。重複が著しいが、30条以上の溝群と調査区のほぼ中央を東西方向に横断する大溝状の遺構 S X 1 を検出した。素掘り溝の大半は、幅0.3~0.6m、深さ0.1~0.15mを測る。S X 1 は幅10m、深さ0.3mほどを測り、埋土の大半は淡青灰色粘質土

であった。出土遺物としては瓦器、中国製陶磁器、中世陶器、銭貨(寛永通寶)などがあり、中世後半~近世と思われる。

素掘り溝群 2(第5図中段) 中世の遺構の第2面で検出した素掘り溝群で、おもに南北方向に延びる。重複が著しいが、S X 1 よりも北側で南北方向の耕作溝を20条以上検出した。出土遺物としては土師器・瓦器・中国製陶磁器などがあり、中世前半~中頃と思われる。

土坑 S K 106(第34図) 中世の遺構の第2面の北半部で検出した。平面形は東西方向に長い楕円形を呈する。長軸0.85m、短軸0.6m、深さ

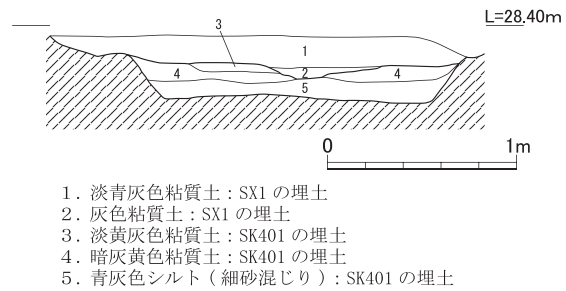


1. オリーブ褐色粘質土 (2.5Y4/3)
2. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y4/2)
3. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y4/2)
4. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y5/2)

第35図 土坑 S K143実測図

0.1mを測る。瓦器碗や土師器皿などが出土した(第81図612～614)

土坑 S K 143(第35図) 中世の遺構の第2面の南端で検出した。平面形は歪な長方形を呈する。長辺1.7m、短辺0.9m、深さ0.6mを測る。瓦器碗・瓦器皿・白磁碗・須恵器碗・土師器皿などが出土した(第81図621～634)。



第36図 大溝状遺構 S X 1・土坑 S K 401土層断面図

(3) B 地区

素掘り溝群(第7図左) 中世の遺構面で検出した素掘り溝群で、大半が東西方向に延び、一部南北方向に延びる。全体に重複が著しいが、60条以上の溝群を検出した。幅0.3～0.6m、深さ0.1m前後を測るものが多い。素掘り溝には、区画溝や排水路と思われるやや規模の大きな南北溝も数条検出した。出土遺物としては土師器や瓦器などがあり、中世前半～後半と思われる。A2地区上層遺構第1面と同方位であり、同遺構面に対応すると考える。

土坑 S K 32 調査区の北半部、西壁に接して検出した。平面形はほぼ円形を呈し、直径1.0m、深さ0.4mを測る。遺物として土師器羽釜が1点出土した。

6. 出土遺物

今回の発掘調査では、古墳時代から中世にかけての遺物が多数出土した。これらの多くは遺構から出土したもので、遺構の時期や変遷、遺跡の性格を考える上で重要な資料となる。また、少数であるが弥生時代の遺物が出土していることを確認した。弥生時代の遺物については、古墳時代以降の遺構から出土しているものもあるが、いずれも遺物包含層出土として扱うこととする。

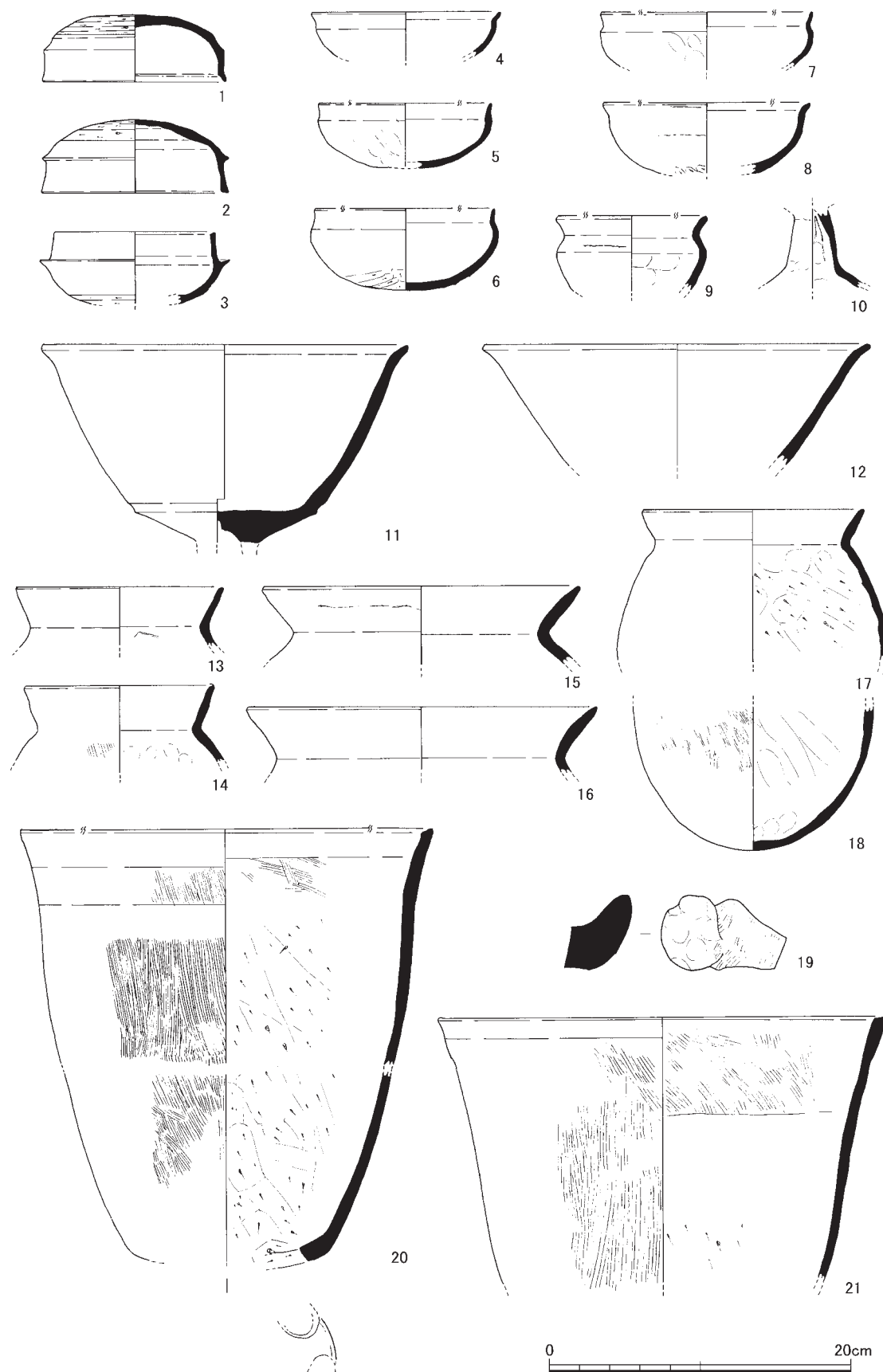
以下、検出遺構と同様に、時代ごとに遺物の報告を行う。

1) 古墳時代

各調査区から古墳時代前期から後期にかけての各時期の遺物が出土した。主体となるのは11基もの竪穴式住居跡を検出した中期後半～後期後半のものであるが、前期初頭や中期初頭の遺物も出土しており、調査地周辺における土地利用の一端を伺い知ることができる。なお、古墳時代の遺物については、調査区ごとに報告する。

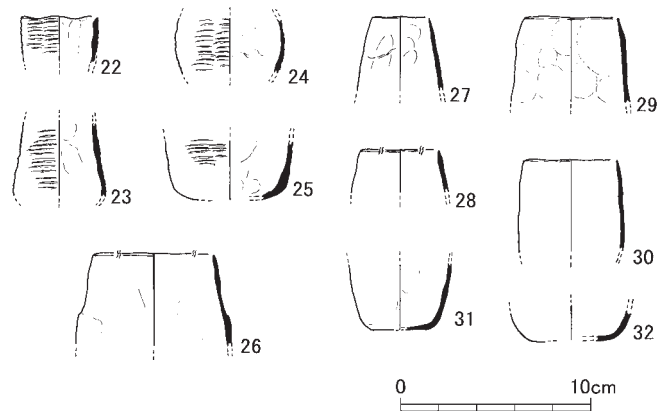
(1) A 1 地区

竪穴式住居跡 S H 50(第37図1～第38図32) 須恵器・土師器・製塩土器などが多数出土した。1～3は須恵器である。1・2はほぼ同形・同大の杯蓋で、口縁端部の形状が若干異なり、1は内径気味、2はほぼ平坦な面をなす。どちらも天井部の2/3程度に回転ヘラケズリ調整を施す。1は完形で、口径12.1cm、器高4.4cmを測る。3は杯身の破片で、ほぼまっすぐに立ち上がる口縁部と短い受け部を持つ。底部に回転ヘラケズリ調整を施す。おおむね陶邑編年のT K 47型式に位置づけられる。^(注4)



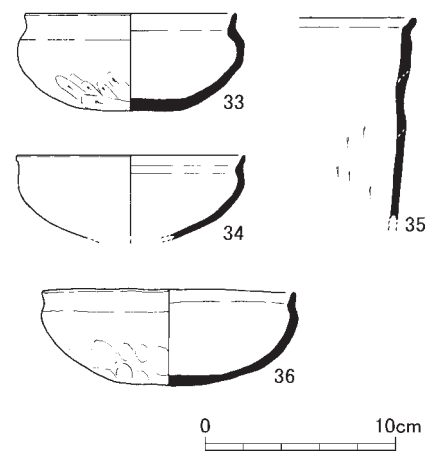
第37図 竪穴式住居跡 S H50出土土器実測図(1)

4～21は土師器である。4～8は杯である。いずれも口縁部に強いヨコナデ調整を施して外反させる。底部は丸底気味で、6・8は手持ちのヘラケズリ調整を、5はユビオサエを施す。9は小型丸底土器の破片と思われる。10は高杯の脚柱部で、脚端部は「ハ」字状に開く。11・12は大型高杯の杯部である。11は脚柱部との接合部に刺突痕が認められる。11は口径24.2cm、残存



第38図 竪穴式住居跡S H50出土土器実測図(2)

高13.0cmを測る。13～18は甕である。13・14は小型品、17は中型品、15・16は大型品である。いずれも口縁部が単純「く」字状を呈し、口縁端部を丸く納める。18は底部である。17は体部内面にケズリ調整、18はナデ調整を施す。19は甕あるいは甑の把手である。20・21は甑である。20は直接接合しないものを図上で復元したもので、推定口径27.2cm、推定器高28.7cmを測る。体部内面の上位にハケ調整、それ以下にヘラケズリ調整を施す。底部には少なくとも2か所の穿孔が認められる。21は20よりもやや大型の甑で、体部内面の上位にハケ調整、それ以下にヘラケズリ調整またはヘラケズリ調整後にナデ調整を施す。図示した以外にも別個体の甑が1点ある。



第39図 土器溜まりS X15・
柱穴S P57出土土器実測図

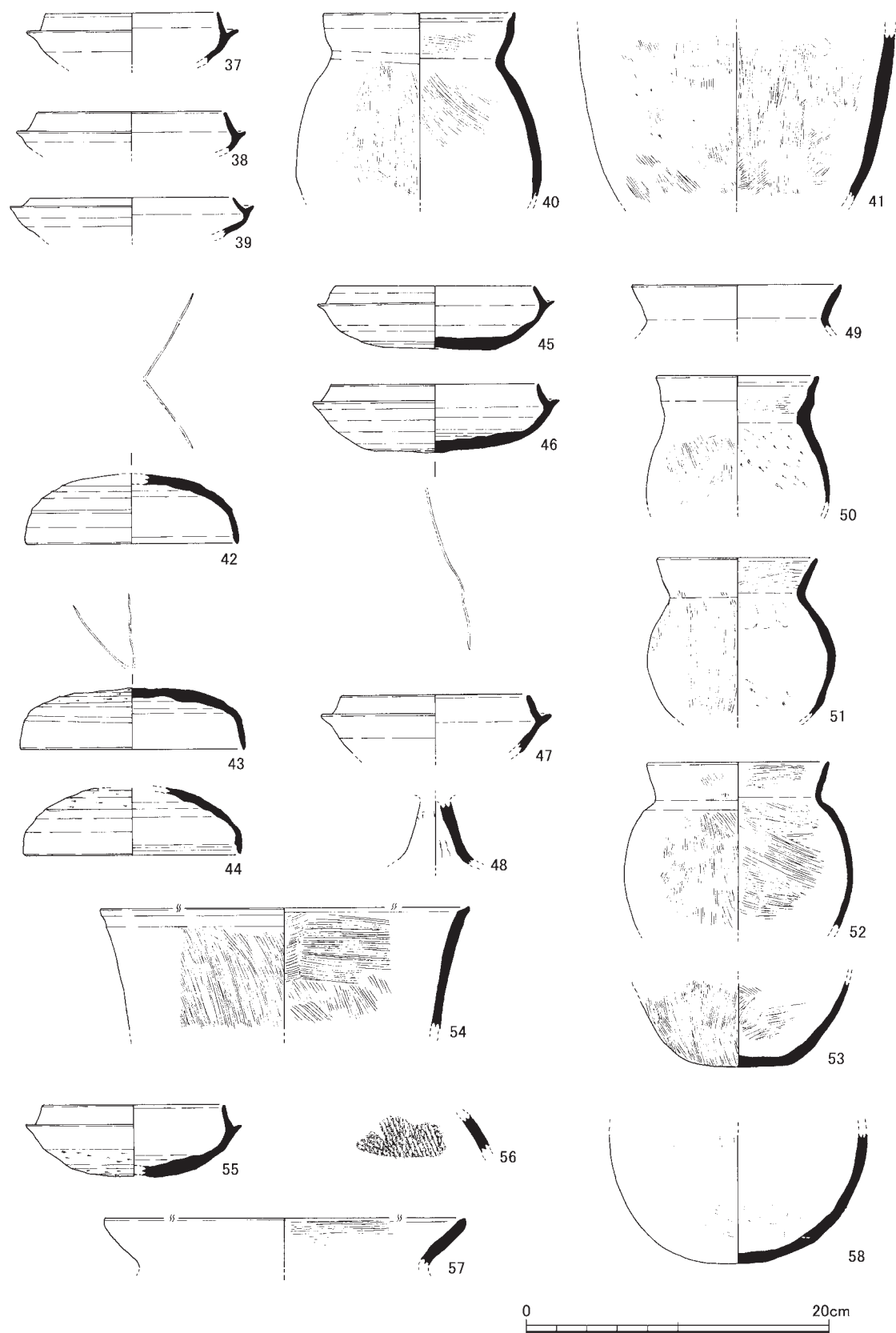
22～32は製塩土器である。口径3.0～6.2cmを測る小型品で、器壁は非常に薄い。22～25は外面にタタキ調整を、内面にナデ調整を施す。26～32は内外面ともナデ調整とユビオサエを施す。

土器溜まりS X15(第39図33～35) いずれも土師器である。33・34は杯である。ともに口縁部が斜め外上方に屈曲する。33は底部外面に手持ちのヘラケズリ調整を施す。35は口縁端部をわずかに斜め上方につまみ上げる甑である。内面にヘラケズリ調整を施す。小破片のため法量等は不明である。出土した杯の特徴から陶邑編年のTK208～TK47型式に併行すると思われる。^(注5)

柱穴S P57(第39図36) 土師器杯である。口縁部にやや歪みあり、口径12.2～13.3cm、器高5.1cmを測る。口縁部が斜め外上方に屈曲する。体部内面に丁寧なナデ調整を施す。土器溜まりS X15出土の杯類とおおむね同時期と考えられる。

(2) A2地区

竪穴式住居跡S H281(第40図37～41) 須恵器・土師器などが出土した。出土量は少なく、破片資料を中心に5点を図示した。37～39は須恵器杯身である。いずれも受け部と立ち上がりを有する器形である。37・38にくらべ、39は立ち上がりが若干短い。口径は11.3～13.4cmを測る。小



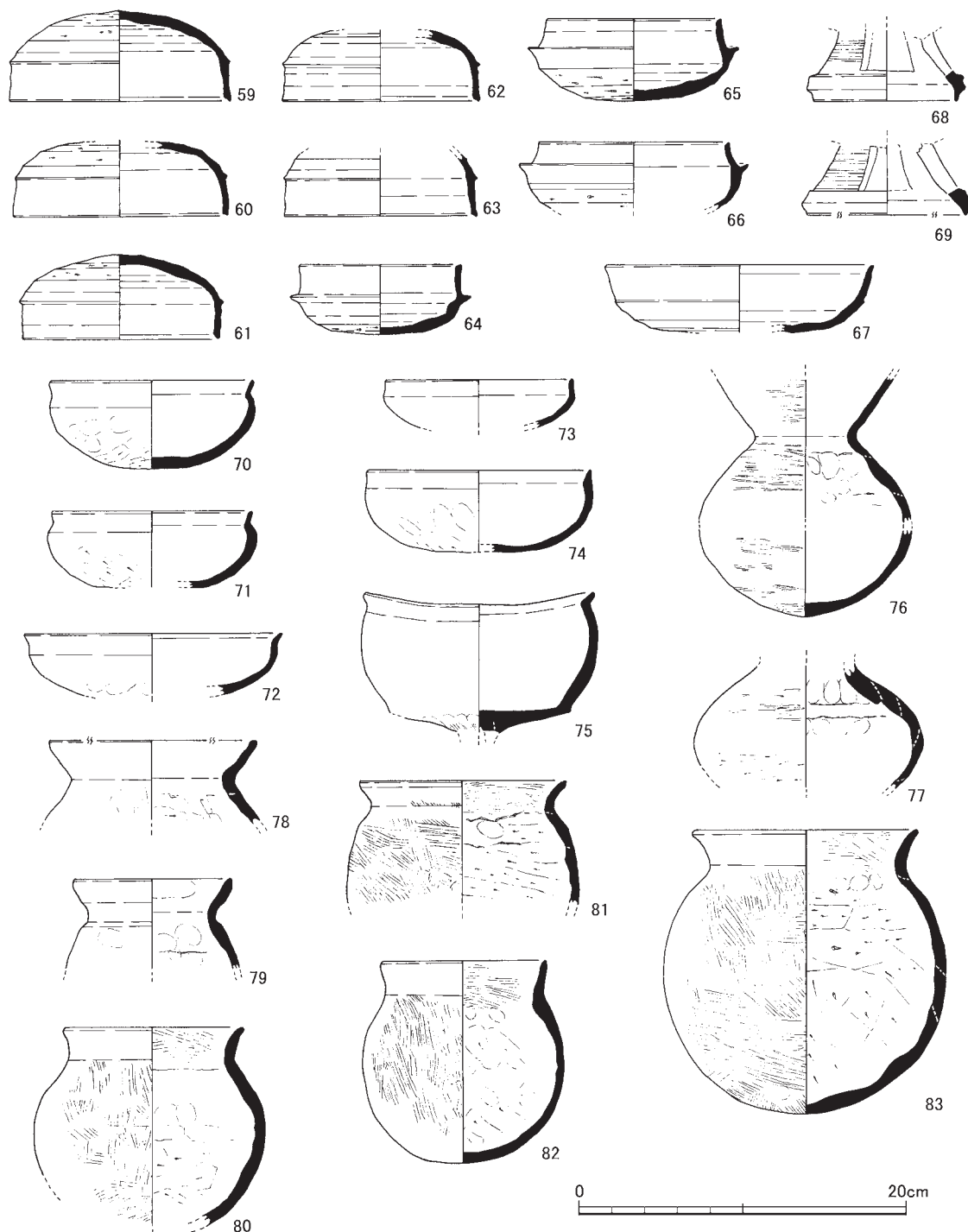
第40図 竪穴式住居跡 S H281・282・330出土土器実測図

片のため時期は不明確な点があるものの、おおむね陶邑編年のTK43型式に位置づけられる。40は土師器甕である。口縁部は内面にハケ調整を、口縁端部から外面にはヨコナデ調整を施す。体部内外面にハケ調整を施す。外面が赤変することから2次焼成を受けたと考えられる。口径12.6cm、残存高12.2cmを測る。41は土師器甕もしくは甑の体部の破片である。甕であれば長胴甕の可能性もある。内外面ともハケ調整を施すが、外面には砂粒の移動が確認でき、ケズリ調整を施している可能性もある。

竪穴式住居跡SH282（第40図42～53） 須恵器・土師器が多数出土した。42～44は須恵器杯蓋である。42・43は口縁端部を丸く納め、口縁部と天井部の境に稜ないし沈線がみられる。どちらも天井部にヘラ記号がみられるが、1/2程度しか残存しないため全容は不明である。44は口縁端部に沈線状の段を持つが、天井部との境に稜や沈線はみられない。3点とも天井部の1/2程度に回転ヘラケズリ調整を施す。43は口径14.8cm、器高4.0cmを測る。45～47は須恵器杯身である。45・46はほぼ同形同大の杯身で、短い立ち上がりの口縁部を持ち、底部外面1/3程度に回転ヘラケズリ調整を施す。46は底部外面にヘラ記号がある。47は45・46にくらべやや厚めの器形を呈する。45は口径13.1cm、器高4.2cmを測る。これらの須恵器蓋杯は、おおむね陶邑編年のTK10型式に位置づけられる。44・47はやや古く位置づけられるかもしれない。48は土師器高杯脚部の小破片で、摩滅のため調整は不明である。49～53は土師器甕である。50・51は体部外面にハケ調整、体部内面にケズリ調整を施し、50は口縁部が段状を呈する。52は体部内外面ともにハケ調整を施す。50～52は口縁部内面に横方向のハケ調整を施す。53はやや平底気味の底部の資料で、内外面ともハケ調整を施す。外面に煤らしき黒色物が付着する。51は口径10.6cm、残存高10.5cmを測る。54は土師器甑の口縁部と思われる。

竪穴式住居跡SH283（第41図59～第42図90、第46図124・125・127） 須恵器・土師器、製塩土器、滑石製白玉、鉄器などが多数出土した。59～69は須恵器である。59～63は、口縁部と天井部の境に稜がみられる杯蓋である。60の口縁端面は水平に近いが、それ以外は内傾する。いずれも天井部の1/2～2/3程度に回転ヘラケズリ調整を施す。残存率はいずれも1/4未満であるが、59は口径13.6cm、器高5.5cmを測る。61は口径12.0cm、器高5.1cmを測る。64～66はやや内傾気味の口縁部と短い受け部をもつ杯身である。底部外面1/3～2/3程度に回転ヘラケズリ調整を施す。65は完形で、口径10.6cm、器高5.0cmを測る。64の断面は赤紫色を呈する。これらの須恵器蓋杯は、おおむね陶邑編年のTK23型式ないしTK47型式に位置づけられる。67は高杯の杯部と推定される。68・69は高杯脚部で、ともに脚部外面にカキメを施す。また長形状のスカシ孔が認められる。4か所に穿孔されていたと推定される。

70～83は土師器である。70～74は杯である。形態的には大きく3つに分かれ、口縁部が斜め外上方に屈曲するもの(70・71)、口縁部が外反するもの(73)、口縁部にヨコナデ調整を施すだけのもの(73・74)がある。70・71の底部外面には手持ちのヘラケズリ調整を施す。70はほぼ完形で、口径12.4cm、器高5.4cmを測る。74は1/3程度が残存し、口径13.6cm、器高5.0cmを測る。75は高杯の杯部で、1/4程度が残存するものの、歪みが著しい。平坦な杯底部から、大きく内湾しながら



第41図 竪穴式住居跡S H 283出土土器実測図(1)

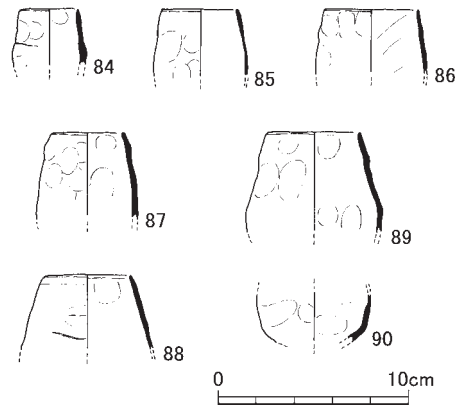
杯部が立ち上がり、口縁部が70・71の杯のように斜め外上方に屈曲する。76は長頸壺である。77もほぼ同形態の土師器長頸壺の体部上半の破片と思われる。76は直接接合しない破片を図上で復元した。ともに外面に横方向のヘラミガキ調整を施し、77は体部下半にヘラケズリ調整を施す。76は1/2程度が残存し、推定残存高は14.6cmである。78～83は甕である。小型もしくは中型品が多い。口縁部はいずれも「く」字状に屈曲するが、78はやや内湾気味、79・82はやや直線的、80・81・83は外反しており、口縁部の形状は多様である。79を除き、体部内面にヘラケズリ調整

を施す。

84～90は製塩土器である。口径3.0～4.8cmを測る小型品で、器壁は非常に薄い。いずれも内外面ともナデ調整とユビオサエを施す。90は底部から体部への屈曲部の破片である。

124・125は滑石製の白玉である。直径4.9～5.2mm、厚さ2～3mmを測る。

127は床面直上から出土した鉄鏝である。残存長12.5cm、鏝身部幅1.2cm、茎幅2.5mmを測る。



第42図 竪穴式住居跡 S H 283
出土土器実測図(2)

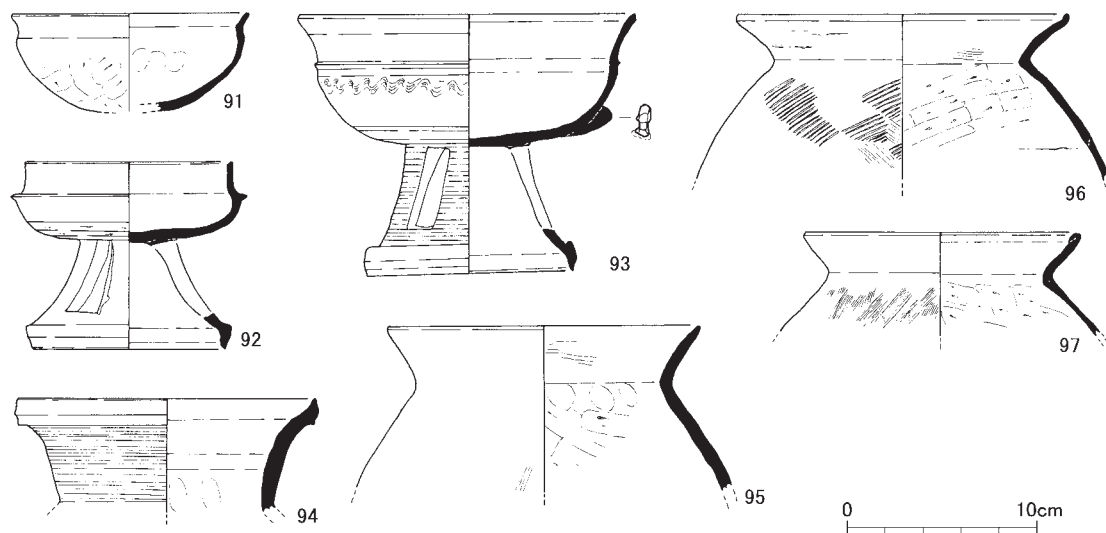
竪穴式住居跡 S H 330 (第40図55～58、第46図128)

須恵器・土師器などが出土したが、住居跡そのものが、奈良時代の井戸 S E 215によって大きく攪乱されていたため、出土量は非常に少ない。破片資料中心に5点を図示した。55は須恵器杯身である。口径12.0cm、器高4.7cmを測る。口縁端部に沈線状の段がみられる。底部外面2/3程度に回転ヘラケズリ調整を施す。おおむね陶邑編年のMT15型式に位置づけられる。56は甕か壺の体部の小片であるが、外面に縄蓆文がみられる。57は土師器甕の口縁部で内面にハケ調整を施す。58は土師器甕の底部で、丸底である。

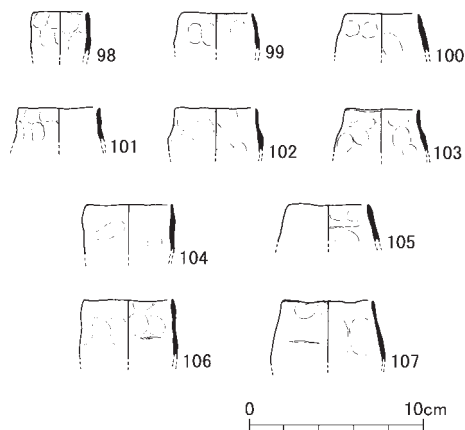
128は朝顔形円筒埴輪の破片である。円筒部の最上段の突帯と、その上部に頸部に向かってすぼまる肩部が依存する。肩部外面に縦ハケ調整を施す。

土器溜まり S X 199 (第43図91～95) 図示したのは須恵器3点、土師器2点であるが、出土量はもう少しある。91は土師器杯である。口縁部が斜め外上方に屈曲する。体部外面はナデ調整とユビオサエを施す。口径12.4cm、残存高5.2cmである。92は須恵器の有蓋高杯である。口縁部はほぼ直立し、短い受け部を有する。杯底部外面に回転ヘラケズリ調整を施した後、脚部を接合する。脚部には3方向に透かしを穿つ。口径11.0cm、器高9.8cm、底径10.2cmを測る。93は須恵器の無蓋高杯である。杯部中位に凸線状の稜があり、下半に波状文を施す。脚部には3方向に透かしを穿ち、外面にカキメを施す。口径17.7cm、器高13.6cm、底径10.8cmである。92・93は形状などからおおむね陶邑編年のTK23型式に位置づけられよう。94は須恵器壺の口縁部と思われる。頸部外面にカキメを施す。95は土師器甕である。摩滅が著しく調整は不明瞭である。

土器溜まり S X 321 (第43図96・97) 古式土師器2点と弥生土器1点が出土した。96は庄内式甕である。口縁端部をつまみ上げるが、やや丸く納めている。外面に細筋のタタキ調整、体部内面にヘラケズリ調整を施す。ヘラケズリ調整は頸部まで達する。口径17.5cm、残存高8.5cmである。97は布留式甕である。口縁端部内面が肥厚するものの、膨らみはやや弱い。体部外面にハケ調整、体部内面にケズリ調整を施す。ケズリ調整は頸部まで達しない。口径14.4cm、残存高5.4cmである。このほか、図示していないが弥生土器の甕がある。体部外面にタタキ調整を施す。体部内面はやや摩滅しているが、ナデ調整を施す。これら3点がほぼ重なって出土したことから同時期のものである可能性が高いと判断した。時期は資料数が少ないため不明確な点もあるが、庄内式甕や布



第43図 土器溜まり S X 199・321出土土器実測図



第44図 土坑 S K 280出土土器実測図

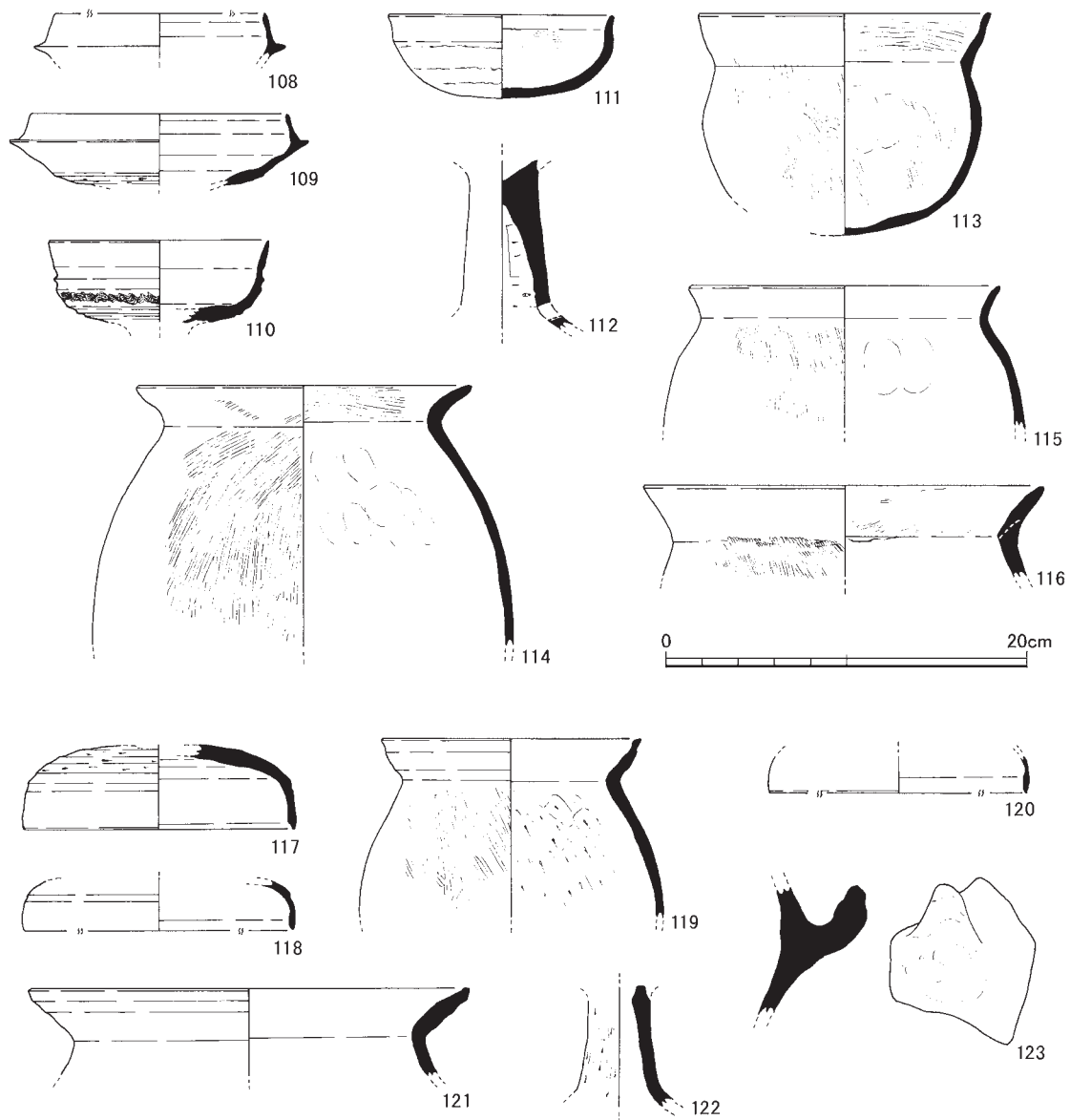
留式甕の形態から布留 1 式を前後する時期のも
 (注6)
 であろう。

土坑 S K 280 (第44図98～107) 製塩土器のみ
 が出土した。口径3.2～5.3cmを測る小型品で、器
 壁は非常に薄い。いずれも内外面にナデ調整とユ
 ビオサエを施すが、全体に摩滅が著しい。詳しい
 時期は不明であるが、竪穴式住居跡 S H 50や S H
 283で出土したものと大きさや形態に大きな差が
 みられないので、これらの住居跡とほぼ同時期と
 推定される。

(3) B 地区

竪穴式住居跡 S H 99 (第45図108～116) 須恵器や土師器などが出土した。B 地区で検出した
 住居跡としては遺物が多く出土しており、9 点を図示した。108～110は須恵器、111～116は土師
 器である。108・109は杯身である。わずかに内傾する立ち上がり、と、短く水平に延びる受け部を
 持つ。109は底部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。110は高杯杯部である。杯底部外面に脚部の
 剥離痕が認められる。口縁部中位に稜がみられ、下半部には波状文を施す。口径12.1cm、残存高
 4.5cmを測る。これらの須恵器杯身は、おおむね陶邑編年の T K 10型式ないし M T 85型式に位置
 づけられる。111は杯である。口縁部にヨコナデ調整を施して外反させる。体部から底部にかけ
 ての外面には粘土紐の接合痕が残る。112は高杯の脚柱部である。113～116は甕である。117は内
 湾気味の口縁部に、球形の体部を呈する。内外面とも粗めのハケ調整を多用する。口径16.2cm、
 器高12.3cmを測る。114～116は口縁部が単純「く」字状を呈する。体部の形状は不明であるが、
 114は長胴気味の体部である。

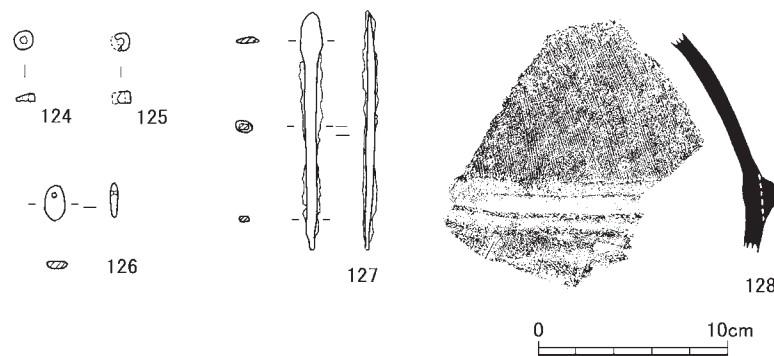
竪穴式住居跡 S H 100 (第45図117～119) 須恵器や土師器の破片が少量出土した。後述する S



第45図 竪穴式住居跡SH99・100・105・111出土土器実測図

H111と重複するため、SH111の遺物が混入している可能性もある。117・118は須恵器杯蓋である。117は口縁端部に段を持ち、口縁部から天井部への境界にはわずかに突出した稜がみられる。天井部の2/3程度に回転ヘラケズリ調整を施す。口径15.0cm、残存高4.6cmである。これらの須恵器杯蓋は、おおむね陶邑編年のTK10型式に位置づけられる。119は土師器甕で、縁部が内湾気味に立ち上がり、端部をやや外方につまみ出す。端部はやや内傾気味となる。体部外面にハケ調整、内面にケズリ調整を施す。口径14.4cm、残存高10.9cmである。

竪穴式住居跡SH105(第45図122・123) 出土遺物は少量であり、図示できたのは土師器2点のみである。122は高杯の脚部である。内外面ともヘラケズリ調整が施される。123は把手付甕の把手である。出土遺物の時期は不明であるが、他の住居跡とほぼ同じ古墳時代中期後半から後期におさまるものと思われる。



第46図 玉類・鉄製品・埴輪実測図

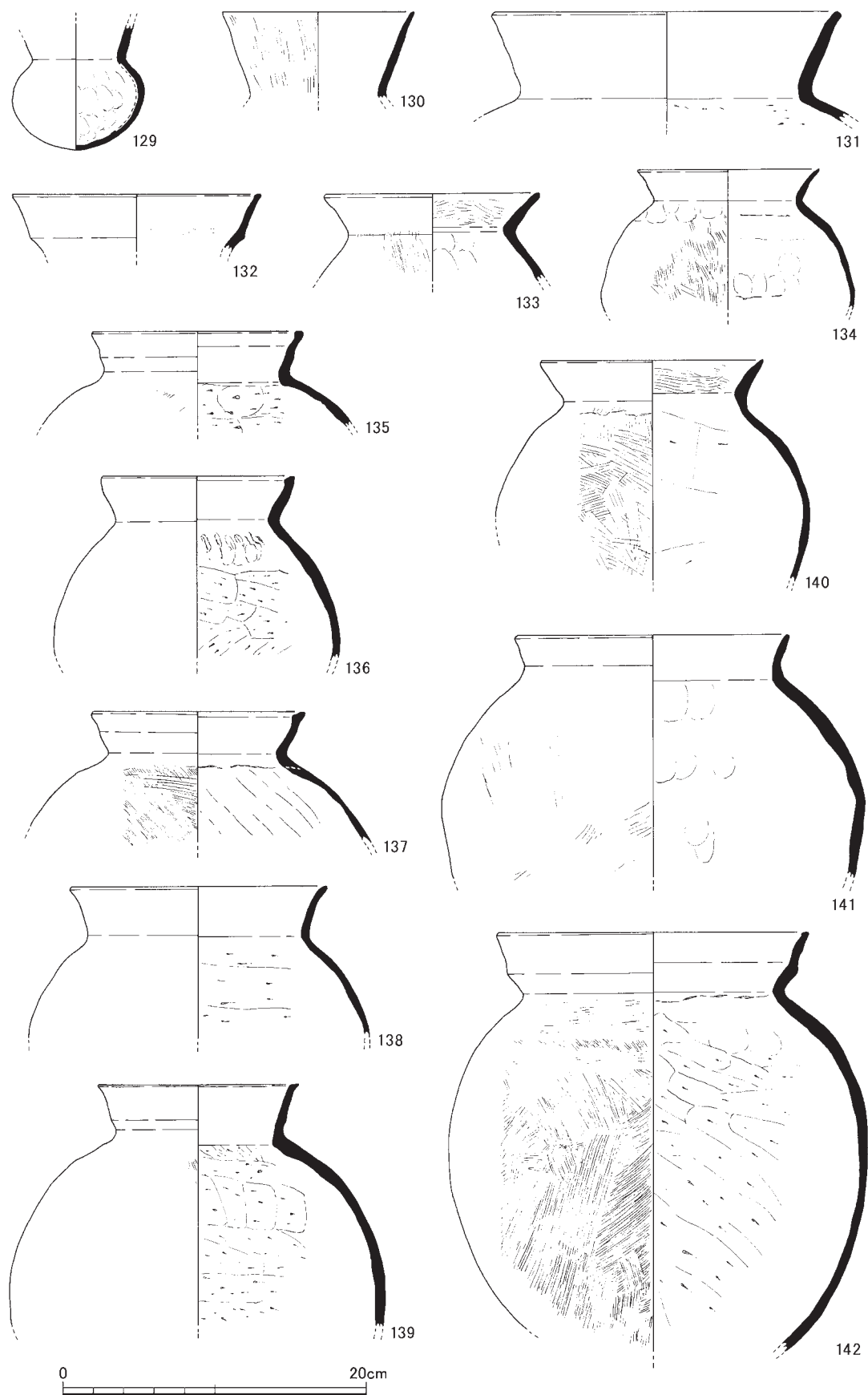
竪穴式住居跡 S H111

(第45図120・121) 120は須恵器杯蓋と思われる小破片である。口縁端部は丸く納める。小破片のため時期の決定にはいたらないが、陶邑編年の T K10型式以前には位置づけられない。121

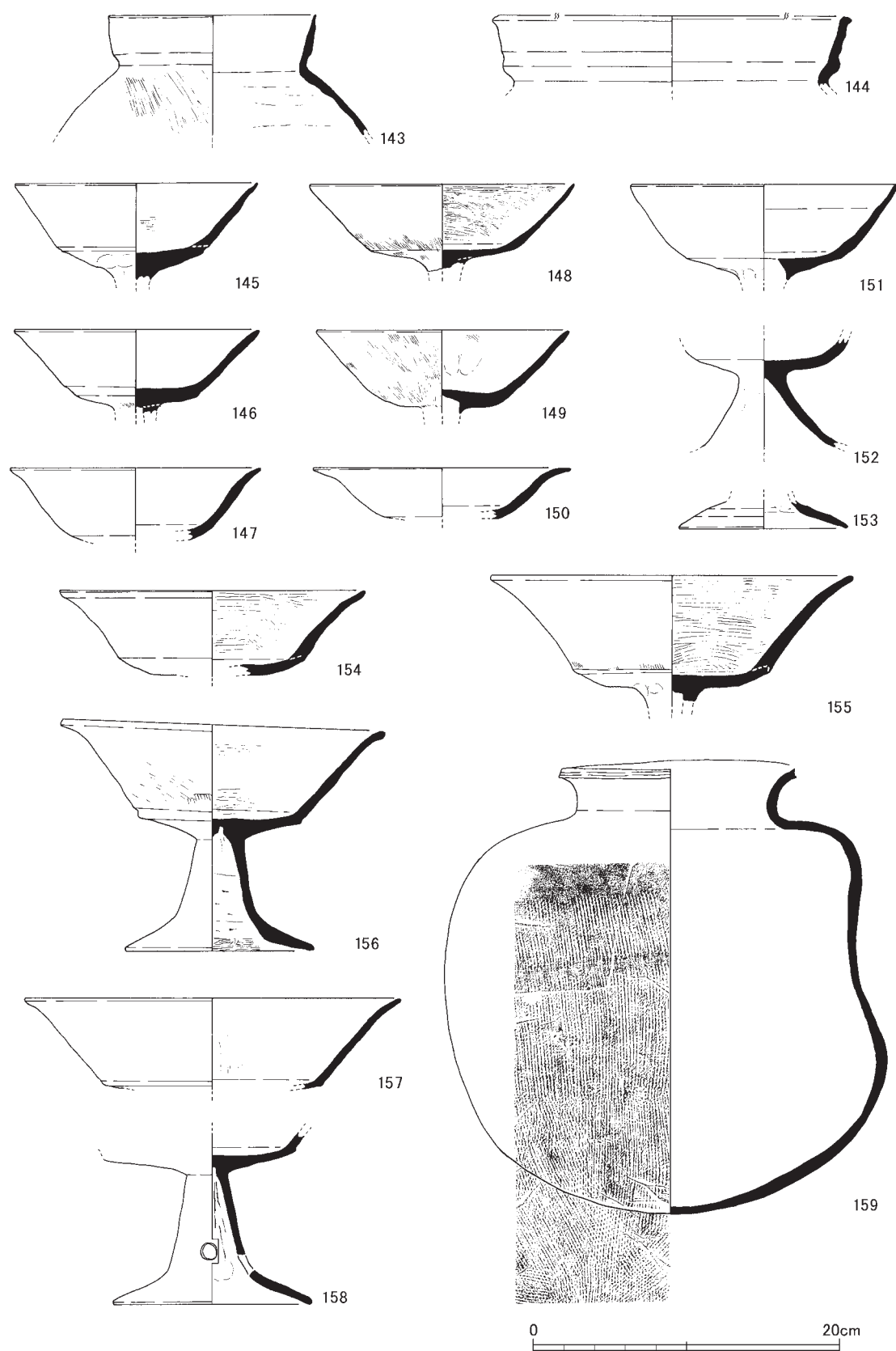
は土師器甕で、口縁端部をややつまみ上げる。詳細な時期は不明であるが、S H100に先行することから古墳時代後期前半に位置づけられる可能性がある。

土坑 S K 126 (第47図129～第48図159) 129～158は土師器、159は陶質土器である。129は小型丸底土器である。口縁部を欠損し、全体に摩滅気味である。130・131は直口壺である。130は口径12.6cmを測る小型品、131は口径22.4cmを測る大型品である。132は複合口縁を呈する壺と推定される。133～144は甕で、口縁の形状や体部の調整が多様である。135～137は口縁部内面が肥厚し、体部内面にケズリ調整を施す。136は口径12.6cm、残存高12.1cmを測る。133・134・138～141は、口縁部が外上方、もしくは外反気味に「く」字状に屈曲する口縁を呈する。133・134・141は外面にハケ調整、内面にナデ調整を施す。138・139は内面にヘラケズリ調整を施すが、外面は摩滅のため不明瞭である。140は外面にハケ調整、内面にヘラケズリ調整を施す。141は内外面とも摩滅気味であるが、外面はハケ調整、内面にナデ調整を施す。139は口径13.3cm、残存高15.9cmを測る。142～144は複合口縁を呈する甕である。142は体部外面にハケ調整、内面にヘラケズリ調整を施す。口径20.6cm、残存高27.5cmを測る。甕類は外面に煤の付着するものが多い。145～158は高杯である。145～149は斜め上方に開く杯部を有するほぼ同形同大の高杯である。口径15.9～17.3cm、杯部の高さ4.7～5.7cmを測る。145・148は内面にハケ調整を施す。148・149は外面にハケ調整を施す。150は杯口縁部が大きく外反し、ほかの個体にくらべ浅い器形である。152は杯部から脚部にかけての資料である。153は高杯もしくは器台の脚部と思われる。150・154はやや中型の高杯である。150は杯部の内外面ともナデ調整を施すが、154は杯部の内面にハケ調整を施す。150は口径16.8cm、残存高3.3cmを測る。155～157は大型の高杯である。杯底部から杯口縁部への立ち上がり部分に明瞭な稜を持つ。155は口径23.6cm、残存高8.5cmを測る。156の脚柱部内面は横方向にケズリ調整を施す。口径21.8cm、器高15.1cm、底径12.4cmを測る。157と158は同一個体と思われる。158は円形の透かし孔が3か所に穿たれる。脚柱部内面は不調整で、シボリ痕が残る。

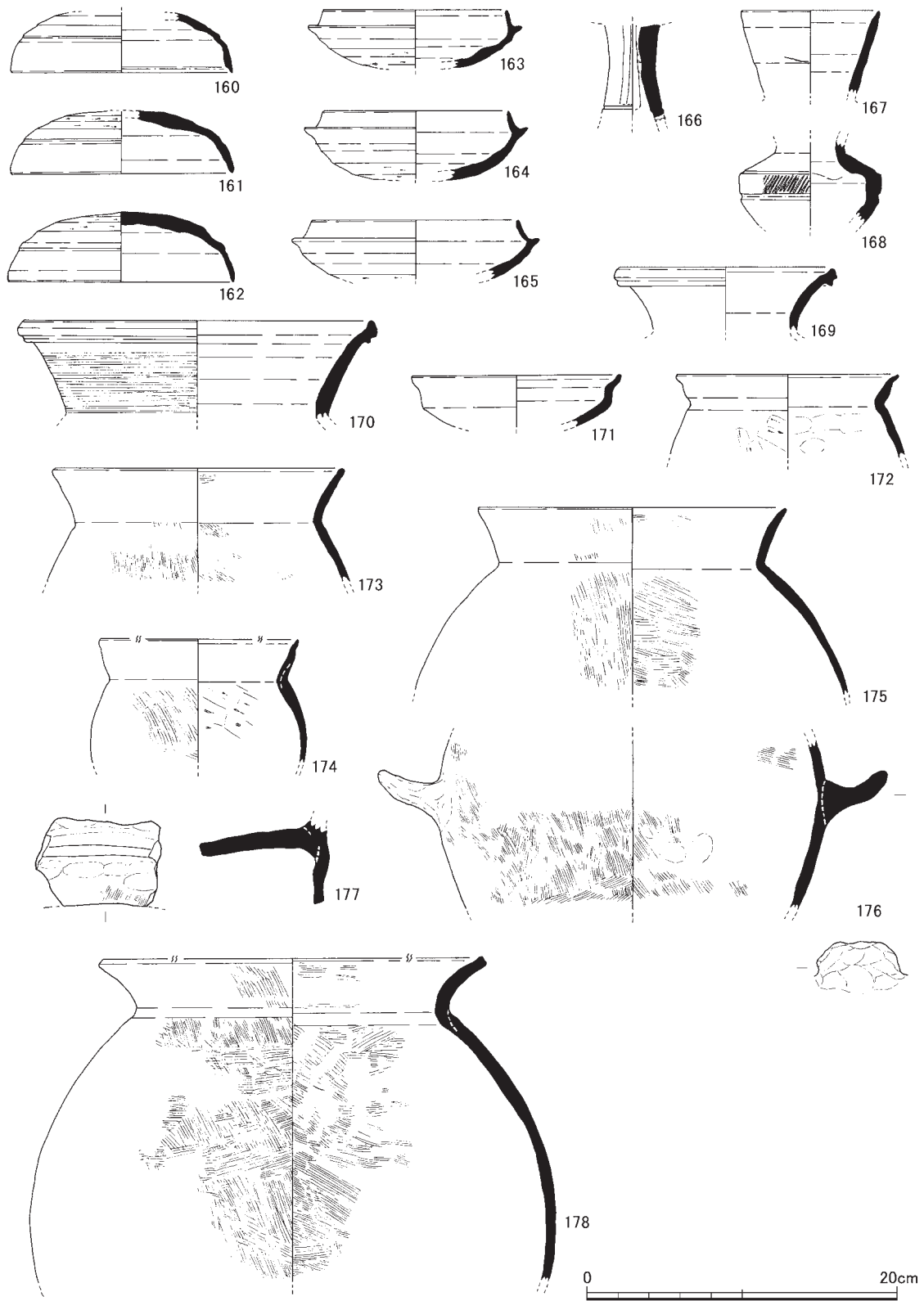
159は陶質土器甕である。大きく焼け歪むが、口径15.2～15.7cm、器高29.6cmを測る。口縁部から肩部外面までは回転ナデ調整、体部外面に縄蓆文によるタタキ調整を施し、体部内面を丁寧なナデ調整で仕上げる。



第47図 土坑 S K126出土土器実測図(1)



第48図 土坑 S K126出土土器実測図(2)



第49図 土坑 S K 91・102出土土器実測図

土坑S K 91(第49図160～177) 須恵器・土師器が多数出土したが、完形に復元できるものはほとんどなかった。160～170は須恵器、171～177は土師器である。160～162は杯蓋である。160は口縁端部内面に段をもち、161・162は口縁端部を丸く納める。口縁部と天井部の境に稜ないし沈線がみられる。3点とも天井部の2/3程度に回転ヘラケズリ調整を施す。161は口径14.6cm、器高4.5cmである。163～165は須恵器杯身である。163・164はほぼ同形同大の杯身で、内傾しながら立ち上がる口縁部を持ち、底部外面1/2程度に回転ヘラケズリ調整を施す。164は口径12.0cm、残存高4.4cmである。これらの須恵器蓋杯は、おおむね陶邑編年のMT85型式ないしTK43型式に位置づけられる。166は長脚2段透かしの高杯脚部である。167は提瓶の口縁部と推定される。168は甕の体部片と思われるが、残存する破片に透かし孔は認められない。体部中位に櫛状工具による刺突文を施し、その上下に1条ずつの沈線を施す。体部最大径は9.2cmを測る。169・170は壺の口縁部である。170は口縁部外面にカキメを施す。口径22.6cm、器高6.1cmである。171は杯である。口縁部を上方に屈曲させた後、端部を若干つまみ上げる。172～175は甕である。172・175は口縁部がやや外反気味のもの、173は口縁端部内面がわずかに肥厚するもの、174は内湾気味の口縁部の端部を少しつまみ上げたものなど、さまざまな口縁部の形状ものがある。175は口径19.9cm、残存高11.9cmである。176は把手付甕の体部の破片である。体部最大径(把手を除く)は25.0cmを測る。177は竈の底部分の破片である。

土坑S K 102(第49図178) 土師器甕1点が出土した。口縁端部をややつまみ上げる。内外面ともハケ調整を施す。推定口径24.5cm、残存高20.8cmを測る。

(筒井崇史)

2)奈良時代

奈良時代に属する遺物の大半はB地区で出土しており、A地区で出土した遺物は非常に少ない。これはA地区の奈良時代の遺構面が遺存していなかったためであり、出土した遺物をみると、ある程度遺構が存在していた可能性は高い。なお、奈良時代の遺物については、遺物の種類ごとに報告することにした。

(1)木簡

今回の調査では、B地区の土坑S X 96から木簡3点と削屑41点が出土した。これらは多量の土器や木片、炭化物などとともに出土したことや、持ち帰った土砂の水洗中に確認できたため、出土位置を記録できたものではなく、出土層位を把握したのみである。以下、出土木簡および削屑の概要を述べる。

①木簡(第50図、巻頭図版第2、図版第32)

179は木屑層(第13層)もしくはその直下から出土した。長方形の板材に墨書されたもので、下端は折れて欠損している。現存の長さ19.0cm、幅1.1cm、厚さ1～4mmである。木簡の上半部は何度も削られたようで薄くなっている。樹種同定の結果、ヒノキ科ヒノキ属である。

釈文は「讃岐國鵜足郡少領□」と読める。□以下は削り取られているため不明である。少領であった人物の名前もしくは物品名が書かれていたものと考えられる。長屋王家木簡にも「宗形郡

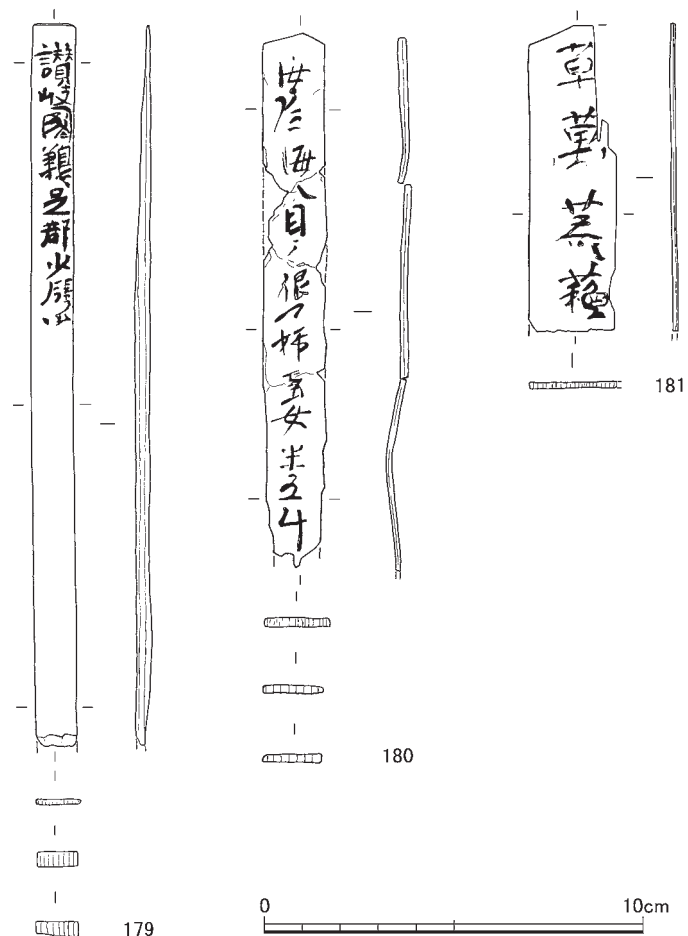
大領鯛醬」という郡司名木簡が見られ、郡司名の下には物品名が書かれている。本木簡については、報告にあたりいずれか確定することはできなかった。

讃岐国鵜足郡は、現在の香川県丸亀市を中心に、坂出市や綾歌郡の一部を含む地域にあたる。この木簡の具体的な内容は不明であるが、鵜足郡から上粕北遺跡にあった人物、あるいは施設に送られた文書木簡と考えられる。この木簡により、上粕北遺跡と讃岐国鵜足郡との間で何らかの交流があったことがうかがわれる。

180は木屑層(第13層)から出土したが、出土した土砂には多くの炭化物が含まれていたことから直上の炭層(第10層)に接していたものと思われる。上端は圭頭状である。下端は折れて欠損しているが、尖っている可能性が高い。現存の長さ14.1cm、幅1.7cm、厚さ2.5mmである。なお、全体が4つに折れている。形状および内容から荷札木簡と考えられる。樹種同定の結果、スギ科スギ属スギである。

釈文は「海戸主海八目戸服部姉虫女米五斗」と読める。1字目の「海」は貢進元の地名を略記したものと考えられる。「海」という表記から「海部郷」を表す可能性が高い。「海八目」は戸主、「服部姉虫女」は「海八目」の「戸」、つまり戸口の名前と考えられる。「八」は左側のはらいの墨痕が不明であったが、字形から「八」と判断した。木簡の内容は、「海部郷」の戸主「海八目」の戸口である「服部姉虫女」が「米五斗」を貢進したというものであろう。「海部郷」は、平安時代に編纂された『倭名類聚鈔』によれば、伊勢国川曲郡をはじめ、尾張国海部郡、越前国坂井郡、丹後国熊野郡、安芸国佐伯郡、阿波国那珂郡、筑前国伊都郡などで確認できるが、いずれの海部郷であるかは不明である。

公式な荷札木簡の場合、その書式は「国名+郡名+郷名+人名+税目+品名+数量」であることが多いが、本木簡では郷名を略して書いているほか、税目にあたる部分が記載されていない。このように、国郡名や人名が省略される簡略なものは長屋王家木簡でも見られる。本木簡のように地名を略式で書く例は、長岡京跡や西大寺食



第50図 木簡実測図

堂院推定地でわずかにみられる。^(注7)長岡京跡の例は越前国坂井郡海部郷、西大寺食堂院の例は越前国足羽郡小名郷の荷札木簡で、前者は郷名を「海」、後者は「少」と略して書いている。両者の共通点が越前国であることを積極的にとらえるならば、この木簡の「海部郷」は越前国と考えることもできる。なお、平城宮内裏東北官衙域の土壙S K 820出土木簡群の中に、讃岐国山田郡に「海郷」という郷が存在したことを示す木簡が出土しており、^(注8)上述の木簡1と本木簡がかかわりをもつ可能性もある。また、貢納物の貢進者は男性である例が圧倒的に多く、女性である例は非常に^(注9)珍しい。

本木簡は、地名を「海」1文字で表現するなど書式が簡略である点や女性が貢進している点などから、公式なものとは考えにくい。同様の書式の木簡が出土している遺跡の性格と考え合わせると、貢進先として、寺院や貴族の邸宅など私的な施設の可能性が考えられ、当遺跡の性格を考える上で重要な資料といえる。

181は木屑層から出土した。上端は圭頭状で、下端および右側は欠損している。現存の長さ8.1cm、幅2.3cm、厚さ1.5mmである。樹種同定の結果、ヒノキ科ヒノキ属である。

釈文は「草萬荒蘇」と読めるが、記載されている内容の意味は不明である。中国の漢籍等を写した可能性もあるが、現時点では草かんむりの字を練習した習書木簡と考えておきたい。

②削屑(図版第33 703～736)

木簡と同じく炭層や木屑層から出土しており、削屑どうして接合するものも含め合計41点確認した。墨痕が確認できる34点を図版に示した。「長長」(719)や「連連」(721)、「段段段」(705)など同じ字を繰り返し書いているものが多いことから習書木簡の削屑と考えられる。ほかに「言偏」と考えられるもの(715・724)や「しんにょう」(703・712)がある。706は「多」または「移」の一部の可能性はある。713は「ぎょうにんべん」が確認できるが、字は確定できない。731は「のぎへん」の有無が不明であるが「稲」か。削屑のうち、704・716・726の3点は樹種同定の結果、ヒノキ科ヒノキ属である。

なお、釈文や出土層位については付表1を参照されたい。

(松尾史子・筒井崇史)

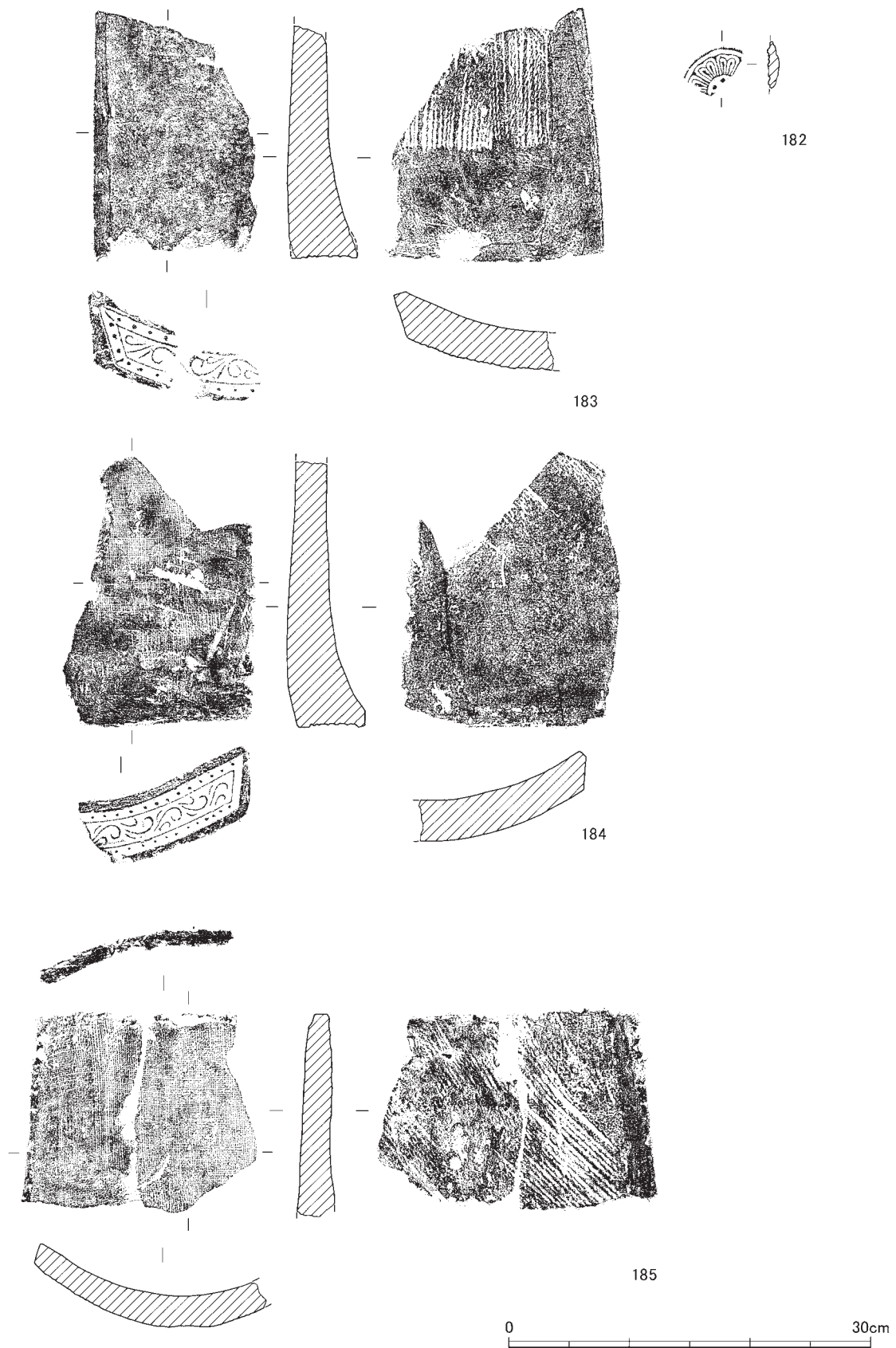
(2)瓦塼類

B地区の土坑S X 96をはじめ、溝S D 21やA地区の井戸S E 215などから出土した。整理箱にして8箱ほどあるが、大半は丸・平瓦である。鬼瓦などの道具瓦はなく、瓦質の塼が2点出土した。

①軒瓦(第51図)

軒丸瓦1種1点(182)、軒平瓦2種各1点(183・184)が出土した。これらは、瓦当文様、製作技法、胎土、焼成などから、恭仁宮跡出土の軒瓦との共通性がみられた。以下、恭仁宮跡出土軒瓦と比較しながら、軒丸瓦・軒平瓦の順に述べる。^(注10)

182は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房と内区文様の一部が残存する。恭仁宮KM02B型式や平城宮6282Da型式^(注11)と同範と考えられる。KM02B型式は、恭仁宮跡の内裏地区出土のKM02A型



第51図 軒瓦実測図

式と瓦当部と筒部との接合法がほぼ共通するとされるが、182は瓦当の表面のみの残存のため、瓦当裏面の調整法などの詳細は不明である。B地区土坑S X96の最上層から出土した。

183は均整唐草文軒平瓦である。中心飾はなく、左側のみ残存する。蕨手3葉を3転半させる。表面は燻し風の黒灰色で、内部は灰白色を呈する。焼成はやや軟質である。20cmほどが残存するが、凹面の布目圧痕は全体的に横ナデで擦り消されており、布目が一部残るのみである。顎部^(注12)は、いわゆる曲線顎Ⅱである。凸面は、瓦当側端部を幅1cmほど面取りして顎部を成形し、顎部から7cm内外の凸面を縦ナデで整形している。その後、縦位の比較的粗い縄目叩きを施し、その上に斜位の縄目叩きを加えている。側面は、凹面側を深く削っている。凸面側は、整形の際に側面に近いところの縄目叩きは一部擦り消されている。B地区南端付近の遺物包含層から出土した。

183は恭仁宮KH01型式や平城宮6691A型式と同範である。KH01型式は、恭仁宮跡の大極殿地区と内裏地区で出土しているが、瓦当文様の精微さ、凸面の縄目の粗さ、凸面の整形技法の手順などの違いから明確に二分されている。183は内裏地区出土のKH01型式と同じ特徴を持ち、瓦当文様の線が比較的丸みを帯びて太く、凸面をナデ整形してから縦位の縄目叩きを施し、その上に斜位の縄目叩きを加えている。KH01型式は、恭仁宮跡において第2群軒瓦に分類され、恭仁宮造営に際して新調されたものと考えられている。

184は均整唐草文軒平瓦である。中心飾はなく、右側のみ残存する。蕨手3葉を5回転させる。灰褐色を呈し、焼成は堅緻である。184は22.1cmが残存するが、凹面の布目圧痕は全体的に残っている。しかし、瓦当側のみ幅3.5cmにわたって横ケズリを施し、布目を擦り消している。顎部^(注12)は、いわゆる曲線顎Ⅱである。凸面は、斜位の縄目叩きを施し、瓦当側端部1.5cm幅を面取りして、顎部から10cm内外の凸面を縦ケズリすることで、縄目が一部擦り消されている。側面は、凹面側を深く削っている。S X96の埋土上層(炭層よりも上)から出土した。

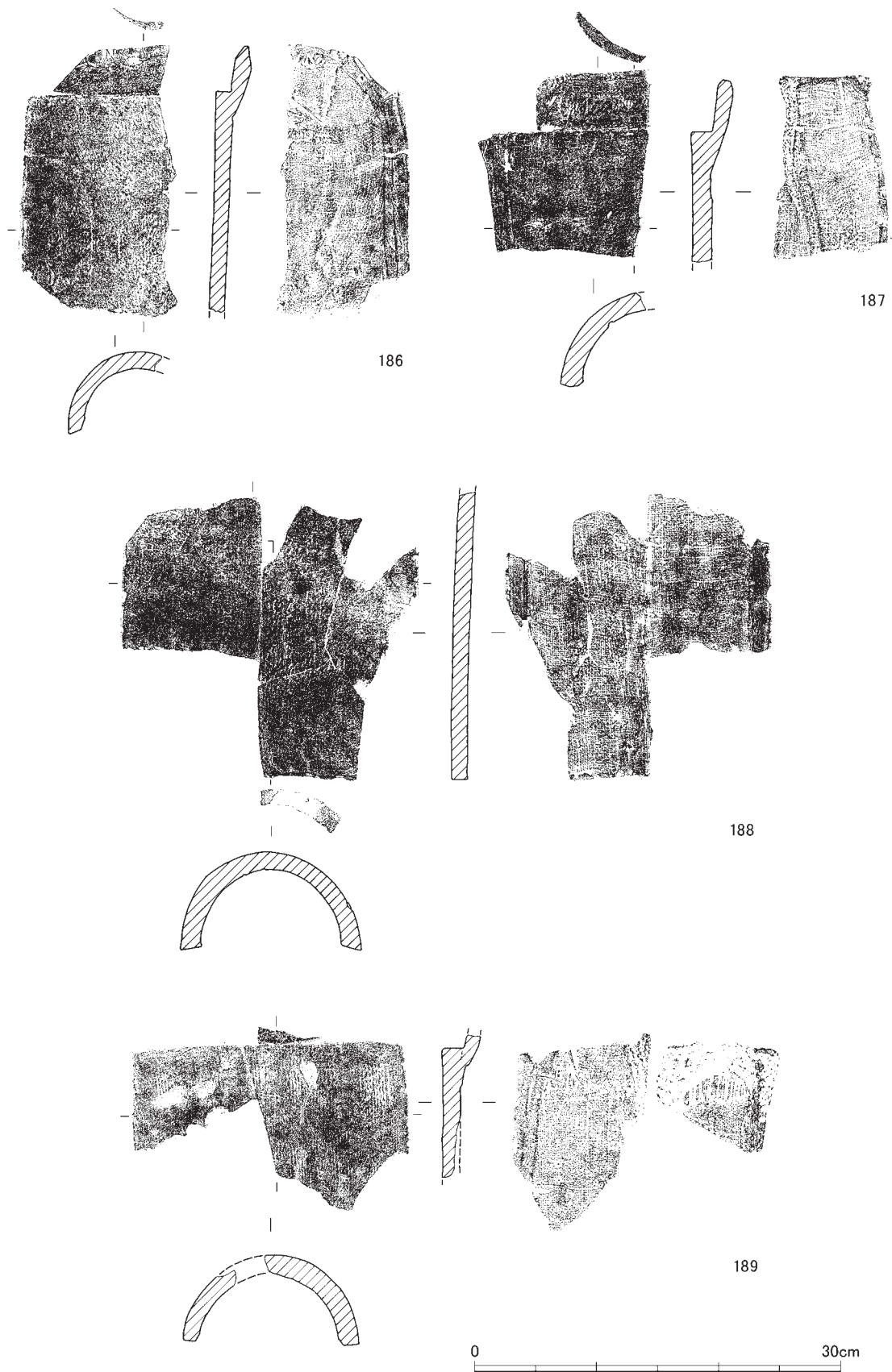
184は恭仁宮KH04A型式や平城宮6721C型式と同範である。ところで184と瓦当文様だけでなく、平瓦部の整形技法も共通するのは、6721C型式の方である。KH04A型式とは、凹面側の側面を深く削ることは共通するが、凹面の布目圧痕を横ナデで全体的に擦り消し、凸面に縦位の縄目叩きを施しており、この点が異なる。6721C型式は、平城宮瓦編年のⅢ-1期において主体となるものの、恭仁宮跡において同範であるKH04A型式が出土していることから、恭仁宮造営時に新調されたものと考えられている。^(注13)

185は凹面の布目圧痕を擦り消さず、凸面に斜位の縄目叩きを施すことから、184と同一型式の軒瓦に接合する平瓦部と考えられる。B地区溝S D21中央部のほぼ最上層から出土した

②丸瓦(第52図)

上狛北遺跡で出土した丸瓦の大半が破片資料であるため型式分類には至らなかった。ここでも恭仁宮跡出土丸瓦との比較しながら、個々の説明を行う。

出土した丸瓦で、全長が分かるものはないが、すべて粘土板巻き付けによる成形の玉縁式丸瓦である。玉縁部接合技法の分かるものは、大脇潔氏分類のBまたはC1手法である。^(注14)表面が燻し風



第52図 丸瓦実測図

の黒灰色で、内面が灰白色のやや軟質のものと、灰褐色で堅緻なものがある。凹面の糸切り痕・布目圧痕は擦り消さない。凸面は、縦位の縄目叩きの後、丁寧にナデが施され、ほとんど擦り消されている。側面は大脇潔氏分類のc手法で、凹面側を深く削って面取りする。186は筒部径が12cm前後で、玉縁部の長さが3.8cmである。187～189は筒部径が15cm前後で、187は玉縁部の長さが4.5cmである。

恭仁宮跡出土の丸瓦の大きさには、筒部長と筒部径とで相関関係があり、b型式丸瓦は、筒部長が35cm以上で筒部径が16.5～18cmで大型なのに対し、b型式以外の丸瓦は、筒部長が35cm未満で筒部径が15cm未満である。上粕北遺跡の丸瓦は、すべて後者のb型式以外の丸瓦と共通する。また、b型式丸瓦は、筒部端縁を面取り風に何回も横ケズリするという特徴があるが、188にはそのような整形技法はみられない。このようなことから、上粕北遺跡で見られる丸瓦は、b型式以外の丸瓦と共通性があることが分かる。186は土坑S X96の炭層～木屑層から出土した。187・189はS X96の炭層よりも上の堆積層で出土した。188はS X96の整地層から出土した。

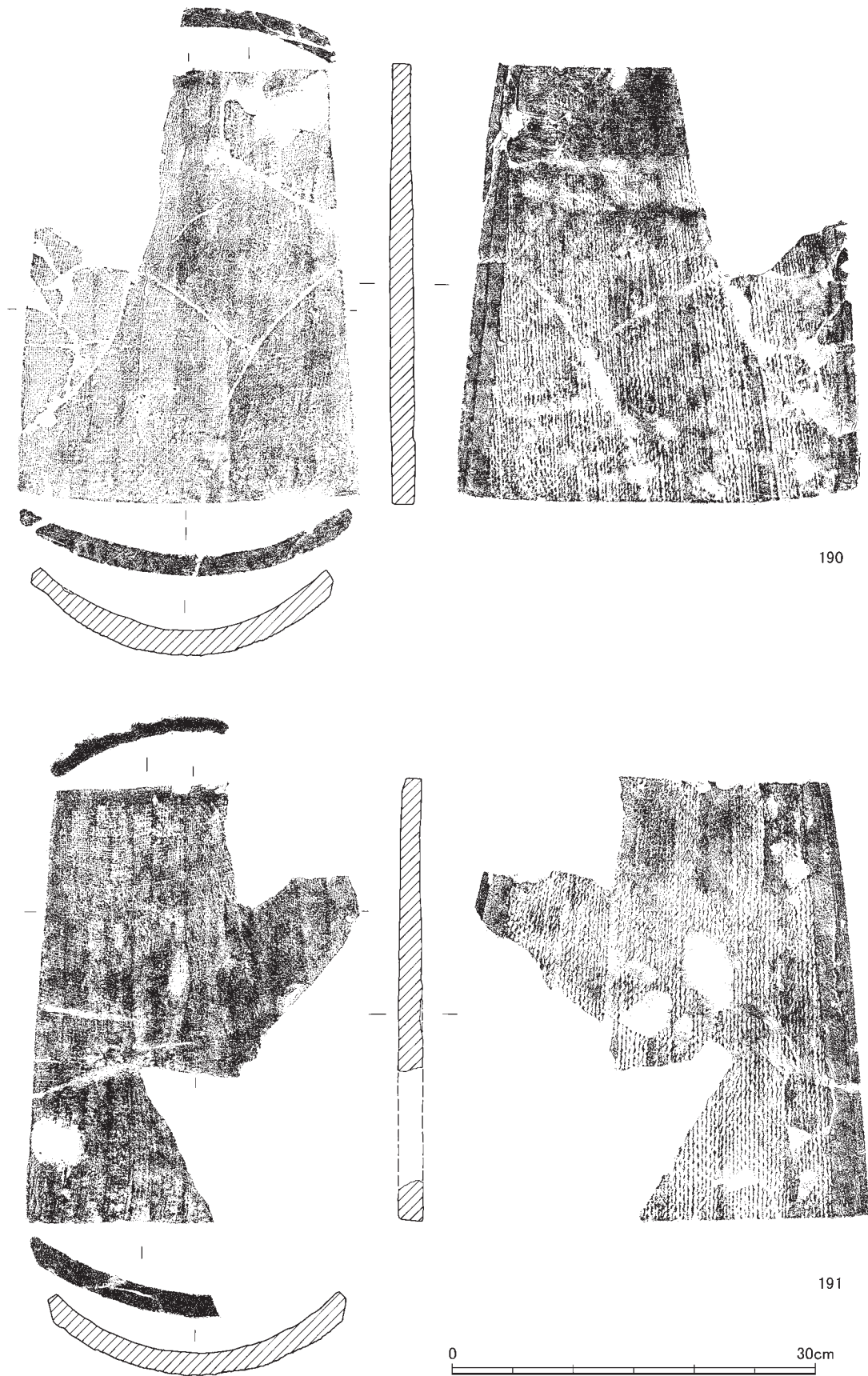
③平瓦(第53～56図)

恭仁宮では、平瓦の成形法を大別基準として、細部の整形法・叩き目・胎土・焼成などを含めた技法の連鎖型としての製作技術体系を「型式」とし、B・C・D I～IV・E・F・Gの9型式に大別している。上粕北遺跡では、型式設定に耐えうる完形品、およびそれに近い資料に恵まれたため、恭仁宮都と同様の方法をもとに型式設定を行い、大きく3つに分類した。

1類(第53図190～第54図193) 全長が36cm前後で、台形を呈する。粘土板による成形である。表面は燻し風の黒灰色で、焼成がやや軟質のものと、灰褐色で焼成が堅緻なものがある。凹面の糸切り痕・布目圧痕は擦り消さない。幅3～3.5cmの杵板痕が観察でき、桶巻作りの可能性がある。凸面は、縦位の縄目叩きを施しており、所々、条の不整合が見られる。狭端側8～11cm内外を横ナデして叩き目を擦り消している。190・191は土坑S X96の埋土上層から炭層にかけて出土した。192は溝S D21南部で出土した。193はS X96から出土したが、詳細な層位は不明である。

2類(第55図194～第56図196) 全長が30cm前後で、ほぼ長方形を呈する。粘土板による成形である。表面は燻し風の黒灰色で、内部は灰白色を呈する。焼成はやや軟質である。凹面の糸切り痕・布目圧痕は擦り消さない。194は、凹面の右側面に沿って、紐状の圧痕が見られ、分割截線と考えられる。また、195や196は幅4～5cmの杵板痕が観察でき、桶巻作りの可能性がある。凸面は、縦位の縄目叩きを施し、狭端側5cm内外を横ナデして叩き目を擦り消している。縦位の縄目叩きに条の不整合はみられない。側面は、凹面側を深く削るが、195はそれがみられない。194は第1次調査第2トレンチで検出したS D21の最上層で出土した。195・196はS X96の埋土上層から炭層にかけて出土した。

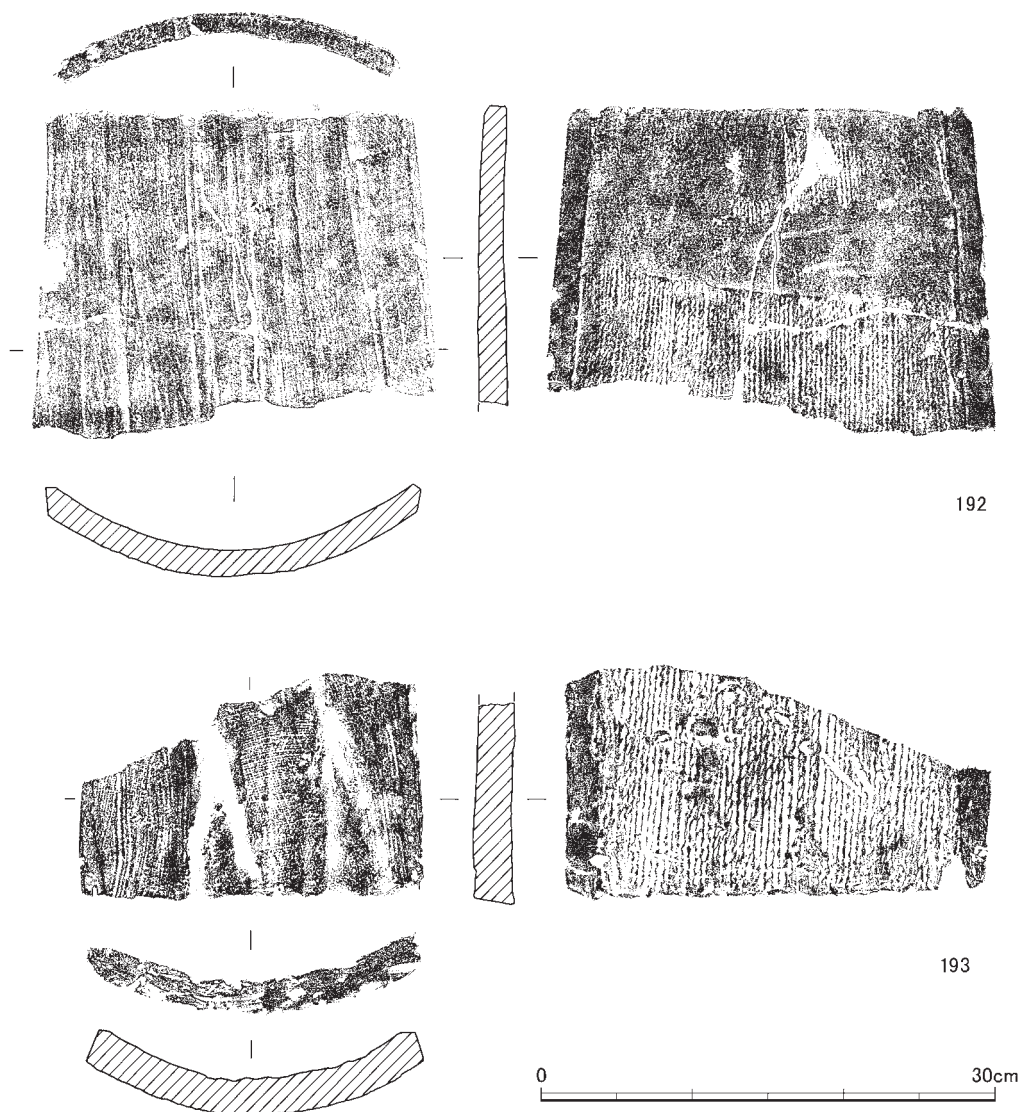
3類(第56図197) 197は、狭端側が残存し、隅の角度がほぼ直角であるので、ほぼ長方形を呈するものと考えられる。粘土板による成形である。全長が分かるものは無かった。第2類と同様に、表面は燻し風の黒灰色で、内部は灰白色を呈する。焼成はやや軟質である。凹面の糸切り痕・布目圧痕は擦り消さない。杵板痕はみられない。凸面は、比較的粗い縦位の縄目叩きを施す。条



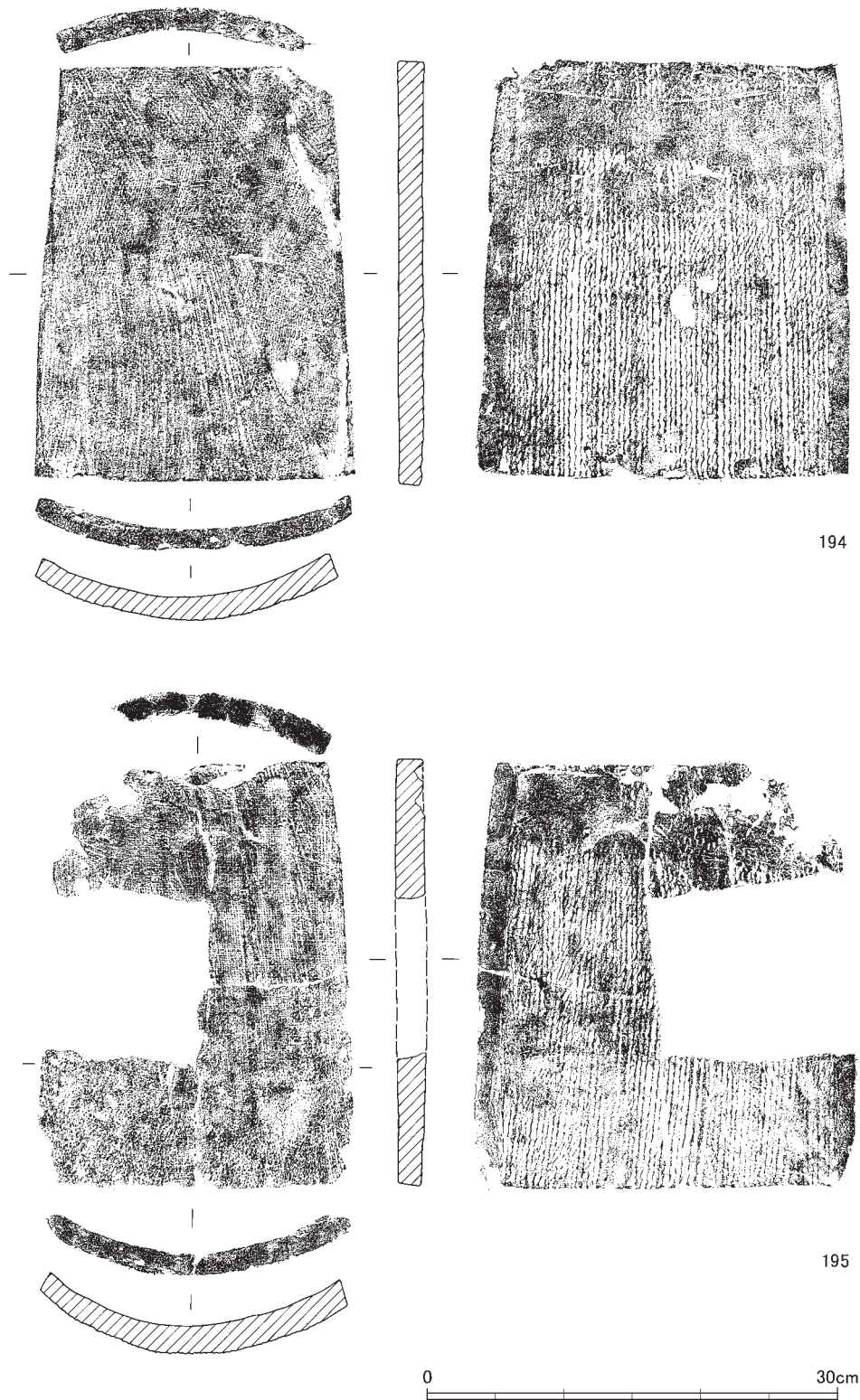
第53図 平瓦実測図(1)

の不整合はみられない。側面は、凹・凸面側ともに深く削って面取りする。197はS X96の埋土上層もしくは炭層から出土した。

恭仁宮跡出土の平瓦は、桶巻き作りで、凹面の整形をほとんど行わず、凸面の叩き目が縦位の縄目叩きで、それを横ナデで擦り消すC型式平瓦がある。C型式平瓦で全長の分かるものは35.1cmで、形状は台形である。縦位の縄目叩きを施した後、狭端および広端側の数cm幅を横ナデして擦り消し、縦位の縄目叩きには条の不整合が見られ、全長10cm・幅7～8cmの叩き板が復元されている。つまり、1類・2類ともに恭仁宮跡出土のC型式平瓦との共通点が多く見られる。しかし、規格の違いや、凹面の杵板痕や叩き目の不整合が恭仁宮跡出土資料ほど明瞭ではないこと、C型式平瓦は叩き目の擦り消しを凸面広端側でも行うことなど相違点もある。上粕北遺跡出土瓦の量的な制約からも、ここでは、恭仁宮跡C型式平瓦との共通性を指摘するのみに留めておきたい。一方、3類は、1・2類と異なり、凸面の狭端側を横ナデして縄目叩きを擦り消すというを行わないが、恭仁宮跡出土資料でそのような特徴がみられるのは、一枚作りのD型式平



第54図 平瓦実測図(2)



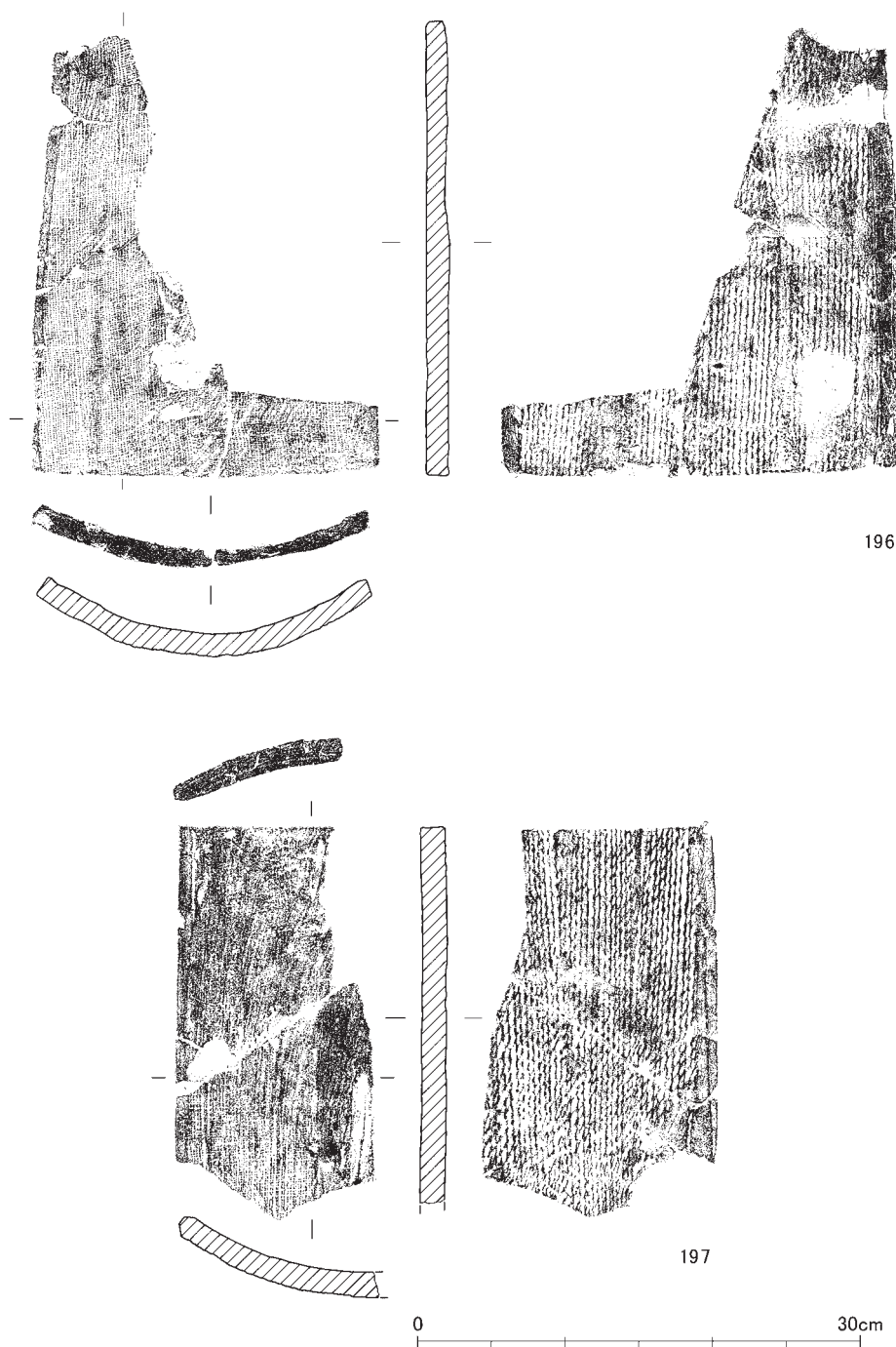
第55図 平瓦実測図(3)

瓦である。比較的粗い縄目叩きであることや、条の不整合がみられないことから、DⅡないしⅢ型式に近いといえる。しかし、3類が破片資料しか出土していないという資料の制約から、D型式平瓦との共通性を指摘するのみに留めておく。

(谷崎仁美)

④瓦塼(第57図)

2点を確認した。198は長さ22.2cm、残存幅16.4cm、高さ6.4cmを測る。本来の大きさは不明



第56図 平瓦実測図(4)

である。土坑S X96の埋土上層から出土した。199は塼の1つの面の粘土が掻き取られて凹むものである。塼の表面がこのような凹む形態のものは類例がない。溝S D21南部出土である。

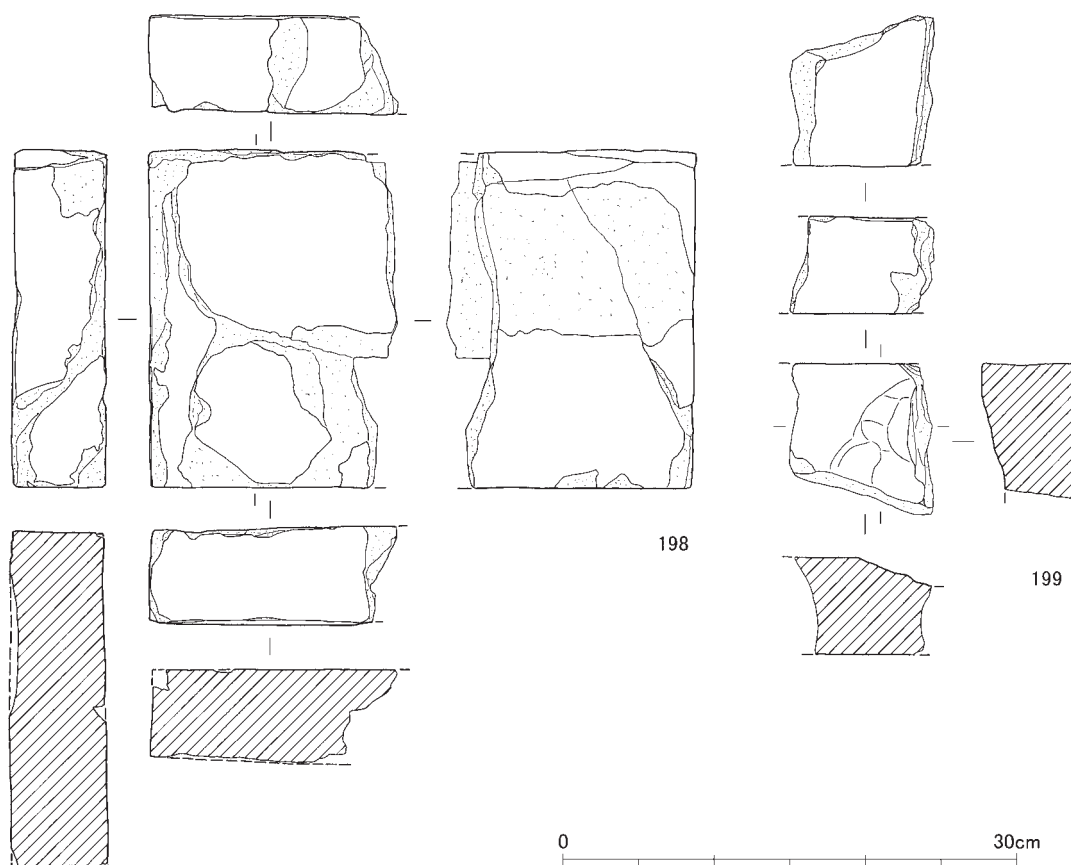
(筒井崇史)

(3)土器

今回の調査では、B地区を中心に大量の土器が出土した。特に土坑S X96では整理箱で30箱を越える土器が出土しており、その内容から奈良時代中頃の良い一括資料といえる。また、溝S D21からも多くの土器が出土しており、他の遺構からの出土土器と合わせて、上粕北遺跡の性格を考える上で重要な資料である。なお、奈良時代の土器の器種名や土師器の調整手法^(注15)については奈良文化財研究所が使用しているものに準じることとする。

①A2地区出土遺物

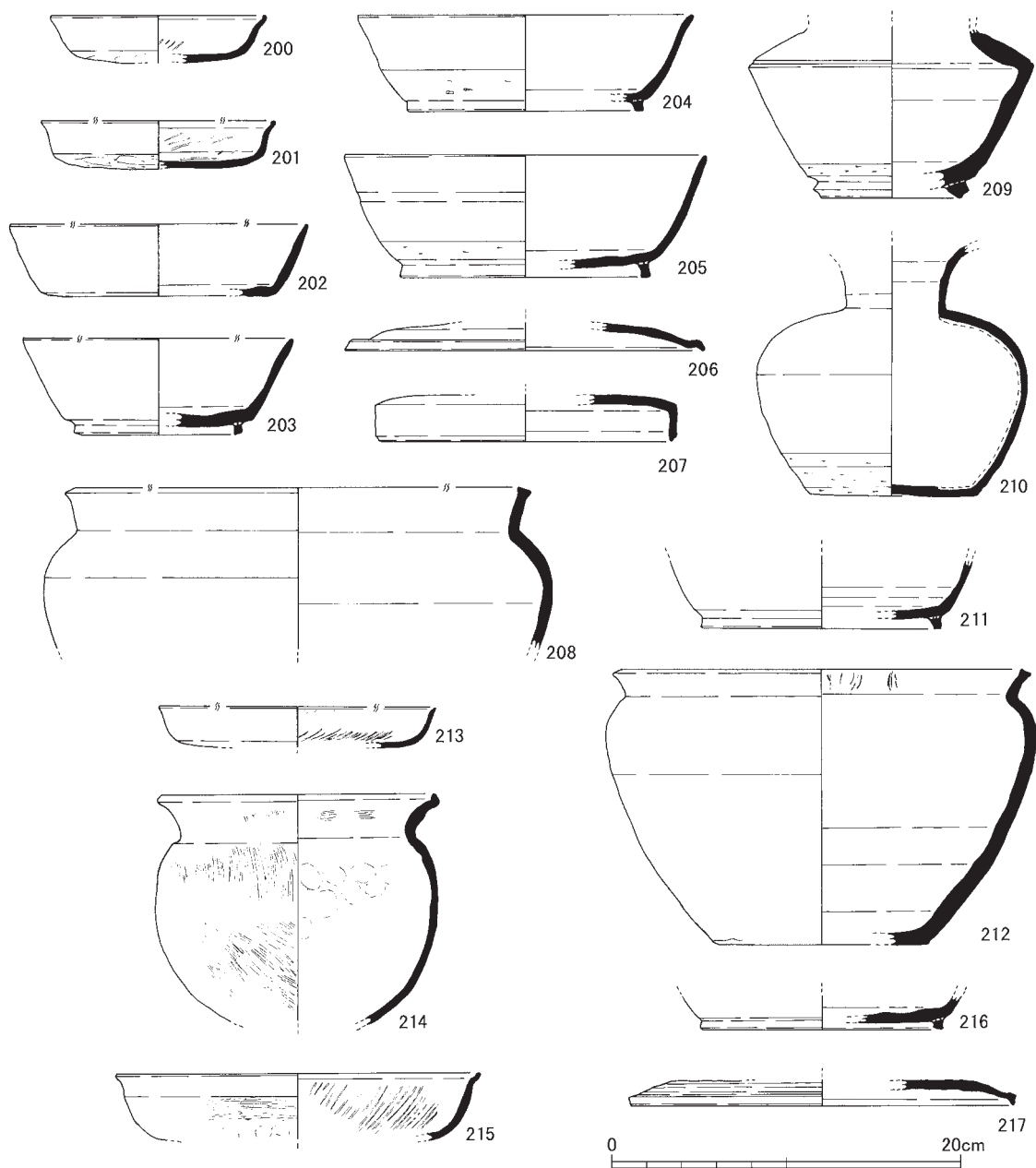
井戸S E215(第58図200～210) 出土量自体少ないが、供膳具が主体である。200・201は土師器杯Aである。口径12.3～13.4cm、器高2.7cmを測る。外面の調整は200がa0手法で、201はb0手法である。内面の調整は、いずれも口縁部内面に1段斜放射状暗文を施す。また、201は底部内面に螺旋状暗文が見られるが、200は不明である。202～210は須恵器で、杯A・B、蓋、鉢D、壺L・Qなどがある。202は杯A、203は杯BⅡ、204・205は杯BⅠである。204・205は底部と体部の境に回転ヘラケズリ調整を施し、丸みをもたせる。205は内面が研磨されていることから転



第57図 瓦塼実測図

用硯と考えられる。206は杯B Iもしくは皿B Iの蓋、207は壺Aの蓋である。208は口径16.8cm、残存高2.7cmを測り、全体に自然釉が掛かる。208は口径の残存率が1/12以下であるが、器壁の厚みから鉢Dと考えられる。調整は内面が回転ナデ調整で、外面はケズリ後ナデと考えられる。209は壺Qである。底部と体部の境に回転ヘラケズリ調整を施し、高台を貼り付ける。肩部には沈線を1条施し、自然釉が掛かる。210は壺Lである。底径9.5cmを測る。底部外面はヘラキリ後ナデで調整し、体部下半の約1/4に回転ヘラケズリ調整を施す。肩部には自然釉が掛かる。

土器溜まり S X 203 (第58図211・212) いずれも須恵器で、211は杯B、212は鉢Dである。211は底径13.8cm、残存高3.8cmである。212は口径23.0cm、器高15.7cmを測る。調整は、内外面ともに回転ナデ調整である。口縁部内面には所々線刻状の痕跡が見られる。



第58図 A 2 地区奈良時代遺構出土土器実測図

柱穴 S P 222 (第58図213・214) 213は土師器皿Aである。外面調整はa0手法で、内面には1段斜放射状暗文を施す。底部内面の螺旋状暗文については摩滅が著しいため不明である。214は土師器甕である。口縁部内外面と体部外面にハケ調整、体部内面にナデ調整を施す。口径15.6cm、残存高13.2cmを測る。

柱穴 S P 169 (第58図215) 215は土師器杯Aである。口径20.8cm、器高3.8cmを測る。外面の調整はa1手法で、口縁部外面にヘラミガキ調整を施す。口縁部内面には1段斜放射状暗文が施されるが、底部内面に螺旋状暗文が施されていたかどうかは不明である。

柱穴 S P 221 (第58図216) 216は須恵器杯Bの底部である。底径13.1cm、残存高2.7cmを測る。

柱穴 S P 313 (第58図217) 217は須恵器杯Bもしくは皿Bの蓋である。口径22.0cmを測る。

②B地区出土遺物

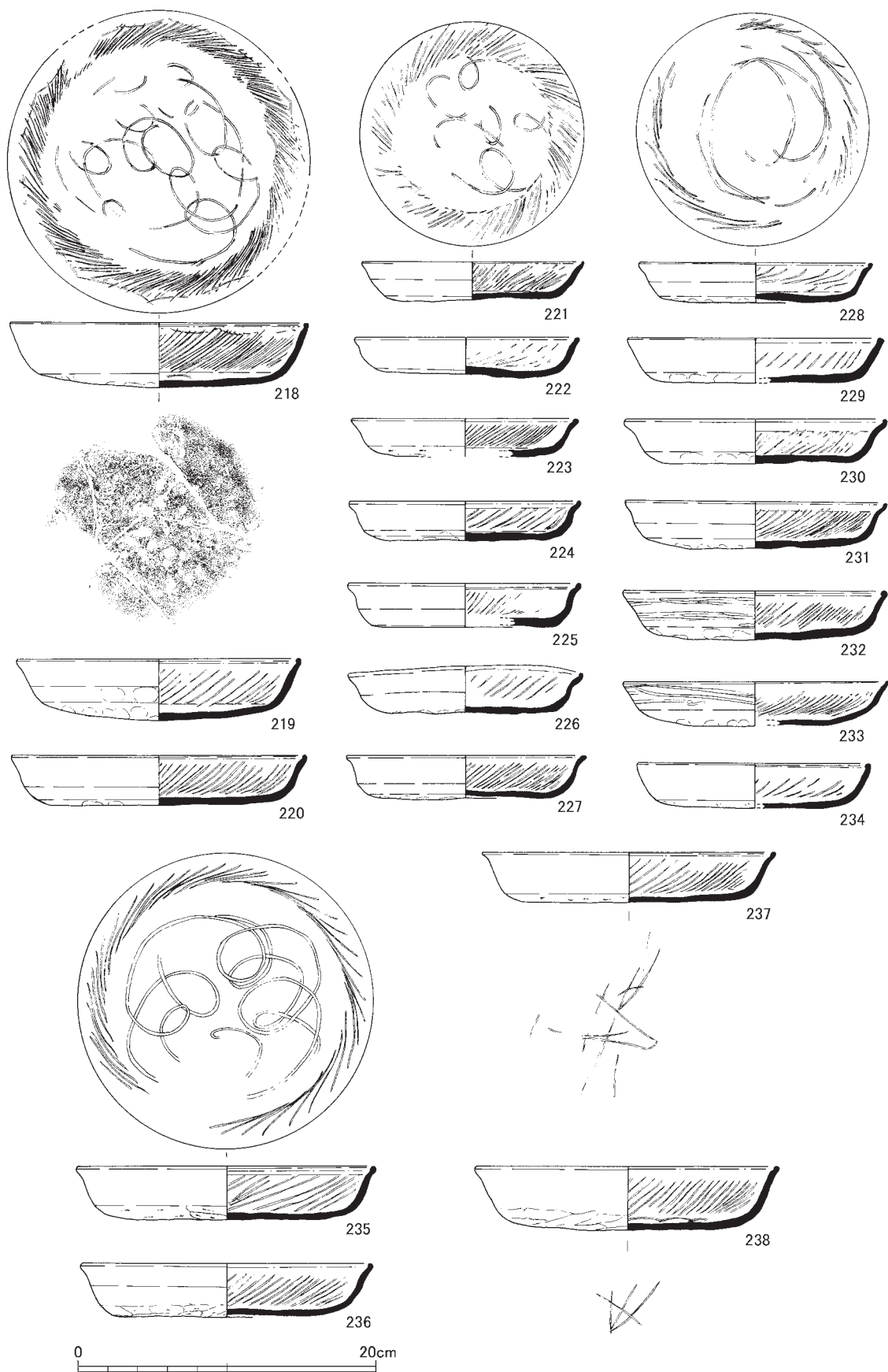
土坑 X X 96 (第59図218～第71図457) 出土した土器としては土師器や須恵器のほか、墨書土器や製塩土器などがある。以下、土器の種類ごとに報告する。

土師器 (218～321) 杯A・B・C、皿A・B・C、碗C、高杯、壺A・B、甕A・B、鍋B、竈などがある。218～254は杯Aである。口径14.4～17.8cmの杯AⅡと、口径18.8～20.8cmの杯AⅠに分類できる。外面調整は、218～231がa0手法、232・233がa1手法、234～242がb0手法、243～251・253がb1手法、252・254がb3手法で、a0手法が最も多く、次いでb1手法が多い。253はb1手法であるが、底部外面中央にケズリ残した部分に木の葉圧痕がみられる。内面の暗文は1段斜放射状暗文と螺旋状暗文の組合せが基本である。螺旋状暗文については、225・226・242の3点が摩滅のため不明で、234は施さない。放射状暗文には密なものと粗いものがあり、密なものの方が多い。螺旋状暗文はほとんどが二重ないし三重である。また、218・253・254は口縁端部内面に連弧状暗文がみられる。218・230・253は底部外面に木の葉圧痕が、238は線刻がみられる。221は口縁部に煤が付着していることから灯火器として使用されていたと考えられる。

255～268は杯Cである。口径16.8～18.8cm、器高2.5～3.0cmを測り、法量分化はみられない。外面調整は、256～258・262～265・268がa0手法、255・259～261・266・267はb1手法で、ほぼ同じ割合である。内面の暗文は1段斜放射状暗文と螺旋状暗文の組合せが基本である。262は摩滅のため不明である。斜放射状暗文は密で、螺旋状暗文は二重ないし三重である。また、255・259～261は口縁部内面に連弧状暗文がみられる。

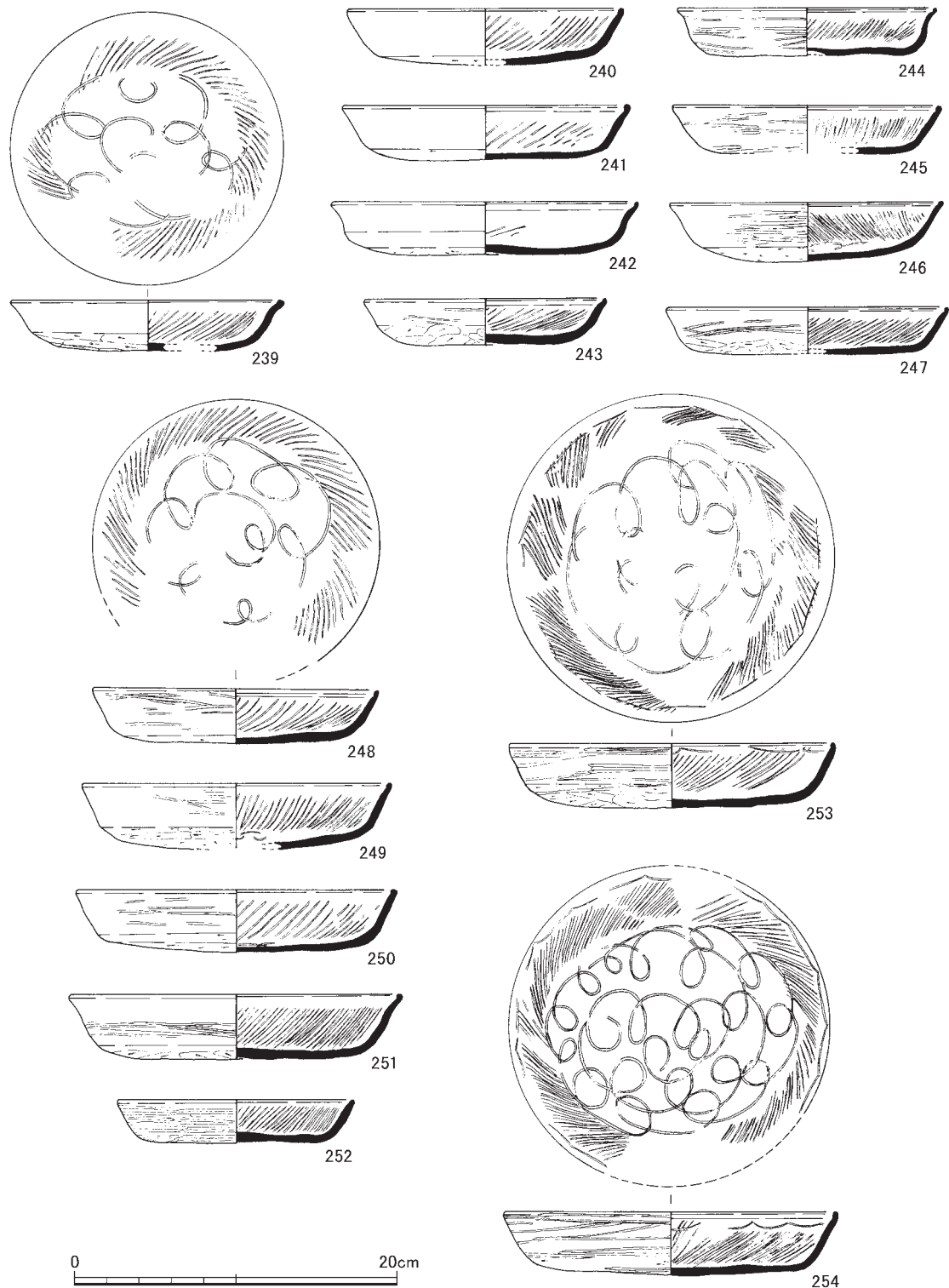
269～280は皿Aである。口径15.2～15.8cmの皿AⅢ、口径18.8cmの皿AⅡ、口径21～23.6cmの皿AⅠに分類できる。外面調整は269～277がa0手法、278～280がb0手法で、a0手法が多い。内面の暗文は1段斜放射状暗文と螺旋状暗文の組合せが基本であるが、271はなく、274は摩滅のため不明である。斜放射状暗文は密なものが多く、螺旋状暗文は二重ないし三重である。277の底部外面には線刻がみられる。

281・282は杯Bで、口径15.0～15.2cm、器高3.0～3.2cmを測る。調整はいずれもb0手法で、口縁部内面には1段斜放射状暗文が施される。281は底部内面に螺旋状暗文がみられるが、282にはない。283は皿Bである。底径25.2cm、残存高1.9cmを測る。内面には1段斜放射状暗文と螺旋状

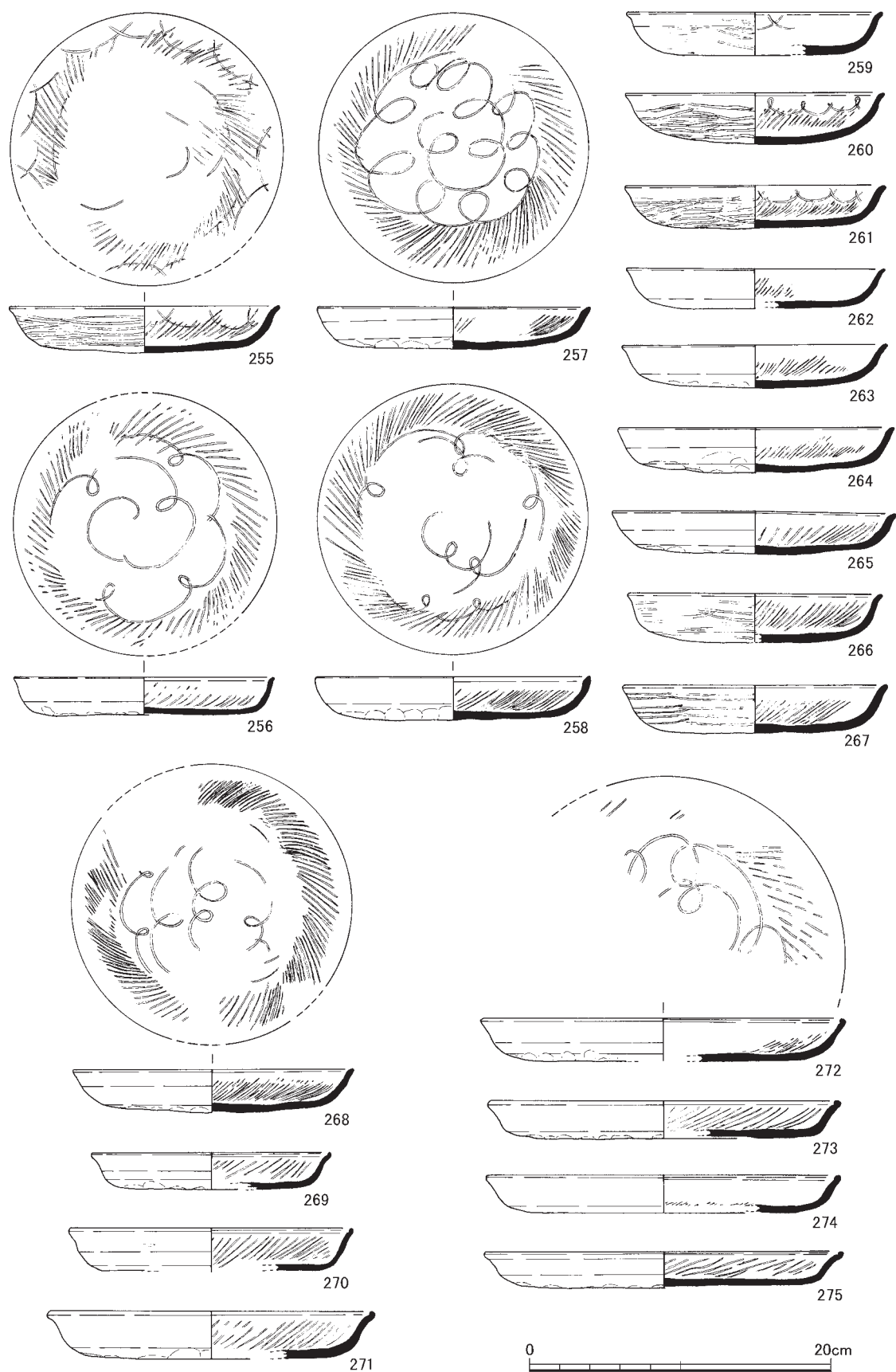


第59図 土坑 S X 96出土土器実測図(1)

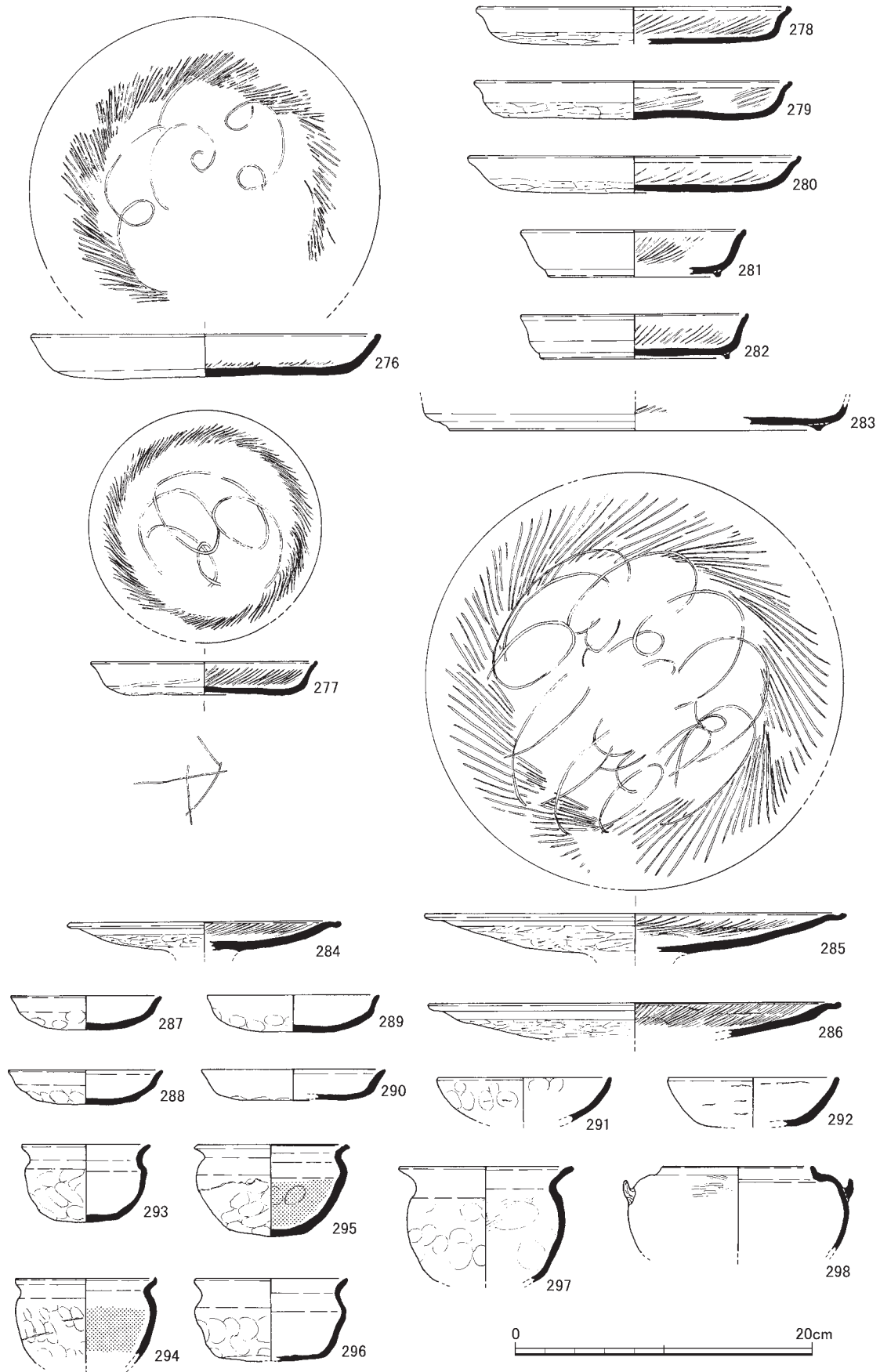
暗文を施す。284～286は高杯である。口縁部端部はヨコナデ、杯部外面はヘラケズリで調整する。内面にはいずれも放射状暗文を施す。285・286には底部内面に螺旋状暗文がみられるが、284は摩滅のため不明である。放射状暗文は密なものが多く、螺旋状暗文は二重ないし三重である。なお、S X 96では脚部はほとんど出土していない。287～290は皿Cである。口径10.0～12.3cm、器



第60図 土坑 S X 96出土土器実測図(2)

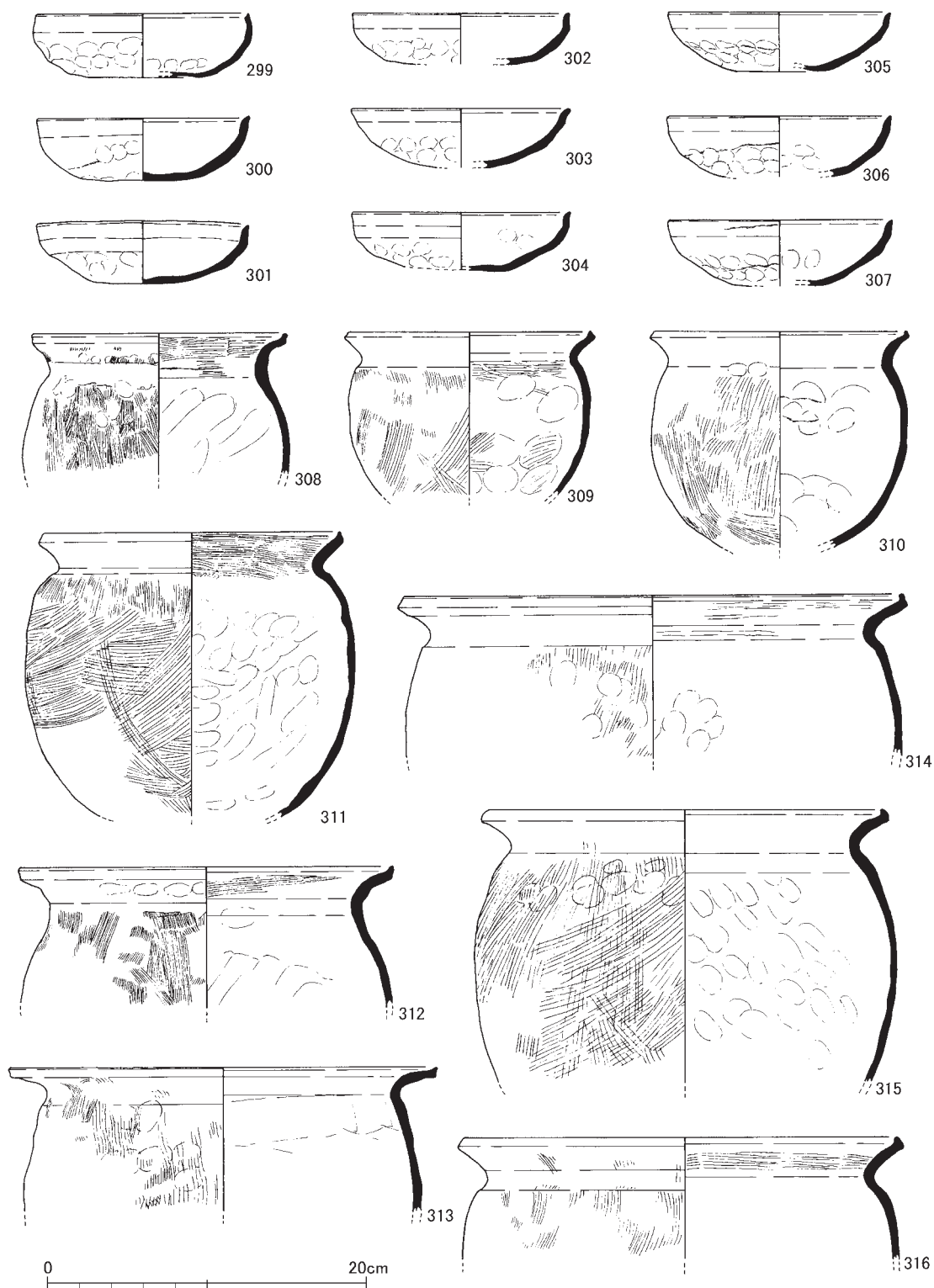


第61図 土坑 S X 96出土土器実測図(3)



第62図 土坑 S X 96出土土器実測図(4)

高2.1～2.5cmを測る。e手法で調整する。291・292は杯である。口径11.4～11.6cm、器高3.0～3.3cmを測る。いずれも全体をナデで調整するが、291は指圧痕が残る。293～297は壺Bである。口径8.5～11.6cm、器高(もしくは残存高)5.2～7.7cmを測る。294～296は内面に漆が付着する。298は壺Aである。口径9.9cm、残存高5.7cmを測る。摩滅が著しいが、口縁部および内面はナデ、



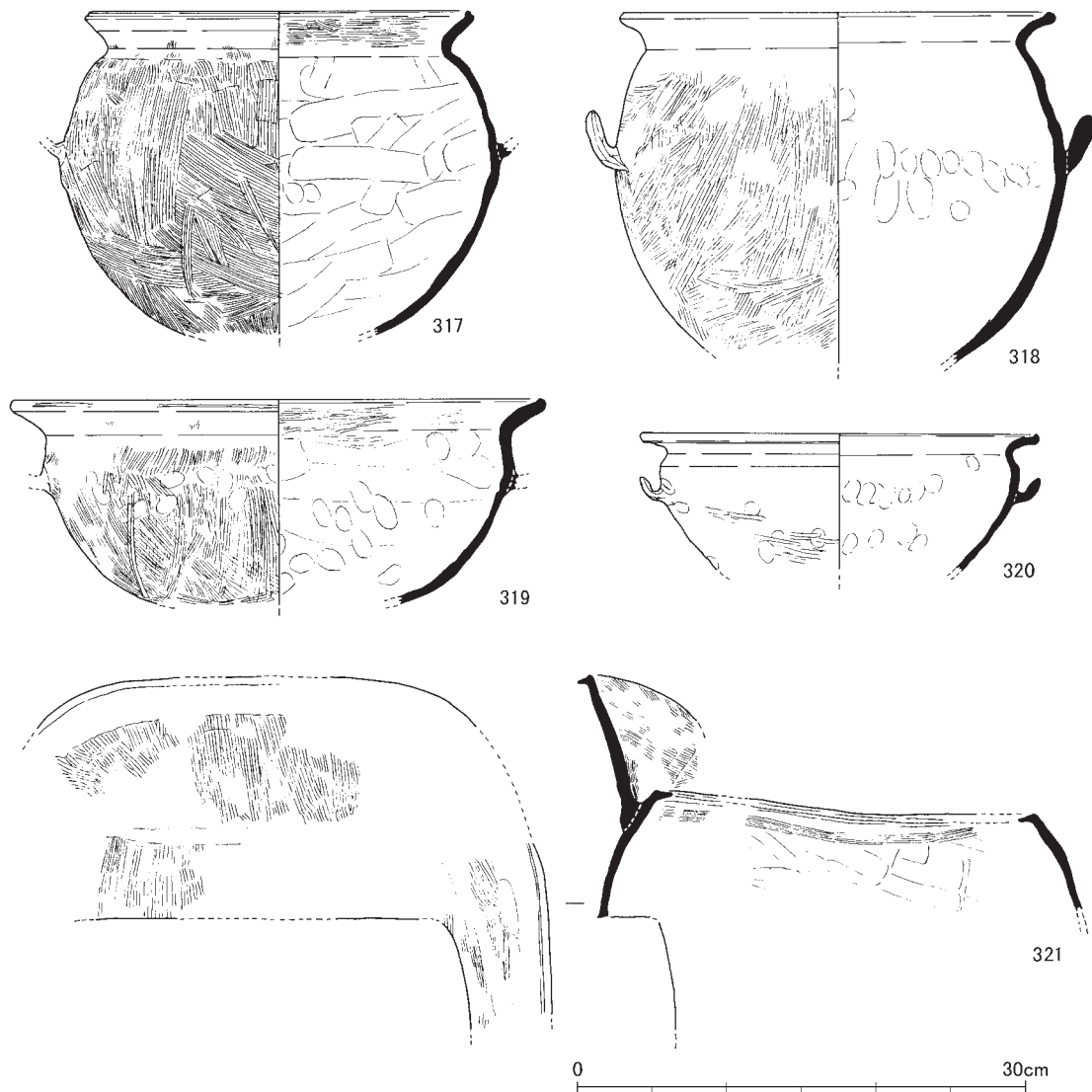
第63図 土坑 S X 96出土土器実測図(5)

外面はミガキで調整する。299～307は椀Cで、口径13.3～14.0cm、器高3.2～4.1cmを測る。e手法で調整する。299は口縁端部が内湾し、303は外反気味である。

308～316は甕Aである。口径15.2～18.6cmの甕AⅢ、口径23.6～27.6cmの甕AⅡ、口径31.2cmの甕AⅠに分類できる。いずれも体部外面はハケメ、内面はナデ調整する。308・310・311・312・314・316は口縁部内面をハケメ調整する。317・318は甕Bである。口径25.1～28.7cm、残存高21.5～23.5cmを測る。口縁部内面はハケメ、外面はヨコナデ、体部内面はナデ、外面はハケメ調整する。319・320は鍋Bである。319は口径34.9cmを測り、320は口径26.2cmと小型である。いずれも体部外面はハケメ、内面はナデ調整する。319は口縁部内面をハケメ調整する。

321は竈である。同一個体と思われるが、欠損部位が多く、完形に復元することはできなかった。推定口径24cmを測る。図示していないが底部の破片もある。

S X96から出土した土師器供膳具は、斜放射状暗文が密であるものが多く、螺旋状暗文が二重ないし三重である。また、口縁端部内面に連弧状暗文を施すものが一定量含まれる。これらの特



第64図 土坑 S X96出土土器実測図(6)

徴から平城宮土器編年のⅢの古段階に併行する資料群と考えられる。旧山城町域でこの時期の資料がまとまって出土した例はなく、この地域の土器編年を考えていく上で貴重な資料といえることができる。

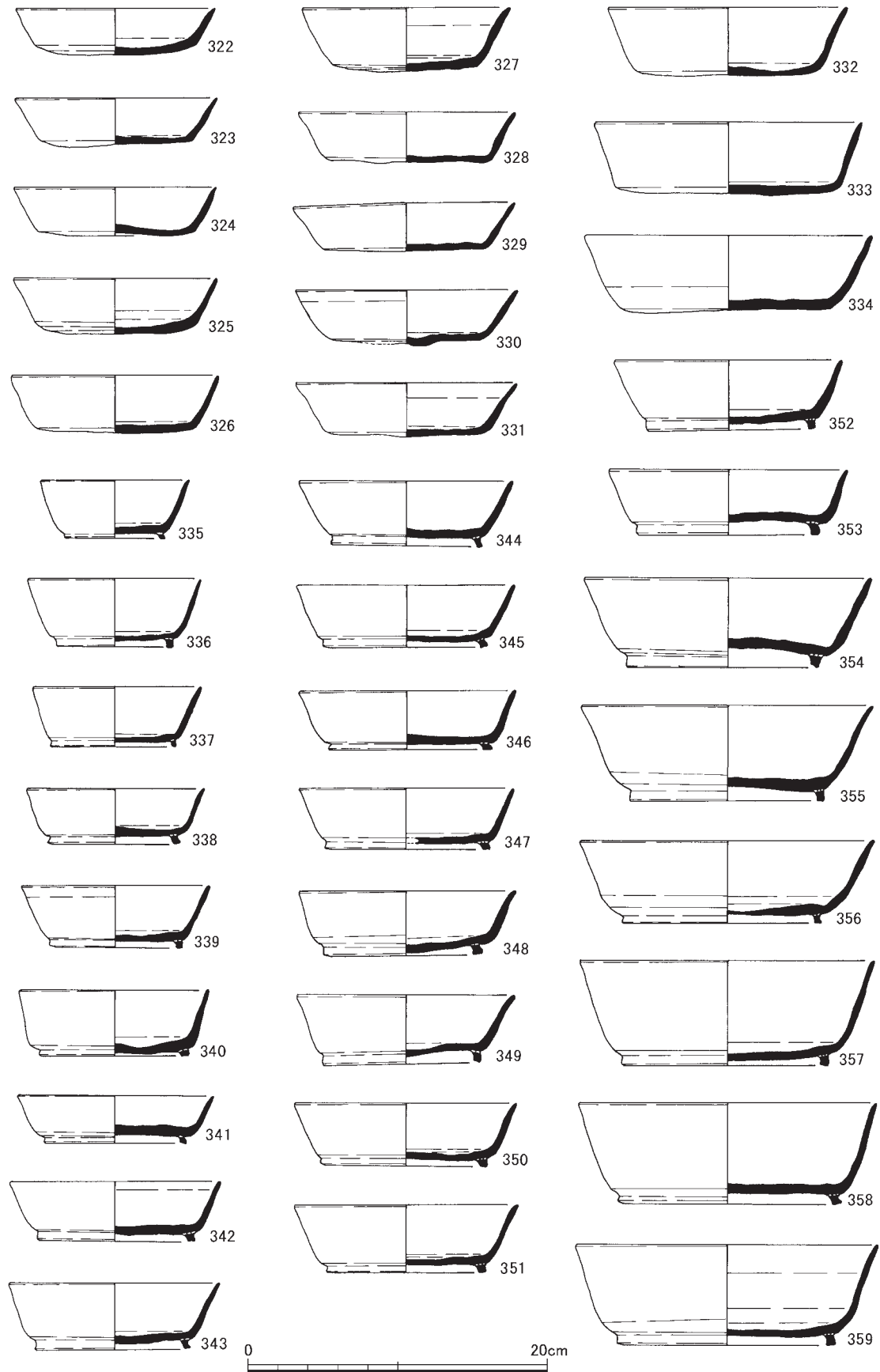
須恵器(322～412) 杯A・B・E・F、杯B蓋、皿B・C、皿B蓋、高杯、壺E・K・Q、壺A蓋、甕などがある。供膳具、中でも杯Bが多く、貯蔵具は少ない。322～334は杯Aである。口径の大きさにより杯AⅠ(口径18～20cm)、杯AⅡ(口径15～18cm)、杯AⅢ(口径13～15cm)のおおむね3つに分類できる。ほとんどが底部をヘラキリ後にナデで仕上げるが、322・325・327は調整しない。杯AⅠは器高が4cmを越える深手のものである。

335～361は杯Bである。口径の大きさにより杯BⅠ(口径19～21cm)、杯BⅡ(口径14～16cm)、杯BⅢ(口径11～13cm)、杯BⅣ(口径9～11cm)のおおむね4つに分類できる。杯BⅠは器高6cmを越える深手のものが多い。また、底部の調整はほとんどがヘラキリ後ナデであるが、340・342・343・350・353は調整しない。354・357～361はヘラキリ後にヘラケズリを施す。また、354～356・359～361は底部から体部にかけてヘラケズリすることにより丸味をもたせる。361は内面に漆が付着している。ほかにも漆の付着した須恵器杯Bが数点ある。

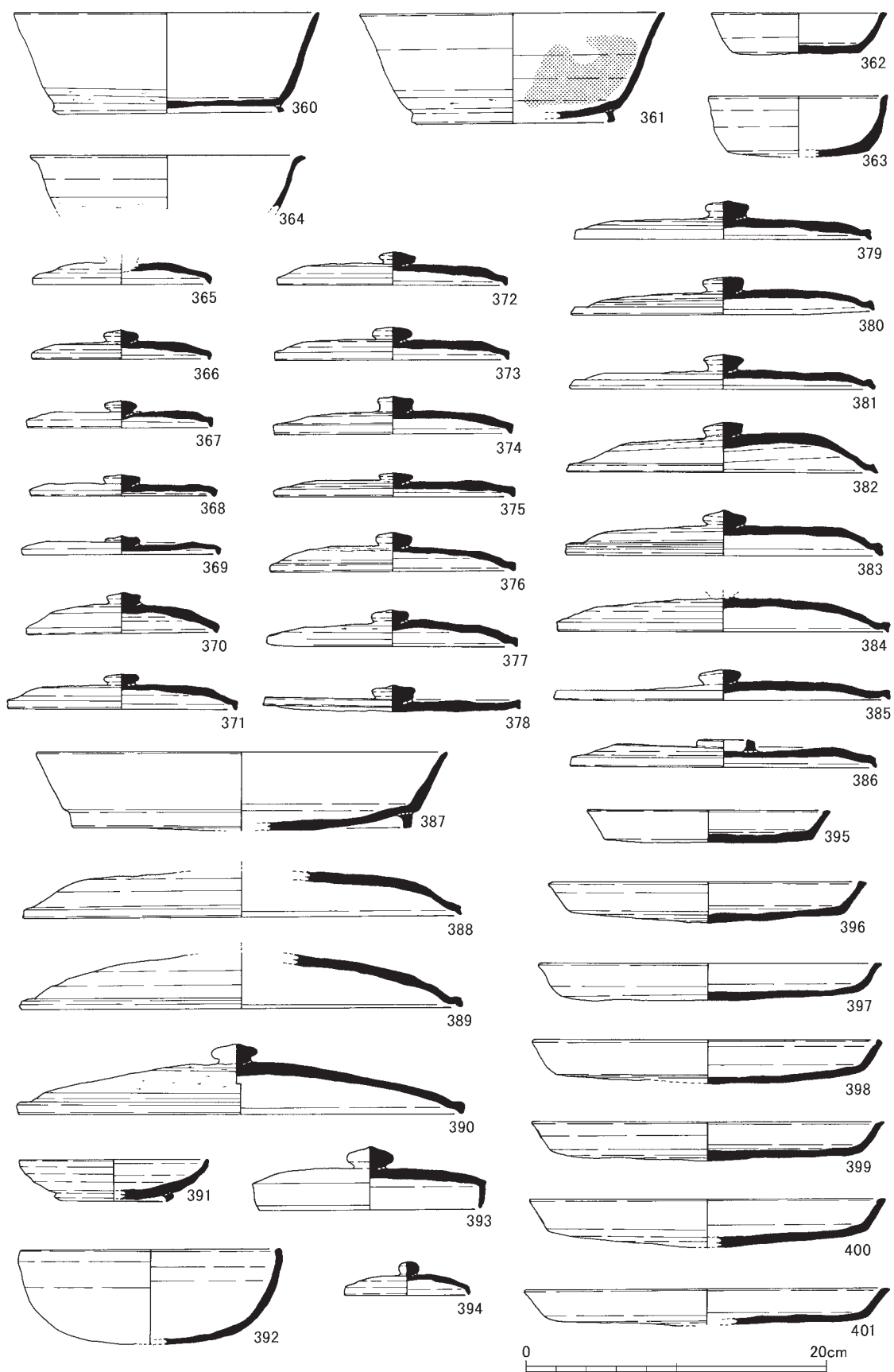
362・363は平底から湾曲して体部が立ち上がり、口縁端部が平坦であることから杯Eと判断した。364は杯Fである。体部下半はヘラケズリを施す。365～386は杯B蓋である。口径の大きさにより杯B蓋Ⅰ(口径19～22.2cm)、杯B蓋Ⅱ(口径15～17.1cm)、杯B蓋Ⅲ(口径11～13cm)の3つに分類できる。385は環状つまみをもつ。387は皿Bである。口径27.3cm、器高5.2cmを測る。底部外面はヘラケズリである。388～390は皿B蓋である。

391は皿である。口径12.5cm、器高2.75cmである。体部は湾曲して立ち上がり、口縁端部は内傾する。貼り付け高台で、底部外面にはヘラケズリを施す。畿内では見られない器形である。内面には赤色顔料が付着する。392は杯Eもしくは鉢の類であろう。口径17.0cm、器高6.25cmを測り、調整は摩滅のため不明である。393は壺A蓋である。394は口径8.2cm、器高2.2cmを測り、小型の壺の蓋もしくは杯B蓋のミニチュアと考えられる。395～401は皿Cである。口径16.0cmの皿CⅢ、口径20.5cmの皿CⅡ、口径22.7～24.0cmの皿CⅠがある。底部外面はほとんどがヘラキリ後ナデで調整する。402～404は高杯脚部、405は壺頸部である。406は壺Kで、口径7.5cm、器高19.7cmを測る。体部の下方約1/3はヘラケズリ、底部外面はナデで調整する。407は壺Eである。口径10.1cm、器高7.6cmを測る。貼り付け高台で、底部外面はヘラキリ、体部はナデである。408は壺Qの頸部の破片である。409・410は壺底部である。409は底径5.2cm、残存高4.1cmを測り、高台は貼り付けである。体部外面はケズリ、底部外面はナデで調整する。410は底径9.6cm、残存高7.2cmを測り、高台は貼り付けである。体部と底部の境をケズリで調整する。411・412は甕である。412は口径20.0cm、残存高18.2cmを測る。

墨書土器(413～443) 総出土点数は31点である。個々の釈文や出土層位は付表2を参照されたい。413～423・443が土師器(13点)、424～442が須恵器(18点)である。墨書のほとんどが杯や皿などの供膳具の底部外面に記載されていた。出土層位は炭層および木屑層である。

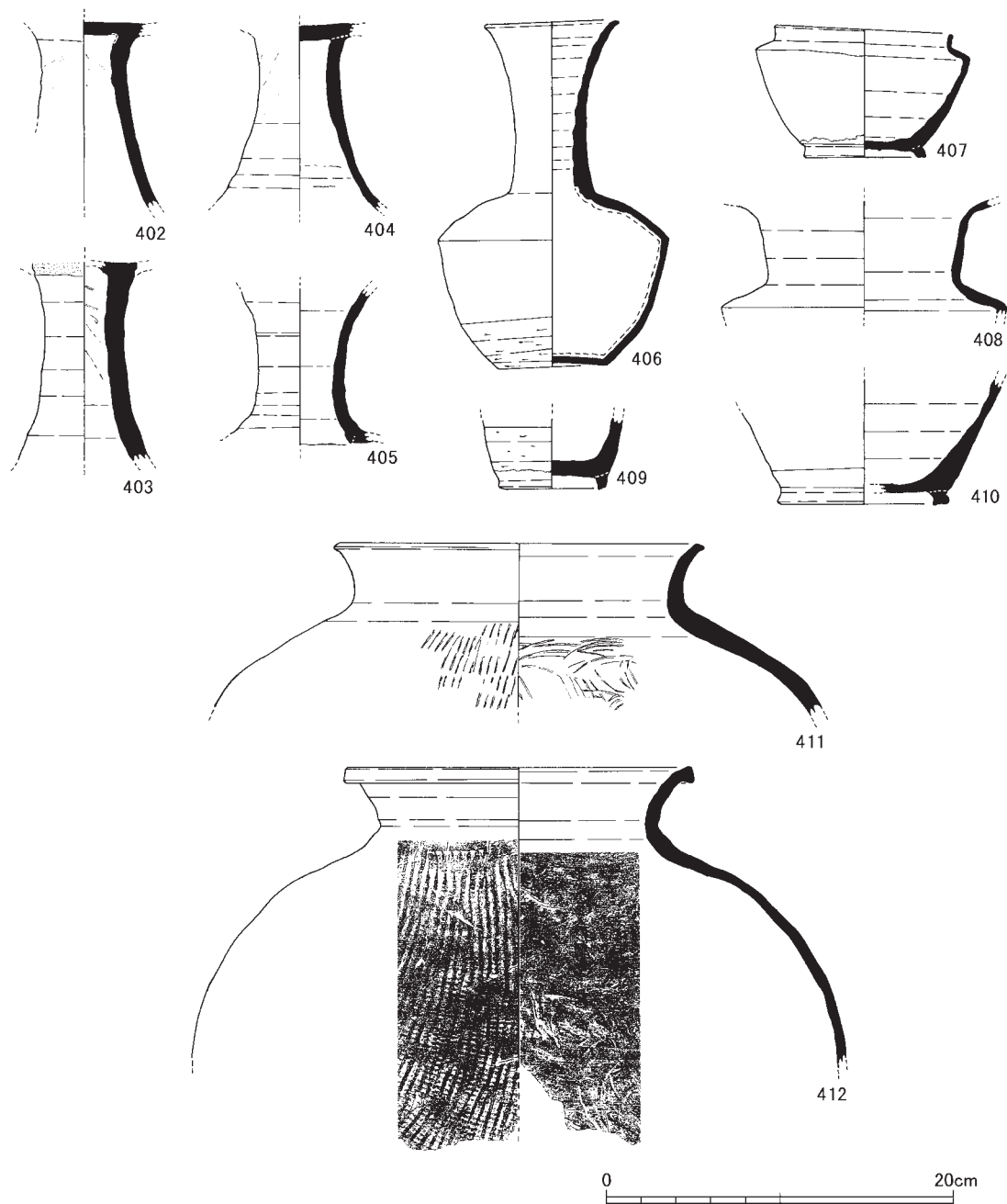


第65図 土坑 S X 96出土土器実測図(7)

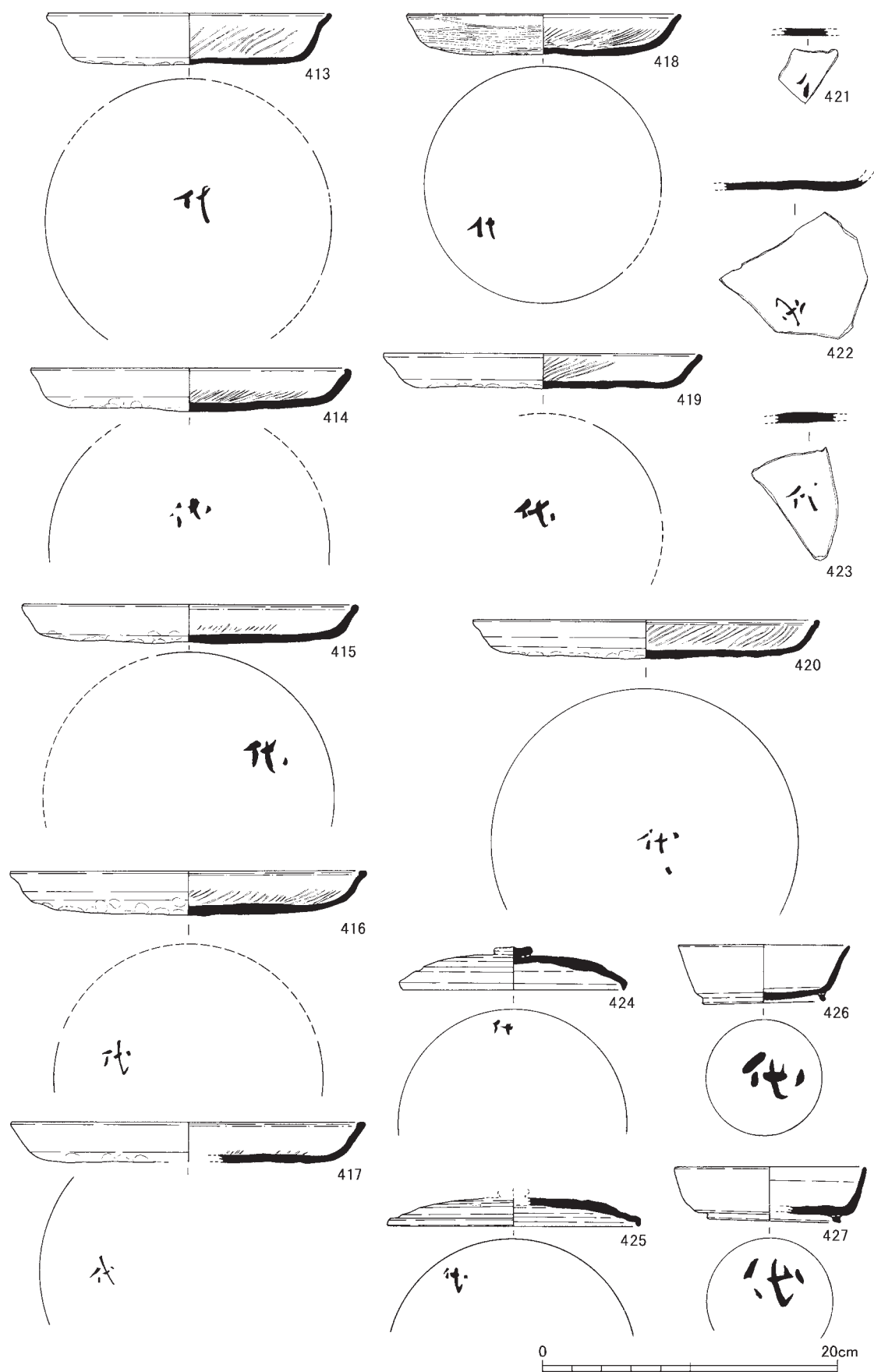


第66図 土坑 S X 96出土土器実測図(8)

413～420・422～434は「代」と墨書されたものである。21点を数え、墨書土器全体の7割を占める。413～420・423は土師器で、皿が多い。いずれも底部外面に墨書される。413は杯A、414～420は皿Aである。外面調整は418はa1手法、他はa0手法である。いずれも内面に1段斜放射状暗文と螺旋状暗文を施す。斜放射状暗文は密なものが多く、螺旋状暗文は二重ないし三重である。422・423は杯もしくは皿の底部である。421も杯もしくは皿の底部で、人偏のみ判読でき、「代」である可能性が高い。424～434は須恵器である。424・425は杯B蓋で、いずれも内面に墨書される。426～429は杯Bで、底部外面に墨書される。430は杯もしくは皿の底部である。外面に墨書される。431～433は皿Cである。底部外面に墨書される。434は鉢Dで、口径26.8cm、器高



第67図 土坑 S X 96出土土器実測図(9)

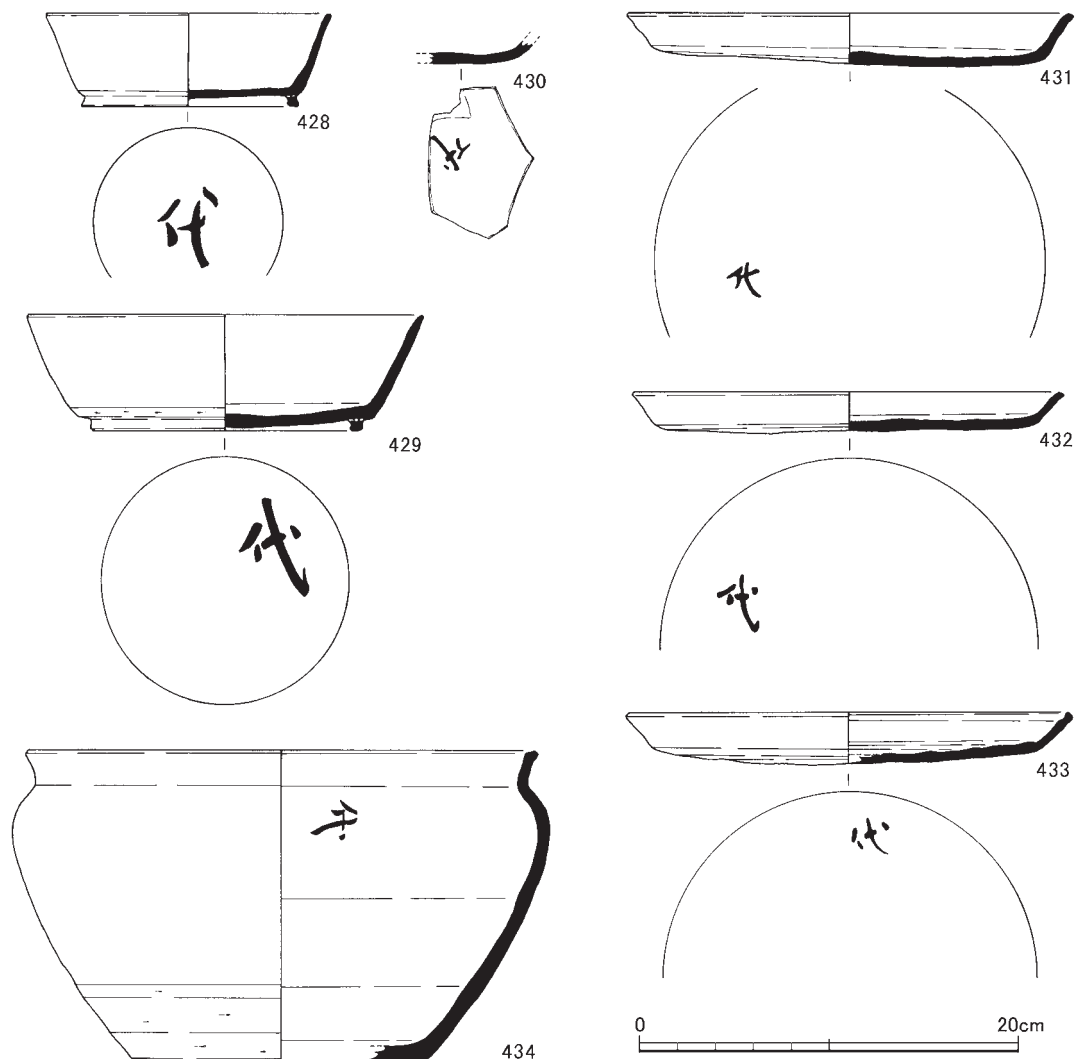


第68図 土坑 S X96出土墨書土器実測図(1)

16.3cmを測る。体部の下半部約1/4はヘラケズリで調整する。肩部内面に横向きに墨書される。

「代」の運筆を観察すると少なくとも3種類以上あり、おそらく複数の人の手によるものと考えられる。なお、「代」の意味するところについては不明である。

その他の墨書としては「咋女」・「若女」など女性の名前と考えられるものや「石」・「匠」・「寺」などがある。435～442は須恵器である。435～437は杯Aで、口径14.5～17.8cm、器高3.9～4.1cmを測る。いずれも底部外面に墨書がみられる。435は「会」または「金」または「参」と考えられる。436は「大」、437は「咋女」と墨書される。438～441は杯Bで、口径14.3～14.8cm、器高4.4～4.8cmを測る。いずれも底部外面に墨書される。438は「寺」、439は「若□」、440は「若女」、441は「匠」と墨書される。442は皿Cである。口径23.5cm、器高2.2cmを測り、底部外面に「石」と墨書される。443は土師器皿Aである。口径24.2cm、器高2.9cmを測る。外面調整はb0手法で、内面には1段斜放射暗文と螺旋状暗文が施される。斜放射状暗文は粗い。底部外面に「山」と墨書される。

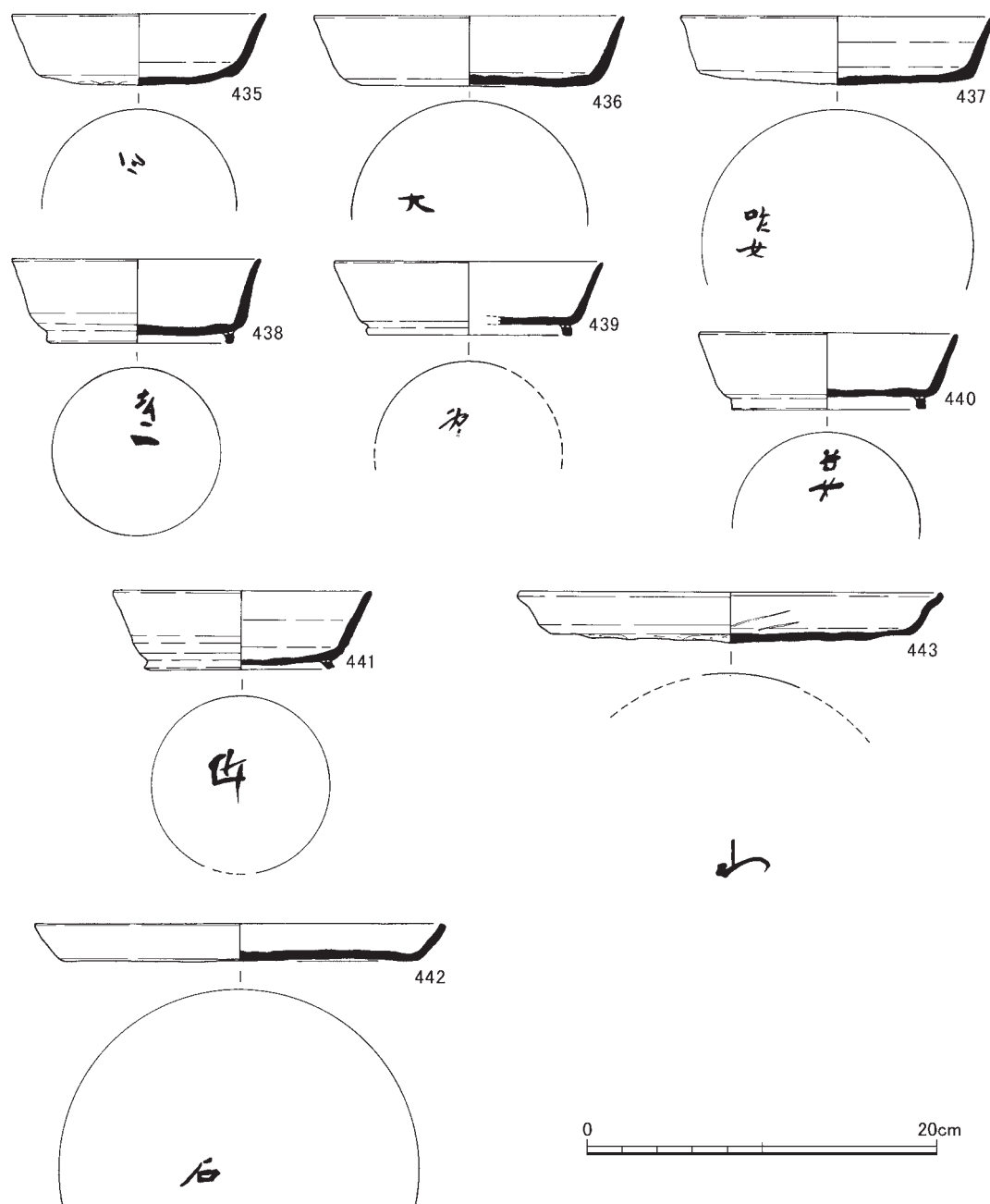


第69図 土坑S X96出土墨書土器実測図(2)

(松尾史子)

製塩土器 (444～457) S X96で出土した製塩土器は19.0kgに達する。大半は破片資料で、全体の形状がわかるような復元を行うことはできなかった。代表的なもののみを図示した。444～448は内外面ともユビオサエとナデ調整を施す。いずれも粘土紐接合痕を残す。449～454は外面にユビオサエやナデ調整を、内面にハケ調整を施す。外面には粘土紐の接合痕を残す。455～457は外面にタタキ調整を施す。457は底部の破片で、尖底気味である。図示していないが、内面に布目の圧痕が残るものが少量ある。

なお、製塩土器の生産地については十分に検討することはできなかったが、大半は大阪湾沿岸、



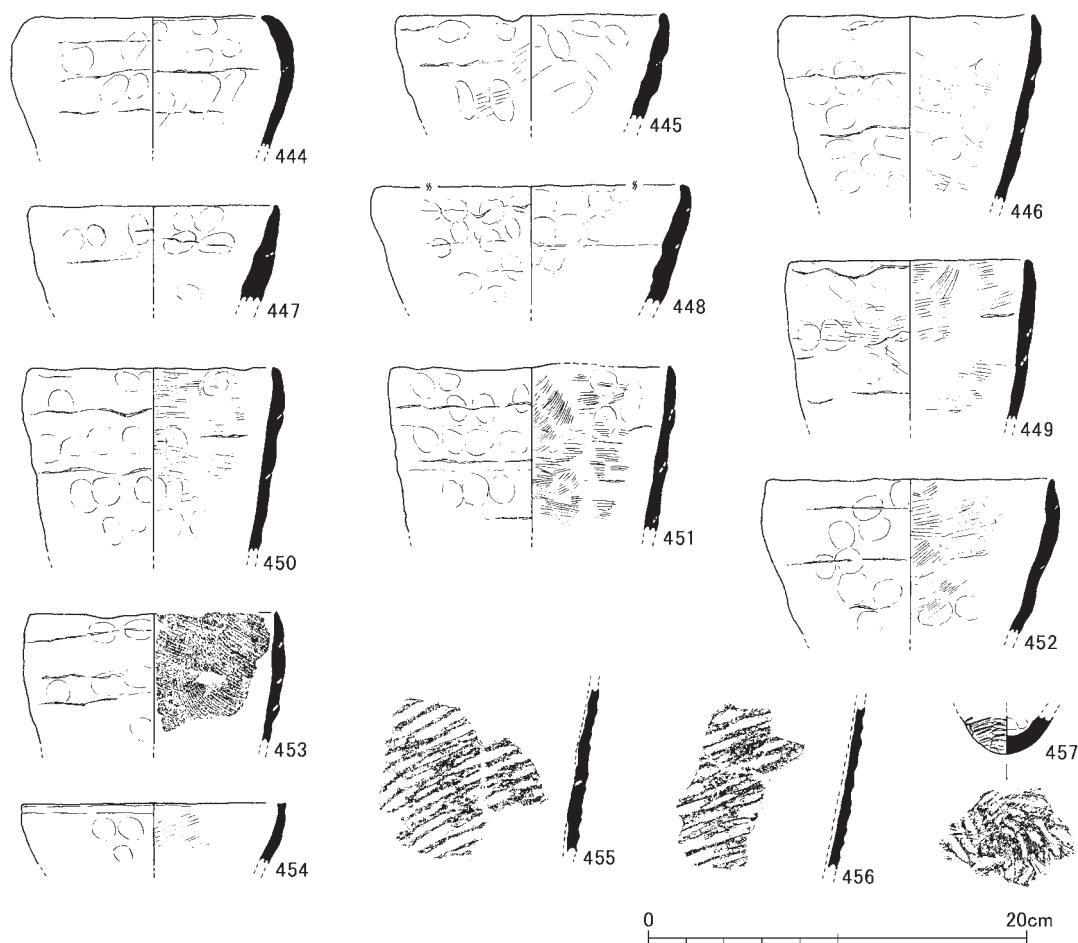
第70図 土坑 S X96出土墨書土器実測図(3)

もしくは東部瀬戸内沿岸のものと推定される。ただし、タタキ調整を施すものはこれらの地域にみられず、詳しい生産地は不明である。^(注17)

(筒井崇史)

溝S D21(第72図458～第77図590) S D21から出土した遺物は遺物整理箱で12箱分である。遺構の項で述べたように、この溝は総延長約100mにおよび、遺物は溝の北部・中央部・南部の3地区でまとまって出土する傾向にあることからその地区ごとに報告する。なお、製塩土器は溝全体で、4.3kgが出土した。

北部(第72・73図) 土師器(458～477)には杯A、壺B、甕A、製塩土器などがある。458～462は杯AⅡである。外面調整は、458・459がa0手法、460はa1手法、461はb0手法である。458・460は内面に1段斜放射状および螺旋状の暗文を施す。459・460は内面に暗文を施さない。462は内外面とも摩滅が著しく調整は不明である。463・464は高杯の脚柱部、465は脚部である。463・464は外面を面取りし、杯部内面に螺旋状暗文を施す。466は小型の杯である。口径10.0cm、器高2.5cmを測る。内外面ともにナデにより仕上げる。平城京ではあまり見られない器形であり、在地の土器である可能性がある。467は杯B蓋と考えられる。口縁端部はヨコナデにより仕上げる。468～473は壺Bである。468・469はほぼ完形で、470～473はいずれも底部付近が欠損している。



第71図 土坑S X96出土製塩土器実測図

法量は、口径8cm台と10～11cm台の2種類である。いずれも体部外面には指オサエによる圧痕がみられ、口縁部はナデによって仕上げる。469・470・472・473の内面には黒漆が付着している。474は鉢Aである。口径21.8cm、器高6.25cmを測る。口縁部外面はミガキで、体部下半から底部はケズリで仕上げる。内面の調整は摩滅が著しく不明である。475～477は甕Aないし甕Cと思われる。口径27.6～28.6cmを測る。調整はいずれも体部外面および口縁部内面はハケ、体部内面はタタキ後ナデである。

478・479は製塩土器である。破片資料であるためいずれも器形および口径は不明であるが、口縁端部はナデによって仕上げられ、外面には指圧痕が残る。

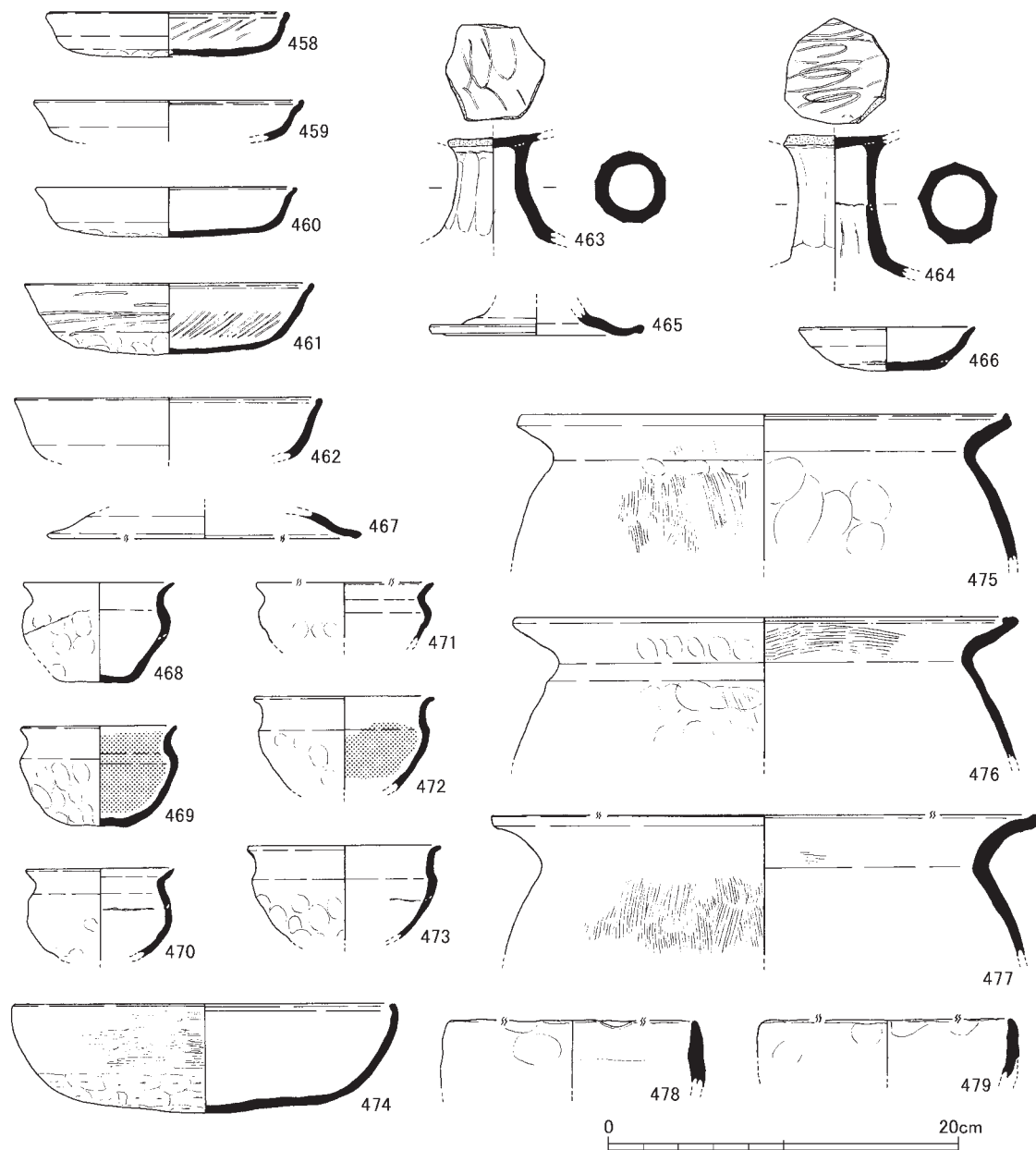
須恵器(480～512)には、杯蓋、杯A・B・C・E・F、皿B、鉢A、壺A・C・D・E・N、壺A蓋などがある。杯は深さ4cm前後の深手のものが多い。また、他の地点に比べ壺類が多く出土している。480～485は杯A、486～492は杯Bである。493は皿Bである。494は杯Cで、口縁端部内面に沈線を施す。495は杯Eである。口縁端部は平坦に仕上げ、底部と体部の境にケズリを施す。496～501は杯B蓋である。500・501以外はつまみ部分が欠損している。503は壺Aの蓋である。口径13.4cmである。口縁端部はナデによりシャープに仕上げる。つまみは欠損している。504は壺Aで、口縁部および底部は欠損している。506は壺Dで、口径7.4cm、器高6.2cmを測る。体部と高台の境にヘラケズリを施す。507・508は壺Eである。いずれも口縁部は欠損している。体部内外面ともナデで仕上げる。505・509は壺の底部である。510は壺Cで、口径4.0cm、器高5.8cmを測る。511・512は壺Nである。511は体部の下方1/4をヘラケズリで調整し、底部との境には手持ちのヘラケズリを施す。肩部には把手が対向して2つ貼り付けられる。また、体部の下方1/3あたりに把手か何かが剥離した痕跡があり、三耳壺の可能性がある。512は体部と底部の境目のみにケズリを施す。513は鉢Aで、口径21.4cm、残存高7.3cmを測る。外面にヘラミガキ調整を施す。

中央部(第74・75図) 土師器(514～528)には、杯A、皿A・B・C、碗C、甕A・C、製塩土器などがある。514は杯Aである。外面調整はa0またはb0手法で、内面に1段斜放射状暗文が見られる。螺旋状暗文の有無は不明である。515は小型の皿A、516～517は大型の皿Aである。外面調整は、516がa1またはb1手法で、他はa0手法である。515は内面に1段斜放射と螺旋状暗文が施される。516・517は暗文の有無は不明で、518は暗文を施さない。514は1段斜放射はみられるが、螺旋状暗文の有無については不明である。523は大型の皿Bである。外面の調整はb0手法で、内面の暗文は不明である。520・521は皿C、522は碗Cである。いずれも口縁部をヨコナデで仕上げ、底部には指オサエが残る。524～526は甕Aである。口径は25～30cmを測る。いずれも体部外面はハケ調整を行い、口縁部および内面はナデで仕上げる。527・528は製塩土器である。527は口縁部が外上方に開き、口縁端部内面が内傾する。体部内外面はナデで仕上げるが、外面には粘土紐接合痕が明瞭に残る。器壁は分厚く、胎土には砂粒を多く含む。528は口縁部が内傾する。口縁端部の内側をハケ調整する。器壁が薄く、内外面ともナデや指オサエで調整する。

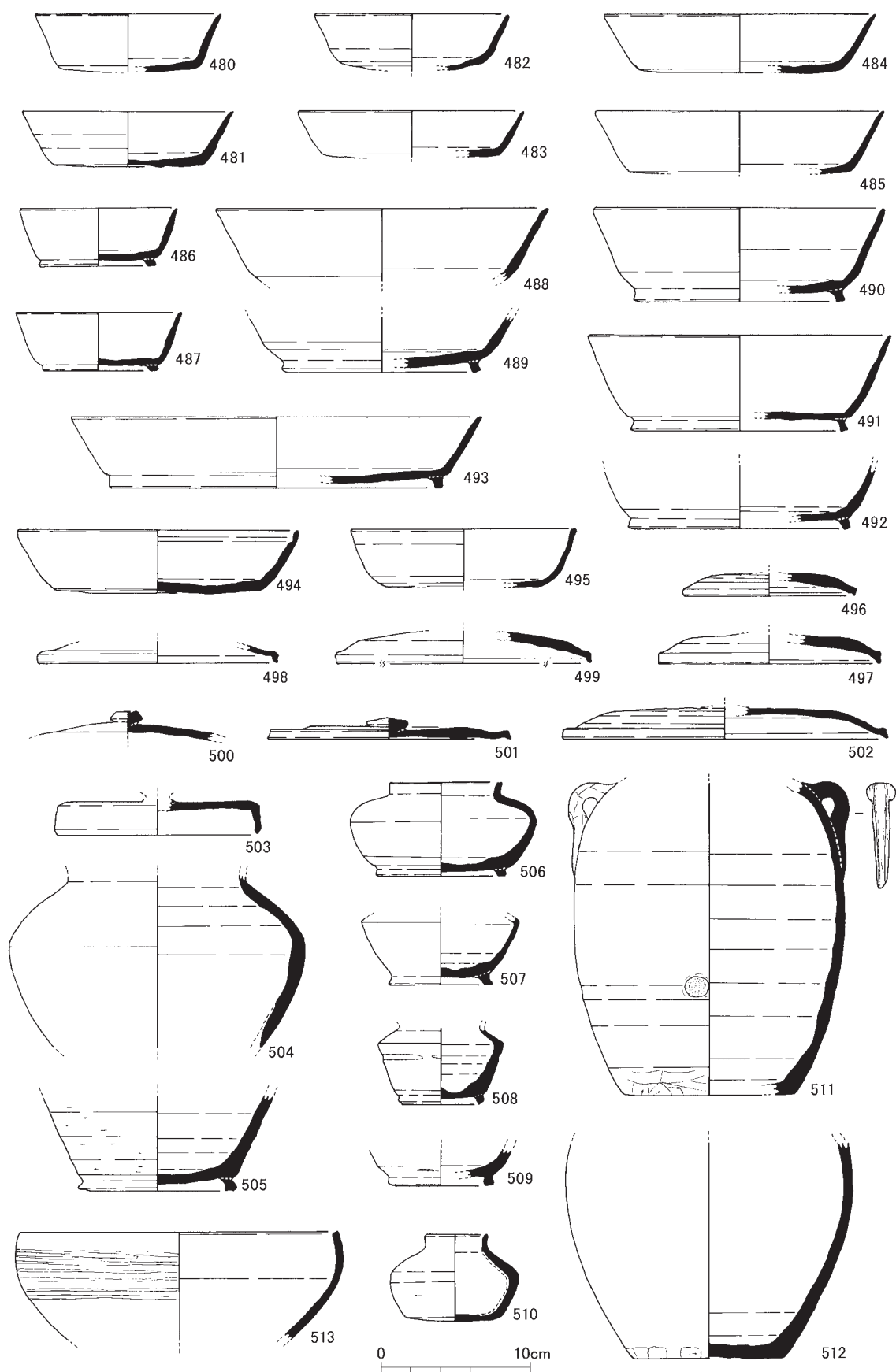
須恵器(529～549)には、杯A・B、杯B蓋、皿B蓋、鉢A、壺C・L・Mなどがある。529～

536は杯A、537～540は杯Bである。535・536・539・540など深手のものがある。541～543は杯B蓋、544・545は皿B蓋である。543～545はつまみが欠損している。546は鉢Aいわゆる鉄鉢である。ほぼ完形である。器壁は薄く、外面は丁寧なミガキを施す。547は壺Lで、底径6.6cmを測る。体部下半をケズリで仕上げる。548は壺Cで、口径4.6cm、器高4.4cmを測る。549は壺Mで底部には高台を貼り付ける。548・549はいずれも全体をナデで仕上げる。

南部(第76・77図) 土師器(550～573)には、杯A、杯B蓋、皿A・B・C、鉢B、高杯、壺B、甕などがある。550は杯Aである。口径14.7cm、器高2.7cmを測る。外面の調整はa0手法で、内面には1段斜放射と螺旋状暗文が施される。551は鉢Aである。口径21.0cm、残存高2.95cmを測る。体部外面はケズリである。552・553は皿Aである。口径23.5cm前後、器高3.2cm前後を測る。い

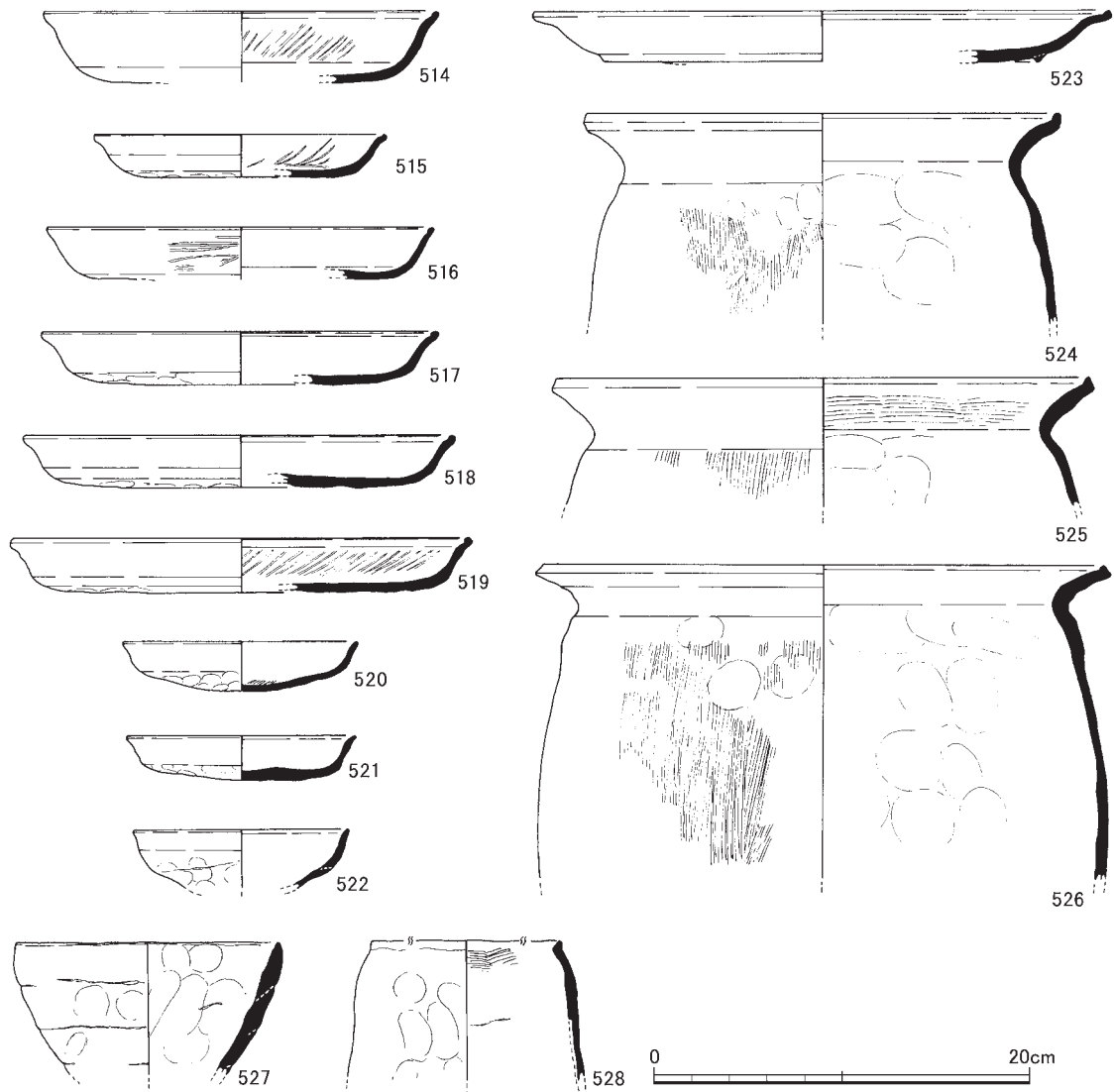


第72図 溝S D21出土土器実測図(1)



第73図 溝S D21出土土器実測図(2)

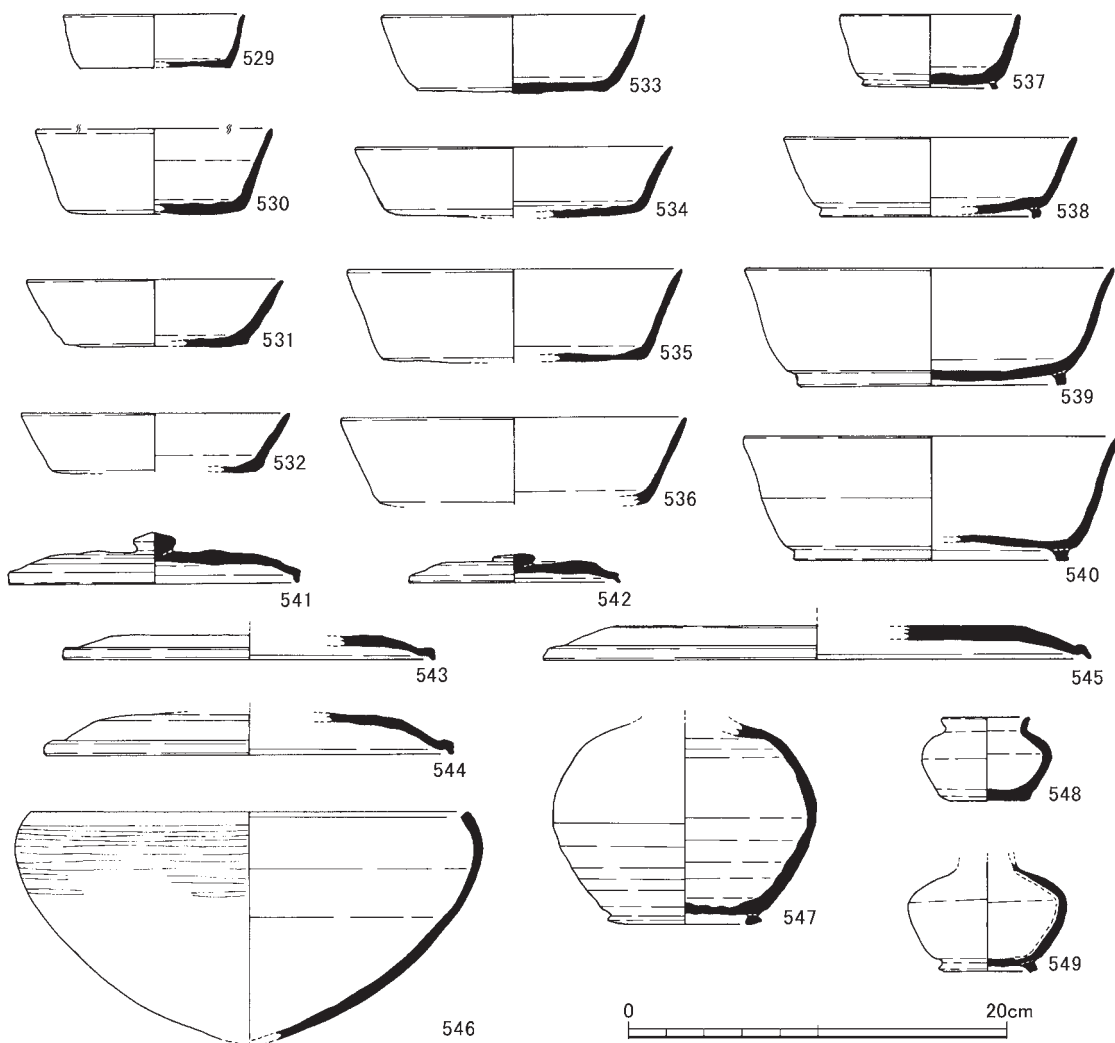
ずれも外面調整はa0手法で、内面には粗い1段斜放射状暗文が施される。底部内面の螺旋状暗文は摩滅のため不明である。554は皿Bの底部である。底径18.2cm、残存高1.4cmを測る。555は皿Cである。556は皿で、口径10.6cm、器高2.3cmを測る。口縁端部はヨコナデにより摘むように外反させる。都城ではあまり見られない器形であり、在地系のものである可能性が高い。555・556はいずれも灯明皿である。562は杯B蓋である。562は口径16.8cm、器高2.7cmを測る。外面は4分割で丁寧にミガキ調整をする。内外面に煤が付着している。563は鉢Aである。口縁端部および内面をナデで、体部外面はケズリで仕上げる。557～561は高杯Aである。557・558は杯部である。559～561は脚柱部で、外面をそれぞれ9面・10面に面取りする。557の内面には放射状暗文が、558～560の杯部内面には螺旋状暗文が施される。558は杯部外面をヘラケズリで調整する。564～567は壺Bである。564は口径7.6cm、565～567は口径11.5cm前後を測る。いずれも外面に指押さえの圧痕がみられ、口縁部および内面はナデにより仕上げる。568～573は甕Aである。



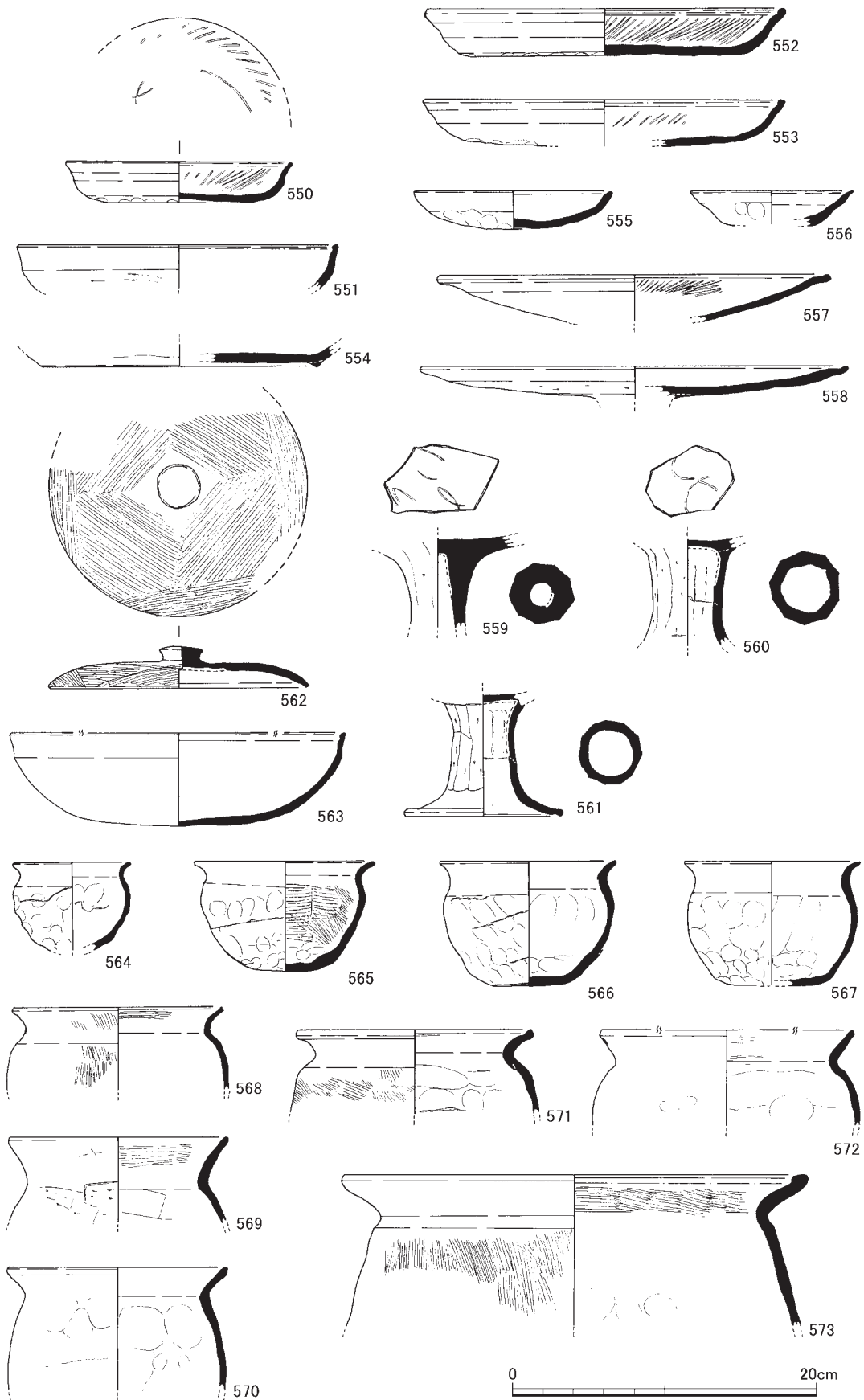
第74図 溝S D21出土土器実測図(3)

571～573は体部外面および口縁部内面はハケ調整し、内面はナデにより、当て具痕を消す。572は外面調整は不明で、内面はナデにより当て具痕を消す。口縁部内面はハケ調整する。569・570は口縁端部を丸くおさめる。569は体部内外面をケズリで調整し、口縁部内面はハケ調整する。570は内外面ともナデ調整する。569・570ともに平城京ではみられないタイプであり、在地の土器と考えられる。

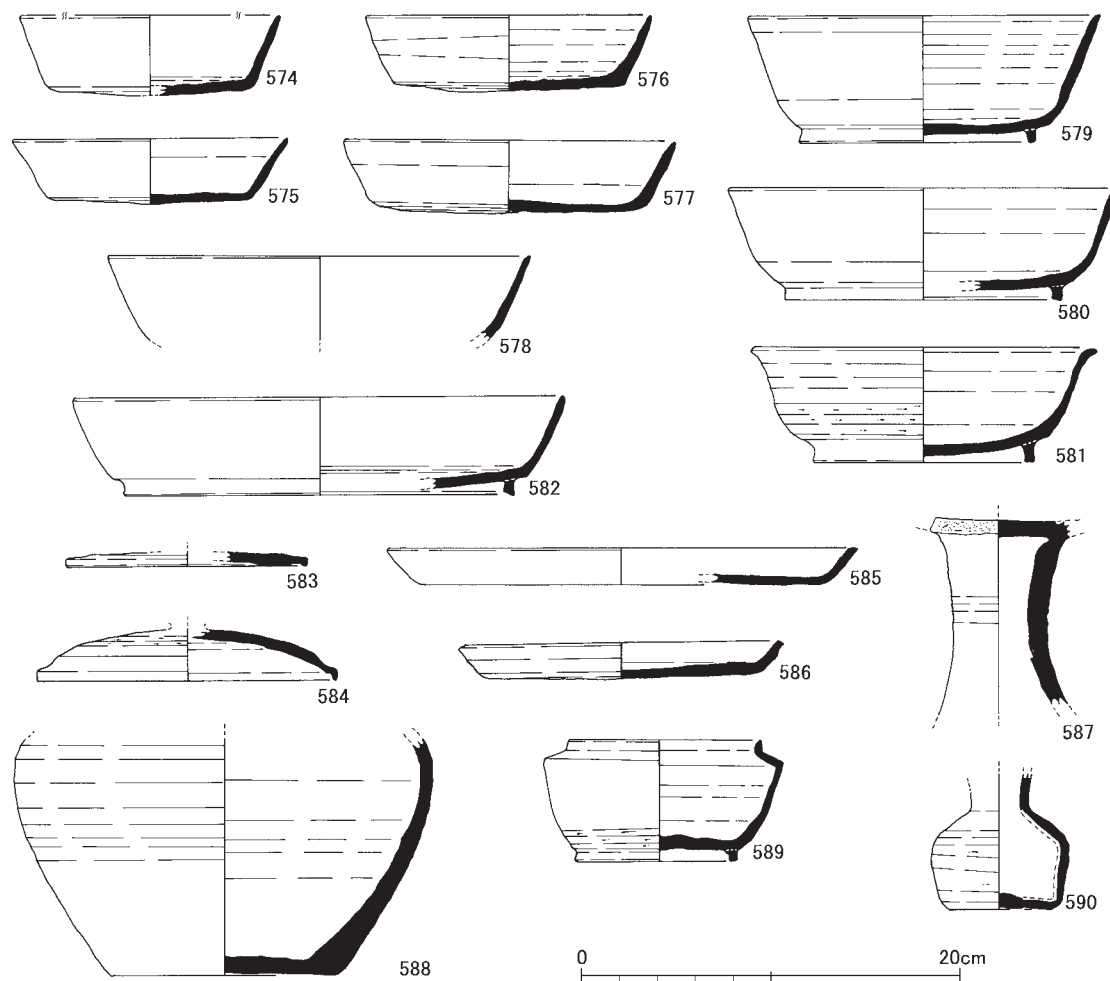
須恵器(574～590)には杯蓋、杯A・B・F、皿B、皿C、高杯、鉢、壺E・Mなどがある。574～577は杯AⅡで、口径13.8～17.6cm、器高3.4～4.2cmを測る。579・580は杯BⅡである。580は器高6.7cmと深手である。578は底部が欠損しているが、体部から底部にかけて緩く湾曲することから杯Bと考えられる。582は皿Bである。581は杯Fで、口径18.0cm、器高6.05cmを測る。口縁端部は外反し、体部下半をケズリで仕上げる。583・584は杯B蓋である。584は笠形を呈する。585・586は皿C、587は高杯脚柱部、588は鉢である。589は壺Eである。口径10.1cm、器高6.4cm、底径8.5cmを測る。体部の下方1/3はケズリで仕上げ、高台を貼り付ける。590は壺Mと考えられる。肩部は体部に向かって緩くカーブする。体部はヘラケズリ後ナデで仕上げています。



第75図 溝S D21出土土器実測図(4)



第76図 溝 S D21出土土器実測図(5)



第77図 溝S D 21出土土器実測図(6)

底部外面はヘラキリである。

S D 21出土の土師器杯・皿は、S X 96出土の土師器杯・皿を比較すると、a0手法のものがほとんどであり、連弧状暗文がみられないことや、内面の斜放射状暗文や螺旋状暗文が省略されるものが一定量存在することから、S X 96よりも新しい様相をもつ土器群といえる。椀Aが出土していないことを考え合わせると、平城宮土器Ⅲ中～新段階の資料と考えられる。^(注18)

(松尾史子)

掘立柱建物跡S B 01(第78図597) 597は土師器鍋もしくは甕の口縁部の破片である。内面にハケ調整を施し、口縁端部を内方に折り返す。復元口径36.6cmを測る。柱穴S P 65から出土した。

掘立柱建物跡S B 03(第78図591・592) 591は須恵器杯Bの底部である。底部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。底径12.9cmを測る。592は土師器杯Cである。全体に摩滅が著しく、内面の暗文の有無は不明である。口径16.5cm、残存高2.7cmを測る。ともに柱穴S P 49から出土した。

掘立柱建物跡S B 04(第78図593～595) 593は土師器甕である。口縁部は緩やかに「く」字状に屈曲する。柱穴S P 60から出土した。594は杯B蓋のつまみの破片である。595は土師器壺Bで、ほぼ完形である。口縁部内外面にヨコナデ調整、体部外面にナデ調整とユビオサエ、体部内面にナデ調整を施す。口径9.3cm、器高7.5cmを測る。594・595は柱穴S P 58から出土した。

土坑 S K 41 (第78図596)

596は須恵器杯Aである。焼け歪みがみられるものの、口径13.3cm、器高3.7cmを測る。底部外面はヘラキリ後ナデ調整を施す。

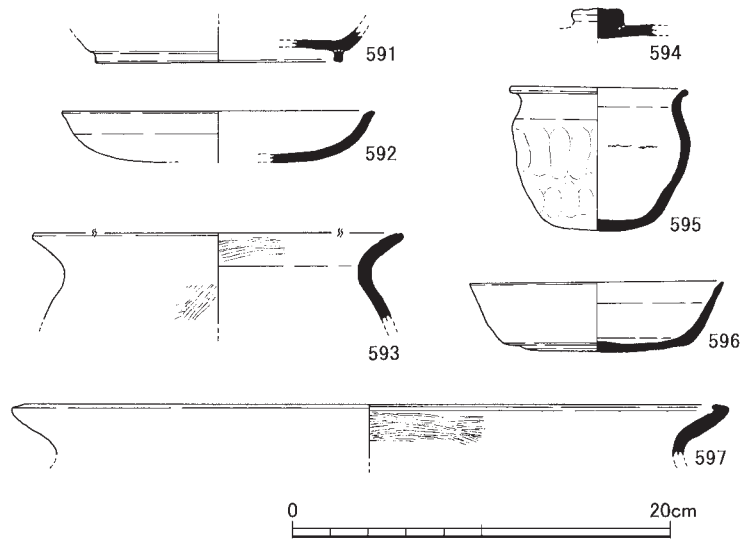
(4) その他

今回の調査では、木簡・瓦・埴類・土器類のほかに、土馬やミニチュア竈などの土製品、銅椀や鉄釘などの金属製品が出土した。また、轡の羽口の破片も出土しており、調査地周辺に金属製品生産関連遺構の存在が予想される。図示した遺物はいずれもB地区出土である。

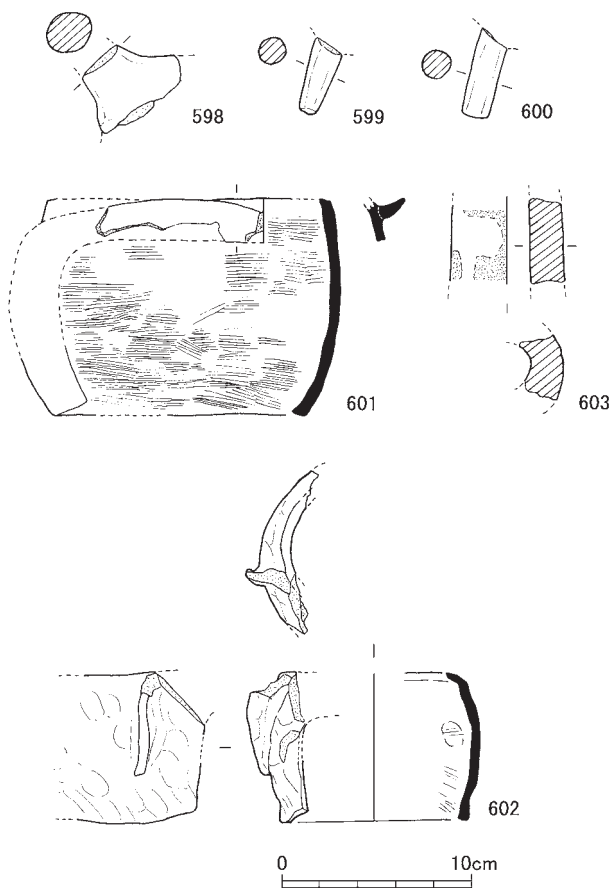
①土馬(第79図598～600) 598は土馬の首から体部にかけての破片、599・600は脚部と思われる。いずれも淡めの橙褐色を呈する。598は溝 S D 21南部、599・600は S D 21北部で出土した。600は残存長4.7cm、脚部の直径1.6cmを測る。

②ミニチュア竈(第79図601・602) 2点とも破片で出土しており、全容が明らかにできるほど復元することはできなかった。601は溝 S D 21中央部で出土した。1/3程度残存し、底径12.4cm、器高11.5cmを測る。外面に縦方向のハケ調整を、内面に横方向のハケ調整を施す。長さ1.6cmの庇がつくようである。602は溝 S D 86で出土した。1/6程度の破片であるが、底径9.8cm、器高8.0cmを測り、601よりも一回り小型である。内外面ともにユビオサエやナデ調整を施す。また、内面にはハケ調整を加えていると思われる。甕の受け部は大きく内方に屈曲させて、ヨコナデ調整を施す。

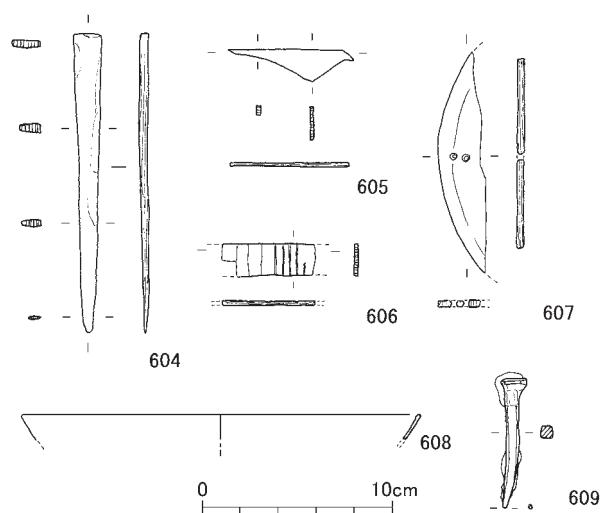
③轡羽口(第79図603) 図示したもの以外にも羽口と思われるものがある(図版第48-737)。



第78図 B地区奈良時代遺構出土土器実測図



第79図 土製品実測図



第80図 木製品・銅製品・鉄製品実測図

603は溝S D21中央部の最上層から出土した。残存長は4.5cmを測る。直径は6.0cm、内径は2.4cmに復元できる。737は土坑S X96から出土した羽口の先端である。

④木製品（第80図604～607） いずれも土坑S X96の木屑層から出土した。604は不明木製品である。全長15.8cm、最大幅1.5cm、最大厚さ0.5cmを測る。図のどちらが上下かも明らかではないが、表面には墨痕等もみられず、あるいは木簡の未使用品かもしれない。605も不明木製品である。いずれが上下が明らかではないが、

各辺とも加工痕が認められる。長さ6.7cm、幅1.7cm、厚さ0.2cmを測る。606は表面に目盛と思われる刻みがあることから定規と考えられる。残存長5.0cm、幅1.8cm、厚さ0.3cmを測る。607は曲げ物の底板と考えられる。直径4mm程度の孔が2か所並んで穿たれている。

⑤銅製品（第80図608） 銅碗の破片1点が土坑S X96炭層から出土した。608は口縁部のみが遺存し、推定口径21.0cm、残存高1.3cmを測る。緑灰色を呈するが、錆で脆弱化していない。

⑥鉄製品（第80図609） 土坑S X96から出土した鉄釘1点を図示したが、ほかにも数点の鉄釘がS X96から出土している。609はやや湾曲しているものの、断面方形の鉄釘である。全長7.2cm、断面の大きさは0.7cm四方を測る。

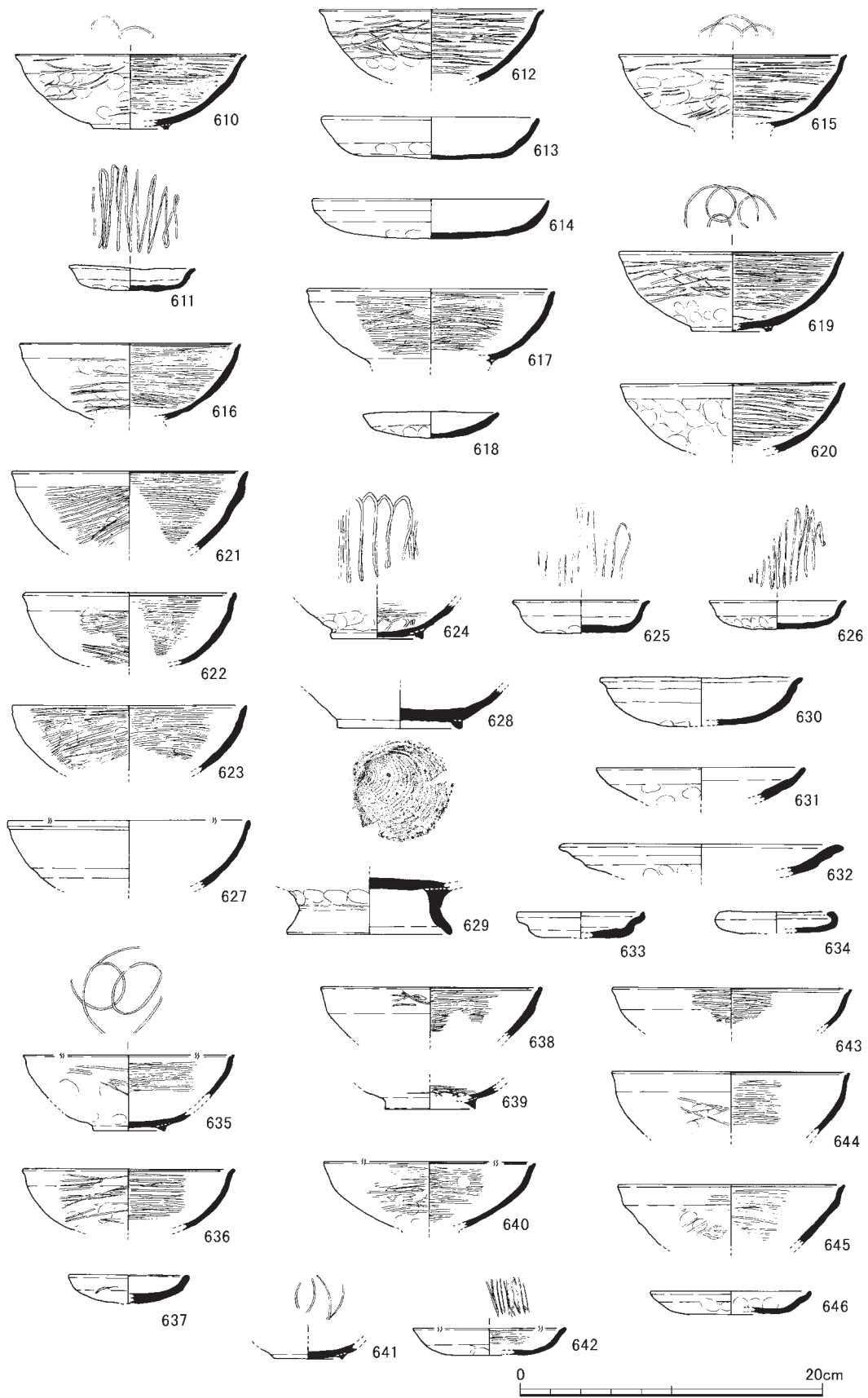
⑦漆塗り製品（図版第47-2） 土坑S X96から出土した用途不明の製品で布状を呈する。片面に織物の痕跡が認められる瓦、裏面にはなく、素材は不明であるが、皮などに織物を漆で固定したような構造かと思われる。折り重なったような状態で出土しており、整理箱に底に敷き詰めると、およそ4箱文ほどが出土している。

⑧その他（図版第48-2 738・739） 土坑S X96からはこれまでに報告してきた遺物のほか、スサ入りの土壁状の塊や、鉾物滓等も出土している。これらの用途は不明であるが、土坑S X96の性格を考える上で、重要な資料となる。

3) 中世

中世に属する遺物の大半はA2地区で出土したが、これはA2地区で上層遺構面を3面確認するとともに、土坑や柱穴などの遺構を多数検出したためである。これに対してA1地区やB地区では検出した遺構の大半が耕作溝であったため、遺物が少ない。以下で報告する遺物はすべてA2地区ならびに第1次調査第1トレンチ出土のものである。

溝S D314（第81図610・611） 610は瓦器碗である。内面に密にミガキ調整を施す。高台の断面形は方形を呈する。見込みに螺旋状暗文を施す。口径15.4cm、器高4.9cmを測る。611は瓦器皿で、焼け歪みが著しい。見込みに平行線状の暗文を施す。口径8.6cm、器高1.6cmを測る。



第81図 A2地区中世遺構出土土器実測図(1)

溝S D 106(第81図612~614) 612は瓦器碗である。内外面ともやや粗いミガキ調整を施す。復元口径14.9cmを測る。613・614は土師器の皿で、大型品である。どちらも全体にユビオサエやナデで調整し、口縁部にヨコナデ調整を施すが、摩滅気味である。613はほぼ完形で、口径14.3cm、器高2.8cmを測る。614は口径15.7cm、器高2.6cmを測る。

溝S D 105(第81図615) 615は瓦器碗である。内面に密にミガキ調整を施す。見込みに螺旋状暗文を施す。

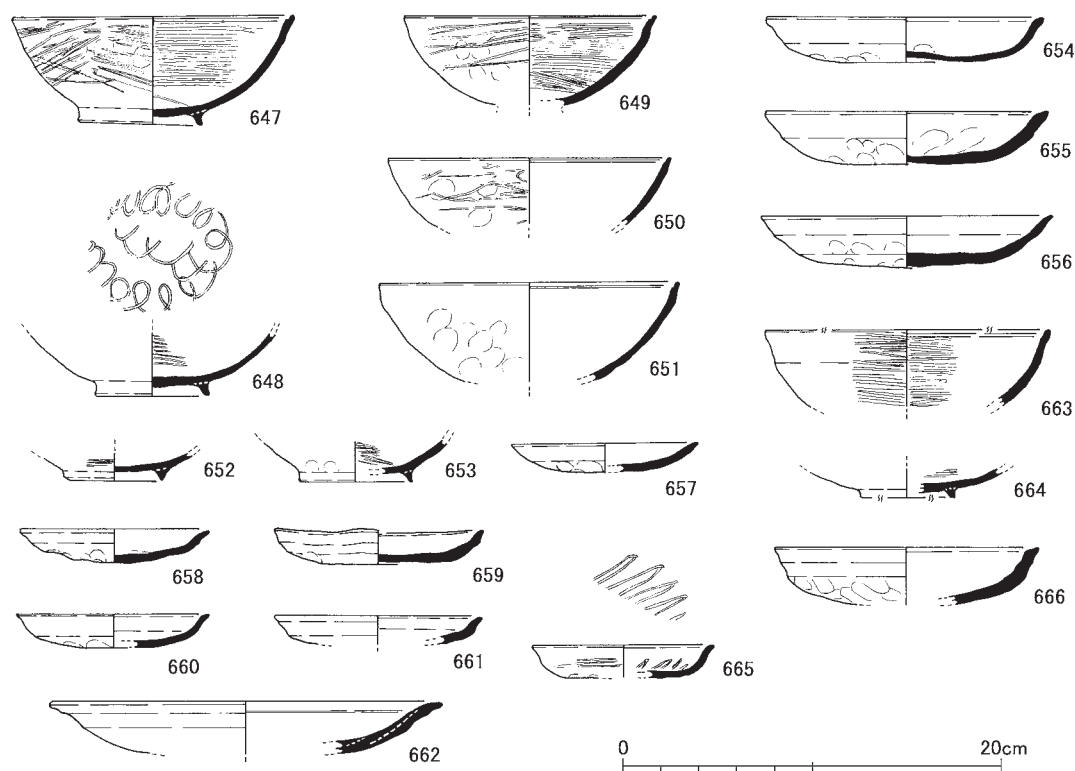
柱穴S P 181(第81図616) 616は瓦器碗である。内面に密にミガキ調整を施す。

柱穴S P 152(第81図617) 617は瓦器碗である。内外面とも密にミガキ調整を施す。他の個体にくらべ器壁がやや厚い。復元口径16.4cmを測るが、もう少し小さいかもしれない。

柱穴S P 118(第81図618) 618は土師器皿で、全体に摩滅が著しい。口径9.0cm、器高1.8cmを測る。

土坑S K 116(第81図619・620) 619・620はともに瓦器碗である。619は内面にやや粗めのミガキ調整を施すが、外面にミガキ調整を施さない。620は内面に密にミガキ調整を施す。高台の断面形は方形を呈する。見込みに螺旋状暗文を施す。口径14.8cm、器高5.2cmを測る。溝S D 314出土の瓦器碗(610)によく似た特徴・法量である。

土坑S K 143(第81図621~634) 621~624は瓦器碗である。621~623は口縁部の破片で、内外面とも密にミガキ調整を施す。3点ともほぼ同形同大で、口径14.0~15.6cmを測る。614は底部で断面三角形の高台を貼り付ける。見込みに平行線状の暗文を施す。625・626は瓦器皿である。



第82図 A 2 地区中世遺構出土土器実測図(2)

底部内面に並行縁状の暗文を施す。口径9.0～9.1cm、器高1.9～2.2cmを測る。627は白磁碗の破片である。口縁端部外面は小さな玉縁状を呈する。復元口径16.0cmである。628は須恵器碗の底部である。外面に糸切り痕を残し、高台を貼り付ける。629は脚台付の皿もしくは杯の脚台部である。脚台の高さは3.0cmを測る。630～632は土師器の大型の皿である。器形はいずれも異なるが、630・632は口縁部に二段のヨコナデ調整を施す。630は口径13.4cm、残存高3.1cmを測る。633・634は土師器の小型の皿である。633はいわゆる「て」字状口縁で、端部をつまみ上げる。口径8.4cm、器高1.7cmを測る。634は口縁部を内方に折り曲げるもので、いわゆる「コースター形」を呈する。

柱穴 S P 22 (第81図635～637) 635・636はほぼ同形同大の瓦器碗で、外面にやや粗めのミガキ調整を施し、内面は密にミガキ調整を施す。635は見込みに螺旋状暗文を施す。高台は断面三角形を呈する。637は土師器の小型の皿である。

柱穴 S P 52 (第81図638・639) 638・639は瓦器碗であるが、同一個体かどうかは判断できない。内面のミガキ調整は密である。639は見込みに螺旋状暗文を施す。

土坑 S K 39 (第81図640～642) 640は内外面とも密にミガキ調整を施す。641が瓦器碗の底部で、見込みに螺旋状暗文を施す。高台は小さな断面三角形を呈する。642は瓦器皿で、内面に平行線状の暗文を施す。

土坑 S K 51 (第81図643～646) 643～645は瓦器碗の口縁部の破片で、3点ともほぼ同形同大である。643は内外面とも密にミガキ調整を施すが、644・645は内面のみ密にミガキ調整を施し、外面は粗いミガキ調整を施す。646は土師器の小型の皿で、口縁端部をわずかにつまみ上げる。

溝 S D 24 (第82図647～662) 647～653は瓦器碗である。647は内外面にミガキ調整を施す。高台の断面形は台形に近い三角形状を呈する。口径14.8cm、器高5.7cmを測る。648は底部の資料で、見込みに螺旋状暗文をほかの個体よりもやや細かく施す。高台の断面形は台形状を呈し、647よりもやや古い特徴を有する。649～651は口縁部の破片であるが、650・651は摩滅のため、器表面のミガキ調整の粗密が不明である。652・653は底部の破片で、高台は断面三角形を呈する。654～656・662は土師器の大型の皿である。いずれも全体にユビオサエやナデで調整し、口縁部にヨコナデ調整を施す。656・662は二段にヨコナデ調整を施す。657～661は土師器の小型の皿である。大型の皿と同様に全体をユビオサエやナデで調整し、口縁部にヨコナデ調整を施す。660・661は口縁部を外反させる。

溝 S D 23 (第82図663～666) 663・664は瓦器碗である。どちらも小破片である。663は内外面に密にミガキ調整を施す。664は断面方形の高台を有する。665は瓦器皿で、底部内面に平行線状の暗文を施す。666は土師器の大型の皿である。654～656などに比べると、やや厚手である。全体をユビオサエやナデで調整し、口縁部に二段にヨコナデ調整を施す。

4) 遺物包含層

今回の調査では、遺構面の数が多く、これに伴った形成された遺物包含層からも多数の遺物が出土した。また、遺構面として確認できた時期以外の遺物も出土していることを確認した。ここ

では代表的な遺物包含層出土の遺物を報告する。

(1) 土器

667・668は弥生時代中期の土器である。667は外面にタタキ調整を施す甕の肩部の破片である。668は甕の底部と考えられ、底径は9.4cmを測る。

669～679は古墳時代の土器で、669～674は土師器、675～679は須恵器である。669は庄内式甕の肩部の破片である。670は受け口状の口縁部を呈する壺の口縁部である。671は底径4.8cmの突出底をもつ壺の底部である。672は口径16.9cm、残存高5.4cmを測る高杯杯部である。杯部はおおむねヨコナデ調整である。673は平底気味の壺の底部である。674は口縁部が「く」字状を呈する甕である。1次調査2トレンチで出土したもので、奈良時代遺構面の下層に古墳時代の遺構面が存在する可能性を示した土器である。675は杯蓋で、口径11.6cm、器高4.4cmを測る。天井部の2/3程度に回転ヘラケズリ調整を施す。陶邑編年のTK23～TK47型式に位置づけられよう。676・677は杯身である。676は小破片であるが、675とほぼ同時期かやや新しい時期に位置づけられる。677は口縁部が短く立ち上がり、底部外面の回転ヘラケズリもほとんど認められない。土器溜まりSX91とほぼ同時期に位置づけられる。679は提瓶である。口縁部と体部下半を欠損する。外面にカキメを施し、環状の把手を肩部に貼り付ける。詳しい時期は不明であるが、TK10型式ないしMT85型式に位置づけられる。

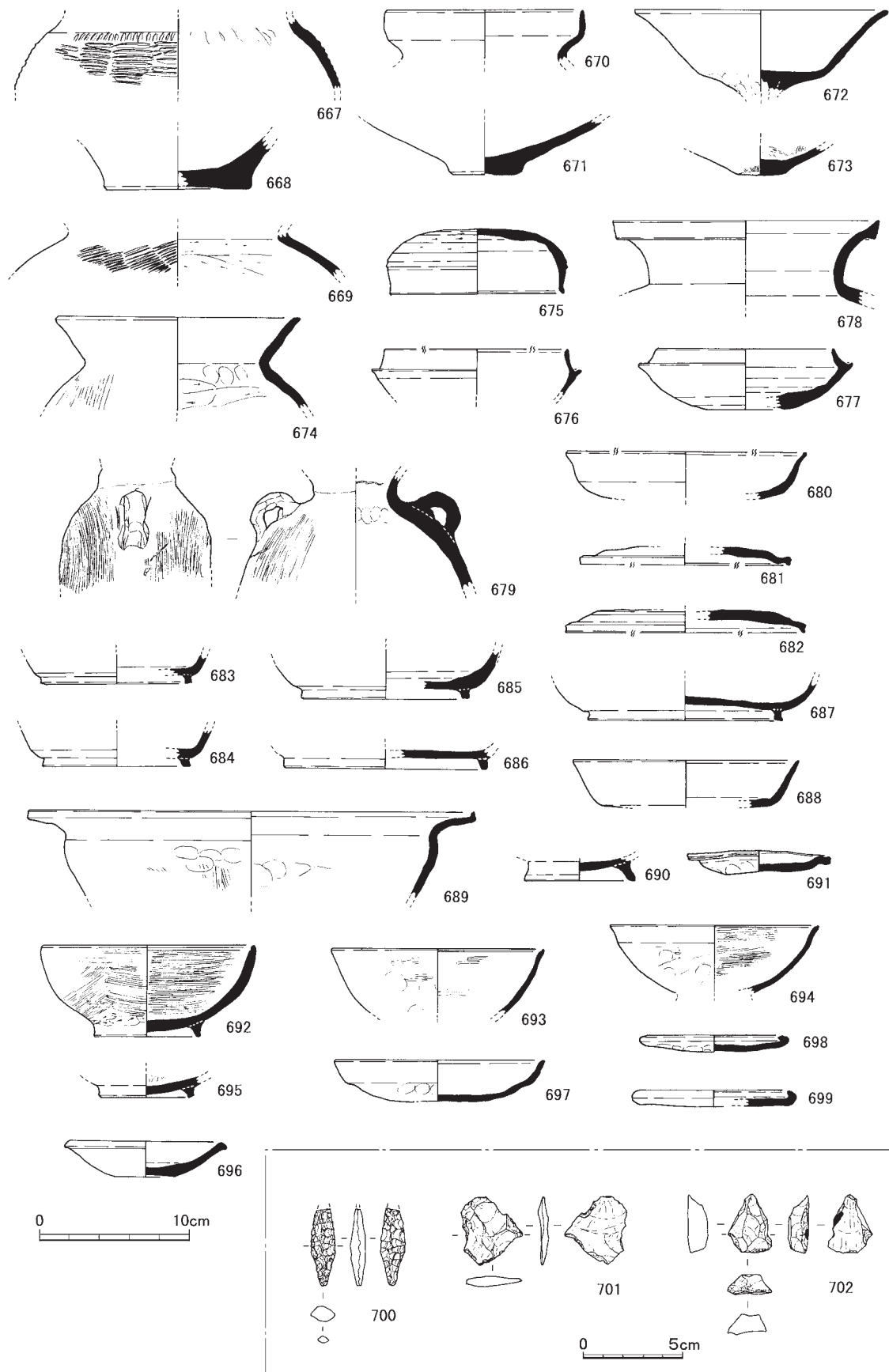
680～689は奈良時代の土器で、680・689が土師器、その他が須恵器である。680は杯Aで、内面に暗文は認められない。681・682は杯B蓋である。681は口縁部が屈曲気味であるのに対して、682は屈曲せず全体の形状が笠形に近い。683～687は杯Bの底部である。686・687は底部外面に回転ヘラケズリ調整を施した後に高台を貼り付ける。688は杯Aで、口径15.2cm、残存高3.2cmを測る。689は鍋Aで、口径29.9cm、残存高5.7cmを測る。全体に摩滅気味で、内面に煤が付着する。

690・691は平安時代の土器である。690は黒色土器碗の底部である。底径7.4cm、残存高1.5cmを測る。691は土師器皿で、口縁部がいわゆる「て」字状を呈する。口径9.7cm、器高1.6cmを測る。

692～699は中世の土器で、692～695が瓦器碗、696が白磁、697～699が土師器である。692はやや厚手の個体で、口縁部が内湾気味に立ち上がる。内外面とも密にミガキ調整を施すが、見込みに暗文は認められない。外面のミガキ調整に先行して器表面にケズリ調整を施す。出現期に近い特徴を持つ瓦器碗で、11世紀後半ごろのものと考えられる。693・694は口縁部が内湾気味に立ち上がった後、ヨコナデ調整によって外反するものである。695は底部の破片で、高台の断面形が方形を呈する。696は小型の白磁皿である。口径10.0cm、器高2.3cmを測る。697は大型の皿である。口縁部内外面にヨコナデ調整を施し、底部内外面はユビオサエやナデ調整を施す。698・699は小型の皿で、いわゆる「コースター形」と呼ばれるものである。698は口径9.0cm、器高1.1cmを測る。

(2) 石器

3点を図示した。確認した石器はこの3点のみで、いずれもサヌカイト製である。700は石鏃である。先端が折損するが、残存長3.9cm、最大幅1.3cmを測る。701は剥片である。702は楔形



第83図 遺物包含層出土遺物実測図

石器である。一部に自然面が残る。

7. まとめ

平成21・22年度に実施した上粕北遺跡の調査では、古墳時代・奈良時代・中世の各時期の遺構・遺物を多数検出し、大きな成果を得ることができた。また、遺構や遺物がほとんどみられなかった時代もあるが、遺跡の変遷や性格を考える上では重要な成果といえる。以下では、周辺の遺跡の調査成果とも絡めながら、時代ごとに調査成果をまとめたい。

①弥生時代

今回の調査で、弥生時代の遺構を検出することはできなかった。しかし、少量とはいえ、弥生土器や石器が出土したことから、調査地周辺に当該期の遺構の存在する可能性がある。当遺跡の西側に位置する上粕西遺跡では弥生時代後期の竪穴式住居跡が検出されており、今後、調査地周辺でも弥生時代の遺構の広がりが予想される。

②古墳時代前期～古墳時代中期前半

古墳時代前期では、顕著な遺構を検出することはできなかったが、庄内式甕や布留式甕を検出することができた。これらの遺物が示す年代は椿井大塚山古墳の築造年代に近く、椿井大塚山古墳を築造した集落、あるいは集団の1つが、現在の上粕周辺に存在したことを示唆している。資料数が少ないため、不明確な点もあるが、布留1式を前後する時期のものであろう。

これらに後出する資料が、当遺跡の東に位置する上粕東遺跡で出土している。報告書によれば、布留2～4式(古)段階に比定されている^(注19)。この資料に続くのが今回の調査で検出した土坑SK126出土の資料である。SK126からは布留式の特徴を持つ土器群とともに、大型化した高杯や体部に縄蓆文を施した陶質土器甕などが出土しており、布留4式、すなわち古墳時代中期初頭ないし前半に位置づけられる。これまで旧山城町域では古墳時代前期～中期前半の集落遺跡は確認されていないが、今回の出土遺物から上粕北遺跡周辺に当該期の集落の存在が予想されるとともに、南山城地域南部における渡来系の要素を有する集落の出現がこの時期まで遡る可能性もある。

③古墳時代中期後半～後期

須恵器出現以降の古墳時代中期後半になると、上粕北遺跡では集落の形成がみられる。今回の調査で検出した竪穴式住居跡は11基あるが、中期後半～後期後半まで継続して集落が営まれたと考えられる。また、調査地を中心に広範囲に集落が形成されていた可能性もある。今回検出した竪穴式住居跡の中には渡来系の特徴とされる「L字形竈」をもつ住居跡を1基検出した(ほかに可能性のあるものが1基ある)。このような渡来系要素を持った竪穴式住居跡の確認は、旧山城町域でははじめてであるが、木津川を挟んだ西側に位置する精華町森垣外遺跡では、渡来系の特徴とされる大壁住居跡や陶質土器・韓式系土器などが検出されている^(注20)。地名としても当遺跡所在地の「上粕」に対して精華町には「下粕」(森垣外遺跡は隣接地に所在)という地名があり、「粕＝高麗(高句麗)」と考えられ、地名の上では渡来系氏族の存在などが考えられている。今回、上粕北遺跡でわずかな事例であるが、渡来系要素を確認したことは地名の由来となった歴史的背景を

明らかにするための一素材を提供できたという点で評価できる。

④飛鳥時代

今回の調査では飛鳥時代に属する遺構・遺物はまったく確認できなかった。この時期は、調査地の南東1.1kmに位置する高麗寺跡の造営が行われたが、造営主体となる在地氏族の集落については未確認である。上粕北遺跡でこの時期の集落が古墳時代後期に引き続き営まれていてもよいと思われるが、何らかの理由により集落が廃絶、あるいは移動してしまったようである。その後、奈良時代中頃まで、当遺跡周辺での土地利用はほとんどされていなかった可能性がある。

⑤奈良時代

今回の調査では最も大きな成果が得られた。まず、土坑S X96では木簡や墨書土器が多数出土した。特に179の「讃岐國……」木簡については、正確な内容は不明であるものの、他地域からもたらされた木簡である点で重要である。これは上粕北遺跡やその周辺に、讃岐国の郡司が文書をやり取りするような施設があった可能性を示す。すでに木簡の報告でも触れたように、「讃岐國……」、「海戸主……」の両木簡の内容は、平城京域で出土するものに類似したものを見いだすことができる。したがって、上粕北遺跡には平城京域と同等の性格を有する施設が存在した可能性を示している。その場合、八省やその被管官司などの中央官衙の可能性や、有力寺院もしくは貴族がもつ家政機関のような組織の可能性もある。またS X96では、平城宮や平城京で出土する土器と比較しても遜色のない土器群が多数出土した。遺物の項で検討したように平城宮土器Ⅲの古段階に位置づけられる。さらに恭仁宮造営時の軒瓦(恭仁宮KH01型式・KH04A型式)も出土している。以上の点から土坑S X96は、恭仁宮遷都時(天平12(740)年12月)を含む天平年間前半ごろの遺構と推定される。

次に総延長100m以上を測る南北方向の溝S D21は、長さや方位性から計画的に掘削された溝と考えられる。S D21の西側で検出された掘立柱建物を区画している可能性や、東側に同様の溝があつて道路遺構となる可能性もある。S D21出土の土器はS X96よりもやや新しい様相を示し、平城宮土器Ⅲの中～新段階に位置づけられる。これらの土器はS D21の埋没年代を示し、恭仁遷都から平城遷都後しばらくの間の短い期間が想定できる。S D21の掘削時期は不明であるが、上述のように建物と溝の一体性を考慮すると、溝の時期がS X96を大きく遡ることはないと思われる。掘立柱建物は、規模が小振りであるものの、正方位を指向して配置されていることから、溝と一体に計画的に配置されたものと考えられる。

以上のように、上粕北遺跡に平城京域と同等、あるいはそれに準じる性格の施設が存在したと考えるならば、遺跡の存続時期や遺跡の位置を考えると、それは恭仁京である可能性が最も高い。^(注21)これらの遺構が恭仁京にともなうものであるとすれば、S X96は恭仁京の京域や諸施設の造営によって生じた不要物を廃棄した土坑、溝S D21や掘立柱建物は京域の施設の一面であると評価することができる。

今回の調査では、恭仁宮が営まれたのとほぼ同時期の遺構を検出することができた。そして、この遺構群は、上述のように、恭仁京に伴う遺構である可能性が高い。この遺構群の検出によっ

て、その存在が疑問視されがちであった恭仁京の京域について、存在する可能性をはじめて示すことができたといえる。また、S X96から出土した木簡も、遺構の性格を評価する上では重要な成果といえる。しかし、恭仁京そのものはわずか3年余りの都であり、どこまで条坊等の整備が進んでいたのか、まったく明らかではない。こうした点をふまえると、恭仁京の京域の広がりや施設の整備などについては、今後の調査・研究に期待される。

⑥平安時代・中世

上層遺構として中世の遺構群を検出した。検出した遺構の大半は耕作溝で、A1地区とA2地区の南半部で掘立柱建物跡や多数の柱穴を確認した。検出状況から調査地の北半部は耕作地、南半部は集落の一面と推定される。これらに伴って出土した瓦器碗には、出現期に近いものが含まれ、上狛北遺跡における中世集落の形成が11世紀代後半まで遡る可能性がある。また、今回の調査では、少量ながらも平安時代の遺物が出土した。調査地周辺に平安時代の遺構が広がる可能性もある。

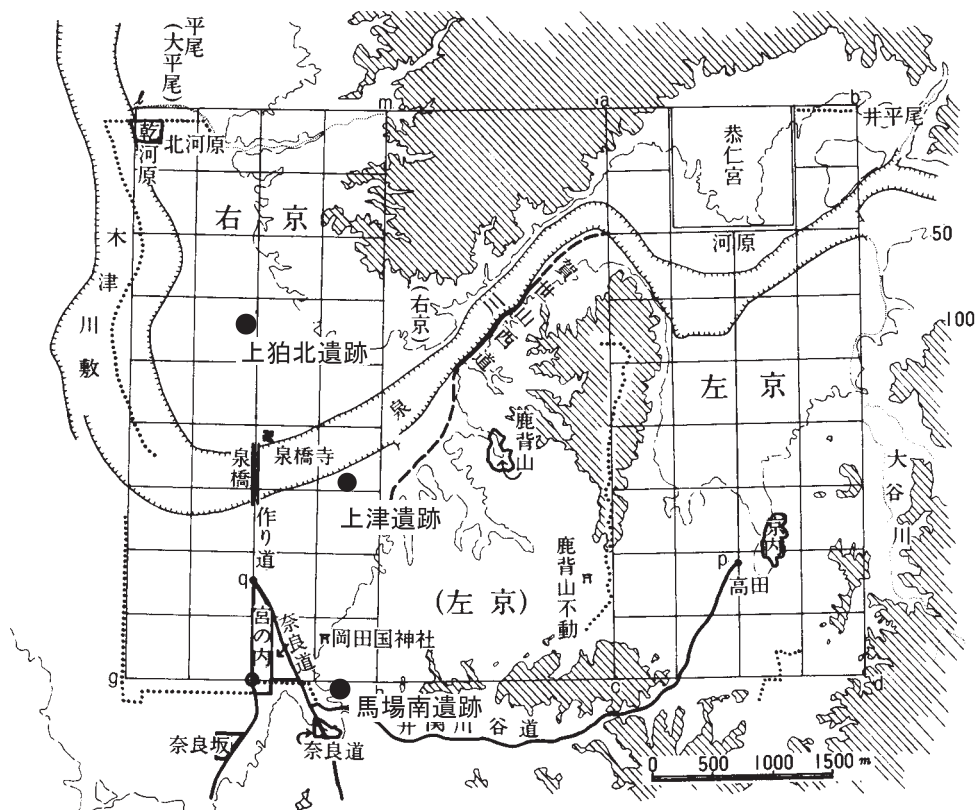
(筒井崇史)

注1 木簡の保存処理ならびに樹種同定作業は株式会社吉田生物研究所に委託した。

注2 放射性炭素年代測定は株式会社パレオ・ラボに委託した。

注3 「L字形竈」については、以下の文献を参照した。

松室孝樹「竪穴住居に設置されるL字形カマドについて」(『韓式系土器研究』VI 韓式系土器研究会)



第84図 恭仁京域と上狛北遺跡(足利健亮氏作成の図を一部改変)

1996

- 注4 須恵器の編年については以下の文献を参照した。
田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』（平安学園考古学クラブ）1966
田辺昭三『須恵器大成』（角川書店）1981
- 注5 古墳時代後半期の土師器の編年については以下の文献を参照した。
辻美紀「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」（『国家形成期の考古学』 大阪大学考古学研究室）
1999
- 注6 古墳時代前半期の土師器の編年については以下の文献を参照した。
寺澤薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」（『矢部遺跡』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』
第49冊 奈良県立橿原考古学研究所）1986
- 注7 長岡京跡左京第13次調査では
「・「海」戸主秦小田比戸同吉万呂・□□米五斗上人吉万呂」がみられる。
向日市教育委員会『長岡京木簡Ⅰ』（1984）
西大寺食堂院推定地では
「少戸主波太部直万呂戸田料大豆五斗」、「少戸主波太部直万呂大豆五斗」、「少波太部直万呂」、
「少戸主□□□□紀須大豆五斗」などがみられる。
独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所編『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』2007
- 注8 奈良国立文化財研究所『平城宮木簡Ⅰ』1966・1969
- 注9 貢進者が女性で、同様の書式で書かれた木簡には平城宮跡推定造酒司宮内道路南側溝で出土した「中
村郷戸主丸部今赤戸口真魚女米五斗」がある。
奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』32（1996）
- 注10 恭仁宮出土瓦については下記の文献を参照した。
京都府教育委員会編『恭仁宮跡発掘調査報告 瓦編』（1984）
また、京都府立山城郷土資料館に収蔵されている恭仁宮跡出土瓦について資料調査を実施した。資
料の実見については同館森島康雄氏にお世話になった。記して感謝したい。
- 注11 軒瓦の型式名は奈良文化財研究所が使用しているものを使用する。
奈良国立文化財研究所編『平城宮跡発掘調査報告Ⅵ』（1974）ほか
- 注12 奈良国立文化財研究所編『平城宮跡発掘調査報告ⅩⅢ』（1991）
- 注13 岸本直文「軒瓦6282-6721の年代観」（『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』 奈良国立
文化財研究所）1995
- 注14 丸瓦の製作技法の分類については下記の文献に準じる。
大脇潔「丸瓦の製作技術」（『研究論集Ⅸ 奈良国立文化財研究所学報 第49冊』 奈良国立文化財研
究所 1991）
- 注15 土師器・須恵器の器種名は下記の文献を参照した。
小笠原好彦・西弘海・吉田恵二「土器」（奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告Ⅶ』（『奈良
国立文化財研究所学報』第26冊）1976
安田龍太郎・巽淳一郎・沢田正昭「土器」（奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告ⅩⅠ - 第
1次大極殿地域の調査-』（『奈良国立文化財研究所学報』第40冊）1981
神野恵「土器類」（奈良文化財研究所編『平城宮発掘調査報告ⅩⅥ - 兵部省地区の調査-』（『奈良
文化財研究所学報』第70冊）2005

注16 土師器供膳具の調整手法は、奈良文化財研究所の報告に準じて以下のような記号を組み合わせで使用する。

①調整手法

- ・ a 手法 口縁部外面をヨコナデし、底部は未調整のもの。
- ・ b 手法 口縁部外面をヨコナデし、底部はヘラケズリで調整するもの。
- ・ c 手法 口縁部以下の外面全体をヘラケズリするもの。
- ・ e 手法 口縁部以下を幅狭くヨコナデし、それよりしたは未調整のもの。

②器表面の調整手法

- ・ 0 手法 ミガキ調整を施さないもの。
- ・ 1 手法 口縁部のみミガキを加えるもの。
- ・ 2 手法 底部のみミガキを加えるもの
- ・ 3 手法 口縁部から底部にかけてミガキを施すもの。

注17 製塩土器については下記の文献を参照した。

積山洋「律令制期の製塩土器と塩の流通」(『ヒストリア』第141号 大阪歴史学会) 1993

注18 上粕北遺跡の調査抄報(『京都府埋蔵文化財情報』第115号)では、溝 S D21の時期を平城宮土器Ⅳとして報告したが、報告後に奈良文化財研究所で、土器資料の検討を行ったところ、平城宮土器Ⅲの中～新段階に位置づけるのが妥当であるとの認識に至った。したがって、S D21の埋没年代については、平城宮土器Ⅲの中～新段階に訂正したい。

注19 中島正・永澤拓志「上粕東遺跡における布留式土器の様相とその背景」(『上粕東遺跡』(『京都府山城町埋蔵文化財調査報告』第24集) 山城町教育委員会) 2000

注20 小池寛ほか「森垣外遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第86冊 1999)、小池寛ほか「森垣外遺跡第3次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第91冊 2000)、小池寛ほか「森垣外遺跡第4次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第96冊 2001) いずれも(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注21 第84図は恭仁京の復元を行った足利健亮氏の復元案に上粕北遺跡をはじめ、恭仁京期の代表的な遺跡を図示したものである。

付表1 土坑S X96出土削屑一覧表

報告番号	整理番号	出土層位	釈文
703	削屑 1	4 区 木屑層	ゝ ゝ
704	削屑 2	4 区 木屑層	〔言カ〕 〔千 千 千カ〕
705	削屑 3	4 区 木屑層	□ 段 段 段
706	削屑 4	4 区 木屑層	□ 多カ 多カ 多カ
707	削屑 5	4 区 木屑層	□ □ □
－	削屑 6	4 区 木屑層	(削屑 3 と接合)
708	削屑 7	4 区 木屑層	□ □ □ □
709	削屑 8	4 区 木屑層	□ □
710	削屑 9	4 区 木屑層	□ □
711	削屑 10	4 区 木屑層	□ □ □
712	削屑 11	3 区 木屑層	□ ゝ ゝ ゝ ゝ
713	削屑 12	4 区 木屑層	□ □ □ □ 行カ □
714	削屑 13	不明	□ □
715	削屑 14	不明	□〔言カ〕 □〔言カ〕
717	削屑 15	4 区 木屑層	
716	削屑 16	4 区 木屑層	□ □ □ □
718	削屑 17	4 区 木屑層	□
719	削屑 18	4 区 木屑層	□ 長 長
720	削屑 19	4 区 木屑層	□ (土へんカ) □ (土へんカ) □
721	削屑 20	4 区 木屑層	連 連
722	削屑 21	4 区 木屑層	
723	削屑 22	4 区 木屑層	□ □
－	削屑 23	4 区 木屑層	□
－	削屑 24	4 区 木屑層	
－	削屑 25	4 区 木屑層	□
724	削屑 26	4 区 木屑層	□ □〔言カ〕 □〔言カ〕 □
725	削屑 27	4 区 木屑層	□
726	削屑 28	4 区 木屑層	□
－	削屑 29	4 区 木屑層	墨痕のみ
－	削屑 30	4 区 木屑層	墨痕のみ
－	削屑 31	4 区 木屑層	墨痕のみ
727	削屑 32	4 区 木屑層	墨痕のみ
728	削屑 33	4 区 木屑層	墨痕のみ
729	削屑 34	4 区 木屑層	墨痕のみ
－	削屑 35	4 区 木屑層	墨痕のみ
－	削屑 36	4 区 木屑層	墨痕のみ
730	削屑 37	4 区 木屑層	墨痕のみ
－	削屑 38	4 区 木屑層	削屑ではない可能性あり
731	削屑 39	木屑層 (15 層)	〔稲カ〕
－	削屑 40	木屑層 (15 層)	墨痕のみ
－	削屑 41	3 区 27 層より下	墨痕のみ

付表2 土坑S X96出土墨書土器一覧表

報告番号	出土地区・層位	積文	土 器		墨書部位	備 考
			種類	器種		
413	2区	代	土師器	杯／皿	底部外面	
414	炭層ほか	代カ	土師器	皿A	底部外面	
415	炭層	代	土師器	皿A	底部外面	
416	木屑層	代	土師器	皿A	底部外面	人べん
417	木屑層	代	土師器	杯／皿	底部外面	
418	炭層	□〔代カ〕	土師器	杯A/皿A	底部外面	人べん
419	木屑層	□〔代カ〕	土師器	杯／皿	底部外面	
420	炭層	代	土師器	杯A	底部外面	
421	炭層	□	土師器	杯／皿	底部外面	
422	炭層	代	土師器	杯／皿	底部外面	
423	炭層	□〔代カ〕	土師器	杯／皿	底部外面	
424	炭層	□〔代カ〕	須恵器	杯B蓋	天井部内面	
425	炭層	代	須恵器	杯B蓋	天井部内面	
426	炭層	代	須恵器	杯B	底部外面	
427		代	須恵器	杯B	底部外面	
428	炭層	代	須恵器	杯B	底部外面	
429	炭層	代	須恵器	杯B	底部外面	
430	4区	代	須恵器	皿A/皿C	底部外面	
431	炭層ほか	代	須恵器	皿C	底部外面	
432	炭層	代	須恵器	皿C	底部外面	
433	木屑層	代	須恵器	皿C	底部外面	
434	炭層ほか	代	須恵器	鉢D	口縁部内面	
435	炭層	□	須恵器	杯A	底部外面	全、金、参などの可能性あり
436	炭層・木屑層	大カ	須恵器	皿A	底部外面	
437	炭層	咋女	須恵器	杯A	底部外面	
438	炭層ほか	寺カ	須恵器	杯B	底部外面	
439		若□	須恵器	杯B	底部外面	
440	埋土上層ほか	若女	須恵器	杯B	底部外面	
441	炭層	□〔匠カ〕	須恵器	杯B	底部外面	
442	木屑層	石	須恵器	皿C	底部外面	
443	炭層	山カ	土師器	杯／皿	底部外面	

(1)第1次調査1トレンチ全景
(東から)



(2)第1次調査2トレンチ全景
(北から)



(3)第1次調査3トレンチ全景
(南から)





(1) 調査前風景(東から)



(2) 調査前風景(南東から)



(3) A 2 地区重機掘削作業(南から)



(1) A 2 地区中世遺構面精査作業
(東から)



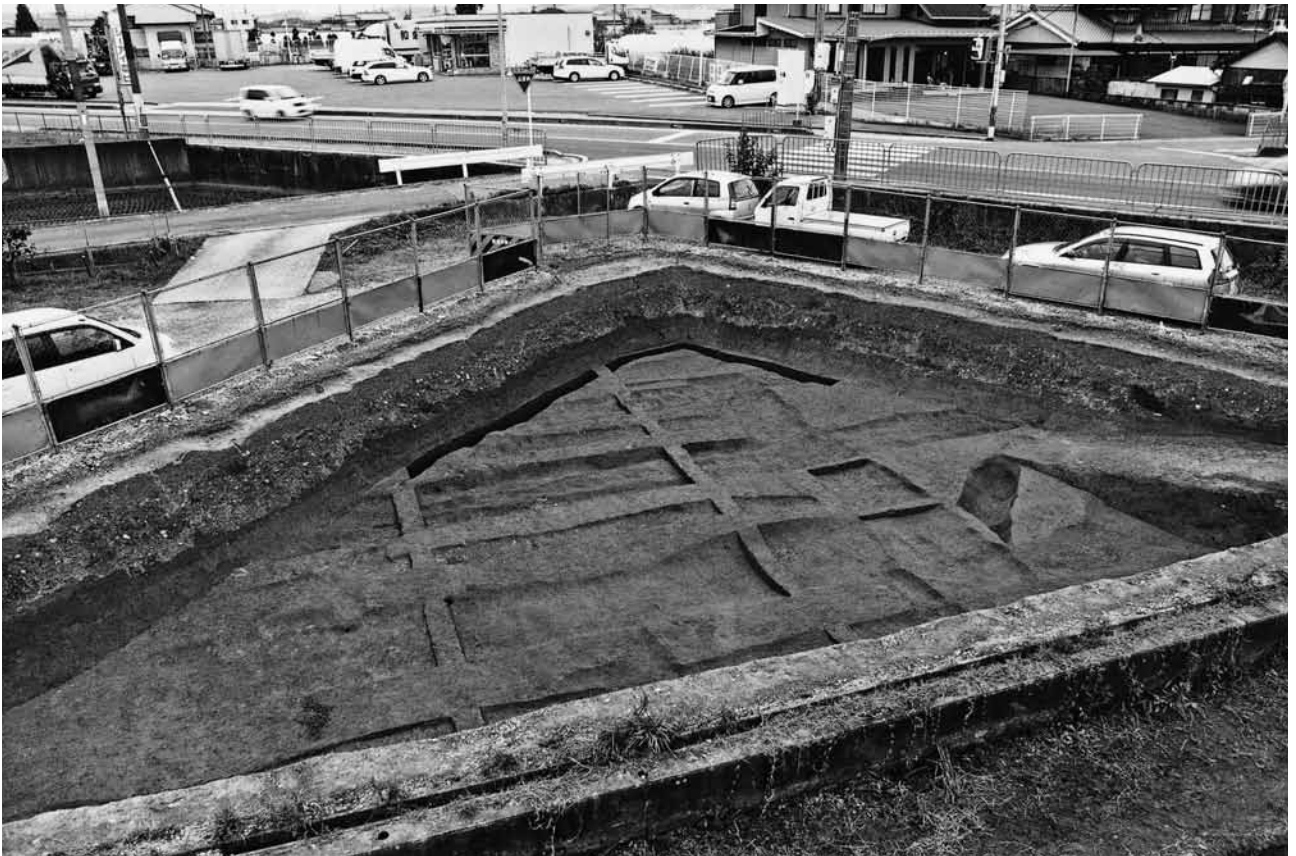
(2) 現地説明会風景(北西から)



(3) B 地区西壁土層断面(東から)



(1) A 1 地区中世第2 遺構面、古墳時代遺構面全景(北から)



(2) A 1 地区中世第1 面全景(北東から)

(1) A 1 地区竪穴式住居跡 S H50
全景(北から)



(2) A 1 地区竪穴式住居跡 S H60
全景(東から)



(3) A 1 地区竪穴式住居跡 S H63
全景(南西から)





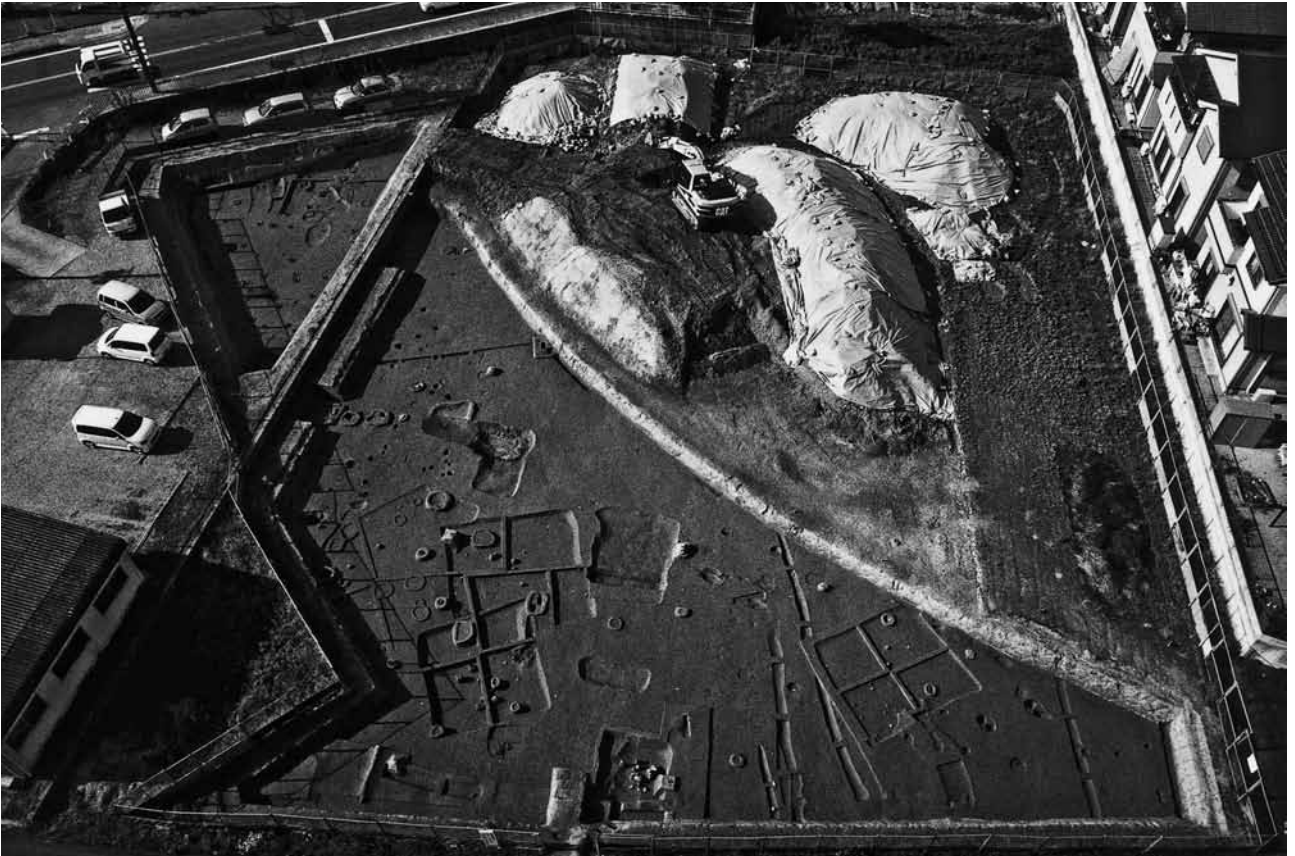
(1) A 1 地区土器だまり S X15
(西から)



(2) A 1 地区中世第2面全景
(東から)



(3) A 1 地区掘立柱建物跡 S B06
全景(南から)



(1) A 2 地区古墳時代遺構面全景(東から)



(2) A 2 地区古墳時代遺構面全景(北東から)



(1) A 2 地区竪穴式住居跡 S H281
全景(南西から)



(2) A 2 地区竪穴式住居跡 S H281
カマド全景(南西から)



(3) A 2 地区竪穴式住居跡 S H281
遺物出土状況(南東から)



(1) A 2 地区竪穴式住居跡 S H282
全景(南から)



(2) A 2 地区竪穴式住居跡 S H282
カマド全景(北東から)



(3) A 2 地区竪穴式住居跡 S H282
カマド全景(南東から)



(1) A 2 地区竪穴式住居跡 S H282
カマド前面遺物出土状況
(東から)

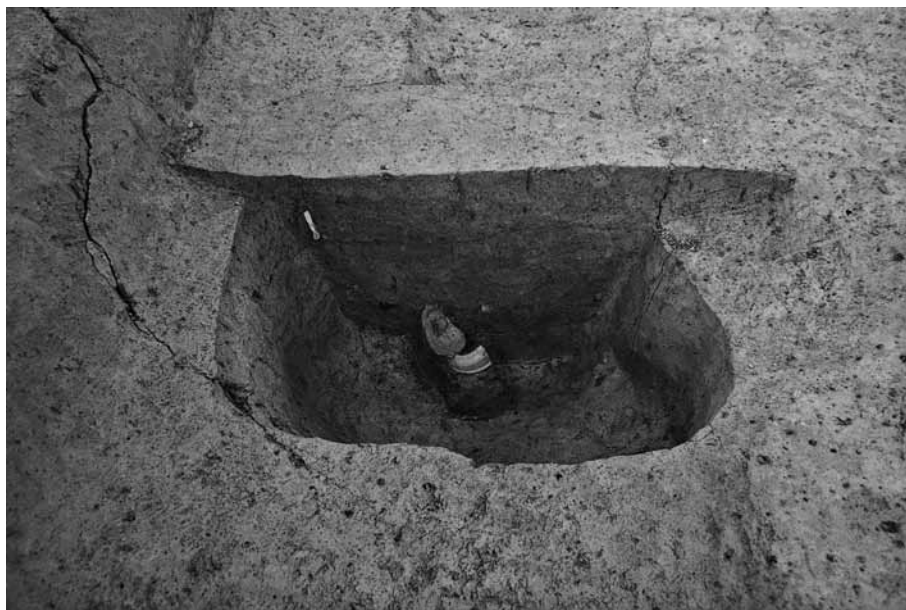


(2) A 2 地区竪穴式住居跡 S H282
鉄器出土状況(東から)



(3) A 2 地区竪穴式住居跡 S H283
全景(南西から)

(1) A 2 地区竪穴式住居跡 S H283
貯蔵穴 1 遺物出土状況
(東から)



(2) A 2 地区竪穴式住居跡 S H283
焼土除去後遺物出土状況
(南から)

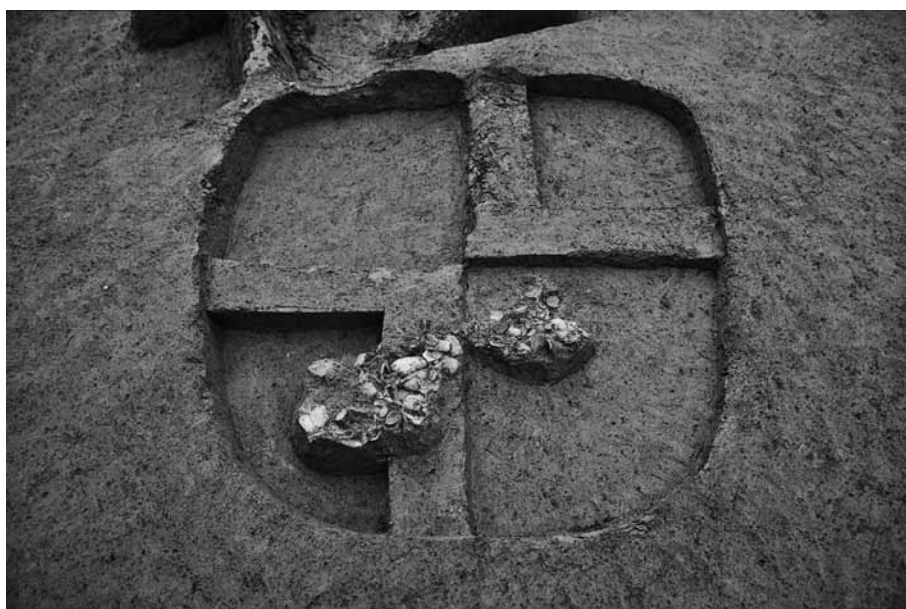


(3) A 2 地区竪穴式住居跡 S H330
全景(南から)





(1) A 2 地区竪穴式住居跡 S H330
カマド全景(南から)

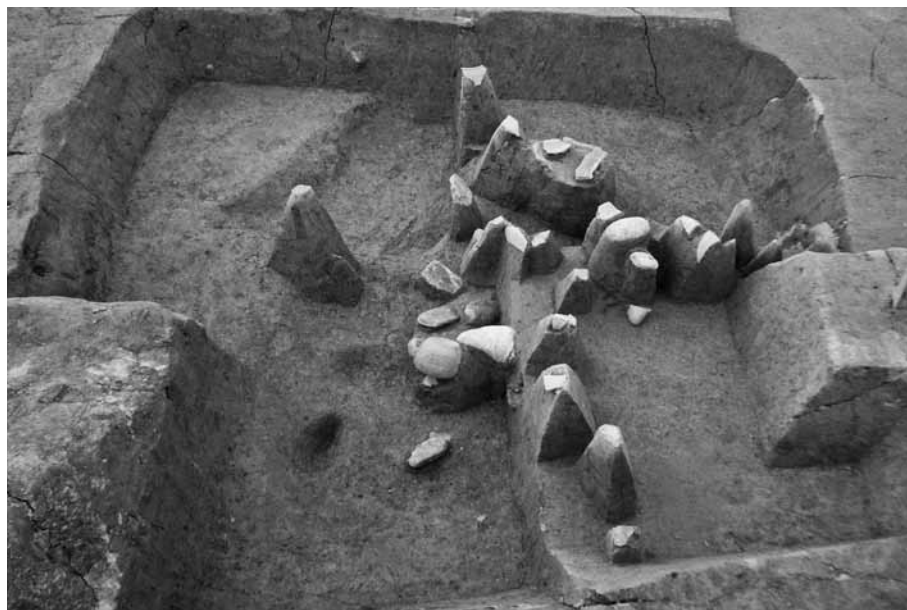


(2) A 2 地区土坑 S K280遺物
出土状況(東から)



(3) A 2 地区土器だまり S X199
下層遺物出土状況(南から)

(1) A 2 地区井戸 S E 215 遺物
出土状況(南から)



(2) A 2 地区井戸 S E 215
断ち割り状況(南西から)



(3) A 2 地区中世遺構第1面全景
(西から)





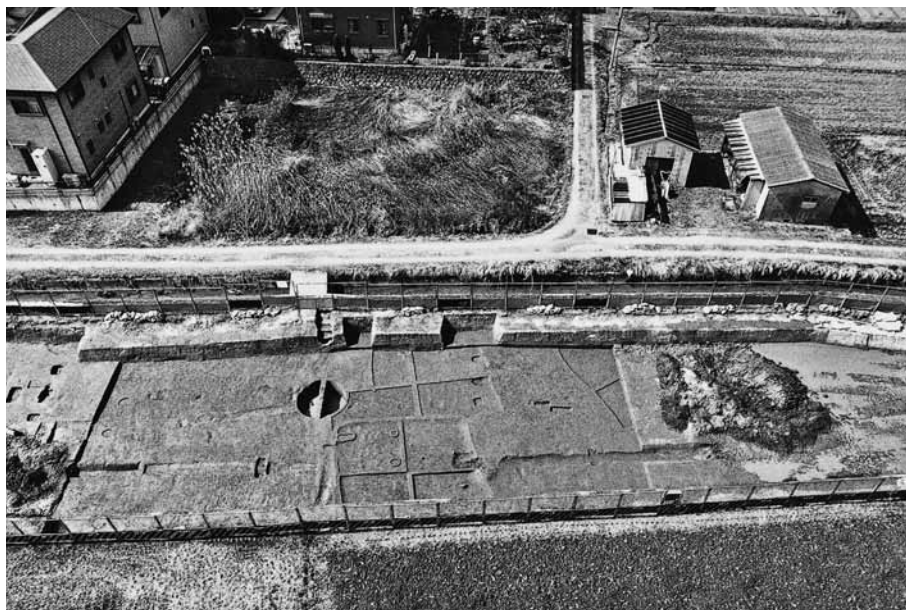
(1) A 2 地区土坑 S K143 全景
(東から)



(2) A 2 地区中世第2面全景
(南西から)



(3) A 2 地区溝 S D24 遺物出土状況
(南から)



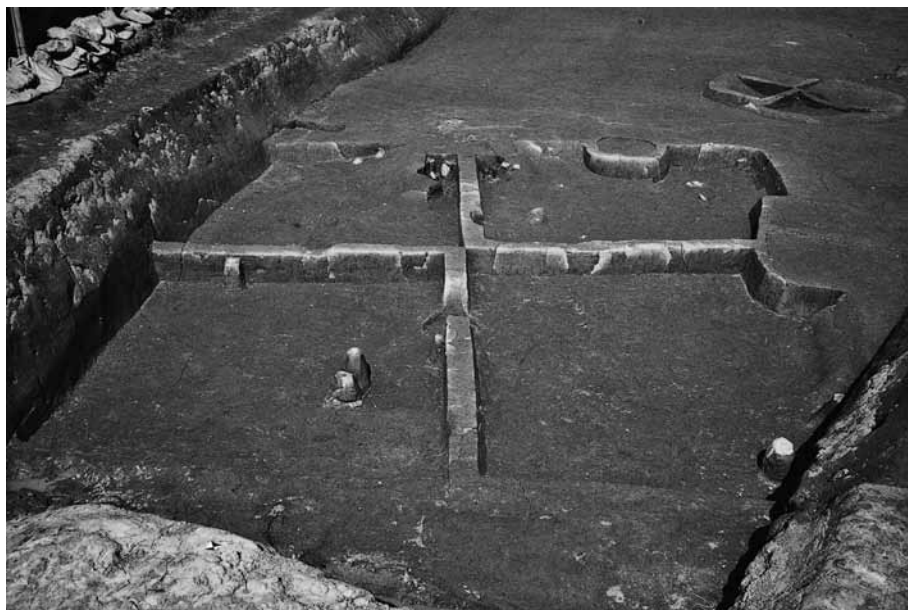
(1) B地区古墳時代遺構面(北半部)
全景(東から)



(2) B地区古墳時代遺構面(南半部)
全景(東から)



(3) B地区古墳時代遺構面
断ち割り状況(南から)



(1) B地区竪穴式住居跡 S H99
全景(北から)



(2) B地区竪穴式住居跡 S H100・
111全景(南から)



(3) B地区竪穴式住居跡 S H105
全景(西から)

(1) B 地区土坑 S K 126
遺物出土状況(北から)



(2) B 地区土坑 S K 126
遺物出土状況(南から)



(3) B 地区土坑 S K 91
遺物出土状況(北から)





(1) B地区土坑S X 96全景(南から)



(2) B地区土坑S X 96土層断面状況(南から)



(1) B地区土坑 S X 96遺物出土状況
(南から)



(2) B地区土坑 S X 96漆塗り不明
製品出土状況(南から)



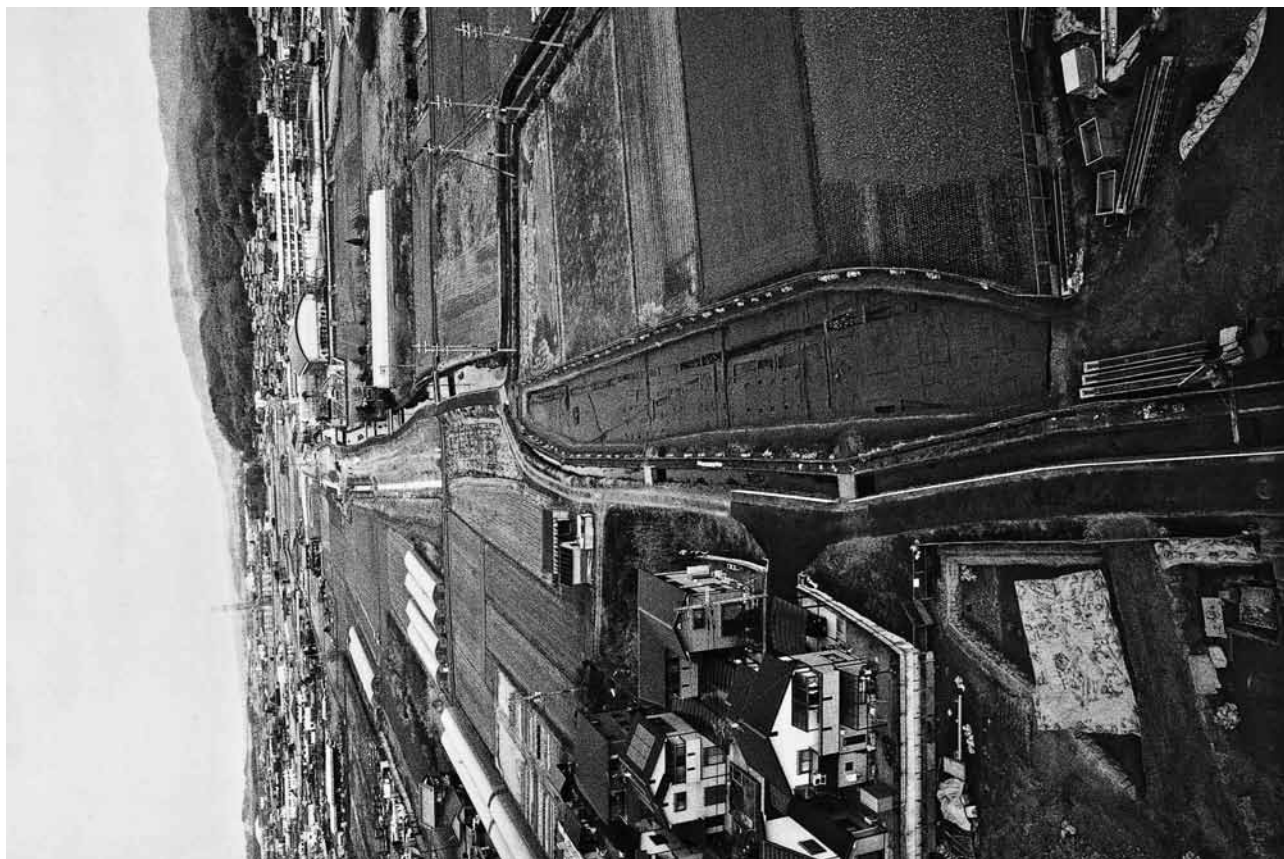
(3) B地区土坑 S X 96完掘状況
(南東から)



(1) B地区奈良時代遺構面全景(東から)



(2) B地区奈良時代遺構面全景(南西から)



(2) B地区奈良時代遺構面全景(南から)



(1) B地区奈良時代遺構面全景(北から)



(1) B地区溝 S D21全景(南から)

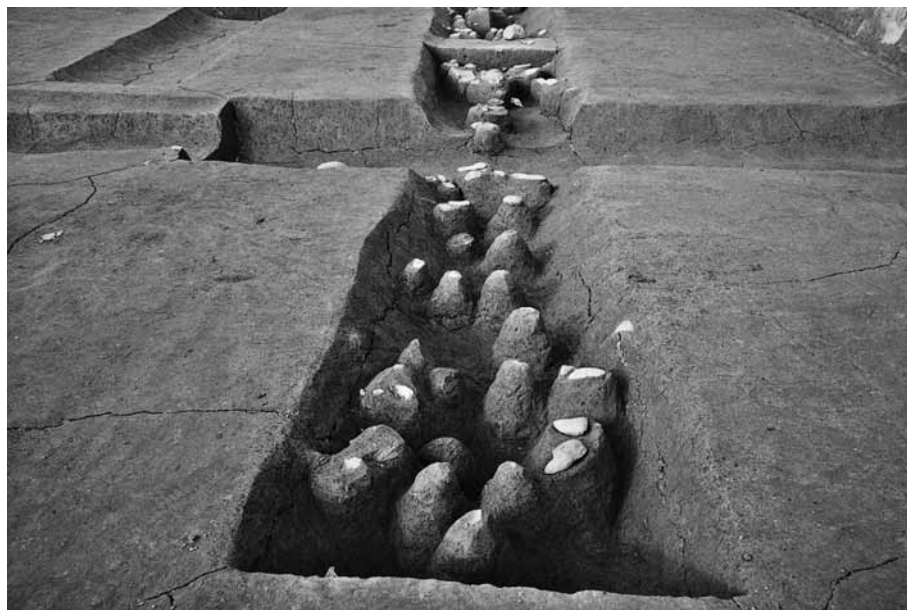


(2) B地区溝 S D21北部遺物
出土状況(北から)



(3) B地区溝 S D21北部遺物
出土状況(西から)

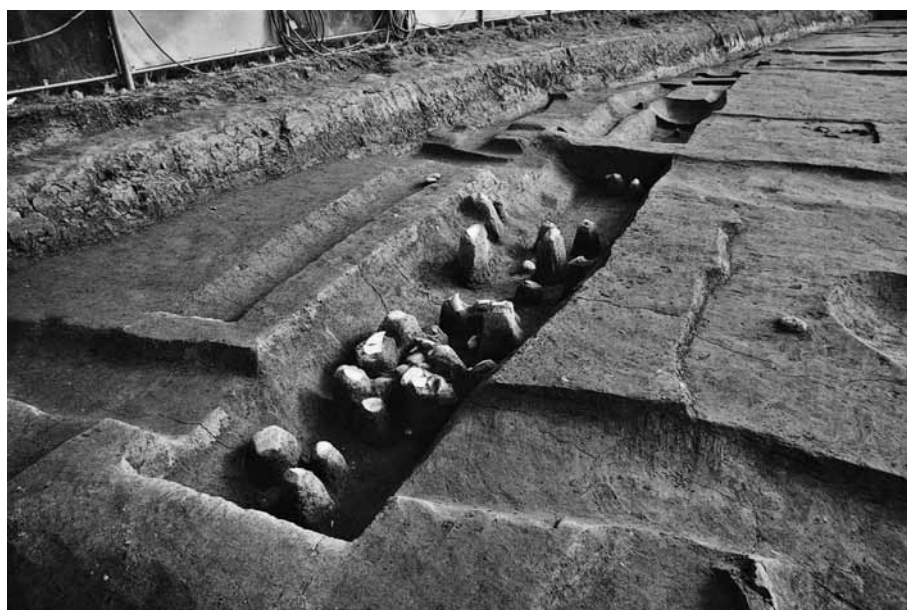
(1) B地区溝S D21中部遺物
出土状況(南から)



(2) B地区溝S D21南部遺物
出土状況(東から)

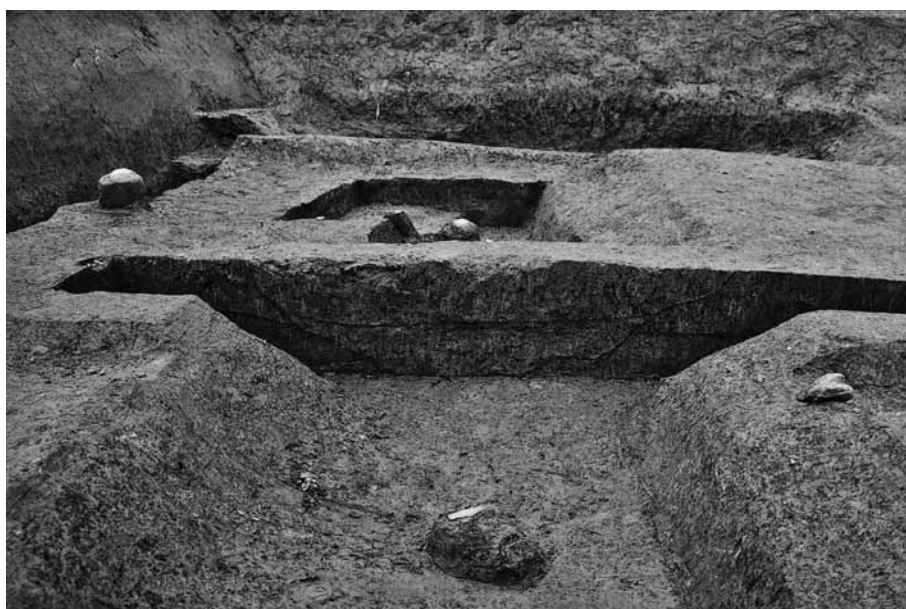


(3) B地区溝S D21南部遺物
出土状況(北西から)





(1) B地区溝S D21南部最上層遺物
出土状況(南東から)



(2) B地区溝S D21北部土層断面
(南から)



(3) B地区溝S D21南部土層断面
(北から)

(1) B地区土坑S K102全景
(西から)



(2) B地区掘立柱建物群全景
(北から)

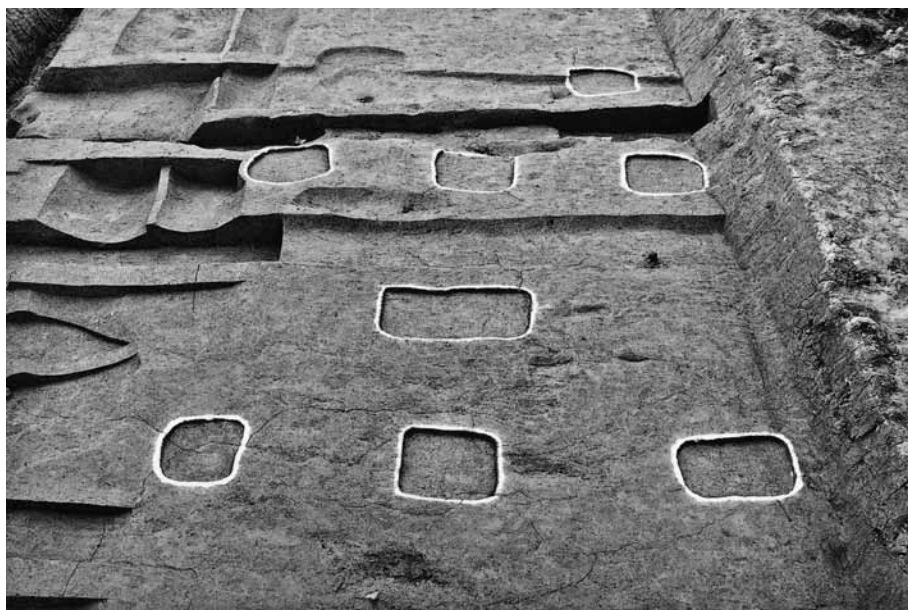


(3) B地区掘立柱建物跡S B01
全景(北から)





(1) B地区掘立柱建物跡 S B01柱穴
S P65遺物出土状況(東から)



(2) B地区掘立柱建物跡 S B02全景
(北から)



(3) B地区掘立柱建物跡 S B03全景
(北から)



(1) B 地区掘立柱建物跡 S B 04 全景
(北から)



(2) B 地区掘立柱建物跡 S B 04
柱穴 S P 58 遺物出土状況
(西から)



(3) B 地区軒平瓦出土状況
(北から)



(1) B地区土坑S K 32全景(東から)



(2) B地区中世遺構面(北半部)全景
(南から)



(3) B地区中世遺構面(南半部)全景
(南から)





51



92



82



93



83



113

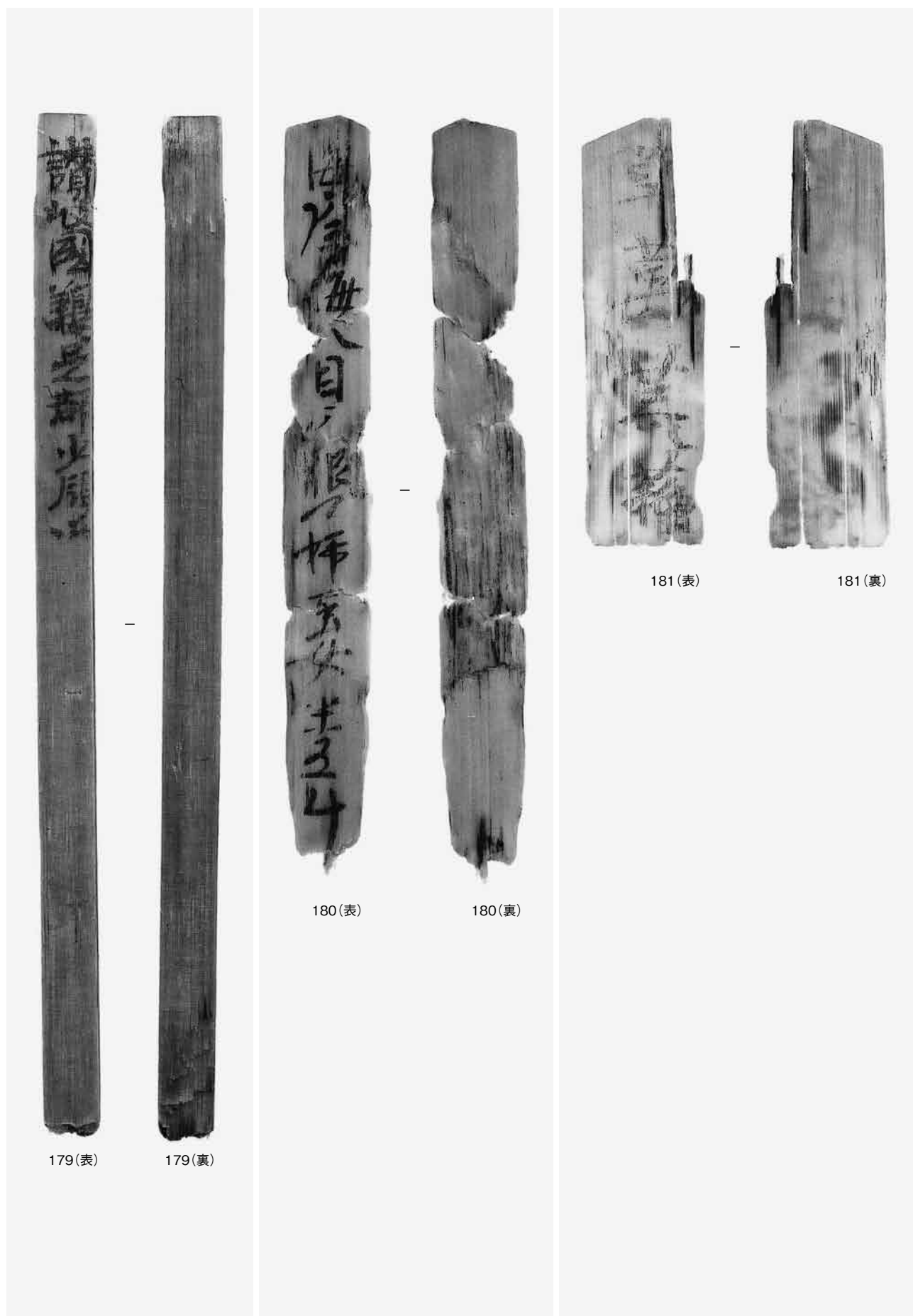


110

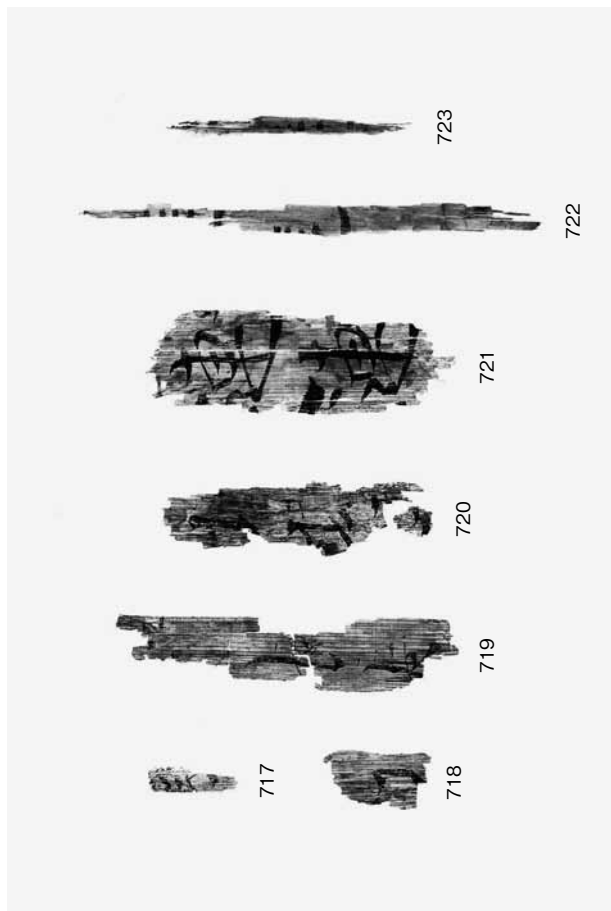


111

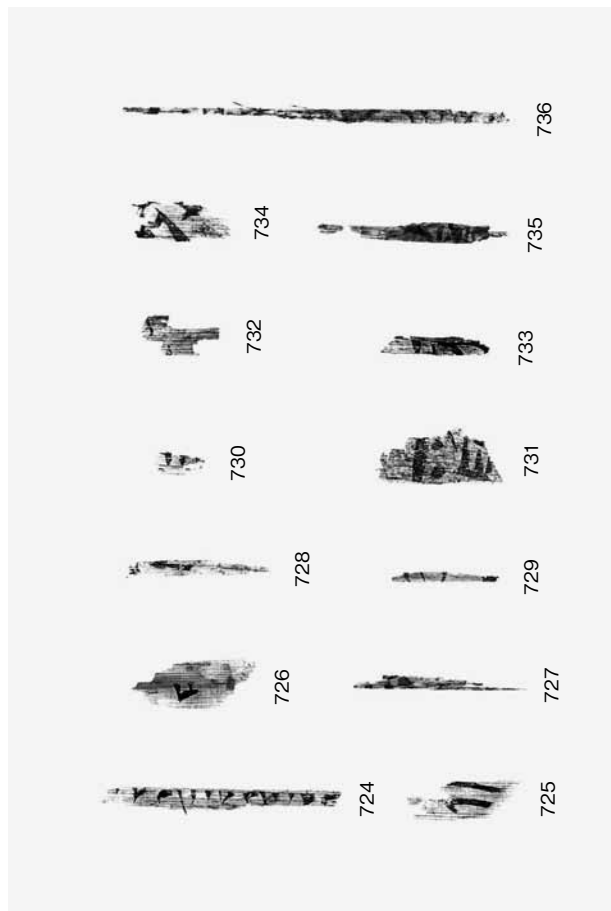




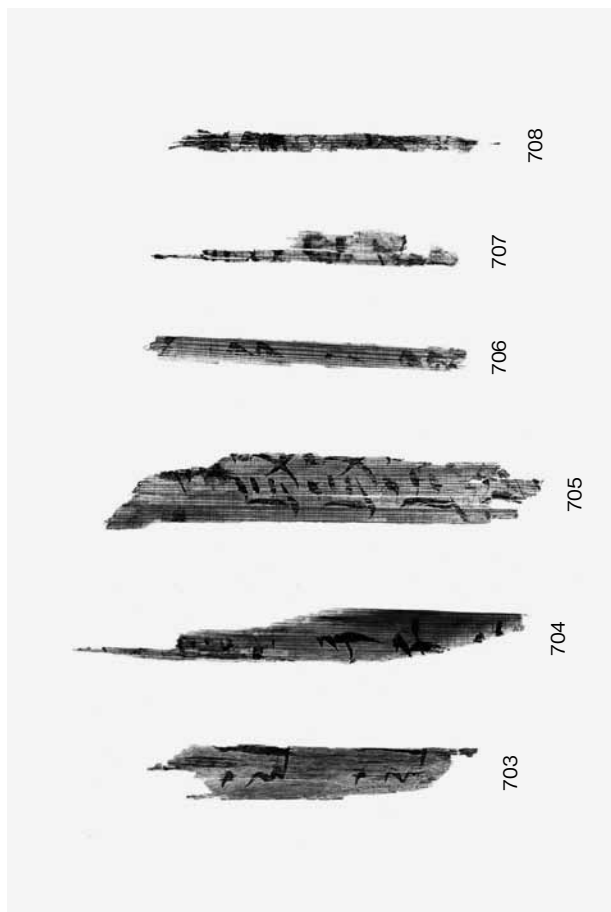
出土遺物 4 木簡



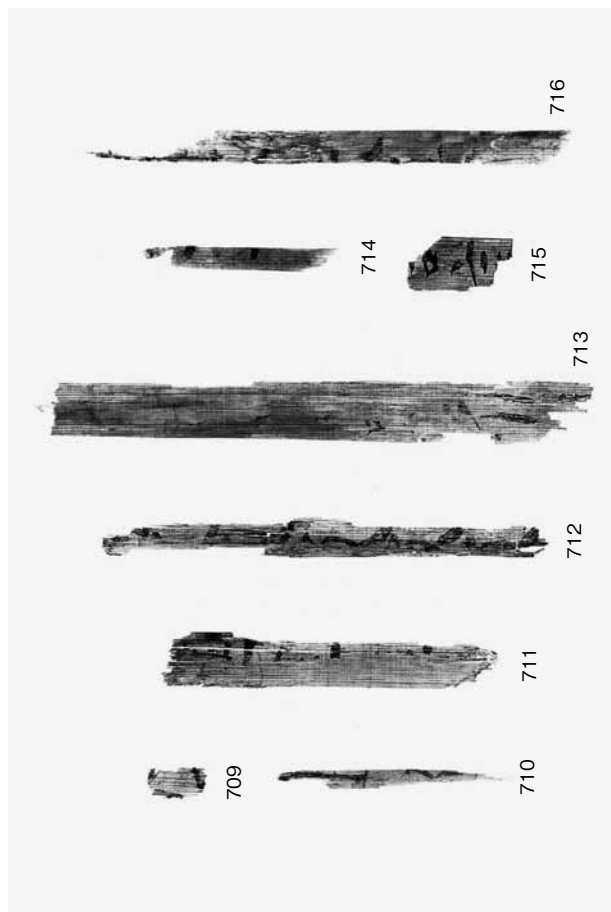
(3) 出土遺物 7 削屑



(4) 出土遺物 8 削屑



(1) 出土遺物 5 削屑



(2) 出土遺物 6 削屑





185(凹面)



185(凸面)



190(凹面)



190(凸面)



192(凹面)



192(凸面)





246



260



248



263



250



265



252



275



253



276



255



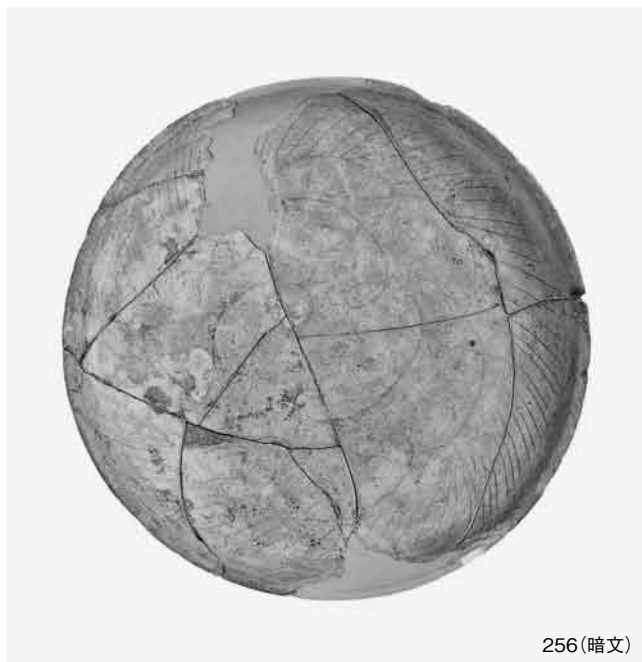
278



257



282



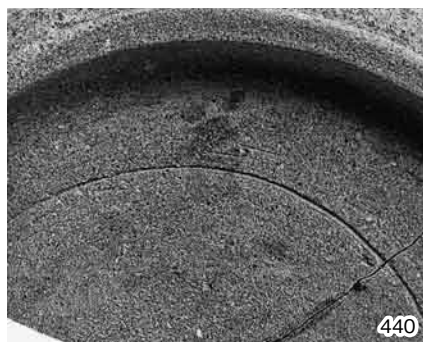
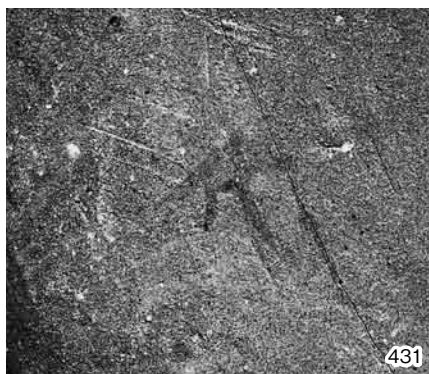
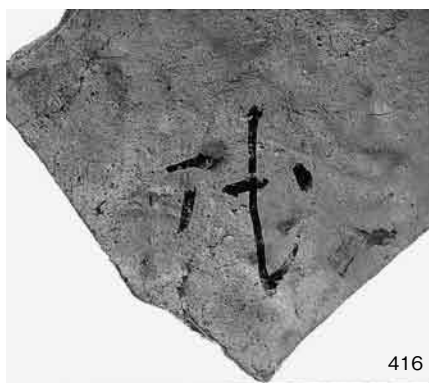




出土遺物15 土坑 S X96出土須恵器



出土遺物16 土坑 S X96出土須恵器



出土遺物17 土坑 S X96出土墨書土器





550



552



562



579



586



605



606



577



581



595

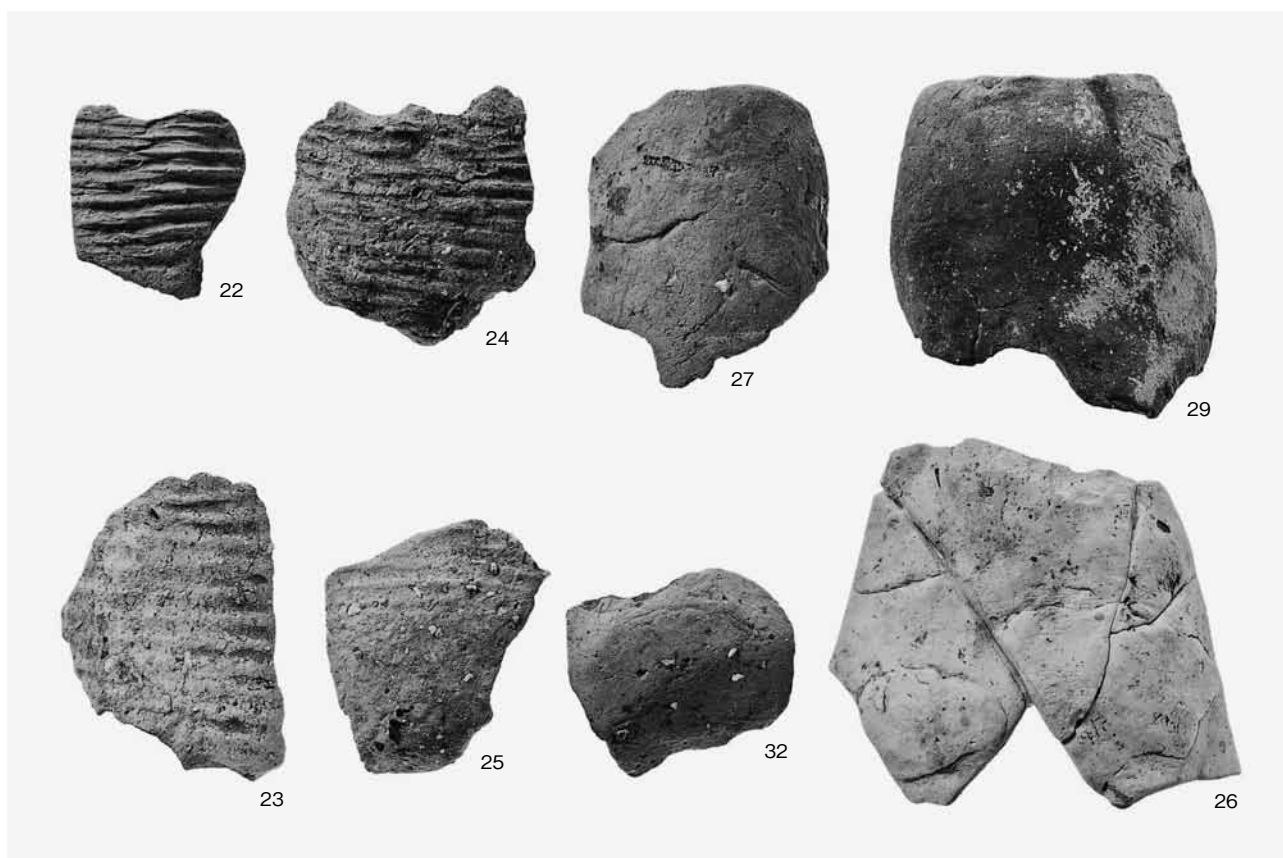


604

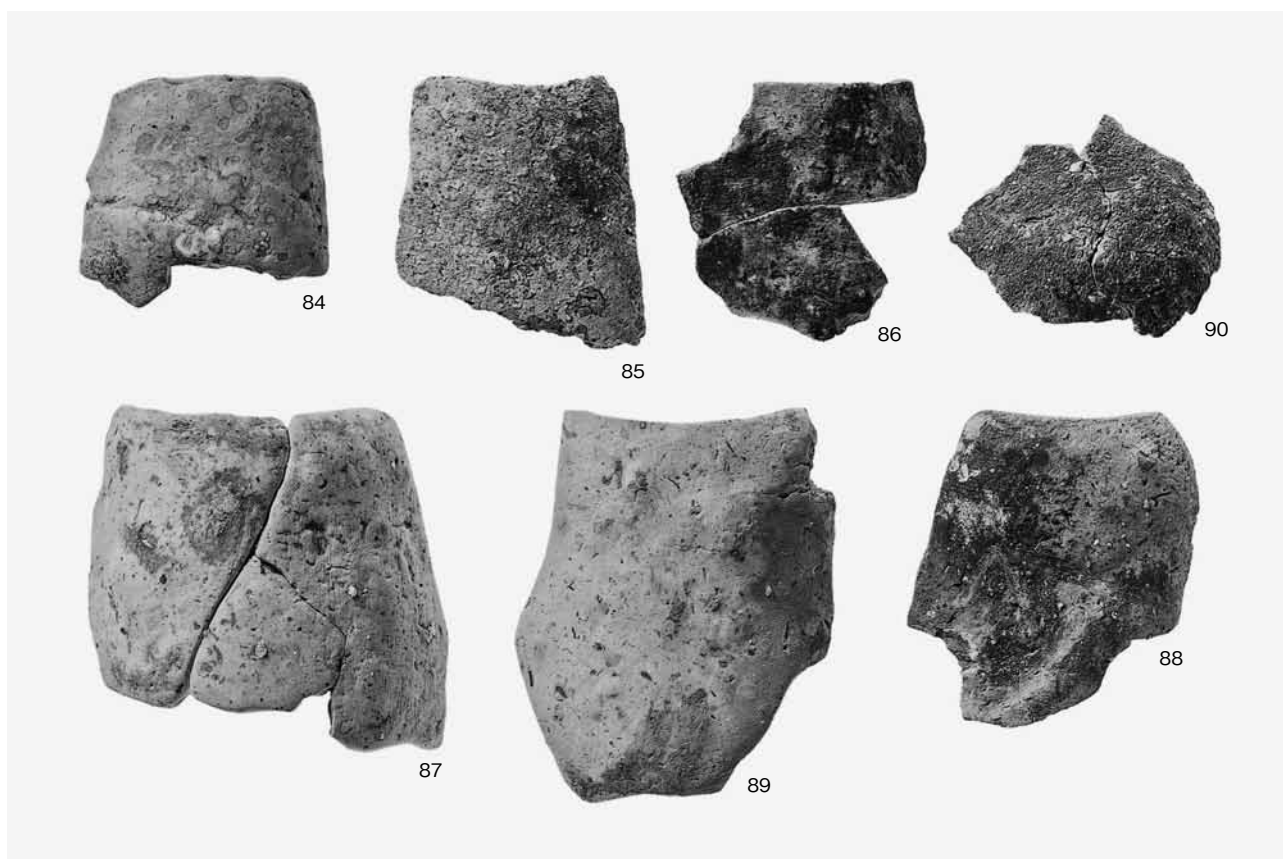


607

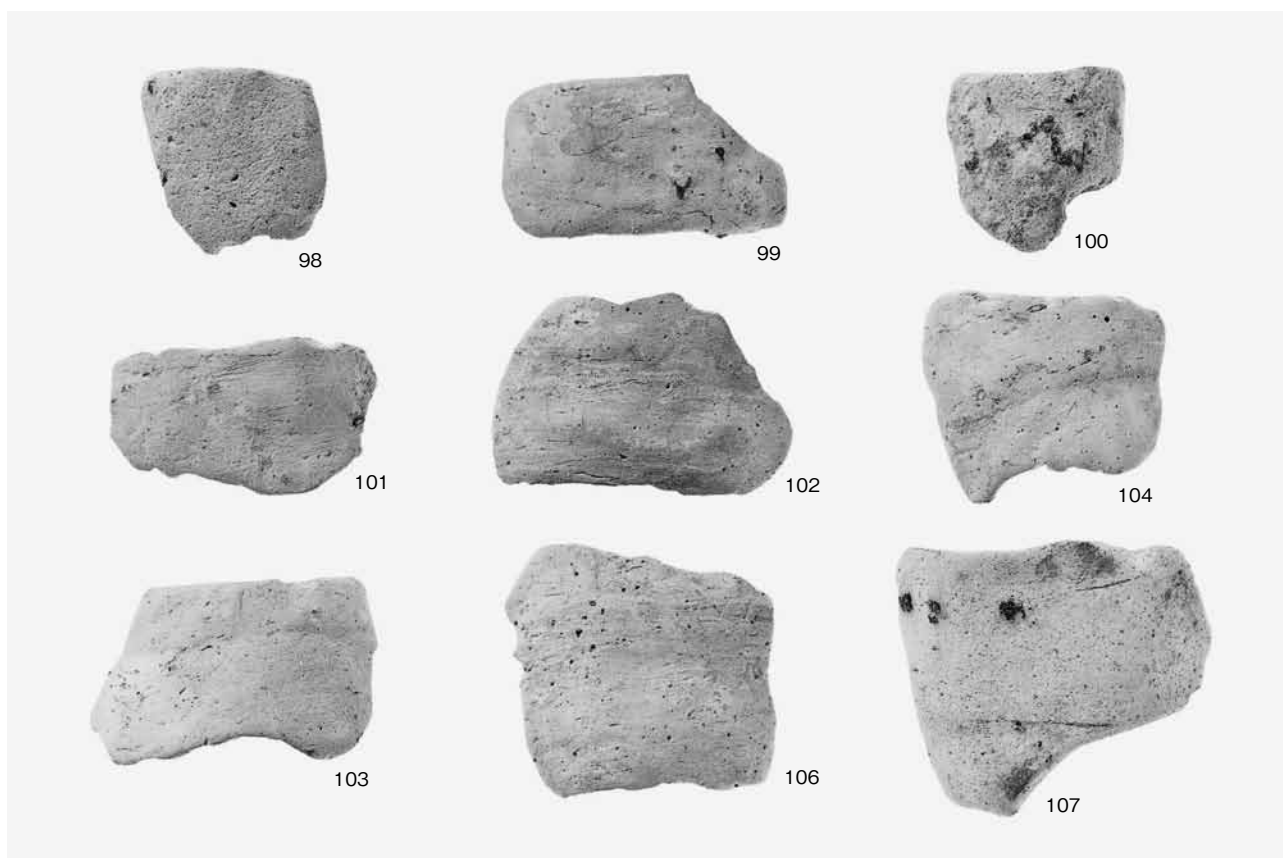
出土遺物19 溝 S D21出土土器・土坑 S X96出土木製品



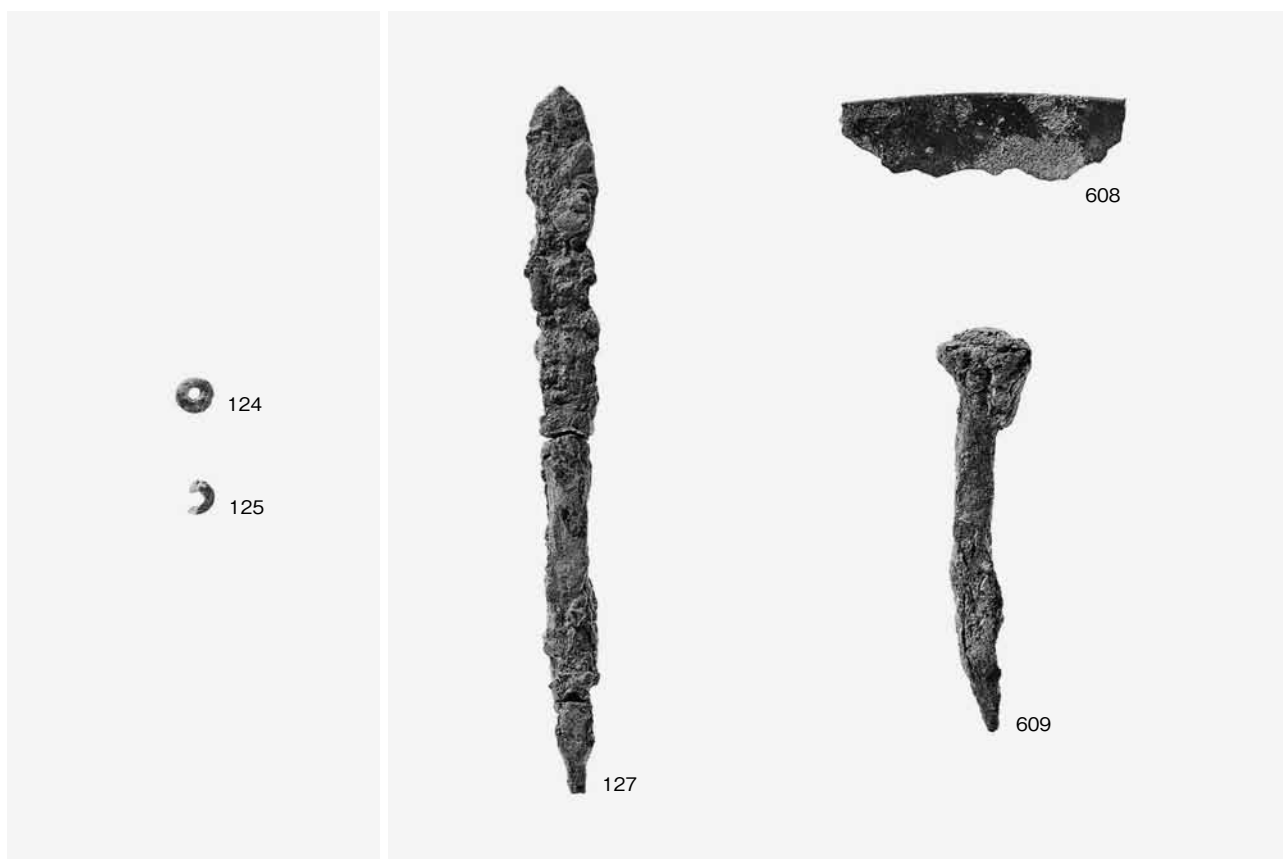
(1) 出土遺物20 竪穴式住居跡 S H50出土製塩土器



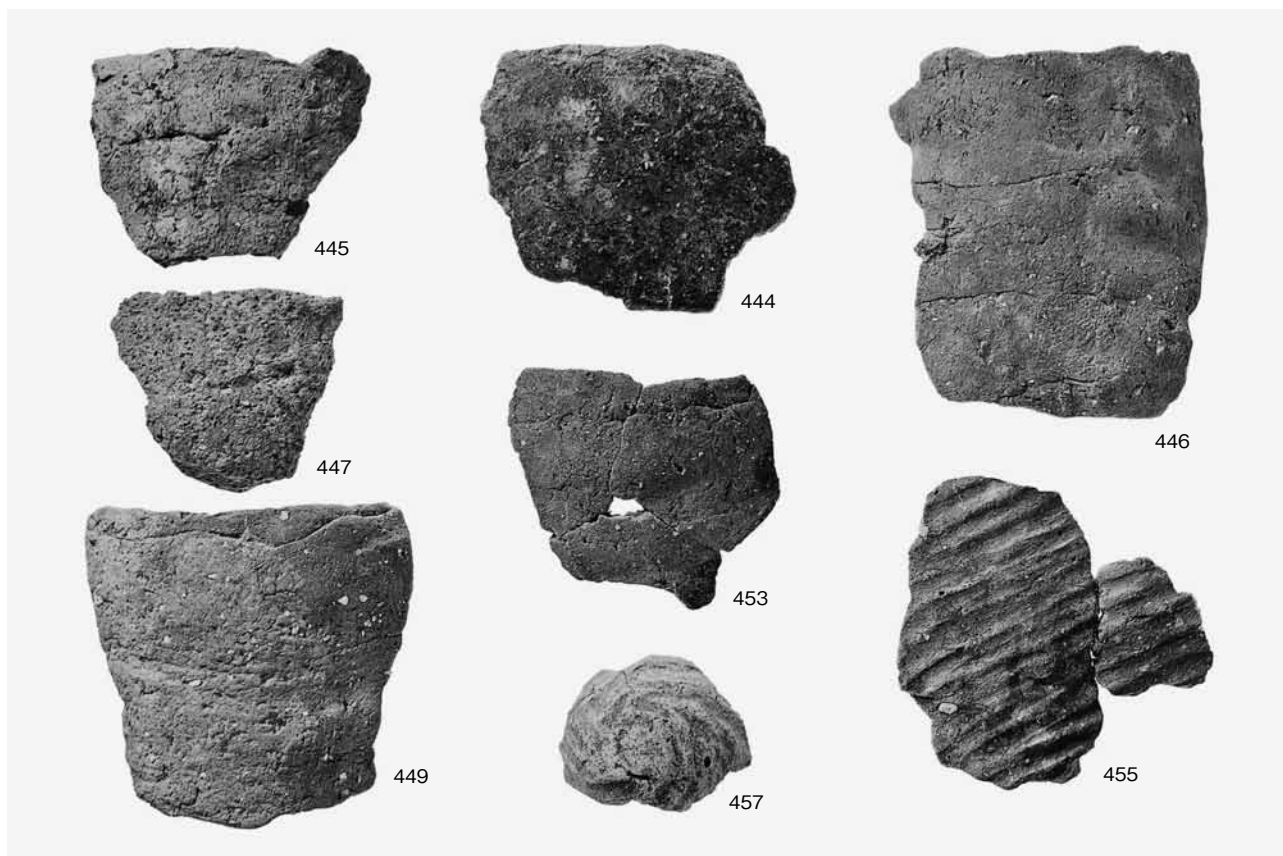
(2) 出土遺物21 竪穴式住居跡 S H283出土製塩土器



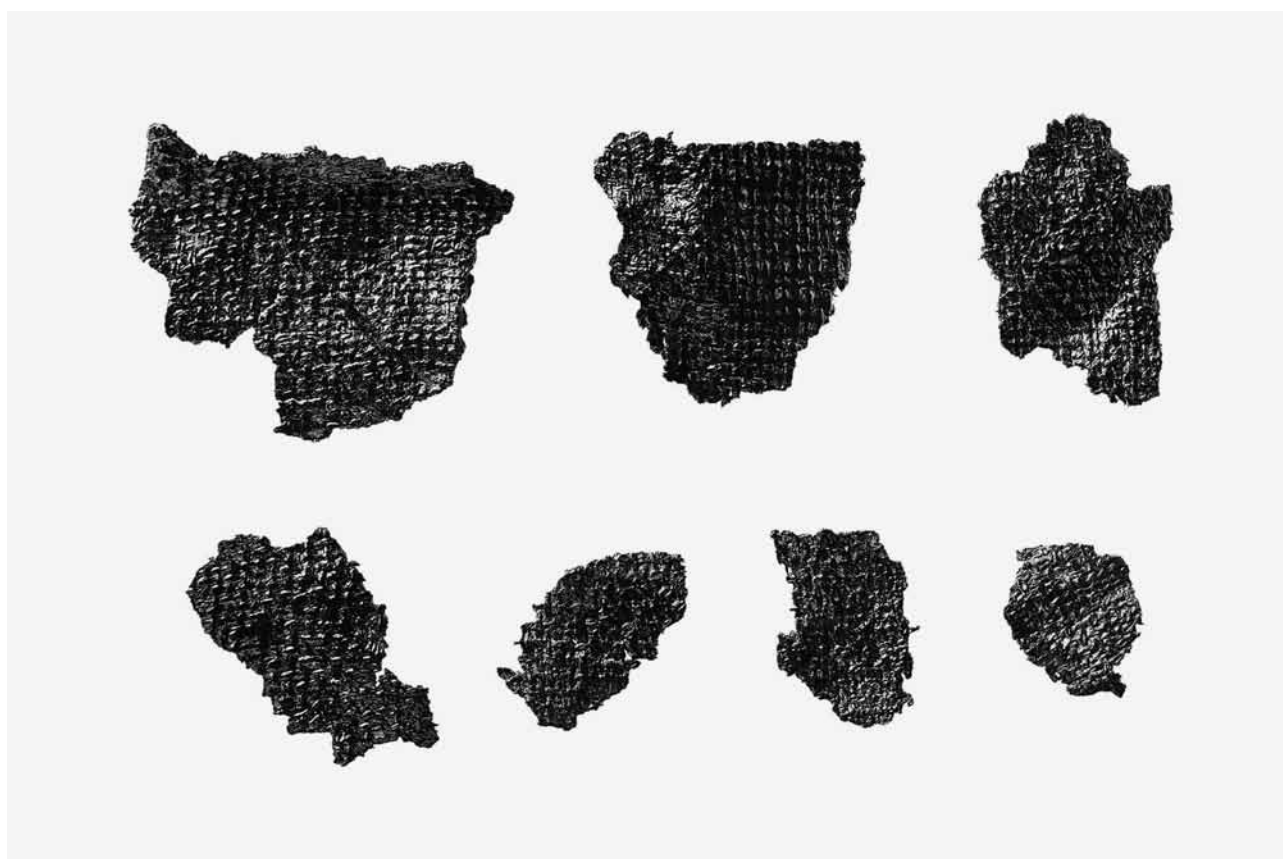
(1)出土遺物22 土坑 S K280出土製塩土器



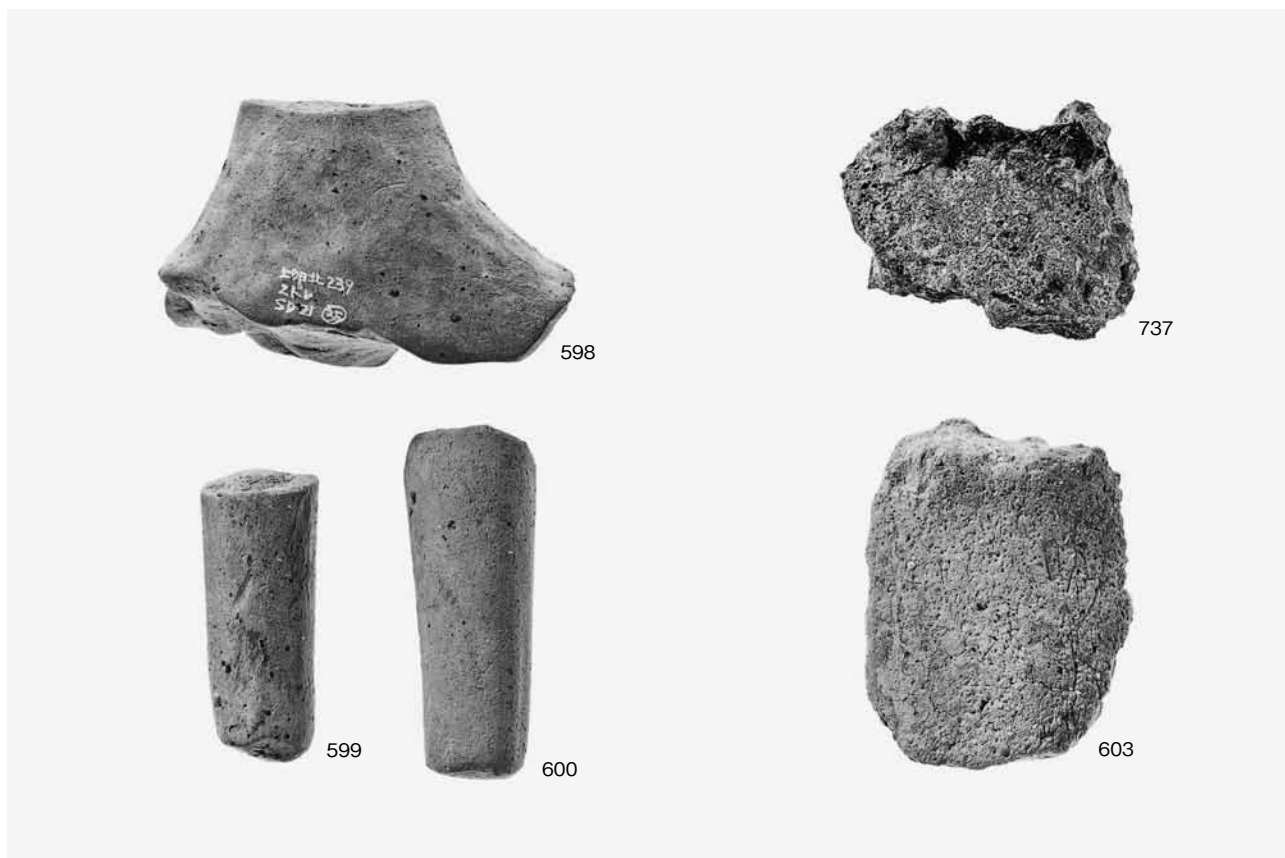
(2)出土遺物23 各遺構出土玉類・銅製品・鉄製品



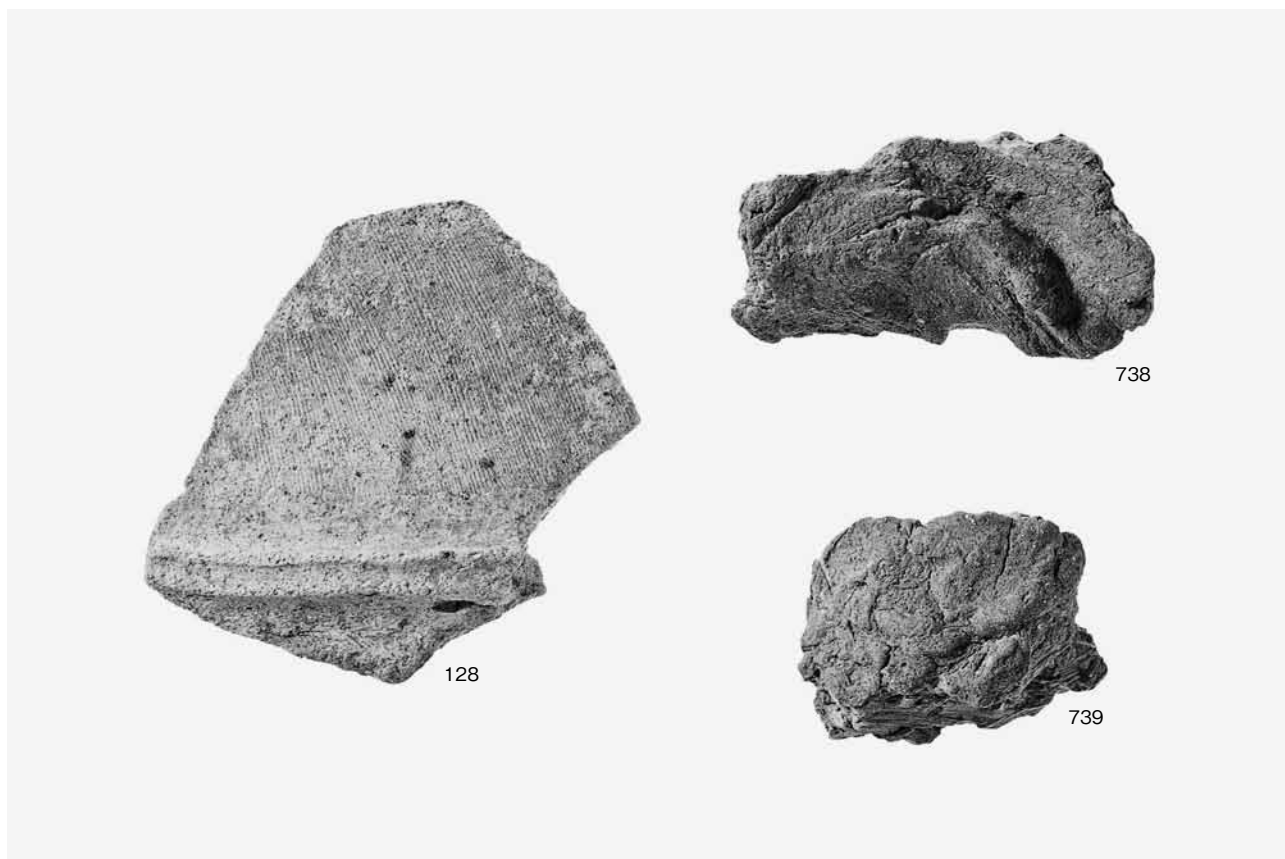
(1) 出土遺物24 土坑 S X96出土製塩土器



(2) 出土遺物25 土坑 S X96出土漆塗り不明製品



(1) 出土遺物26 各遺構出土土馬・韃羽口



(2) 出土遺物27 各遺構出土埴輪ほか